昭和30年9月17日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第3203号　昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第5巻第3号　昭和35年3月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

伝奇小説特集号



3月号

裏窓

伝奇小説特集号

3

定価　120円

IBM 1807

昭和30年9月17日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第3203号　昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第5巻第3号　昭和35年3月1日発行（毎月1回1日発行）

実用セックス講座 ① 好評発売中!!

結婚生活のレイアウト

夫婦の性生活が活気に満ちた愉しいものとするためには、お互いに相手の肉体と心理を知るとともに生涯の家族計画を立てねばならない。既婚者は勿論、婚前の男女のために著した二人だけの設計書

定価 270円
送料 40円

厚生省人口問題研究所技官 青木尚雄

実用セックス講座 ② 好評発売中!!

性医学ノート

誰でも知っているようで案外知らないのが性の問題。初夜の感覚・女性の自慰・愛の技巧・交渉の回数等々その秘密を捉えて、海外文献からの盲信を改めて、夫婦生活の最高を平易に説いた軽性医学。

定価 250円
送料 40円

医学博士 飯田初男

実用セックス講座 ③ 好評発売中!!

女体のメカニズム

女体に関してこれほど深く分析・解剖し尽したものは他に類をみません。聴覚と女の刺激・咬むことの性欲心理等著者独得のメスが縦横の角度から〝女〟の深奥にあてられて解明する「肉体的女性論」

定価 270円
送料 40円

日本大学教授 医学博士 押鐘篤

実用セックス講座 ④ 好評発売中!!

性愛雰囲気86法の分析

性感は心理的条件によって大きく動く。これを知らずして拙速な行為に走っても結果は不満に終り不能症や不感症の原因になるのである。これは技巧・環境等のムードをよりよく創る夫婦円満の快著。

定価 300円
送料 40円

日本生活心理学会会長 高橋鐵

★この一篇があなたの性生活に革命を起す!当代の権威が解明する男女肉体の秘密と夫婦愛欲の実態!★

御送金は小為替、振替、現金書留が尤も安全で確実です。
東京・中野・江古田一の二三〇二 株式会社あまとりあ社

マンハント 2月号絶賛発売中!!

久保書店・刊

●マンハント 1960年 2月号目次

門外不出の珍品
わが家の宝物展
翻訳スタッフ

夜はおシャレ者
バターをつけてこすれ!
植草甚一

ジョーク・ボックス
年の初めのやつあたり
照井信夫

ブック・ジョッキー
おれ達はカコワレてる
永六輔
前田武彦

悪党入門書
宝石店をおそうの法
川崎はじめ

マンハント・スクエア
男は損で天国
〝ヒモ〟の
向井啓雄

モニター会談
いいたい放題
愛読者代表

ヒネクレ族のシネ手帖
ここが見どころデス!
永久蘭太郎
志根寿浩
一丁目一夫

新譜紹介
びいと・ざ・びいと
イタクラ・マリ

2月のマンハンタア
カラー・ヌード
F・ベネット作品

こんちき抄⑤
スキー魔・電話機
ドクトル・チエコ

海外トピックス
もだん浮世風呂
横丁の隠居

新刊紹介
ポケットの中の本棚
山下諭一

マンハンターズ講座
続々々ホームバーについて
Y・Y教授

100万人の探偵雑誌

定価150円
送料 12円

借金とりは給料日にやってくる

帰郷（ききょう）

まだ物語は終らない

満ち潮

最後に笑おう

早射ち

艦長なんか消しちまえ

沖釣り

深夜勤務

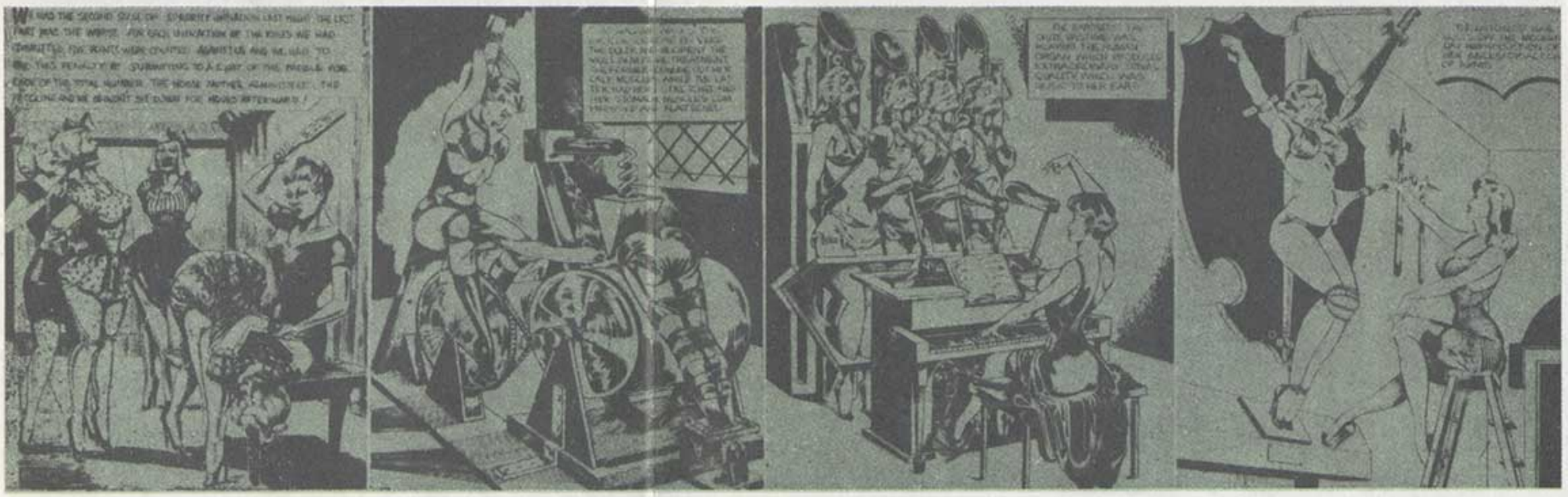
日曜日には人を殺すな

★悦虐絵物語★



★アメリカ版★











裏窓・三月号・目次

◎表紙……堂昌一　◎目次カット……喜多玲子
◎目次裏口絵……悦虐絵物語　◎トビラカット……美濃村晃

巻頭絵物語 **素膚の火を消せ!!** 文・橘新太郎 画・山田彬弘 (11)

★カラーヌード **髪を持つ女**……(タトル特約) (19)

伝奇小説特集

鷹の巣谷伝奇……藤見郁 (36)

血を呼ぶダイヤ……葉山猛 (56)

伝奇狒々族呪縛……水沢雪夫 (92)

伝奇むささび香炉……多摩郡平 (198)

愛憎符印髷……狛勝彦 (211)

色頁絵物語 **白猿塔伝奇** 文・矢桐重八 画・古正英生 (27)

色頁・或る美容体操……編集部・編 (131)

◎読者短評……(118)

あぶちっく みすてりい **陰花の罠**……鵠沼二郎 (156)

★裏窓既刊号目次……(224)

江戸暗黒秘録 **刑具囚俗抄**……鈴木和夫 (172)

時代談巷談 法念寺奇談……丘野武也 (66)

浅太郎しぐれ……三国沢隆 (120)

戦国秘史 堀主水一件始末(上)……瀬川泰子 (140)

★★**鏡花世界の女性像** 中康弘通 (186)

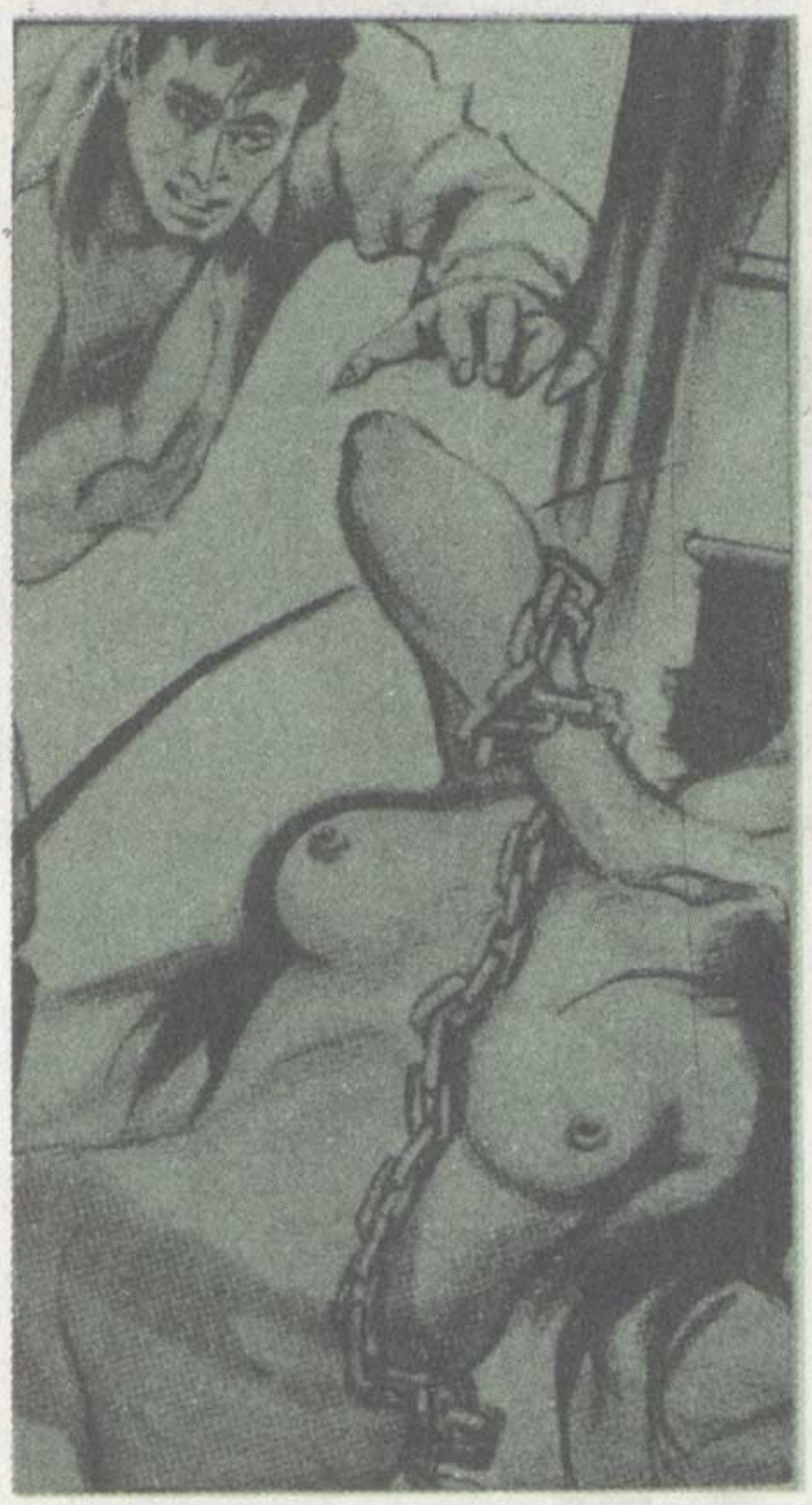
時代談巷談 紅草紙……円城寺達 (230)

夢のアトリエ 裸女は妖夢に崩れる……峠浩介 (236)

泣き兵衛巷雛子 **地獄絵女房**……飯田豊吉 (248)

あさすべんす雪魔女は四本指……長谷川勇 (78)

あすとおりい屑篭が招いた……篁文彦 (104)



読者待望の妖異小説、単行本として発売!!★

怪異愛霊教

妖策の罠を拉げる怪異の教団に、身を挺してのりこむ好漢冬島信吾！悦虐の密室に裸身をさらして悶える美少女の運命は？

飯田豊吉・著

定価 250円
送料 40円

株式会社 あまとりあ社・刊

異色官能サスペンス

地獄の乳房

飯田豊吉・著

喜多玲子・装幀

謎の黄色いトランクをめぐって東京暗黒街にくりひろげられる凄惨な死闘と執拗な復讐地獄！息もつかせぬ迫力興味篇！

¥.250
〒. 40

続・隠密覚書

忍び夜秘帖

島本春雄・著

喜多玲子・装幀

大江戸の夜に咲く逢魔の花！大名屋敷、旗本屋敷、そしてまた分限者の夜の闇を探くる影のような公儀隠密鳴子善四郎！

¥.260
〒. 40

異色時代巷談

女犯経秘図

高月大三・著

喜多玲子・装幀

酒池肉林の好色寺の地下部屋に捕われた女隠密！素っ裸の木馬責めに果して耐え得るか？お小夜嵐、穴蔵菩薩も収録！

¥.250
〒. 40

エロチックサイエンス

甘美な謎

矢野　徹・著

笠井　一・装幀

ふくよかな肌の香りは超次元の世界にただよい、はてしなく広がる非情の科学に機械化された細胞は如何に悶えるのか？

¥.250
〒. 40

恥奇サスペンス

妖しい花粉

狩　久・著

古正英生・装幀

白く重さを秘めてゆれる乳房、慄える太腿……性の真実を求めて蠢めく人々の姿を捉えた異色ミステリイ!!

¥.230
〒. 40

エロチックミステリイ

あやかしの夜

岡田鯱彦・著

笠井　一・装幀

ねっとりとよどんだ夜の底にほの白くとけこんでゆくような羞恥の構図、人間喜劇の断面を特異な筆で描き出した異色作

¥.260
〒. 40

東京都中野区江古田1の2302（振替口座・東京10756 久保書店宛）　株式会社　あまとりあ社

素膚の火を消せ！



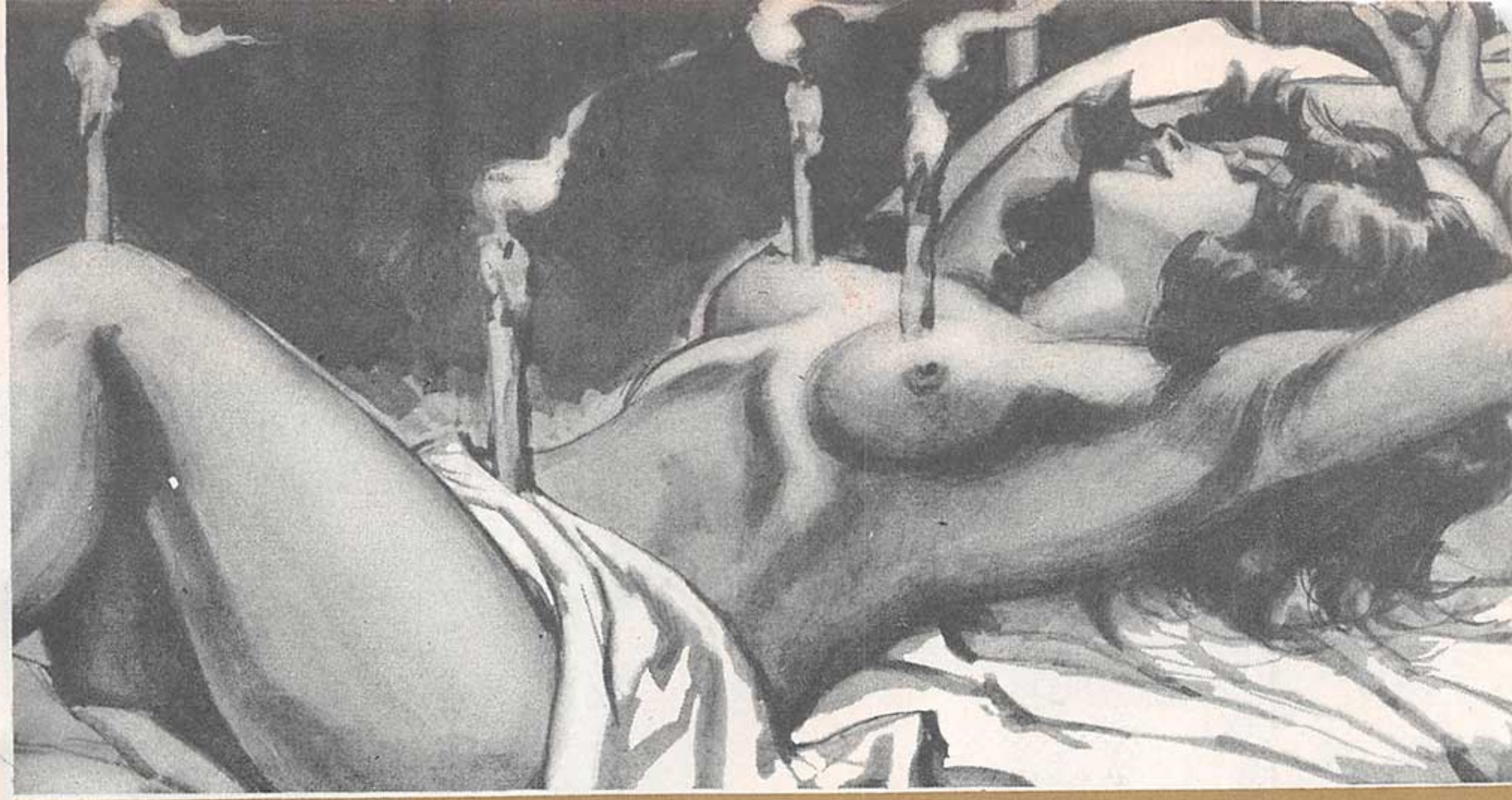
文・橘新太郎
画・山田彬弘

①青白いボス

「あんたがディック・シマモトか。名前はよく聞いてるよ、ミスタ・シマモト。どうなんだ、ロサンゼルスの景気は？」デスクの前の男が訊いた。青白い顔は、全体にたるんでいるが、眼つきは氷のように冷たく、まず典型的なボスづらといっていい。

「別にどうってことはありませんよ。お巡りのうるさいのは、アメリカだって日本だって同じでしょうからね」おれは答えた。

「ところでね、さっそくで悪いんだが、ちょっとしたテストを受けてもらいたいんだ。なにせあんたとは初対面だし、念には念を入れたいからな。ロサンゼルスからの話だと、どんなにきれいな女を見せても、あんたの腕は狂わんそうじゃないか。気を悪くされると困るが、どうだろう、やってくれるかい？」



②冷たい部屋

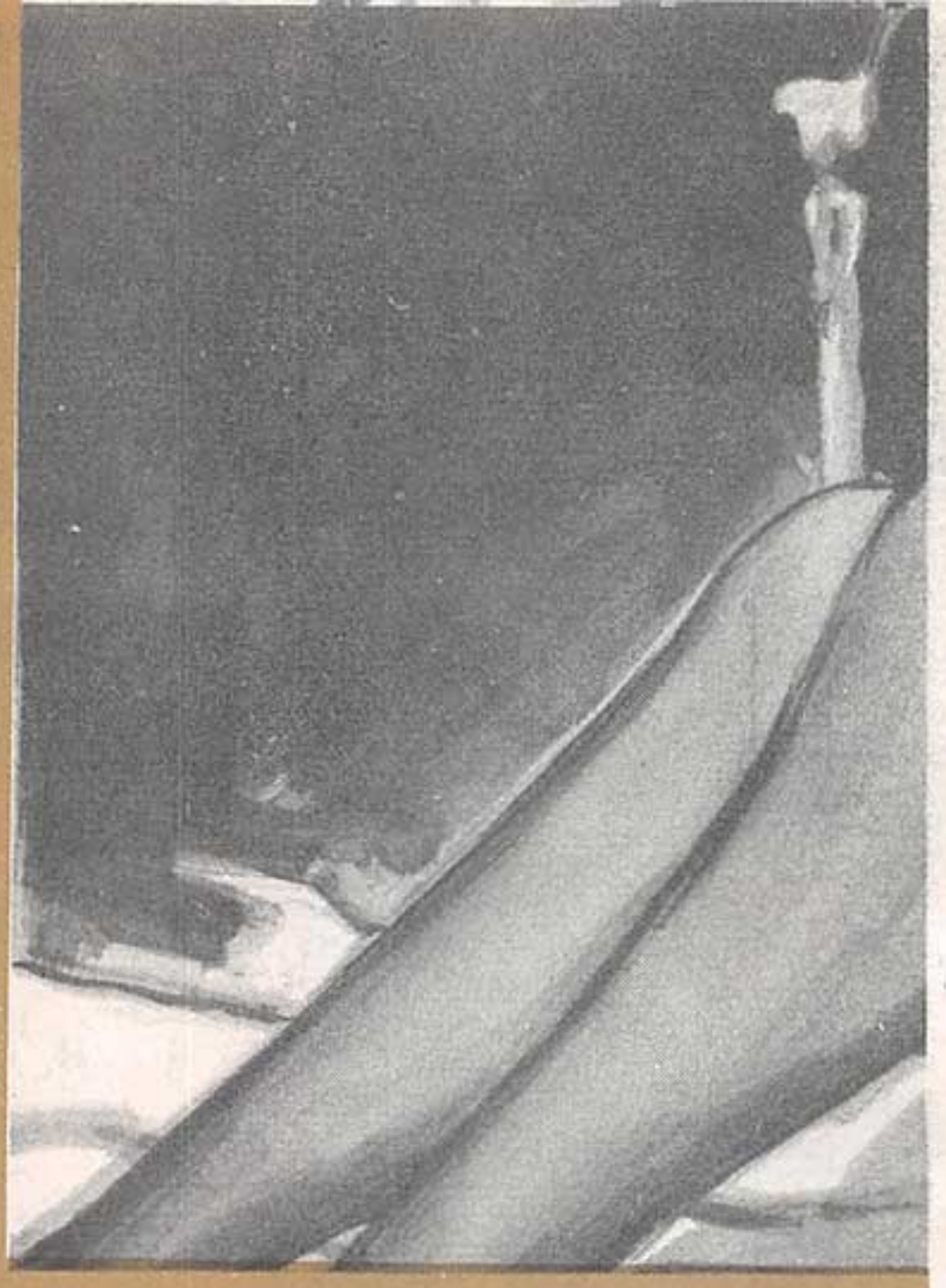
デスクのそばにつっ立っていた若い男が、ボスの背後にあるドアのノップを、ゆっくりと廻した。ボスが立ちあがって、眼でおれをうながす。ボスとおれとが奥の部屋へ入ってしまうと、若い男は外からドアをぴったり閉めた。

いやに細長い部屋だ。なんの装飾もない。

右手のほうの天井に、滑車がとりつけてあって、鎖が一本ぶらさがっていた。部屋の用途が、おれにはすぐにのみこめた。二列に並んだ天井の蛍光灯が、冷い部屋を、冷い光線で満たしている。

部屋のいちばん奥に、鉄製のベッドがあって、ベッドの上に、全裸に近い女が横たわっていた。両の乳房と、へそのあたりと、両膝に、ローソクがたっている——。





③ もゆる的

「弾丸は六発だから、一発は失敗してもいいんだが、長びくと蠅がたれる。たれると熱いから的が動く。わかったね。ミスタ・シマモト。話に聞いたディック・シマモトなら、こんなことは朝めし前のはずだ。さあ、すぐに火をつけるからな」言いながらボスは、さっきおれが預けた拳銃を返してよこす。「あんたが失敗したら、わしが消すよ」口もとだけで微笑すると、自分もポケットから小型の二二口径をとり出した。

恐ろしく用心のいい野郎だ。もし失敗したら、消されるのはローソクの火よりもおれのほうだろう。やけに落ちついた動作で、ボスは左手に持ったライターの火を、ローソクに移していった。女が息をするたびに、炎がゆれる。女はじっと眼を閉じていた。たいした美人だ。ボスの情婦かもしれないが、そうだとすると、このボスの趣味も悪くない。ゆれる炎をみつめながら、使いなれた三八口径の引金を、おれはゆっくり引いた。

④ みごとな弾丸

二発、三発、少しずつ間をおいて、おれの拳銃をとび出した弾丸は、正確にローソクの火を消していく。四発目が、左乳房の炎を消したときだ。残った腹のローソクから、蠅がしたたったらしい。低い呻きが女の恰好のいい唇から洩れて、標的が大きくゆれた。が、ほとんど同時に、五発目の弾丸が、その火をみごとに吹き消した。

「さすがにディック・シマモトね」最初に声を出したのは、ベッドの女だった。女が体を起す。乳房から腹から、ローソクが転がり落ちた。女はじっとおれを見た。黒い瞳が、まるで夢でも見ているように、熱っぽく、うるんでいる。不思議な女だ。

「合格でしょうね」低い声で、おれはボスに言った。





⑤ 標的の誘い

翌日も、そのまた翌日も、ボスからはなんの指令も出なかった。おれは、オフィスの階下にある酒落れたバーでもっぱら弱い酒を飲んで時間をつぶした。大阪からは、おれが一度見たいと思っている京都や奈良も近いのだが、勝手に出歩くわけにもいかず、酒でも飲んでいるよりしかたない。といって、おれのような仕事をする人間には、強い酒を飲みすぎるのは禁物だ。

本場もののジャズが鳴っている。外人の客もいて、ロサンゼルスにいるのとちっとも変らない。

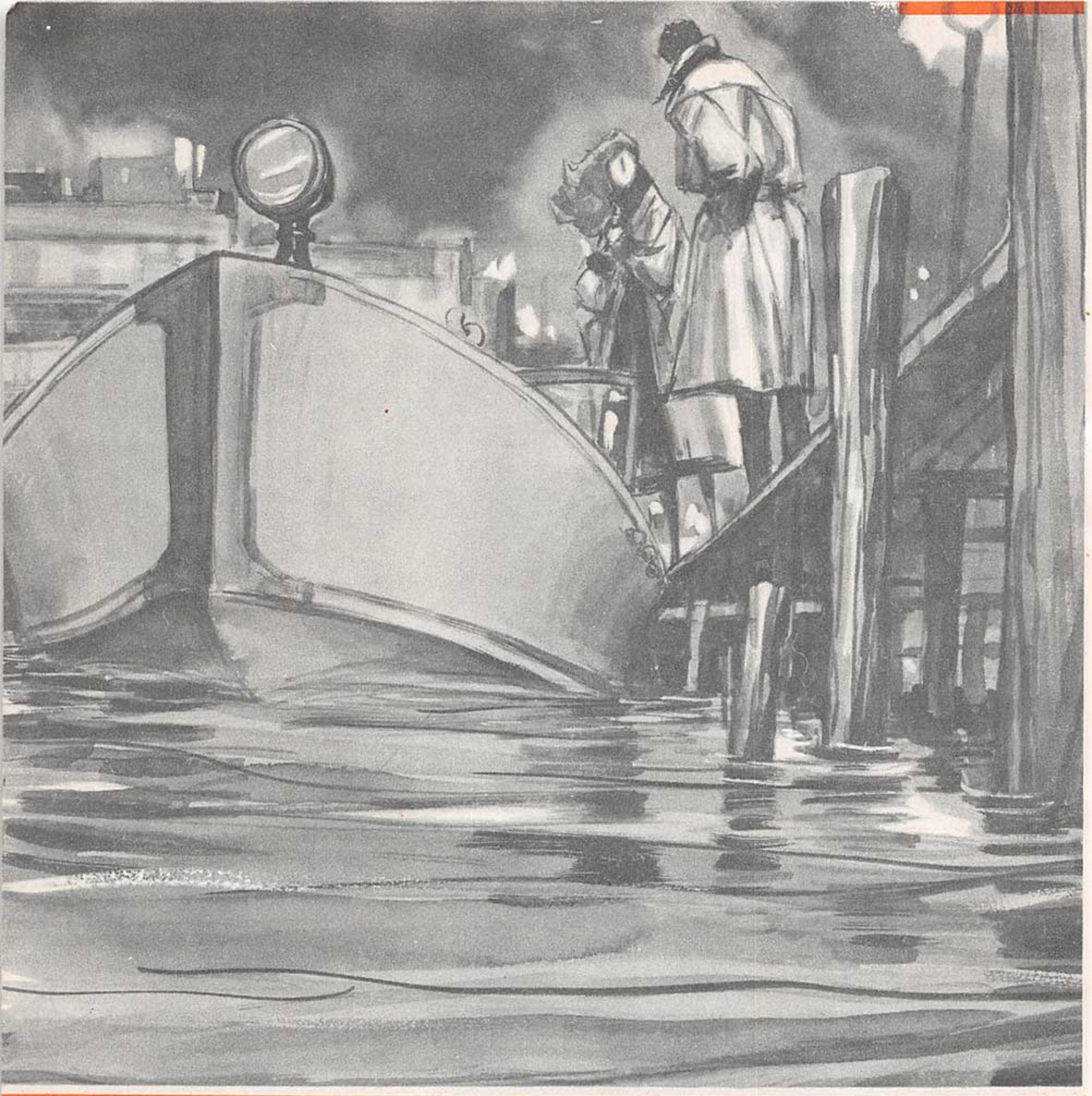
強い香水の匂いがおれの鼻をくすぐった。いつの間にか、おれの標的になった女が、すぐそばに立っていた。

「どう京都にでも案内しましょうか？」



⑥ もう一つのわけ

タクシーで、女とおれは、夜の京阪国道をつっ走った。女は、キミという名を教えてくれただけで、あまり話そうとはしない。しかし、黙って横顔を眺めているだけでも、時間のたつのを忘れるほどだ。京都の街なんて、どうでもいいような気さえしてくる。



京都の街へ入っても、女はタクシーを停めようとはしなかった。街を通りぬけ、のぼり坂の多いハイウェイを、車はどんどん走りつづける。

「いったい、なんのつもりなんだ？　どこへ行こうっていうんだい？」

「ビワ湖でモーター・ボートに乗るの。夜のビワ湖って、とてもすてきよ。もうひとつわけがあるんだけど、それはあとで話すわね。ふたりっきりで……」

湖畔のホテルから、おれたちはボートに乗った。どうやら、あらかじめ手配ができていたらしい。モーター・ボートを、女はものすごいスピードですっとばす。かなり沖に出てから、女はエンジンを切ると、おれのほうへ美しい顔をふり向けた。小さなランプの光線で、女の瞳がきらりと光る。

「落ちついて聞いてね、ディック。日本の警察が嗅ぎつけたのよ。大阪のオフィスは、今夜のうちか、遅くとも明け方に手入れされるはずなの。品物は湖畔のコテージに隠してあるから、朝一番の列車に大津から乗って、横浜へ運ぶのよ。東京もついこのあいだ手入れされたから、日本の市場は半年くらいダメでしょう。だから、品物はアメリカでさばくことになったわけ」エンジンが再び唸り出す。



⑦ ボスは女だ！

大津から三十分くらいの距離だろうか。湖畔の松林に囲れたきれいなコテージだ。

「じゃ、ボスはもう豚箱に入ってるかもしれないわけだね」おれは訊いてみた。

「そう。あたしの身代りにね。でも証拠不十分ですぐに釈放よ。いかにもボスづらしてるから、おどりにはもってこいだわ」

白い歯をみせて、女は微笑した。おれの背筋を、冷いものがつっ走る。この女がボスだったのだ。が、さりげない顔で、おれは戸棚のウイスキーのびんに手をやった。

「ところでね、ディック。こないだのゲームを、もう一度見せてくれない？」

⑧ ローソクは六本！

ゆっくりスーツのボタンをはずしながら、女は言った。「アメリカまでの護衛さんの腕

⑨ 火は消えた

消音器をつけた拳銃から、六発目の弾丸がとび出して、最後の火が消えてしまっても、





を、もう一回確かめておきたいし、実をいうとね。あたし拳銃の標的になるのが好きなのよ。とってもスリルがあるわ。今夜はローソクは六本、一発でも射ち損じちゃダメよ」

女はベッドに体を横たえると、自分の手でローソクを一本ずつたてていく。

「昔、こんな拷問があったそうよ。面白そうだけど、ローソクが燃えつきるまでほっとかれたんじゃたまんないわね。さあ、部屋のすみから射つのよ。六発ともうまくいったら、そうね、このパンティをあげてもいいわ」そのパンティは、雪のように白かった。

女は眼を閉じたまま、しばらく動こうとしなかった。スリリングな感情に、酔い疾れてでもいるように、唇のあたりに微笑がただよっている。

思わずおれが、一歩踏み出そうとした時、女の眼が大きく開いて、じっとおれを見た。

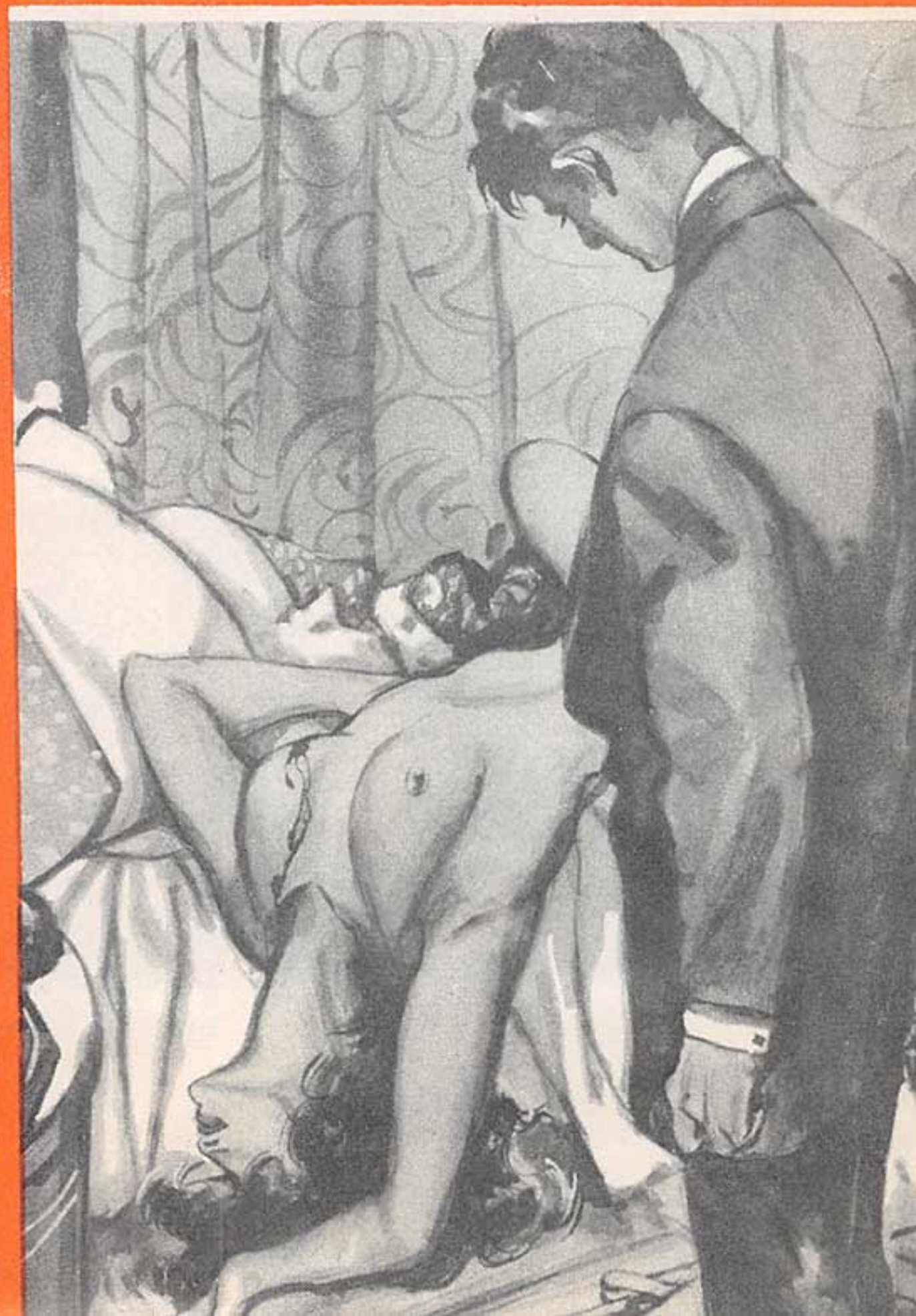
「あんた、本物のディック・シマモトなら、なぜあたしがボスだってことを知らなかったの？　ローソクを一本ふやしたわけがわかったら、いつまでも空っぽの拳銃なんか持ってないで、白状しちゃったらどう？」女の腕が枕の下へのびていく——。





⑩ 勝負は一瞬

枕の下で、小型拳銃がきらめいた。が、一瞬早く、空っぽの拳銃を投げ捨てたおれの手は、ズボンのベルトの裏側から、二二口径を抜き出していた。連邦検察局に、二挺拳銃を禁止する規定なんてありゃしない。ロサンゼルスで本物のディックを射ったとき同様、間一髪の差だ。女の左の乳房に、赤い花が小さく咲いた。



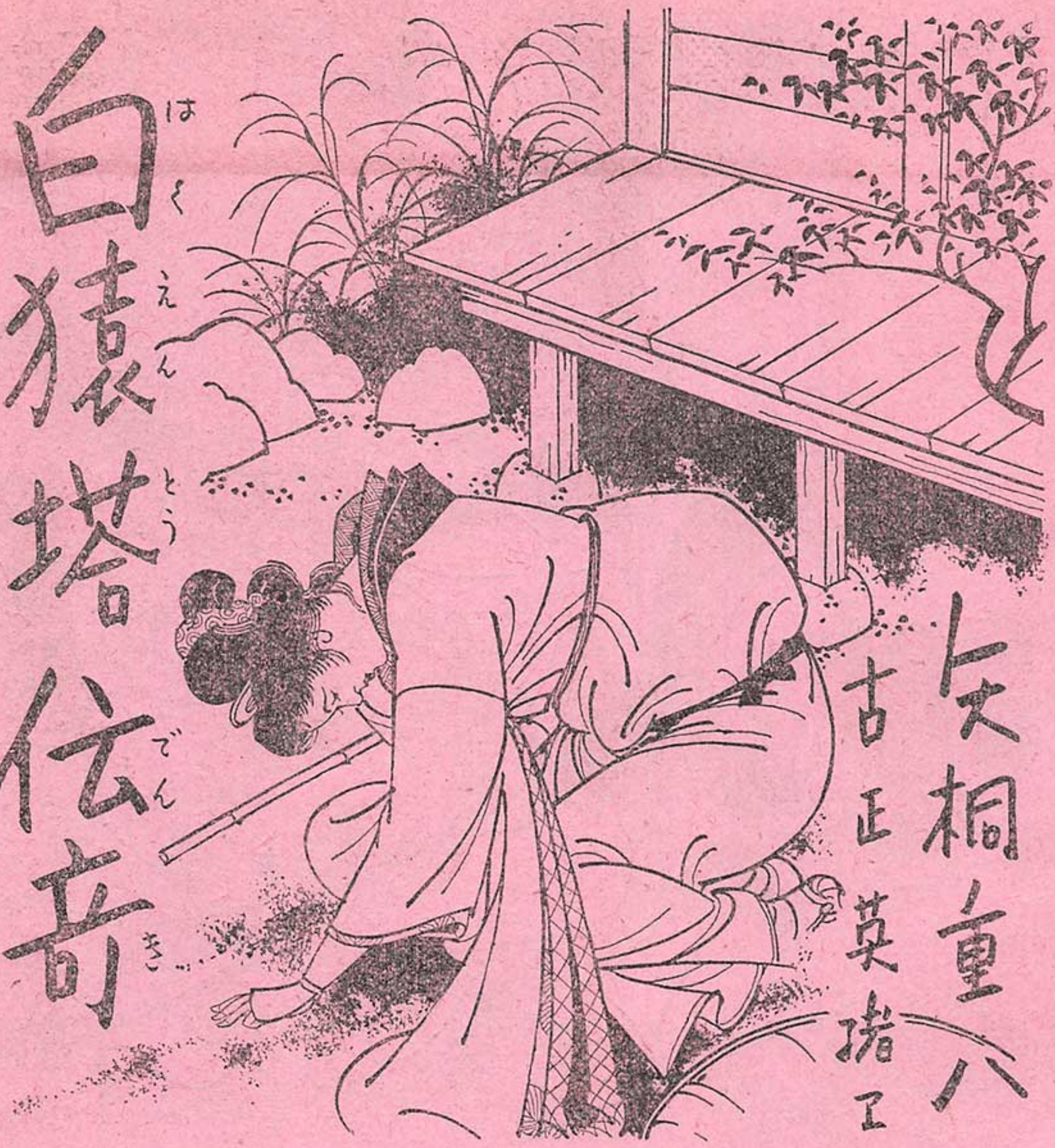
⑪ 小さなトランク

ベットの下から、おれは小さなトランクをひっぱり出した。ダイヤやルビーが、ぎっしりつまっているはずだ。日本へ飛ぶ寸前のディックを射殺してから、ちょうど十日目。ベッドに横たわったままの、ダイヤよりも美しい死体に眼をやりながら、おれは、日本の警察に連絡するため、電話器をとりあげた。あとの始末は、優秀な日本の警察がやってくれるだろう。パトカーのサイレンが聞えるまで、おれは死体を眺めつづけた。

裏窓・1960・三月号



白猿塔綺譚



女相撲八重八古正英雄

①　一人旅の娘

街道筋から、だいぶ横にそれて、旅人の往来もまばらな間道の、このあたりは鬱蒼と茂って、ことにさびしい笹藪がつづいている。

その笹藪を背にした辻堂の前にうずくまりいま、一人の旅姿の娘がうめいていた。

「あ、痛ッ、いたた……」

前ごごみになって腹をおさえ、苦痛を耐えているようすである。

と——その辻堂の附近を、これも道中姿の一組の男女が通りかかった。

女は門附けのこしらえで、三味線を小脇にかかえた、二十四、五のあだっぽい姿だ。

「ちょいと、三太、あれをごらんよ」

「へッ、なんです、姐御？」

三太と呼ばれた若い男は、姐御の白い人差指のさきに、ずいっと眼をやる。

「おや、こいつは……」

ニヤリと笑う三太。

この姐御の名は稲妻お紺——。三味線を抱いてはいるものの、裏芸はほかにある。すなわち女道中師、女イカサマ師、ときには強盗や人殺しにも手をかそうという女。

このお紺の眼に、いま辻堂の縁にうめいている旅の小娘は、絶好のカモであった。



② 女賊のお紺

「ちょいとお嬢さん、こんなさびしい場所に坐りこんで、いったいどうおしだえ？」

親切をよそおって、お紺は娘の肩へ手をかけた。

「ハイ、ありがとうございます。私はあの、江戸深川に住む大工の娘で、おそのと申します。馴れない一人旅ゆえ難渋し、遂に道を迷ったその上に、さきほどから、きゅうに脇腹が痛みだして……」

ホッとして礼をいう娘の顔は、まだあどけない十六、七の愛らしさ。

「そうかい。それはお困りだろうねえ。だけど、残念ながら、あたしはお前さんを助けるために、声をかけたんじゃないのさ」

「えッ？」

と、おどろくおその内懐へ、お紺の手がむンずとばかりにのびて財布をつかみだす。

「それッ、三太、後を追ってこられないように、娘の手足を縛っておしまい！」

「がってんだ！」

三太もこんな仕事には馴れている。おその腰紐を手ぎわよくむしりとると、その細い両腕を背中にねじりあげ、ぐるぐる巻きに縛りあげて、辻堂の中に放りこむのだ。



③　親切な乞食

それから半刻後――。その辻堂の前を、一人の乞食が通りかかった。

おや？……女のうめき声をきいて、乞食は辻堂の扉をひらいて、中をのぞきこんだ。

「どうしなすったい、お嬢さん？」

顔かたちは、おそろしく汚ない乞食だが、親切におそのを縛った紐を解いてやるのだ。

おそろしさのあまり、おそのは泣きだした。

「泣かねえで、おれにわけを聞かせてくれ」

乞食ながらも、どこか、たのもしげなこの男に、おそのは泣き泣き一人旅の理由を語りだすのであった。

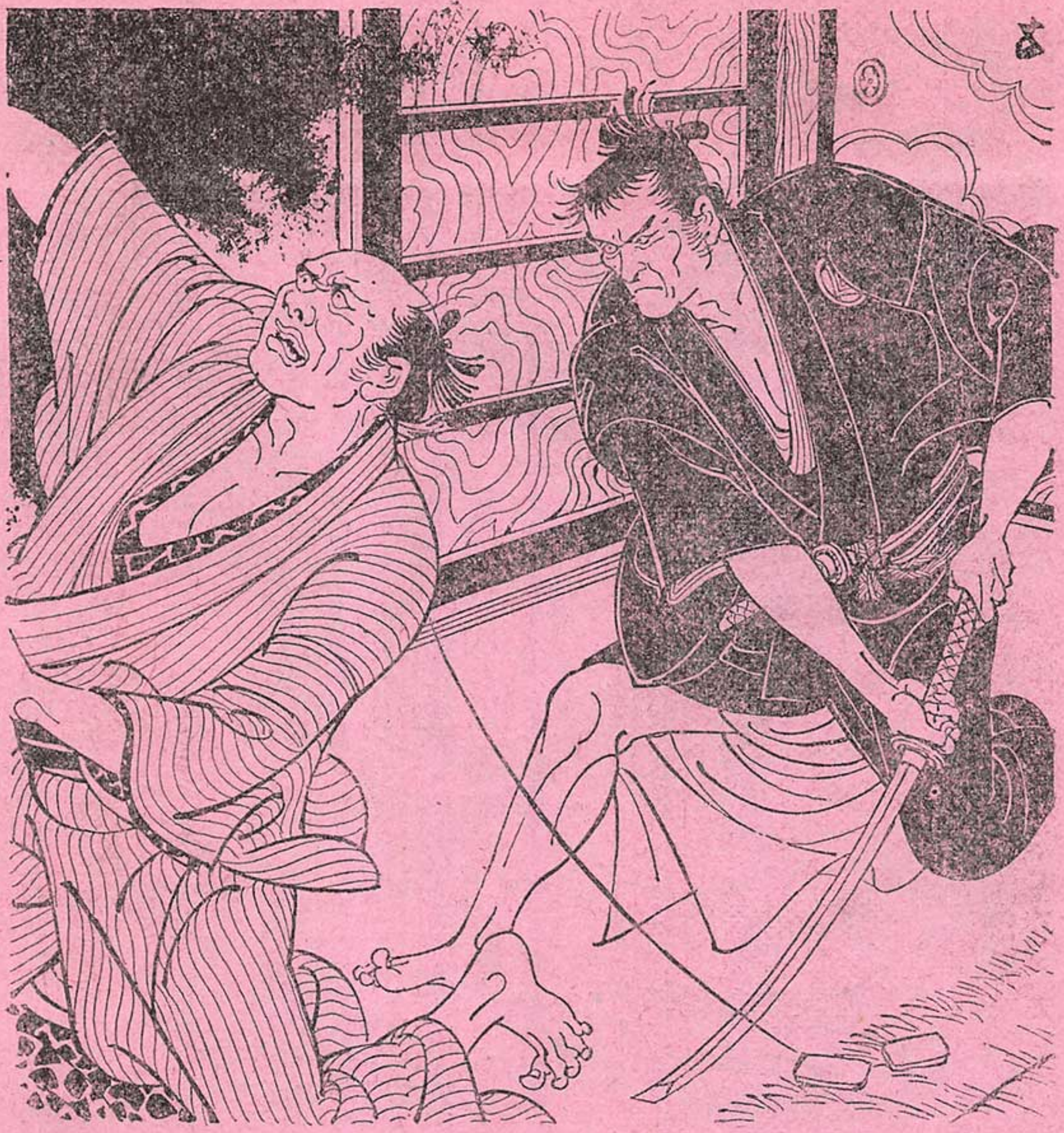
――いまから半月前、甲州白猿峠のふもとにおそのは十七年前、父親、大工の頭梁善助が、卒中で倒れた。善助は息をひきとる前に、おそのが自分の本当の子ではないことを告白した。

捨てられていた捨て子だったのである。

善助は、一枚の古ぼけた紙片をおそのに渡して言った。――この紙片は、お前の守り袋に入っていたもの、これを持って白猿峠へいけ。そこにお前の素姓を秘めた何かがある……

「ふゥん、なるほど……」

乞食は首をひねって腕組みした。



④　人斬り伝九郎

白猿峠のふもとにある信雲寺という古寺。
・仙海という住職がいるが、これがたいへんな坊主であった。
土地のバクチうち猿田の仁造という親分に庫裡を貸して、賭場をひらかせているのだ。
いま——この賭場に客となって姿を見せているのは、稲妻お紺に子分の三太。それから近在の堅気衆が六、七人。
「親分、あの女の手つき、怪しいぞ」
と、仁造の耳にささやいたのは、用心棒の浪人、柴田伝九郎である。伝九郎は、あの女とは、お紺のことである。
「女、待て！　その眼光鋭くのそりと立った。伝九郎の足が、お紺の手を踏み敷いた。
「しまった！……のてのひらを開いてみろ」
イカサマを見ぬかれたお紺と三太は、横ッとびに逃げかけた——伝九郎の白刃が一閃し、三太の肩から袈裟がけの血しぶきがあがった。
「わああッ！」
「ふふふ……女のほうは、もうすこし生かしておこう。殺すには惜しい器量だ……」
血刀をぬぐって、人斬り伝九郎は不気味なふくみ笑いを洩らした。



⑤　白猿塔の謎

これをみて、お紺はふるえあがった。

（なんてえ手の早い浪人なんだろう！……）

そのお紺は、素ッ裸にむかれて、うしろ手に縛りあげられている。

「女イカサマ師とは、ふてえ根性だ。二度とそんな真似のできねえようにしてやるぞ！」

親分仁造の眼が、縄にもがくお紺の裸を撫でまわし、それから打つ蹴るなぐるの折檻がはじまった。

「ひいッ、かんにんしておくれ！　そのかわり、親分にいいものをあげるよ！」

「なんだと！　いいものだと？」

「そうだよ。宝の隠し場所を描いた絵図なんだ。あたしの財布の中に小さくしまってある紙片がそうなんだよ！」

お紺にしてみれば、これは苦しまぎれ、一時のがれの嘘ッパチであった。その絵図とは旅の娘おその持ち物から奪い取った財布の中に入っていたものなのだ。だが――

「ふうむ……。これは親分、たいへんなものらしいぞ」――絵図を調べてうなったのは、仙海坊主である。絵図に示された白猿塔という石塔は、たしかにこの寺の墓地の一隅に、古びたままで存在するというのだ……。



⑥ 武田の隠し金

本堂の柱に裸で縛りつけられているお紺。
それを見張っているのは浪人伝九郎である。
「ねえ、用心棒さん。お願いだから、この縄を解いておくれよ。そうしたら、あたしゃ一生、あんたのものになってもいいよ……」
せいいっぱいの色気をだして、伝九郎をかきくどくお紺である。
「ほんとうか？……」
伝九郎も男、ついその誘惑にのった。あたりを見まわし、お紺の縄を解いてやるのだ。
——こちらは墓地の中の仁造と仙海坊主。
苔むした白猿塔を、やっと探がしだした。
白い雲母石に猿が一匹彫られた石塔である。
「これだッ、地図によると、この塔の下に、武田の黄金千枚が隠されているはずだ！」
仙海坊主がさけんだ。と——そのとき、
「その黄金千枚は、こっちへもらおう！」
背後から声をかけたのは、用心棒の伝九郎だ。お紺も一緒にいる。
「伝九郎さん、冗談いっちゃ困りますぜ！」
仁造が怒った顔で言った。
と——無言のままに伝九郎の腰から白刃がひきぬかれ、同時に、仁造と仙海坊主が、血しぶきをあげてぶッ倒れた。



⑦ しびれ酒

「おどろいた、あたまったくすごい腕だねえ。伝九郎さん、あとしゃ惚れぼれしたよ。ところで、黄金千枚なんて本当にあるのかしら？」

お紺の眼が欲に光って白猿塔を見つめる。

「掘ってみなければわからぬ」

猿が刻まれた奇怪な石塔の下を、伝九郎は掘り返しはじめた。

やがて——穴の底から古びた鎧びつが現われたのである。

「ねえ、伝九郎さん、疲れただろう。いま庫裡から酒徳利をそれを見たお紺、いに一杯やってけようじゃないか」

「酒か、ありがたい」——お紺のついだ茶碗酒を、ゴクゴクと飲みほした伝九郎。まもなく苦しげに咽喉をかきむしりはじめた。

「ううッ、だましたなッ！……」

酒の中には、しびれ薬が入っていたのだ。

そのときである。

「人斬り新九郎に稲妻お紺、御用だ！　神妙にしろ！」——墓地の中へとびこんできたのは、さきほど、江戸から伝九郎のおそのを助けた乞食——実はお紺を追ってきた目明し、花川戸の伊三郎であった。



⑧ 明るい甲州路

伝九郎はいまから一年前に、江戸浅草両国界隈で辻斬り強盗を働き、十人余りも殺傷して逃げた大罪人。——だが、その人斬り新九郎も、しびれ酒を飲まされていては、難なく伊三郎の手で御用になった。

そしてまた、稲妻お紺もキリキリと縛りあげられる。

「てめえら二人が甲州路に逃げこんだ知らせを受けて、わざわざ江戸から出張ってきたんだが、まさか二人をいっぺんにお縄にできようとは思っていなかったぜ、ははは……」

と笑いながら、伊三郎の手が、おそのをまねく。

「さあ、おそのさん、よく見るがいい……」

伊三郎の手で、鎧びつのふたがとられ、中からは、さんぜんと光る黄金と古書一巻。

おそのの祖先は、武田家の重臣だった。

戦い破れて落ちのびるとき、後日武田家再興の折の軍資金の一部として、ここに黄金を埋めたのである。

それから数日後——。

うららかな甲州路を、江戸にむかって歩いていく、二人づれの旅姿は、伊三郎とおそのであった。

裏

三　月　号

伝奇小説特集



第五巻・第三号



藤沢桓夫

鷹匠三人組

せまい山道だった。道の至るところに木の根や蔓が這いくねっていて、傾斜もかなり急である。

しかも、片側は熊笹が密生したふかい崖下であり、反対側を仰ぐと、これも高い崖に雑木雑草が、びっしりと生い茂っている。

「――困ったな」

あけびは、その山道の途中でつぶやき、立ちどまった。頭の上に水桶をのせている。

両手で、その重い水桶をささえていた。だから、両袖は



らえは、ひと目で、かなりの地位にある侍と知れる。

三人の旅侍の足はかなり早く、あけびが、いまさら道を引き返そうとしても、もう間に合わないとみえた。

――しかたがない……

あけびは、水桶を頭にのせたまま、身体をせいいっぱい道の端に寄せて、侍たちが通り過ぎるのを待つ姿勢をとった。

三人の武士が、近づいてきた。ほそい山道だから、縦に一列になっている。

あけびは、なぜかその侍たちから殺気を感じ、血の匂いをかいだような気がして、いっそう身をすくませた。

先頭の侍は、編笠の中からチラと眼を光らせてあけびを見ると、黙って通り過ぎた。

二番目の侍は、ふッと足をゆるめた。

道端に立ちすくんでいる女が、身にはまだうら若い、ピチピチした身体であることに、眼を惹かれたのだ。

おまけに、頭上の水桶を、たかだかと両腕をあげてささえているの

隙までさがって、むきだしになった二の腕が、美しい小麦色をみせている。

（――困ったな、どうしよう……）

このほそい山道の行く手から、三人の武士が登ってくるのだ。

二ツ折り黒縁付の編笠をかぶり、立派な羽織に野袴をつけた旅ごし

た。ゆたかに息づくあけびの乳房に、
ひょいッ……と手がのびたのは、よくある男の悪戯心とはいえ、武士にあるまじき行為といえよう。
「ひえッ」
あけびが胸をゆすって、思いもかけぬそのみだらな手から、乳房を避けようとしたのはまだ男を知らぬ十七才の山の娘にとって、当然の本能であった。
だが——
身をひねったとたんに、その頭上にあった水桶が、大きくかたむいて水がこぼれ、それが三人目の武士の肩さきへ、
ざぶりッ……
とかかっては、あけびの顔色は蒼白となった。
「ぶ、ぶれい者！」
三人目の武士の片袖は、肩からびっしょりと濡れた。
いきなり、あけびの胸ぐらをつかむと、そこへねじ倒した。
「ああッ」
水桶は、ゴロゴロと崖の下へ転落していった。
「これをどうしてくれる。拙者の羽織も着物もびしょ濡れだ！」
すさまじい権幕で罵声を浴びせる。
「だって、あンたたちがあたいの胸に、ヘンなイタズラするから悪いよ。侍のくせに、どすけべえ野郎！」
あけびも負けてはいなかった。あけびはこの谷間に住む猟師七蔵の娘である。こわいもの知らずで気が強い。
「ぶ、ぶれい者！　よし、手討ちにしてくれる。そこへなおれ！」
山の娘から、思わぬタンカを投げつけられて、濡れた武士は真ッ赤になって怒った。
本気らしく、刀の柄に手をかける。
「待て、半兵衛。短気はやめろ！」
先頭の武士が、鋭い声で制した。
「しかし、左内——」
と、いきりたつ半兵衛を、
「忘れるな、おれたちは将軍家お鷹匠組の重職……」
左内の眼が、意味ありげなふくみ笑いでおさえる。その言葉に、
「うむ……」
短気の半兵衛も、刀の柄から手を放した。
「しかし、左内、われらをどすけべえなどと罵しったこの娘を、このまま放すのも業腹ではないか。どうだ、今夜の宿はどうせ山奥の旧家……この娘をこのままわれらと同道させて、酒の酌などさせては……」
といったのは、二番目の、あけびの胸に手を触れたれいの侍である。
「うむ、そういえばこの娘、山猿にしては可愛い顔立ちをしている。よし、そうするか」
半兵衛は、すぐに賛成した。
「ふン、半兵衛と多九郎の手にかかっては、その娘、酒の酌だけでゆるされるかな」
左内が苦笑した。
「いやだよ！　誰がお前らの酒の相手なんかするものか！」
あけびの身体が、力いっぱい反抗し、はねあがった。武士たちの間を、かいくぐって逃げようとするその背中を、半兵衛の足が、ぐんと

踏まえる。

「逃げようとて、逃がすものか」

大きな手が、わしづかみにあけびの両腕を背中にねじあげた。その左右の手首を、大刀の下げ緒で、ギリギリと縛りあげる。

「あ、痛いッ、なにするンだい！」

さけんでも、もう駄目だった。縄尻をつかまれ、ズルズルとひきずられた。

逆手の苦痛に、肩の骨がポキリと鳴った。

「痛いッてば！　ちくしょう！」

苦痛にわめき、あばれるあけびを、

「うるさいッ、静かにあるけ！」

縄尻をとった半兵衛が、草鞋の足をあげると、あけびのまるい腰を思いきり蹴とばした。

「ひえッ！」

あけびは、みじめに前へつんのめる。短い裾がいよいよまくれて、膝から上の白い腿がさらされる。

ホホウ……という顔で、多九郎がのぞきこむ。布子からいつもだしている手足は陽やけして黒いが、隠している肌は、なめらかに白い山の娘だ。

「ちくしょう！　あたいをこんなひどい目に合わせて、おとうが知ったら、お前らなんか鉄砲で皆殺しだぞ！」

あけびは、くやしげにさけんだ。

半兵衛が、まっさきにうなった。

縛りあげたあけびを引きずりながら、三人の武士は渓流のふちへでた。

「おお、絶景だな。江戸では見られぬ、見事な眺めだ」

遠くの連山、近くの谷、樹木の新芽が燃えるようにのびて、あざやかな一色の緑であった。

やがては大江戸にそそぎこむ荒川の源流がこの渓谷に澄んだ瀬音をたてている。

と——そのとき、あけびがふいに身をよじってさけんだ。

「あッ、立花の若旦那、助けてェ！」

三人の武士は、ぎくりとして、いっせいにあけびがのびあがった方角に視線を集めた。

そこには——

粗末な木綿の素袷に、山袴をはき、腰には短い刀をさした若い男が立っていた。

その男は、縛られているあけびの姿に、大きく眼をみはり、

「おお、あけびか、どうした、その恰好は、なにをしたのだ？」

いぶかりの声をかける。粗野だが、愛情のある声音だった。

「うぬ、なにやつだ！」

半兵衛が、まっさきにうなった。

貧乏郷士

☆醜悪な三人の眼は緋扱帯に自由を奪われた雪乃の苦悶の姿を執拗になめ回すのだった！

「これは失礼。このあたりの山林の主、秩父郷士、立花荘太郎。――して、御貴殿方の御姓名は？」

わるびれずに、堂々と荘太郎は名のった。

「ききたくば、きかせてやろう。――拙者は将軍家お鷹匠組、組頭の宇賀神左内」

「拙者は同じく鷹匠組下、石丸多九郎」

「同じく、津田半兵衛――」

どうだ、おそれいったか、とばかりに胸をそらせ、三人とも威猛高の表情である。

――ふうむ……

立花荘太郎は、チラと眉を寄せた。

相手が悪い……と思ったのだ。

――将軍家の鷹を飼い馴らすのが、鷹匠の役目であった。鷹狩りのときは、将軍の身辺じきじきに勤める重職の身分である。

毎年、江戸からこの秩父の山中へ、お鷹に仕立てる雛鳥をさがしにくるのが、彼らの重要な役目になっていた。

だが、虎の威を借る狐のたとえのとおり、山にきて雛鳥を捕える前に、彼らは秩父のめぼしい地主旧家を泊り歩き、やれ酒を飲ませろ、ご馳走をしろ、金を貸せ、女をだせと難題をふっかける。

役儀をカサにきて、威張り散らす彼らに、このあたりの田舎代官などは、手も足も出ないあり様だった。

（――しかし……）

と、立花荘太郎は首をひねった。

それにしても、この三人の武士には品がない。昼間から乱暴がすぎるようだ。

立派な衣服を身につけているが、どことなくそぐわないし、眼つきも悪い……。

「ええい、そこのけ、貧乏郷士の小伜！」

宇賀神左内が、一歩前に踏みだし、傲慢にどなった。

「いかにも、わたしは貧乏郷士の小伜だが、その娘はゆるしてもらいたい。あけびは、わたしの郷に住む猟師の娘で、けっして縛られるような悪いことをする者ではない」

平然として、荘太郎はこたえた。

「若旦那、こいつらは、あたいにい





やらしいイタズラをしたンだよ！　あたいが逃げようとして、つい組相をしたら、こんなに縛りやがったンだ！　助けておくれよゥ！」

首をのばして、あけびはさけんだ。

「うるさい！」

と、どなりつけあけびの身体をそこに突き倒すと、短気の半兵衛が手に唾をして大刀を抜きはなった。

「将軍家鷹匠組にさからう田舎郷士斬り捨ててくれるわ！」

乱暴にも、いきなり荘太郎の面上へ斬りつけてきた

のである。

「それは無茶だ！」

その一刀を右に避け、手に持っていた荘太郎の小枝が、半兵衛の眉間に、ピシリッと鳴った。

「うッ！」

とうめいて、半兵衛はひっくりかえる。

カッと怒った残りの二人は、ギラリギラリと白刃を抜きはなった。

「おのれ！　郷士の田舎剣法で、われらとたたかう気か！」

「田舎剣法にちがいないが、わたしの腕には山で鍛えた骨がある。伊達にさしている貴公らの飾り刀とは、すこし違うぞ」

立花荘太郎の足腰、身のかまえは、なるほど、山犬のように強靱で猿のように敏捷だった。

勢いこんで左右から斬りつけてきた宇賀神左内と石丸多九郎も、荘太郎の持つ小枝で、したたかに小手を打たれ、大刀を叩き落とされて地に膝をついた。

「さあ、あけび、早く家にもどれ。七蔵が心配しているぞ」

荘太郎は、あけびを縛った刀の下げ緒を解いてやった。

「すみませン、若旦那、ありがとう！」

あけびの身体は、山ウサギのようにはねあがって、渓流ぞいの小道を下っていった。

立花荘太郎は、地面に這ってうめいている三人の侍に言った。

「――お鷹匠組の皆さん。固苦しい江戸の勤めをはなれたこの山の郷で、思いきり手足をのばしたかろう。その気持ちはわかるが、郷の者にあまり威張らぬほうがよい。――雛鷹を巣から奪いとるのは、容易かしい。――親鷹に狙われて、この山中で命を落とした方も、過去に幾人かありましたからな、あはは……」

雛鳥をとるのは、親鷹の留守を狙って巣へ近づくのだが、獰猛な鷹はそれを知ると、矢のような速さで、人間に襲撃を加えてくる。

その鋭いくちばしを避けそこね、馴れた鷹匠も、頭を裂かれて死ぬことがあるのだ。

――この荘太郎の言葉には、

「だから、あまり威張って弱い者いじめをすると、鷹に襲われたとみせかけて、おぬしらの命を頂戴してしまうぞ」

という、意味がふくまれていた。

山を守る郷士の、これは権威に屈せぬ、不敵な土性骨であった。

三人の武士は、手出しもできずに、悠然と立ち去る荘太郎の後姿を見送るだけである。

山屋敷の客

その夜――。

昼間ならば、甲武信岳を西にのぞむ鳴羽郷鷹の巣谷。

その中腹に位置する庄屋、笹子茂右衛門の山屋敷であった。

いま、この山屋敷の庭に面した離れの客間に、傲然と大あぐらをかいて飲み喰いにうち興じているのは宇賀神左内、そして石丸多九郎、津田半兵衛の三人である。

当主の茂右衛門は、下座にひかえて、静かにこの横暴な客の相手を勤めていた。

鷹匠たちの宿に、今宵ふいに選ばれた災難を、すでにあきらめてい

る表情であった。

「――うむ、濁った地酒だが、なかなかいける。料理もこんな山奥にしては、まずまず喰えるぞ。――おい、あるじ、もっと酒を持ってこさせろ」

津田半兵衛が、大声あげて酒の追加を命ずる。

「かしこまりました。お口にかないまして、嬉しうございます」

一礼して、茂右衛門は手を叩いた。

「だが、一つたらぬものがある……」

石丸多九郎は、不服そうな顔だ。

「女か。――辛抱しろ。十日や二十日抱かずとも、死にはせぬわ」

にがい顔で、宇賀神左内がたしなめた。

やがて、陽やけして黒い顔の下男が、不器用な手つきで酒を運んでくる。

「お待ちどうでごぜえますだ」

「けッ、色気のねえツラを突きだしやがって何がお待ちどうだ。おいッ、この屋敷には、女ッ気はねえのか。下働きの女中でもよい。酌をさせるのだ。つれてこい！」

酔ったせいか、ひどく口汚なくなった石丸多九郎が、下男にからみついた。

「へえ、この屋敷は男ばかりで、女中なんて一人もおらねえが、お嬢さまが……」

と、うっかりしゃべってから、下男はあわてて口をおさえた。茂右衛門のけわしい眼くばせに気づいたのだ。

しかしもう遅かった。

「お嬢さまだと？」

津田半兵衛は、酔っても耳ざとかった。

「娘がいるのか？」

宇賀神左内も、鋭い眼を茂右衛門にむけてきいた。

「いえ、娘と申しましても、まだほんの子供でして……」

「いくつだ？」

「……」

「いくつだときいているのだ！」

「は、はい。十……八才に相なります」

「馬鹿！　十八才が子供か。ここへ呼べ！」

「それがあの……昨夜来から、風邪で臥っておりますもので……」

茂右衛門も、いまは必死だった。この侍たちの前に娘をだしたら、どうなるかわからない。だが、この侍たちは執拗だった。

「かまわぬ。ここへだせ。この席へつれてこいというのだ！」

石丸多九郎が、声を荒くしていった。

娘の存在を、いままで隠しておいた茂右衛門に対して憤りがある。

「はい。――しばらくお待ち下さいませ。ただいま、わたくしが呼んで参りましょう」

仕方なくそうこたえて、茂右衛門はこの席を立った。

廊下を去っていく茂右衛門の足音をききながら、宇賀神左内が大きく舌うちした。

「多九郎に半兵衛、まったくお前らは仕方のない奴だな。いまさらガツガツと酒や女に喰らいつくことはなかろう。十万両の黄金が手に入れば、こんな山奥の女や酒に眼の色を変えなくとも、江戸へ帰って、思うぞんぶんのぜいたくができようというのに……」

「まあ、そう怒るな、左内。今夜はその前祝いだ。すこしぐらい破目

をはずしても、そうビクビクすることはあるまいて、あははは」

腹を天井にむけて笑うのは津田半兵衛。

「まだ前祝いは早いわ。これからが仕事ではないか。まだ、かんじんの絵図面も手に入れてないというのに……」

年長の宇賀神左内は、いつもたしなめ役である。

「こうして、うまく笹子家へ泊りこむことができた以上、もう武田の隠し黄金を描いた絵図は、おれたちの手に握ったも同然だよ、あはは……」

と、半兵衛は豪傑笑いをやめない。

「半兵衛、だからお前は考えがあまいというのだ。みたところ、この笹子家もどうやら由緒ある郷士の一族らしい。おいぼれながらもあの茂右衛門、一筋縄ではいかぬぞ。脅したところで、そうあっさりと絵図面をこっちへ渡すものか」

宇賀神左内は、むずかしい顔で、盃を口にもっていく。

「そうだ、左内。おれはいま、ふッと思いついたのだが、それについて、一番手ッとり早い方法がある……」

と、口をはさんだのは、石丸多九郎であった。肩をまげ、声を低めて、宇賀神左内の耳へ、

「娘がいるとわかったのはこっちのさいわい。その娘を使うのだ」

ニヤリとして、ささやいた。

「娘を使う？」

「そうだ。——娘の身体をこっちの手でおさえ、責めあげて、やい親父、絵図をこっちへ渡せばよし、さもないときは、可愛い娘の命はないものと思え……」

「ふむ、なるほど。……うまくいくかも知れぬ。お前、案外の知恵者だな」

「少々手荒いが、夜中に家探がしなんかするよりも、仕事がずんと早かろう」

石丸多九郎は、得意気に赤い鼻をうごめかした。



絵図面亡者

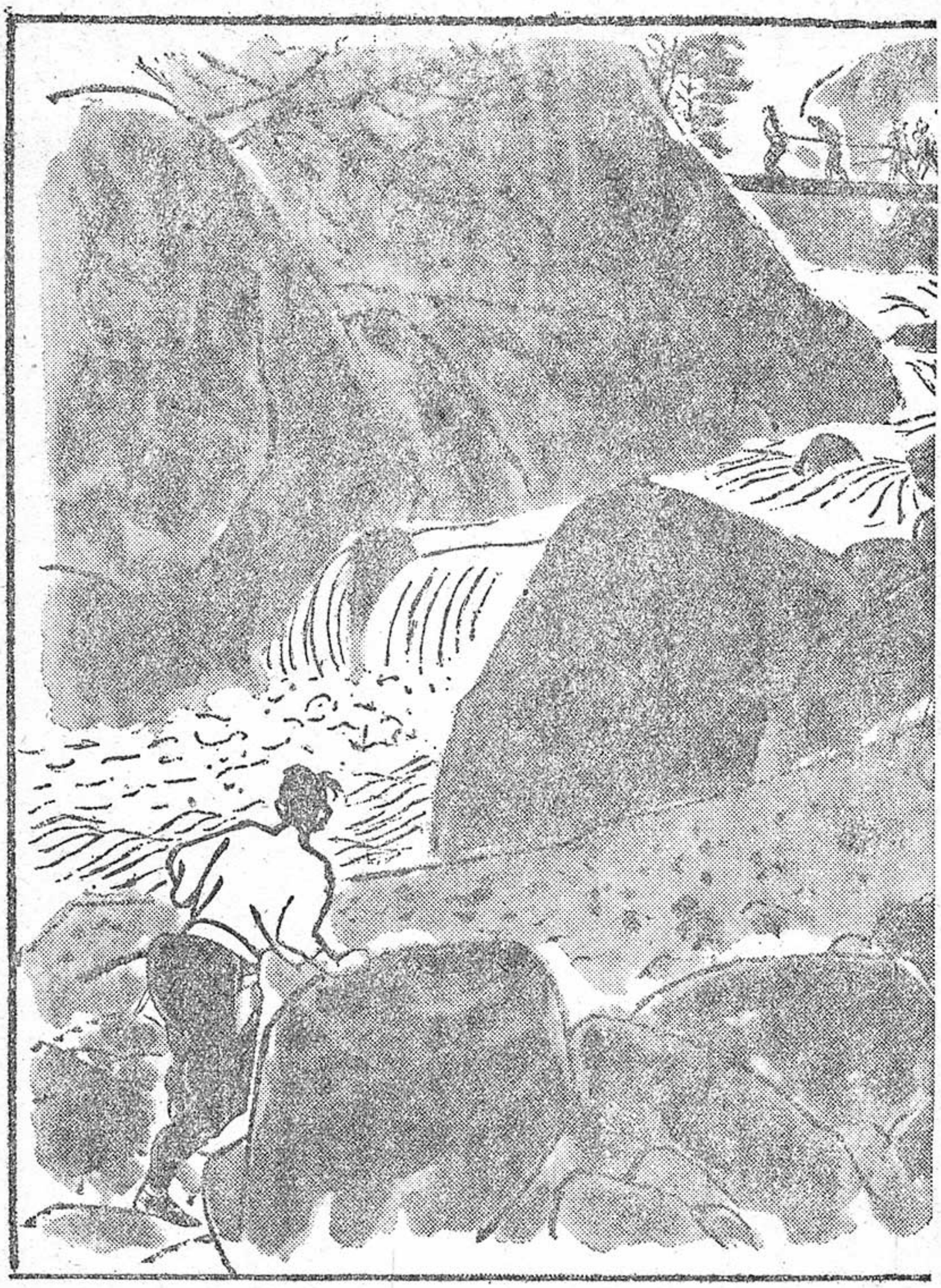
笹子茂右衛門の祖先は、甲州の武田家につかえた金座の役人であった。当時、武田氏はその持領一帯から天産豊かな金を採掘して、定位貨幣及び切遣い金をつくった。

名将と呼ばれた武田信玄は、単に戦上手の武将というだけではなかった。

戦国の世に珍らしく規模の大きなもので、松木、野中、志村、山下の四家が、その金座を担当したという。

世にこれを「甲金」といった。

この武田の私鋳



金は純度の完全さからいって非常に珍重され、高価なものである。

武田勝頼が天目山で自刃したのを最期に、さしもの名家も滅亡した。

金座役笹子重太夫は、五百枚の黄金小判を抱いて戦場を落ち、後日、武田家再興のための軍資金として、甲武信岳をのぞむ秩父の山中にそれを埋蔵した。

いま――。

宇賀神左内以上二名の侍が狙う絵図面は、その黄金の隠し場所を記したものである。

「――ほう、これは美しい！　名は

なんという？」

娘がこの客間に姿を現わすやいなや、たちまち無遠慮な声を発したのは、津田半兵衛だった。

「はい、雪乃と申します」

娘に代って茂右衛門がこたえた。暗い表情のなかに、もし娘の身に異変があれば、身をもって守ろうという決意がある。

「美しいぞ、まったく。もっとこっちへすすめ」

半兵衛がほめたのは世辞ではなかった。

山里育ちに似ず、色が白く、たおやかな物腰は、深窓の姫さながらであふれ、しとやかな物腰は、深窓の姫さながらであって、雪乃の容貌は気品にあふれ、しとやかな物腰は、深窓の姫さながらへ寄って、酌などしてくだされ…」

……というべき香気があった。

「雪乃どの、さあ、もっとこっちへすすめ」

いいながら、三人の武士は、たがいに眼くばせをしてうなずきあった。

石丸多九郎が、いきなり雪乃の手首をつかみ、自分の膝もとに乱暴な力で引き寄せた。

「あれッ、なにをなされます！」

悲鳴をあげる雪乃の咽喉もとに、半兵衛がすばやく小刀の刃先を突きつける。

「おお、これはなんとしたことは、いつか、どこから仰天したのは茂右衛門であった。

いくら極秘にしておいても、黄金絵図のことは、いつか、どこからともなく洩れ、ここ二十数年来の間に、人々の口から口へとささやかれるようになっていた。

そして、この笹子家の山屋敷に、その絵図を求めて現われる山師無頼の者が、年に五、六人はいる。

だが、そのたびに、彼らは笹子家に使える近在の山男たちの手でぶちのめされ、半殺しの目にあって逃げ帰るのだ。

この山男たちも、いずれは武田の残党の血を継いだ一群であった。

しかし――。

まさか、れっきとした将軍直参の武士が、このような強盗に居据わるとは、夢にも思わなかった茂右衛門であった。

この離れの異変を知って、たちまち、二十数名の山男たちが、手に手に獲物をもって現われた。

庭から窓から、この離れの周囲を、すさまじい殺気をみせて取り巻く。

「待てッ、しずまれ！　雪乃の命があぶないのだ！」

茂右衛門が縁をあけはなち、両手をあげて山男たちを制した。

「あれッ、おとうさま、おとうさま！」

多九郎の膝の下で、雪乃の白い顔が、思いもかけぬ恐怖でゆがむのだ。

「うぬッ……」

茂右衛門のこぶしが、怒りにふるえた。だが、うっかり手出しはできない。

「さあ、茂右衛門、娘の命が惜しくば、黄金の隠し場所を描いた絵図を渡せ！」

宇賀神左内が、すっくと立ちあがって、茂右衛門にせまった。

「しまった！　そなたたちを将軍家のお鷹匠と心をゆるしたのが不覚だった……」

茂右衛門は、膝をつかんでうめいた。

「さあ、どうした茂右衛門。秘宝の絵図を渡すのか、渡さぬのか！」
宇賀神左内のむきでた悪党面が、勝ち誇ってせせら笑った。
――百年のあいだ守り抜いてきた祖先の黄金、どうしてこのような侍どもに渡されようか！……
茂右衛門は歯を喰いしばった。
殺気をはらんだ緊迫の数秒がすぎた。
無言のにらみあいである。
ついに耐えきれなくなった宇賀神左内が、わめくようにいった。
「このまま、いつまでにらみ合ってはいられぬわ！　それ、多九郎、半兵衛、かまわぬから、娘を責めあげろ！　この親父の見ている前でぞんぶんのはずかしめを加えてやるのだ！」
悪鬼のような形相であった。
――おのれッ！……
茂右衛門の顔から、血の気がひいた。

最後の一枚

「よしきた、へへへ、待ってたぞ」
石丸多九郎の手が、雪乃の腰にあるしごきの結び目を解いた。
津田半兵衛が、そばからそれを手伝う。
「あれッ、なにをなされるのです、あれッ」
山育ちとはいえ、甲州武士の血筋を受けた雪乃であった。
多九郎の膝を下からはねのけ、その白くしなやかな手が、強烈な手刀となって、
ピシリッ！
まつわりつく男の手を打ちすえた。
「おッ、味なまねをする小娘だな」
その反抗は、しかし、無法侍たちの心に、いっそうの火をそそぐに役立っただけであった。
にぶい音とともに、雪乃の身体は、畳の上にはげしく叩きつけられウッ……と息をのむ間、多九郎の手は、その帯を衣裳を、ズルズルとむしり剝ぐ。
たちまち――
雪乃はむざんにも腰のもの一枚を残した裸身に、しかも、自分のしごきで、その両腕をうしろに縛りあげられる運命にさらされた。
「アアッ！……」
雪白の上半身に、胴から下は、緋一色に包まれた湯文字。
むざんにも美しく、妖しくもまばゆい、白紅の色のとり合わせであった。
しかもその白は、みずみずしい柔軟さで呼吸し、あえぐのだ。十八才の乳房の上には、これも鮮やかな色の緋しごきが、キリキリと巻きつき、背中にねじあげられ、たかだかとくくられた両手の痛々しさ。
「アレッ、あれえッ、おとうさまァ！」
もだえて救いを求めても、茂右衛門の胸もとには、宇賀神左内の抜き身の大刀が突きつけられているのだ。
「ゆッ、雪乃ッ！……」
茂右衛門の額から、タラタラとあぶら汗がながれた。
「うふふ、うへへへ……」
多九郎のゆがんだ唇には、よだれがたまってこぼれそうだ。
「えへッ、えへへへ……」

同じく半兵衛も、満面に醜悪な笑みをうかべ、ことにそのよどんだ眼が、緋しごき縛りにもだえる雪乃の、胸から腹、腰から腿へとなめまわす。その視線のおそましさに、雪乃はいっそう身もだえ、戦慄するのだ。

「ヒイッ、あれッ、あれえッ！……」

由緒ある郷士の屋敷に生まれ、気品を尊んで育てられた雪乃にとって、これは死ぬよりも恥しいさらしものであった。

うつむいて胸をかくせば、刀のこじりを背中のしごきにさしこまれグイグイと仰むきにねじあげられる。

「ウウッ、ヒヒイッ！」

身をのけぞらせてもだえれば、腰はうき、湯文字の裾も大きく割れて、そのかげから、雪よりもまっ白い腿のふるえまでが、無念に泣いてさらされるのだ。

「やい、どうだ、茂右衛門。これでも絵図を渡さぬというのか。ならば、お前の鼻のさきで、この娘の肌にまとった最後の一枚、ゾロリとひんむいてくれようか、うふふふ……」

宇賀神左内が、手にもった白刃のさきで、雪乃の腰をピシャピシャと叩きながらうそぶいた。

「……」

瞑目した茂右衛門の顔面いっぱいに玉粒の汗がふきだしている。

「ならば！……」

多九郎の指が、湯文字の紐にかかった。

「待ってくれ！　渡す！　絵図を渡す！」

両手で畳をかきむしり、血を吐くような声で茂右衛門はいった。

「おとうさまッ！」

絶叫し、雪乃は、アアアッ……と嗚咽の声をあげた。

血まみれ武士

そのころ——

立花荘太郎は、ほの暗い油燈の下で読書にふけっていた。

静かな山の夜であった。

昼間、お鷹匠組の武士たちに、貧乏郷士とさげすまれたが、すでに父母は没し、この古い屋敷に、わずかな下男を置いての乏しい暮しはなるほど、そう呼ばれるのも無理はなかった。

しかし、荘太郎には夢があった。それを待つ心は楽しい。谷一つ越えた隣郷の庄屋の娘雪乃を嫁に迎える話がきまっているのだ。

だから、こうして夜の読書にも、雪乃の白い面影が、しばしば邪魔をする。

と——障子の外に足音がとまり、下男の声がした。

「——若旦那さま。猟師の七蔵と、その娘のあけびが、お目にかかりたいと申してやって参りましたが……」

「七蔵親娘が？　こんなに夜遅く、なんの用だろう？」

荘太郎は、書物から眼を離した。昼間のことの礼を、わざわざ言いにきたのだろうか。

「それが血だらけになった、侍らしい男を一人、肩にかついでおりまして……」

「血だらけの侍を？　よし、通せ」

「へい、庭伝いにつれて参ります」

七蔵が背負ってきた侍というのは、奇怪にも襦袢一枚、下帯一本の

裸であった。

そして、肩さき、胸、脇腹などの数ヵ所をめった斬りにされているのである。

「あ、若旦那さま、昼間は娘の奴の危いところをお助け下さいまして……」

と、実直に礼をいう七蔵へ、

「そんなことはあとまわしだ。それより、そのお方はどうしたのだ？」

「へい――。じつは今日、山兎を五、六匹かついで里へおり、うまく売り切って山へもどる、その途中のことでございました……」

鷹の巣谷に通ずる山道のかたわら、ふかい藪笹の繁みに、人間のうめき声がする。笹を踏みわけてその声を探がすと、血まみれの男が倒れている。

侍だということは髪の形でわかるが、襦袢一枚なので身もとがわからない。傷の痛みにうなってばかりいて、口もきけない有り様である。

そこでとにかく、名主の荘太郎のもとへ届けにきたというのだ。

「奇怪な話だ。とにかく、傷の手当てをせねば……」

荘太郎は庭さきへおり、男の傷を念入りに調べた。

（うむ、刀傷だな。かなりの深傷だが、助かるかも知れない……）

焼酎で傷口を洗い、薬草のしぼり汁を塗りつける。

すると、裸の侍は、いくらか元気をとりもどした。

「――か、かたじけない……拙者は……将軍家お鷹匠組の組頭、土井又四郎と申す者」

途切れながらも、武士は口をきだした。

「なに、お鷹匠組？」

荘太郎は、膝をのりだして、この武士の口もとを凝視した。

「今朝がた早く、部下二名とともに、この秩父鳴羽郷へ着いた……ところが……道の木蔭から、いきなり現われた三名の無頼浪人が、ものをも言わずわれらに斬りこみ、不意討ちのことゆえ、思わぬ不覚……われら三名とも斬りたてられて、かくなる次第……」

あとの二人はどうなったかわからぬと言うのだ。この武士もだらしがない。

「わかった！　して、あなた方の衣服大小までも、そやつらが剝ぎとっていったと言うのですな？」

「む、むねん……」

土井又四郎は、唇を噛んで涙をこぼした。

「――で、その追い剝ぎ浪人どものめざす所を、あなたは見当がつきませんか？」

「そやつらは、拙者らの衣服を着替ながら、なにやら声高に語り合っていたが、そのなかに、たしか嶺沢の笹子家という言葉がでたと思う……」

「そうですか……」

しまった！……と荘太郎は思った。

その三人の強盗浪人は、昼間、荘太郎が逢ったれいの三人連れにちがいない。

――道理で、いやにガラの悪い奴らだと思った……

そうと知っていたらあのまま逃がすのではなかった――と思っても もう遅い。

気がかりなのは、彼らが、笹子家を目さしていったということである。

「七蔵、あけび！――」

と、荘太郎は、猟師親娘に声をかけた。

「へい！」

「お前たち、すまないが、これからその浪人どもに斬られた、あと二人のお鷹匠を探がしにいってくれぬか」

言いながら、荘太郎は、床の間に掛けてある大刀を腰にさした。

「かしこまりました。で、若旦那はこれからどこへ？」

ときく七蔵に、

「谷むこうの笹子家へいく。心配だ。そのお鷹匠に化けた浪人どものために、笹子家ではきっと変事がおきているにちがいない」

荘太郎の眉宇が、キリリとひきしまった。

地獄の山道

まだ夜が明けきらぬ鷹の巣谷の、水しぶき散る渓流ぞいに——。

濃い朝霧が、樹間を白く浸して、流れはわだかまり、そしてまた渓流の上になびいて舞いあがる。

その濃霧のなかを、鷹の巣谷の秘宝をめざして、数名の一行がすすんでいた。

宇賀神左内、石丸多九郎、津田半兵衛。

そして、腰のもの一枚にむかれたままの半裸身を、緋しごきでうしろ手に縛りあげられた雪乃。その父、笹子茂右衛門。

先頭に立つ宇賀神左内の手には、茂右衛門から奪いとった絵図面が握られている。

「このさきの岩鼻を、右に曲るのだな？」

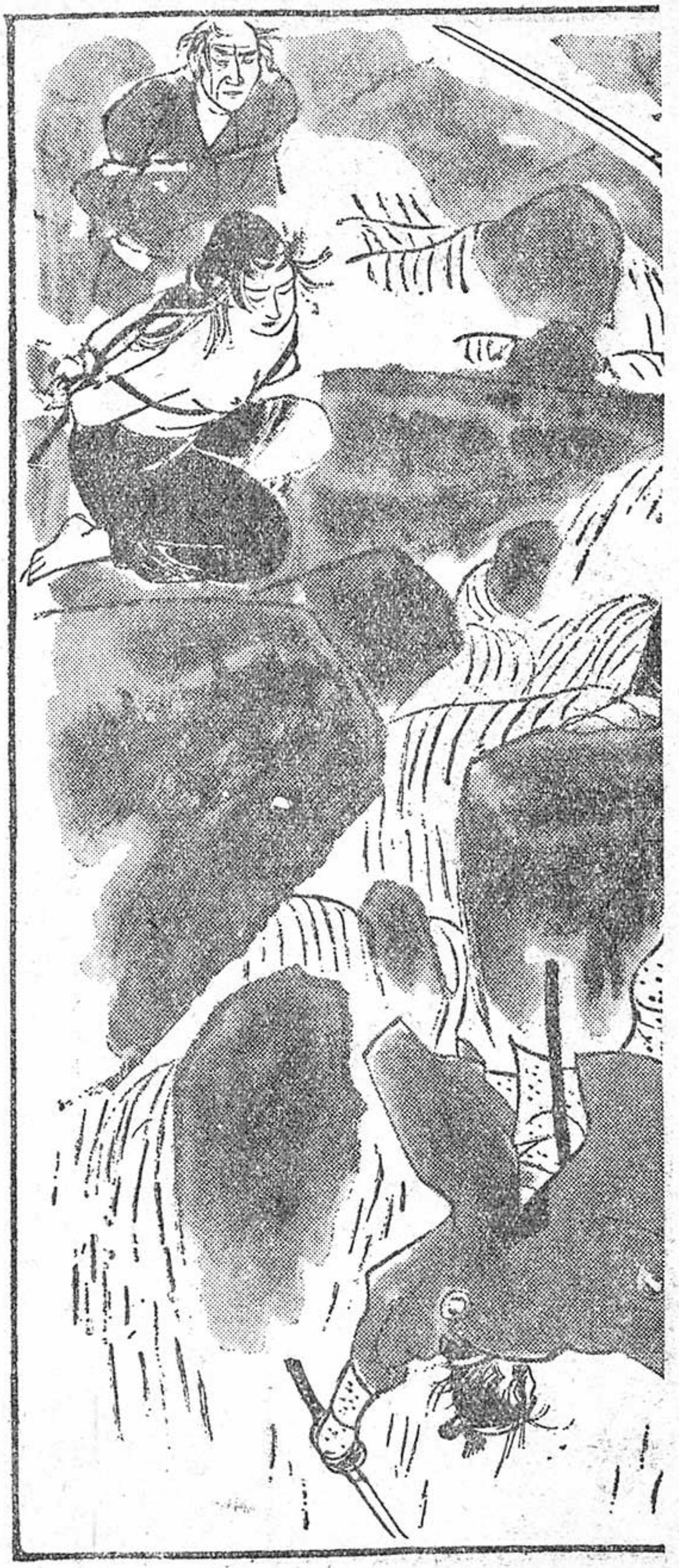
宇賀神左内は、茂右衛門をふりむいて言った。

黙ってうなずく茂右衛門。

一行は、また霧のなかをすすむ。

茂右衛門は道案内であり、雪乃は、山男たちの襲撃を防ぐための人





質であった。

雪乃を縛ったしごきは、いつのまにか霧に濡れて水気を吸いこみ、胸の柔肌にいっそうのきびしさで喰いこんでいた。

「ムムッ、ウムムッ……」

小さくあえぎながら、雪乃はひきずられていく。背中にくくりあげられた手首から腕はすでに血の気を失って蒼白になっていた。

まっ白な美しいまるみの乳房にも、濡れたしごきが、みしみしと喰いこみ、雪乃の呼吸を苦しめた。

けわしい山道を踏む裸足は、すでに血がにじんでいる。白く愛らしい足の指も、血まみれ、泥まみれだった。

その苦痛に耐えかぬ、思わず足を踏みとどめれば、縄尻を握った石丸多九郎に、どんと背中を突きとばされ、うしろから尻を蹴られるのだ。

地獄の針の山にもひとしい苦しみを、罪のない雪乃が、味わっている。三人の無頼侍は、地獄の鬼だった。

「アアッ、ウウッ！……」

せつないうめきを洩らしながら、ひきずられていく雪乃だった。
一行は、流れを上にたどり、道はいよいよ険しく、ほそくなっていく。

やがて――

崖を這いあがるような急勾配をのぼりつめると、きゅうに朝霧が消えはじめて、そこは眼下に滝壺をみおろす平地になっていた。

「ここか？」

と、荒い息をつきながら、宇賀神左内がいった。

「いえ、まだでございます。この滝壺の上の間道を、およそ半里ほども奥へ進み……」

「なんだ、まだ先か、やれやれ――」

山歩きに馴れない江戸の喰いつめ浪人どもは、もう全身にぐっしょりと汗をかき、足腰が痛い。

その平地の岩に腰をおろして一服し、さらに前進しようとして、一行が立ちあがったときである、

「――まて。偽のお鷹匠組！……」

凛然と声を放って、一行のゆく手に立ちふさがった者がいた。

「あッ、荘太郎さま！」

誰よりも早く、歓喜の声をあげたのは、雪乃であった。

「雪乃さん、もう心配はいらないぞ！」

荘太郎は大声で雪乃に元気をつける。

谷を渡って笹子家へ駈けつけた、茂右衛門父娘の危急をきくや、さらにここまで追ってきた荘太郎であった。

「うぬッ、きのうの貧乏郷士、また邪魔に現われたか！」

宇賀神左内が、顔をゆがめてうなった。

「おい、偽お鷹匠、おぬしらが斬った本物のお鷹匠のうち、一人は生き残っていたぞ。わたしはその侍から、おぬしらの悪業を、ぜんぶきいてしまった」

荘太郎は、三人の顔をにらみつけた。

「くそッ、斬れッ、こいつを斬れ！」

「わたしも、こんどはおぬしらを斬るぞ！」

荘太郎から先に、大刀を抜いた。

雪乃のむざんな姿をみては、若い荘太郎の血が激怒に燃えあがるのも無理はない。

「たあッ！」

まっこうから、拝み打ちに斬りこんでくる宇賀神左内の刀を、パシリッと横ざまに払いのける。火花が散った。

「おおッ！」

宇賀神左内は、前のめりにのめって、頭からはげしく地面に転倒した。その左内めがけて、荘太郎が憤怒の一刀を浴びせようとした瞬間である。

「おいッ、山猿郷士、これをみろ！」

石丸多九郎が、けたたましい声で、荘太郎の殺気をはねのけた。

「そうら！」

多九郎の手に握られた白刃が、雪乃の白い咽喉すれすれに押しつけられているのだ。

「ヒエエッ！」

恐怖にのけぞっている雪乃。

「おい、刀を捨てろ！　さもなくば、この娘の咽喉を切り裂くぞ！」

「うぬッ！」

「この白い咽喉から、赤い血がふきだすのをみたいか、どうだ！」
「おのれッ！」
荘太郎の全身が、いっそうの憤怒に、わなわなとふるえた。
だが、敵の白刃は、まさしく雪乃の咽喉にせまっている。
「刀を捨てろ！」
「むむッ！」
荘太郎の四肢が硬直した。
へたにうごけば雪乃の一命があぶない。
真ッ赤になって立ちすくんだ荘太郎の右側から、起きあがって一刀を構えなおした宇賀神左内が、じりッと足をすらせて肉迫してきた。
「荘太郎さまァ！――」
雪乃の悲鳴がかすれた。
いまは、絶対絶命の荘太郎であった。

鷹の巣谷の朝

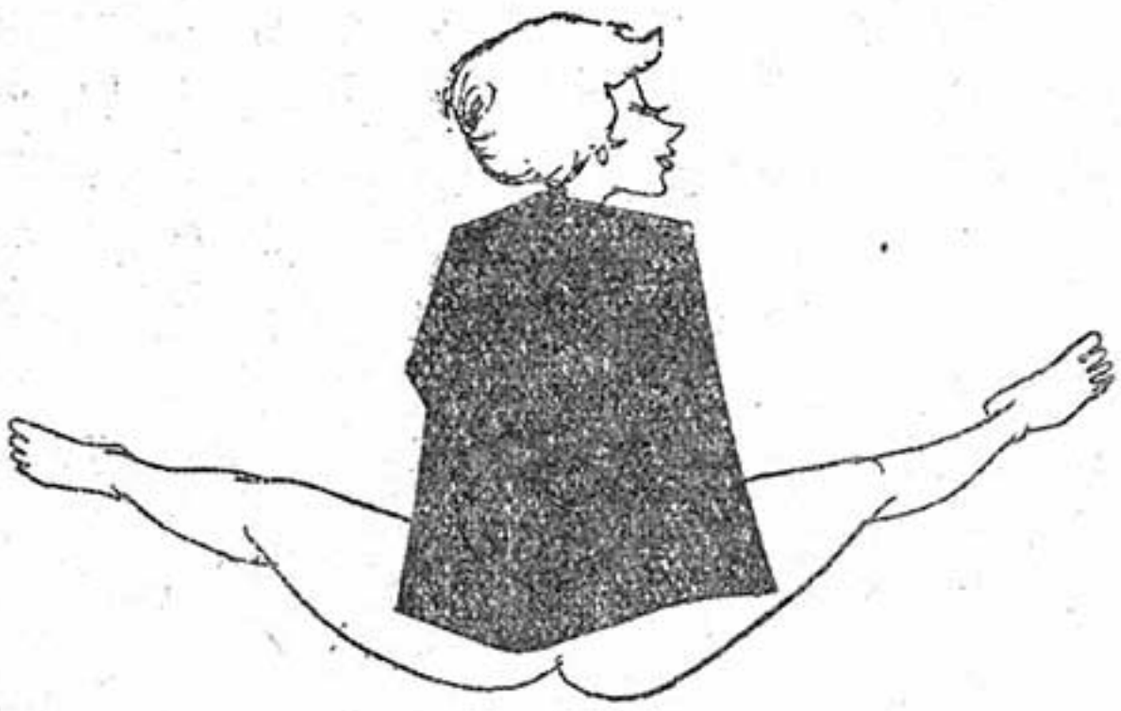
そのとき――
一発の銃声が轟然と鳴りひびき、石丸多九郎は、わあッ――と声をあげてのけぞった。
弾丸は、多九郎の胸板をつらぬいたのである。
「ややッ？」
残った宇賀神左内と津田半兵衛がふいの襲撃に動顛し、キョロキョロとあたりを見まわす。
その一瞬の隙だった。
荘太郎の全身が、地を蹴って躍りあがり、ふりかぶった白刃が、閃光のようにきらめいた。
「うわわッ！」
宇賀神左内の右肩を斬り下げた一刀は、そのまま反転して、津田半兵衛の胴を下から斬りあげた。
「荘太郎どの！」
茂右衛門が我にかえって声をかける。
「荘太郎さま！」
縛られた身で、雪乃もかけよる。
「若旦那、あぶないところでございましたなあ！」
樹間から姿を見せたのは、猟銃を持った七蔵だった。あけびもとびだしてきた。
「おお、いまの鉄砲は七蔵だったのか。おかげで危いところを助かったぞ！」
立花荘太郎は、血刀をぬぐった。身をいましめたしごきは解かれたが、上半身は裸であった。
緊張が去ると、雪乃の顔が赤くなった。身をいましめたしごきは解
荘太郎は手早く自分の袖無し羽織をぬぎ、それを雪乃の肩に着せてやる。
「旦那さまァ、旦那さまァ！――」
領内の山男たちが、声をあげながら周囲に集ってきた。この場の光景をみて、彼らの不安は、よろこびの喚声と変じた。
茂右衛門は、すでに死体となった宇賀神左内の手から、絵図面をとり返した。
「――思えば、この絵図面のために……」

茂右衛門は、沈痛な表情で言った。
「いままで幾十人の亡者どもが、この谷を訪れては醜い争いをくりかえしたことであろうか……」
茂右衛門のつぶやきを、一同は何事かと見守った。
「すでに徳川の世も安定、武田家再興の夢がくずれ果てたいまとなって、なんのための軍資金……なんのための黄金……」
茂右衛門は顔を大きくあげて、集った一同を見渡した。
「みなの衆、よく見るがよい。絵図面はこのとおりじゃ」
茂右衛門の両手が、黄金五百枚を秘めたその絵図を、ビリビリと引き裂いた。
「ありゃァ！」
と、誰かが悲鳴のような声をあげた。
茂右衛門は手をのばして、崖の上こなごなに引き裂いた絵図面を、茂右衛門の若い二人を祝福する、素朴なよろこびのから滝壺の中へ、ハラハラと投げ捨てた。
「わかったか。絵図面が消えれば、秘宝の隠し場所も消える。黄金を求めてこの鷹の巣谷を隅から隅まで掘りおこすには、百年、二百年、五百年もかかろうぞ。――いかに欲に憑かれた亡者どもでも、それまでの無謀はおこすまい。されば、もうこの谷は安泰じゃ。われらの郷は平和じゃ……」
一同は茂右衛門の言葉に、静かにうなずいた。
「――わしの宝は……そして、この鷹の巣谷の宝は、この山の平和をいつまでも守ってくださる荘太郎どのと、その嫁御の雪乃だけでたくさんじゃ、のう、みなの衆……」
茂右衛門の明るい笑顔が、また一同の面上を見渡した。
それにこたえるどよめきが、谷いっぱいにこだました。この郷に暮らす者たちが、荘太郎雪乃の若い二人を祝福する、素朴なよろこびのどよめきだった。
そして、いま――
この鷹の巣谷の朝霧は、一片も残さずきれいに晴れあがって、樹葉の露をキラキラと光らせながら朝日がのぼりはじめるのであった…。

いつごろから、父親を憎みだしたのか、ルースはよくおぼえていない。おそらくは、五つのとき、父親が仔犬を殺すのを、見たときからだろう。
うまれたばかりで、まだ生きているともいえないようなものだし、暮しが苦しく、食べるものにも不足がちなときには、そうするよりほか、なかったのかも知れない。
だが、仔犬のからだを、穴に投げこむのを見るのは、なんともいえぬ、おそろしいことだった。
まだあたたかく、じたばたしているのを、裏の垣根の柱をたてるために掘った穴へ、ほうりこむのを見ているのは。もっとおそろしいのは、あとで自まんげに、それをいうのをきいているときだ。
「柱の穴が六つ、その底に一匹ずつ、しめて仔犬は六匹。墓をほってやる手間をはぶいたっていうわけだ」
「オットー、そんなこと、いうもんじゃありませんよ。ことに子どもの前では」とアナ・クレイマー。

判（はんけつ）決

DECISION



by ヘレン・ニールスン

「なぜいっちゃいけねえ？」とオットー・クレイマー。

「おしえとかなきゃ、いけねえことだぜ――金と手間は、おしめってことはな。生きていくにゃあ、だれだって無駄をしちゃあいけねえんだから」

オットー・クレイマーは、単純な哲学を持っていた。

彼は人生に疑問を感じたこともなければ、争ったことも ない。「ねむるベッドに、食うテーブルに、料理するストーヴに――それだけありゃあ、ほかになにがいるってんだ？」

ごく単純な哲学だ。

心配と恐怖は女がするもので、そのどちらにも同情はなかった。

ルースが泣きたくなったときには、母親のやせた固い腕のなかに涙を注がなければならなかった。この世にはほかにあたたかいものはなかったのだ。

それればかりではない。バカらしい病院に使う金もないのだそうだ。

「女ってのは、がきをうまなきゃならねえんだ。そのためにできてるんだぜ。病院の請求書に投げ出す金なんぞ、おれにはねえよ。馬鹿らしいっちゃねえや。女はみんなそんな病気を、気からつくりだしゃあがる」

オットー・クレイマーのいうことは、法律だった。

アナはけっして夫と争わなかった。ますます痩せほそり青白くなって、彼のいないときには、泣いてばかりいた。いよいよそのときになると、もちろん彼女の気からつくりだしたものではなかった。台所のドアにかくれて、子供たちはみんなきいてしまった。

「お前は頭蓋骨の厚い田舎者だよ。馬の鞭でひっぱたかなけりゃあ、どうしようもないやつだ！」と医者がオットーにいっていた。

くわしくは一月下旬発売の〝マンハント〟三月号を！

宝玉の妄執

血を呼ぶダイヤ

☆ツルハシで一撃！　全身を貫く苦痛を忘れて，
☆ジムは大きなダイヤを傷口におし込んだ！

猛山葉

繿　吉秋・画

陰謀

ジムは横坑の壁に左手を突ッぱって気をしずめた。これからやろうとすることを思うと膝が小刻みにふるえ、大粒の汗が浮いている顔からすうッと血がひいていくのがわかった。

自分の脚に鶴嘴を打ちこむ。

やれるか？　どうやって？　何百回も考えたことだ。ひょいと、何気なく大きく振りおろせばいいのだ。スットロング先生が教えたっけ。

「いいな、無意識にやるんだ。打ちこもうと思ったらなかなかできないぞ。わしを信頼しろ。半年のちにはアムステルダムで笑っていられるんだ。上等の酒をのみながら金を勘定してね」

たしかにそのとおりだ、やろうと思うとますやれない。しかし、その一振りに自分の運命がかかっていると、ツルを——ふくらはぎへ打ちこめば、暗い絶望的な現在が明るくて希望と夢にみちた人生に回転するのだ——さッと一振りさえすれば。

ダイヤモンド坑の黒人と白人の医師が親しくなることは滅多にないことだった。一八七六年ころの南アフリカのダイヤモンド坑山で働いていた坑夫は、表面はともあれ実際は奴隷と変りはなかった。ジムの血には少しボア人（オランダ人と黒人の混血種族）が混っていたが、見るから に堂々とした黒光りのするニグロで、人買いの甘言に簡単にのせられて坑山に来た。契約は満一年だったが、もう一年七ヵ月にもなる。たった一人の肉親である母親が病気でまとまった金が欲しかった。

「なに、一年分の前渡しをしてくれって？　だめだ。半年分が建前だ」

「親方、たのむ。一生懸命にやるから」

「ふーむ」ボア人の人買いは逞しいジムの二の腕の筋肉をつまんだ。

「黒ん坊って、どいつもこいつも怠け者だからなァ」

「たのむ」

「よし、特別に八ヵ月前渡ししてやろう」

彼は他の仲間と一緒にプレトリヤからヤーゲルスフォンテンの坑山に連れて来られた。



かねてから覚悟はしていたが聞きしにまさる地獄部屋だった。ただ食べて豚のように眠る。病気になると毎日がマイナスになり、そのために無理をして就業する。アミーバ赤痢が一ヵ月に二十六人の生命を奪ったこともあった。ジムは、さいわい人並以上に丈夫にできていたので病気も怪我もしなかった。

半年くらいたったころ、新しくやって来た坑夫の一団が、母親が死んだことを知らせた。

「帰らせてくれ。かならず戻ってくる。八ヵ月ぶんはつとめる」

「ばか野郎ッ！　お袋はもう腐って蛆虫がたかってらァ！」

それもそうだった。駈けつけてみたところで半月前に死んだお袋はとっくに土の下だ。ジムは暗い坑道の隅にうずくまって泣いた。

約束の八ヵ月がたった。

「なに帰る？　何を寝呆けていやがるんだ。今日までの食費や宿舎代なんかどうする気だ？　あと何ヵ月か働かなくちゃ帳消しにならないぜ」

「だって、そんな約束をした覚えはねえ」

「このとおり会社はちゃんと請負人と契約し

てあるんだ」
「じゃあのボア人を連れて来てくれ」
「とぼけるな。あんな連中はどこにいるかわかるけえ。広えアフリカ中を駈けまわっている商売人だ」
「インチキだ」
「インチキはお前のほうだ。妙なことをいいだしてズラかろうっていうんかい？」
同じようなことを申し出て監督と争い、はげしく答打たれて悶絶した仲間をジムは厚い唇を噛んで眺めた。
それから三ヵ月ほど後のある夜、ジムと三人の仲間は闇にまぎれて脱走したが、一人は射殺され、ジムともう一人は夜が明けかかった石ころだらけの原っぱに追いつめられて捕まってしまった。
「やい、逃げたい奴はよく見ておけ」
ボア人の監督ホニッカーが、昔の奴隷そっくりに手枷足枷をはめられた二人を続けさまに河馬の皮で作った答でなぐった。
「契約違反の詐欺罪だぞ！」
坑夫頭がどなって答を受け継いだ。
ジムは血だらけになって昏倒していたが、灼きな檳榔の葉が蔭を投げてくれていた。ジムはつく太陽が半身を照らしだしていた。

は夢を見ていた。全身の痛みは快よい痺れにかわり、元気になった母親を舟にのせて河を下っていた。彼は王さまになっていた。うつくしい頸飾をつけた母親がにこにこして息子に見とれていた。
一滴の涙が失神しているジムの頬を流れおちて砂に吸いこまれた。

ストロング医師

わッと絶叫して黒い影がカンテラの光をよぎって転がった。
「どうした？」
「たいへんだ。ジムが脚にツルをぶちこんだッ！」
わらわらと近くの黒い影が幾つも駈けよった。
すぐに舌打ちしながらホニッカーが入口のほうからやって来た。
「どけ、どけ、灯だ、灯だ！」
安全燈が丸くなって唸っている黒い巨体を照らしたときには、ジムは、ストロング医師と会ったのはわったとおりのことをやりとげていた。壁に埋めておいたダイヤを、腋の下に挟み、さッとツルを打ちこみ、たおれながら無我夢中で傷のなかにダイヤを押しこんだ。
「この間抜けめ！」
ホニッカーの手が、傷の上をしっかりと握りしめているジムの両手にのびた。
ボア人の監督はあわてて手をひいた。灯が暗いのと皮膚が黒いのでよくわからなかったが、ホニッカーの手は、生温い、ぬるぬるした駻しい血を感じた。
「医者だ！　はやく呼んで来い」
その医者は、意外にも早くそこに来ていた。誰かがいち早く知らしたらしい。
「ジム、しっかりしろ！」
ジムは意識がかすれて地の底に吸いこまれるような気がした。しかし、死んでも傷をおさえている手を放してはいけないと自分にいい聞かせていた。イギリス人の医者は、とりあえず傷の上にホウタイをしようとした。
「ジム、わしだ。手を放せ」
医者は、膝小僧の下と太腿の下部を強く縛った。
「運んでくれ。なァに大したことはない」
ジムが初めてストロング医師と会ったのは約三ヵ月ほど前で、そのときもジムは血だらけになって診療所にかつぎこまれた。シャベルを盗んだというので答を二十五回くらったのであった。シャベルをこわすと弁償、つま



り前借りに加算されるので往々にして盗まれるのである。

ちかごろ雇われて来た中年の医者だった。眼鏡をかけた丸顔の髪のうすいイギリス人だった。

「こいつを可愛がった後で本当に盗んだ奴が見つかったんで、ま、適当に手当してやっておくんなせえ」

ホニッカーが診療所の窓から顔をのぞかせた。医師は、じッと黒人を見おろし、ぐらッと裏返しにした。

「ううう」

ペッと管の痕が血をにじませている背中に唾を吐き、アルコールがしみたガーゼで拭いはじめた。大きな黒い肉体が子供のような悲鳴をあげた。

その夜、医者と黒い坑夫は、しみじみと語りあった。

「ふーん、そうかい。じゃ何だな、態のいい地獄部屋なんだな。わしは日が浅くてよくわからないが、八ヵ月の前借が一年半も抜けない仕組になっているとすると、わしなんぞも他人事じゃないな」

「先生も前借があるんですけえ？」

「まァね。わしはグラスゴーでちょっとした失敗をやらかしてな、酒と女だよ、詐欺罪に問われた。呑んだくれのヤクザ医者だよ。ど

うせアフリカくんだりまで流れてくる奴にクな者はいないさ、ははは」

彼は自嘲めいた笑いを発し、ひとりで強い酒を流しこんだ。

「冗談でしょう、まさか」

ジムは、牧師さんのような感じのドクターの言葉を信じなかった。

「ほんとだよ、ジム。わしは食いつめもんなんだ。だが、なんとなく、お前みたいな黒ん坊が好きになるなんて今夜はよッぽどどうかしてらァ」

どうやら医師は酔ってきたらしい。

「わしはここへ来た日からここが厭になっとる。畜生、あの監視員め、出入りのたびにわしの鞄を検べくさって、ドクター失礼いたしましたとぬかしやがる。ジム、お前なんか、ほやほやしとったら一生ただ働きだ。そこでっかいダイヤモンドを手に入れて逃げることしかない。わかったか？」

黒人と白人の眼がギラッとかちあった。

決行

「先生」

ある夜、ストロングが寝泊りしていた診療所にこっそり姿をあらわしたジムが声をひそめた。

「なんだ今頃？」

「先生、今日、俺ァ、これまでにまだ見たこともねえほど大きなダイヤを掘りだした」

「どのくらい？」

「このくれえは十分ある」

黒人の坑夫は指に唾をつけてテーブルの上に丸を画いた。

「坑夫頭に渡したか？」

ジムはだまってかぶりをふり、にやッと笑って真剣な眼つきになった。

「どうした？」

「埋めた」

「どこに？」

「しき（坑）の壁」

「ふーん」

医師は、あらためてドアのところまで行って外の様子をたしかめ、ゆっくりと部屋の中に戻ってきた。

「ほんとうか、ジム？」

穴のあくほど黒人の顔を見つめた。

「先生、どうすればいいです？　呑みこむにや大きすぎるんです」

「お前のいうのが本当だとすると、そいつは世界一の大きなダイヤだ。イギリスの王冠についているのより大きいかも知れん。おい、ジム、運命の神がほほえみかけているんだ。わしはスコットランドに帰って土地を買い、田舎紳士で一生のんびりできるし、お前はアフリカ一の黒人になれるぞ」

「俺ァ、いちどでいいから旦那たちが飲んでいるカフィア・ビールが呑んでみてえ。それからジャングルの中の土地を買い、女房も五人ぐれえ買うんだ」

「そうだ、お前はフランス領赤道アフリカへでも逃げたらいい。まず、そのダイヤを持ってオランダに渡り、粗石のままでユダヤ人の商人に売る。金を山分けにして、一年ぐらいはヨーロッパでほとぼりをさまし、わしはスコットランド、お前はフランス領アフリカへ別れるさ」

それから二人は、ホニッカーや白人の技師たちに怪しまれぬように、ときどき立話をしては計画をねり、逃亡の予定をたてた。

いつ決行するかわからなかった。今日やるか明日か、とにかく三日間のあいだストロングは待機することにした。三日のうちにはチャンスがあるはずだ。今日かな？　今日だっ

た。

しかしホニッカーは疑わしげな眼つきで負傷者を見守りながら診療所までついてきた。

「傷を一眼見なくちゃ役目がすまんので」

「きみ」ストロングは怒った。「この出血が見えないのか？　いまホウタイがとれるかどうかは素人でもわかるだろう。そんなことをしたら死んでしまう」

「死んだっていいじゃないですか。黒ん坊の生命より石のほうが大事なんですぜ、ここじゃ」

「わしは医者としてこのホウタイは取れん。そんなに疑ぐるんなら君がやりたまえ」

ホニッカーはしばらく医師と怪我人を見くらべていたが、ヘッと肩を低くし、部下たちにアゴで合図して部屋を出て行った。

そのあとは忙しかった。ストロングは大急ぎで止血剤を注射し、大急ぎでホウタイを取りのけ、苦痛にのけぞるジムを全身で抑えつけながら血まみれのダイヤを取り出した。

「ジム、見ろ」

医師は黒人の首に手をかけて半身を起してやり眼の前にダイヤを近づけた。

「百カラットはありそうだ。ジャングルの中の土地が買えるぞ。傷は大したことはない。さァ手当してやるぞ」

てきぱきと傷を洗い、手際よく手当をすますと、小さなグラスにウィスキーを注ぎ、それに茶色の小壜から二、三滴の薬をたらして仰向けに寝ているジムの枕元に来た。

「さ、これを飲めよ、気付薬だ。明日になれば歩けるよ」

ジムは一気に呑んだ。なんていい先生だろう。こんないい白人にはまだ出会ったことがなかった。

「あとは完全に足が治ってからだ。なにもかも巧く行っているところだな」

ジムは声は出さなかったが、ストロングの言葉ごとに微笑みながらうなずくのだった。

逃亡

あくる朝、眼がさめたジムはしばらくそのままじいッとしていた。頭の芯がツーンと痛く、口の中がやけに苦かった。どこにいるんだろう、俺は？　痛い。足が痛い。

彼は気がついた。思いだした。

「先生」首をもたげて呼んだ。

返事はなかった。ジムは、そろそろと身体を起し、ずきずきする脚に上体の重味をかけた。歩けないほどでもなかった。

何だか変だった。部屋が妙なふうに散らかっている。外は真昼らしいが、あたりは森閑としていた。ジムは、びっこを引いて、医師の寝室まで行った。抽出が出しっぱなしになっており、床の上に寝巻やズボンが投げだされていた。もちろん、医師の姿はどこにも見えなかった。大急ぎに出て行ったらしい気配が残っていた。誰か病人でも出て坑山のほうへ出かけたのかも知れない。

ジムは杖をついて戸外に出た。診療所からは直接に坑山の廓外、つまり正門を通らずに外へ出られた。それは医師だけが通れる通用門で、そこ以外は周囲何キロかにわたって鉄条網が張りめぐらされていた。その通用門こそはダイヤモンド会社の盲点で、ジムとストロングが発見した天国に通ずる道だったのだ。

ある不安がジムの中に大きくなりかけていた。それを現実のものとしたくないので強いて他のことを考えた。ひょっとすると、あのドイツ人の酒場へ行ってバカ話をしているか

も知れない。そんな考えで自分をゴマかしたが、やはり不安と恐怖が次第に大きくなって構外へ出た。バレたのかも知れない。今にもホニッカーたちがライフルやピストルを持って俺のまえに雪崩れこむ。それとも誰かがドクターからあのダイヤを奪って逃げたか？

「ストロング先生を見なかった？」

「ああ先生かい？」酒場の亭主は水撒きの手を休めて顔をあげた。

「ストロング先生なら今朝早く出かけたぜ」

「出かけた？　どこへ？」

「ダーバンだろう。会社の急用ができたとかで馬で飛ばして行ったっけ。なんだい、今日は公休かい？　まァ休んで行けよ」

ジムは痛い足をひきずって店の中に入り、ぼう然として椅子に腰をおろした。

裏切られた！

肚の中が煮えかえり、脚の痛みも感じなくなった。俺のダイヤを盗みやがった！　ぐずぐずしてはいられない。どんなことがあっても取り返す。それに、医者と坑夫がいないことがわかり次第、すぐ眼の前にも追手が――

ジムは、ぎょッとして立ち上った。ドイツ人の亭主は水を撒きつつけている。ストロングはどこへ行ったろう？　むろん前々から打合せていたとおりオランダのアムステルダムへ直行するだろう。ダーバンから船に乗るにちがいない。あんな大きな生（なま）の石を処分できるのはアムステルダム以外にない。

しかし、医者と坑夫が逃亡したことを知ったら、ダーバンへ行って見つかるかも知れない。

会社は、かならずダイヤを持って逃げたと断定し、ヤーゲルスフォンテンの警察に知らせる。ダーバンまで行かない途中で捕まってしまう。だが、捕まってもいい、俺は行く。あれは俺のダイヤだ。ダーバンへ行って見つからなかったらアムステルダムまで行く。そこでダメならグラスゴーまで行く。行くとも世界の涯までも。あれは俺のダイヤだ！

ジムは正午の太陽が照りつける町の通りへ出た。ずっと向うに坑山の正門が見えた。人っ子一人の影もなくしーんと静まりかえっていた。その静寂が彼には余計に無気味だった。

だまって店をはなれると、できるだけ平静をよそおって街道を下った。酒場の亭主も軒下でバクチをしている黒人たちもジムには関心をもたなかった。町はすぐに出はずれた。その出はずれにモーア人の馬小舎があるのを知っていた。

ジムは、だまって家の裏手にまわった。すばらしい胸をした黒い女が水を浴びていたがお互いに知らん顔をした。ジムは馬を曳きだし、ゆっくりと乗りだした。ざァと桶の水をかぶった女が濡れた顔で馬と人を見送った。

ダーバンから南へ沿岸を下って来たアムステルダム行のブイテンボルク号がケープタウンの港を出帆して二十四時間ばかりたったころであった。一つの黒い影が中甲板の五号船室に忍び寄った。

「誰だ今頃？」

中から声があったが外からは無言でなおもコツコツとドアをたたいた。

ぶつぶつと何やらいうのが聞えてドアが細目に開かれた。と、ぐッと身体ごと外から力強く大きな黒いものが押して有無をいわさず室内に入ってきた。入ってきた黒人の手には鋭いナイフが無気味に光っていた。

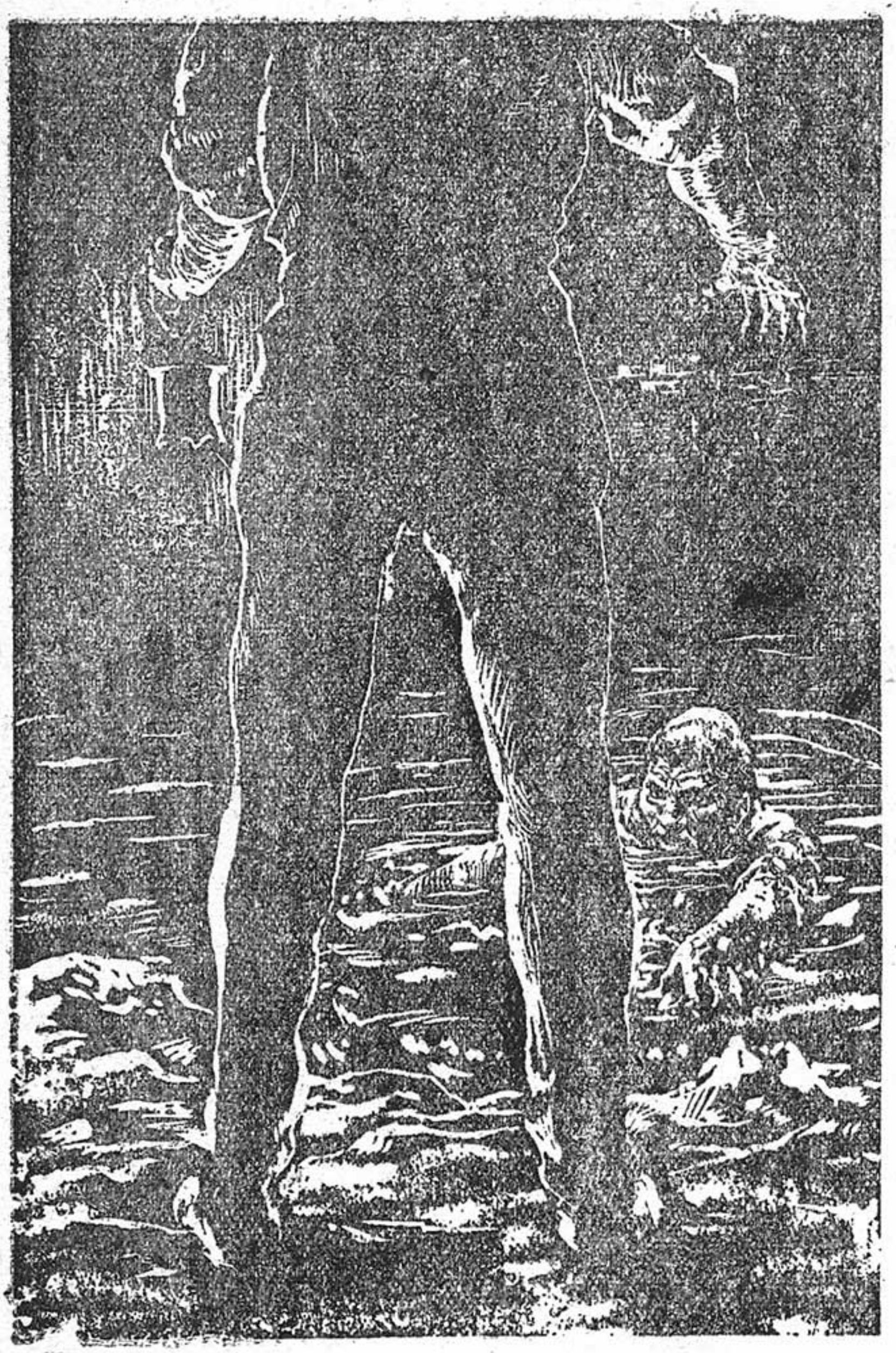
「ずいぶん早かったじゃないか、ジム？」

ドクター・ストロングの声はふるえていた。

呪いのダイヤ

「あんたは俺の友達だった」黒人の声はかすれていた。「俺ァからだを張って血を流し、あんたが世話をしてくれた」

「だとも、そうだとも。これからもそうじゃ



ないか」医師はおどおどと相手の顔とナイフに眼を走らせた。「だから、こうやってお前がくるのを待っていたんじゃないか。ダイヤモンドはちゃんとあるよ」

「そうなんだ、ダイヤモンドだ。俺のダイヤを出してくれ」

黒人は左手を前へ出して、じりじりと進んだ。医者は少しずつ後にさがり、ベッドの上にあった黒い袋を後手でつかんだ。

「心配するな、ここにあるってば。黄色い膏薬の中に隠してあるんだ。仲間じゃないか、わしらは？　オランダに上ってからの処分方法は素人じゃできない。わしには連絡する筋があるんだから」

ジムは、だまって医者に迫った。

ストロングは壜に指をつっこんでダイヤを取りだし渋々ジムの手の平にのせた。

「しようがないな、安心できないのかい。これだよ膏薬の壜は、よせよ、こわい顔をして」

「お前が持っていてもいいが、初めの約束どおり山わけだよ」

その言葉が終るか終らないうちにさっと黒い手が大きくうごき、げっと一声、あっけなく医者がベッドの前に崩れた。もう一、二度ジムの手がうごいた。みごとにノドを切られた白人が大きく一つ身体をケイレンし、そのまま動かなくなった。

あくる朝、五号室へコーヒーを運んで行った船のボーイは、いきなり骨が砕けるかと思うほど強く太い黒い手に肩をつかま

えられて声もでなかった。
「お前は何ていう名だ？」
「ブールター」
「オランダ人か？」
「はい」
「そこへ掛けろ」
ボーイは腰をおろそうとして立ちすくんだ。ものすごい血の痕である。彼は、まッ青になってブルブルふるえ始めた。
「これは何だか知っているか？」
黒人は首にまいたハンカチをとり、その下にさらに巻いていた別のハンカチをはずし、その中から取りだした物をオランダ人の眼の前に突きつけた。
「ガラスですか？」
「世界でいちばん大きいダイヤモンドだ」
数分のうちに二人の協定は成立した。つまり、五号室の客は病気で外出しないことにし、アムステルダムまで万事うまく取りはこぶ。適当なときに二人で船を脱出してダイヤを金にして山分けにする。もしイヤなら今すぐ医師と同じように大西洋の魚の餌にならねばならない。
ブールターは顔をかがやかし固く固く何度も誓った。そして、じっさいその後うまくやってのけた。血の痕も清掃し、きちっと食事もはこび、ほかには誰も五号室を訪れなかった。
何日かすぎたある夜、ブールターがジムを迎えに来た。船は停まっていた。やけに冷えびえとした外気であった。明朝はアムステルダムの港に入るという。しかし、ジムには、そこがヨーロッパかどうか、相手を頼る以外はなかった。
まッ暗な夜だった。なるほど遥か左手に大都会らしい無数の灯が見えた。ジムはオランダ人に案内されるままに後甲板に行き、救命具を持って縄梯子のようなものに伝わって船腹を降りた。まずブールターが、つづいてジムが静かに海に浮んだ。空気の冷たい割合に海水は生温く、これなら岸まで泳げそうであった。あらかじめ打合わせた計画だし、アフリカの河で鍛えた経験のあるジムは別に大冒険とも思わなかった。若いオランダ人も立派な泳ぎぶりで、たくみに黒人を誘導して岸に近づいた。
足の先が岩にさわり、ジムは立ち上った。すぐ眼の前に白い浜が見え、水は胸までしかなかった。ジムは嬉しそうに暗夜に白い歯を見せて後をふり返った。オランダ人は彼の背後にいた。
「おい、早く」
うながしたときにオランダ人の手が大きく闇の中にうごいた。きらッと何かが光り、ジムは鋼鉄の刃が背中に熱く突き刺さったのを感じた。さいごに首に巻いているハンカチをナイフで切りとって手を放した。大きな黒いからだが水にもぐるのを見とどけ、音もなく岸に上って行った。

提訴

「黒人ジムはその場で死んだのではありません。ちょうど夜釣から戻ってきたホーネッケという漁師が瀕死のジムを舟に救いあげたのであります。彼はアムステルダム郊外に住んでいるヤン・ハーゲル医師のところに負傷者を担ぎこみました。しかし、多量の出血のために以上の話をヤン医師に語って暁方息を引きとってしまいました。ジムの死体はアムステルダム市共同墓地に葬られています。これは同墓地のジムに関する埋葬書類の写しです漁師ホーネッケは現在では死亡しております が、ジムの最期に立ち会ったハーゲル医師は現に証人として当法廷に参っております」
一九五七年四月のニューヨーク連邦裁判所

の法廷だった。この争いはニュージャージイ州で起った三百万ドル殺人事件が十八年間もかかった以上にアメリカ裁判史上の最長のものになりそうだった。原告は南アフリカのヤーゲルスフォンテン坑山の経営者タイロン・ベル氏、被告はニューヨークの宝石商ラスキ氏。被告がオランダ人ベルトカンプ氏から買った五一カラットのダイヤモンドは原告の坑山から盗まれた品であるという訴えだった。

「もともと本件のダイヤは」

原告側の弁護人はつづけた。

「八二カラットの世界最大のダイヤから切られた片われで、ほかはどうなったか不明なのであります。何しろ事件は今から八十年前に起ったことで不明の点も多いのですが、われわれは確かにラスキ氏が所有する件の品が原告の所有権にかかわる物である信憑性の証拠ならびに証人を用意しております」

この裁判はもう二十二年間も続いていた。ジムが働いていた当時の会社は次から次へと所有者が受け継がれ、現在の社長タイロン・ベル氏に至っている。この裁判に喚問された証人はヨーロッパ、アメリカ、アフリカからさらに三十人が追加され百人以上に及び、さらに三十人が追加され た。両者の弁護人は十八名をこえた。ベル氏はこの訴訟に七十五万ドルを費い、ラスキ氏は四十万ドルを費った。

「われわれは黒人ジムを殺したオランダ船のボーイの行先を追うことに始まり、呪われたダイヤがいかにして被告の手に渡ったかを明らかにするでありましょう。まず一八七六年九月二十日の夜、アムステルダムの紅燈街ロス町の娼家で身元不明のオランダ人青年が殺害されています。これは該件の警察記録の写しと英文の翻訳ですが、これがジムを海中で殺害したブールターであります。彼の敵娼マーサは逃亡しておりますが、一週間の後に宝石仲買人ユダヤ人のクロフツのところへ中年の紳士と現われていまっていない。一つの殺人の犯人らしい男や女が次の殺人事件では被害者になっているからだ。

原告側の弁護人はつづけた。

「もともと本件のダイヤは」

山から盗まれた品であるという訴えだった。

ーゲルスフォンテン坑山の経営者タイロン・ベル氏、被告はニューヨークの宝石商ラスキ氏。被告がオランダ人ベルトカンプ氏から買った五一カラットのダイヤモンドは原告の坑

のになりそうだった。原告は南アフリカのヤ

かかった以上にアメリカ裁判史上の最長のも

ボーイの行先を追うことに始まり、呪われた

ダイヤがいかにして被告の手に渡ったかを明

らかにするでありましょう。まず一八七六年

九月二十日の夜、アムステルダムの紅燈街ロ

ス町の娼家で身元不明のオランダ人青年が殺

害されています。これは該件の警察記録の写

しと英文の翻訳ですが、これがジムを海中で

殺害したブールターであります。彼の敵娼マ

ーサは逃亡しておりますが、一週間の後に宝

石仲買人ユダヤ人のクロフツのところへ中年

の紳士と現われていまっていない。一つの殺人の犯人らしい男や女が次の殺人事件では被害者になっているからだ。

原告側は何年もかかって宝石の経路を証拠と証人によって説明しようとしたが、あるところの真実性が薄弱で、そこが被告側の追求する点になった。

一説によると黒人ジムは、ちゃんとフランス領赤道アフリカの奥地に広大な土地を買って農園を経営し、数人の妻を持って楽しく生きているともいう。この事件に興味をもったアメリカの新聞記者が、わざわざ彼を訪ねて女たちにかしずかれている大男の黒人の老農場主の写真を撮ってきた。

「ダイヤモンドにはいちいち所有者の名など彫ってない。世界には無数のダイヤが産出している。たまたま八十年前にヤーゲルスフォンテン坑山から黒人労働者と医師が逃亡したことがあったといって、かならずしも巨事実があったからといって、かならずしも巨大なダイヤを盗んだとはかぎらない。本件提訴の五一カラットのダイヤは、もとドイツ皇室の所有で、代々ホーヘンツォルレン家に伝わっていた品である。第一次大戦後カイゼル旧皇帝から巻きあげ、アナは情夫のー」

この裁判はどこまで続くか、まだまだ二年や三年は終るまいと当局は見ている。しかし不思議なことに、原告側がダイヤの行先を調べて行くと、次から次と死体にぶつかる。つまり、一つのダイヤをめぐって迷宮事件とされてしまっている殺人事件が十数件も調査上にあらわれてきた。それらの犯人は一人も捕らだ。



竹野武也

竹の子

江戸川乱歩・七北多玲子

一

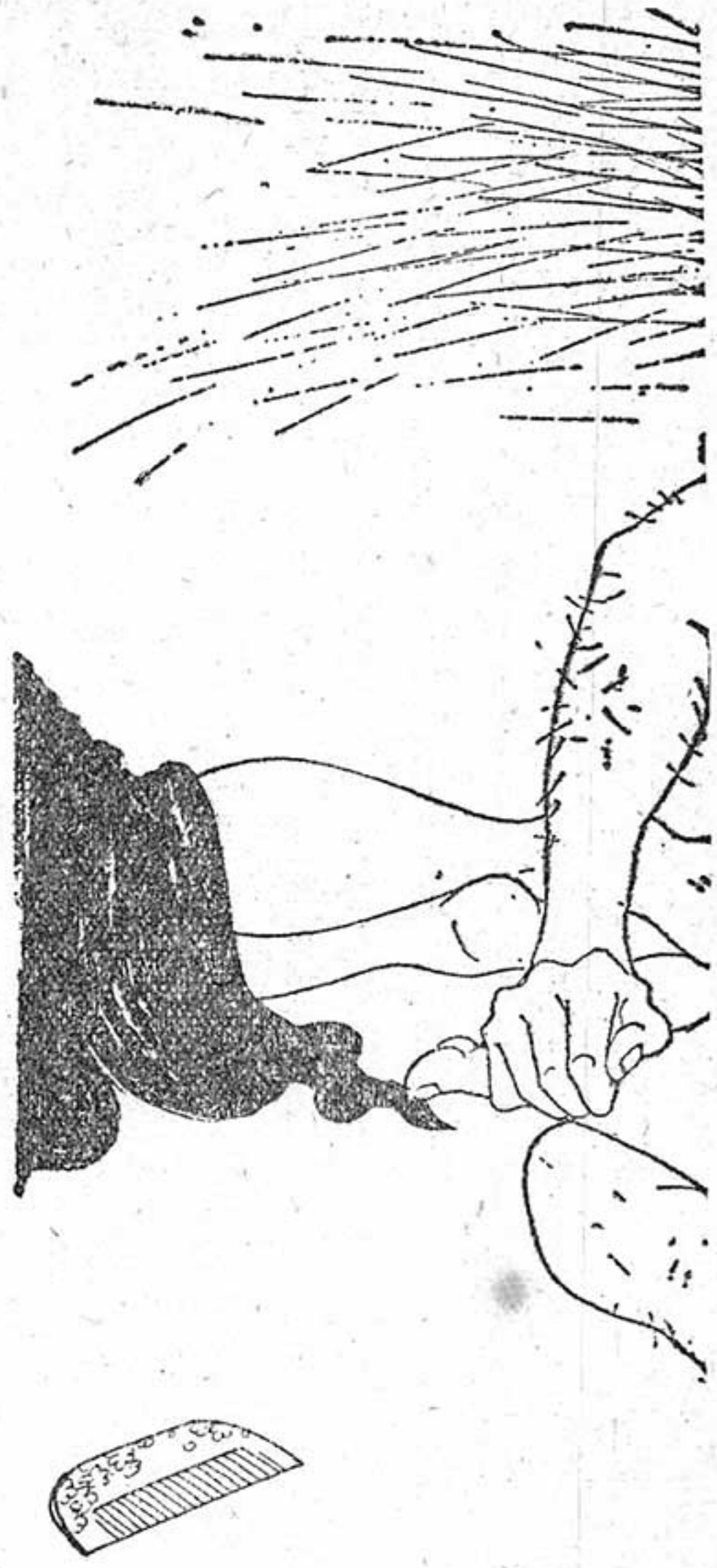
けぶるような秋雨が、音もなく京の町を濡らしていた。

傘の柄を握った指が、かじかむほどに冷めたい晩秋の夕暮である。歌菊は白いおとがいを襟にうずめ、いかにも重そうに蛇の目を傾むけて歩いていた。

だらりの帯が華やかにゆれて、かすかに残ったあどけなさが、歌菊の表情を可愛らしく見せているのだった。

ここは人通りの絶えた公家屋敷の土塀が続いている淋しい小路である。墓参りの帰途ではあるし、場所が場所だけに歌菊はなんとなく気味悪さを感じて、肌をそそけ立たせるのであった。

と、突然、崩れ落ちた土塀の陰から、低い



切迫した男の声が歌菊の耳朶を打った。

「お、お女中」

と、声は確かにそういった。ぎょっとした歌菊の足が立ちすくんだ。

「こ、ここだ」

傘をあげた歌菊は驚きに息を呑んだ。眼前に若い武士が抜き放った刀身を杖にして、土塀によりかかってあえいでいるのである。

彼の顔は異様なほどに蒼ざめ、雨の中に血の匂いを強く漂わしているのだった。歌菊は武士の面上に死の翳が、濃厚に刷かれているのを脅えた眼で素早く見て取った。彼の埃を吸っているらしい旅装には、どす黒い血潮が粘りついていた。

「頼み、頼みがある。聞いてくれぬか」

と、武士は弱りきった口調でいった。答える歌菊の声もかすれて震えていた。

「なんどす、うちにでける事どすか」

「聞いてくれるか。すまぬ」

武士は地面に崩れ落ちながら、必死の願いを双眸にこめて歌菊を見詰めるのだった。

「今宵、亥の刻、この近くにある法念寺に、岡田以蔵と申す男が来る。す、すまぬがこの書状を、誰れにも気づかれず、拙者に代って渡してくれぬか」

彼は最後の力を振り絞るように、ふところから取り出した書状を、歌菊の手に押しつけた。

「しっかり、しっかりしとくれやす」

「頼む、清水源三郎に頼まれたと――」

「黙ってお渡しすればよろしおすな」

「う、うむ」

歌菊は仕方なく受取った書状を、袂に押しこみながら、まだ恐怖の残っている表情で屍を離れた。

(どないしよう。うちが法念寺に行かんならんのやろか。知らん顔もでけへんし)

と、歌菊が小さな胸の内で迷いながら歩いている前を、これも全身をびっしょりと濡ら

★旅空で使命半ばに斃された兄の非運に泣くいとまもなく琴絵は全身で責苦に耐えた！

した武士が立ちふさがったのである。
武士は鋭く光る眼を彼女に注ぎながら、薄い冷徹な感じに満ちた唇を歪めた。歌菊は彼の体から本能的に殺気と血臭を嗅ぎ取り、膝頭から力が消え失せたように思った。
「舞妓か、俺は見廻組の者だが、尋ねたいことがある」
「へえ、なにかご用どすか」
「そなたはこの小路を通って来たのだな」
「へえ、うちはこの路を通って来ましたえ」
見廻組隊士は顔に降りかかる雨を、掌で拭いながら歌菊をねめまわした。
「この先で若い旅姿の武士を見かけなかったか。傷を負うていたはずだが、死んでいたかも知れぬ」
「いいえ、うちはどなたにもお会いしまへんえ」
歌菊は咄嗟に嘘をついた。かかわり合いになることが恐しかったのである。
瞬間、見廻組隊士は疑わしそうな表情を浮べたが、相手は十七、八の小娘と甘く見たのであろう。
「そうか」
と、素直にうなずいたのである。
「足を止めて悪かったな、行け」
「へえ、ごめんやす」
ほっとして生き返った歌菊は、思わず小走りに歩き出していた。気がついてみると、傘の柄を握っている掌に、ねっとりとした脂汗がにじんでいた。

二

雨に濡れた庭には、薄いタ闇が立ちこめていた。
京都所司代与力をつとめる江馬兵庫は、先刻から期待を現わした表情で見廻組隊士、村井進之介と対坐していた。ここは彼の役宅の奥まった一室である。
進之介は兵庫の面をかすかによぎった焦慮を、目ざとく見つけると嘲笑を漂わせながらいった。
「江馬どの、あせらぬことだ。焦慮は禁物」
「しかし、万が一にも間違いはござるまいの、村井どの」
「安心致されい」
と、進之介は自信をこめていった。
「所司代にはご存じあるまいが、我等は用意の網を張りめぐらしておる。目的の第一は土佐より武市半兵太に送られる書状を奪い取ること。第二は武市半兵太の所在を索めてこれを斬ること」
「さよう、倒幕の急先鋒たる武市半兵太を抹殺すれば、不逞浪人どもの動きも静かになるであろう」
「その通り」
と、進之介がうなずいた時、廊下を静かに踏む足音が聞えた。
「おう、天堂典膳だな。待ちかねたぞ」
障子を開いて、部屋の中に入ったのは、歌菊を呼び止めた見廻組隊士である。彼の衣服にまつわりついている雨滴がにぶく光った。
典膳の横顔には、まだ黒ずんだ殺気の翳が濃く浮きあがっている。
「どうした。首尾は上々か」
気負いたって尋ねる進之介を、じろりと一瞥した典膳が重い口を開いた。
「清水源三郎と申すあの土佐藩士は確かに仕止めたが、奴の体のどこにも密書らしい物はなかった」
「本当か、それは」
狼狽した進之介にあおりたてられたように兵庫の脂ぎった赤ら顔も幾分蒼ざめた。しかし、典膳は平然たるものである。
「天堂どの、その土佐藩士は確かに国元から京に潜伏しておる武市半兵太のもとに、書状

を運ぶ途中でござったのか」

典膳の態度に耐りかねたのか、兵庫が気色ばんでいった。

「心配はご無用じゃ。密書が入らぬのなら、武市半兵太を斬ればよいのだ」

「わからぬことを、密書を運ぶ者を斬ったのでは、武市半兵太がどこに隠れているのかつかめぬでござろう」

と、兵庫は不機嫌な色を露骨に現わした。すると、進之介がそれに同意してうなずきながらいった。

「その通りじゃ、おぬしはちとどうかしておるぞ」

「馬鹿なことを申せ。拙者は貴公のごときうろたえ者ではない」

今度は典膳の方が腹立たしげに言葉を荒げるのだ。

「よく聞け、貴公は清水源三郎が一人で旅を続けて来たと思うているのか」

「なに、それは初耳だぞ」

と、愕然と進之介が叫んだ。そして、兵庫の方に素早く視線を投げ、典膳に言葉を続けるように手を振って促がした。

「清水源三郎は密書を運ぶことを気づかれぬように、妹を妻と偽って旅を続けていたのだ。その妹をたたけば、武市半兵太がどこに潜んでいるかわかる。また、囮にして武市を釣り出すのもおもしろかろう」

「ふうむ」

二人は思わず唸って、典膳の得意げな顔を見詰めるばかりである。

「だが、娘の居所はわかっているのか」

と、問い返す進之介を典膳は薄い唇に冷笑を漂わせながら見た。この男がこのような表情を浮べる時は、なにかを企んでいるのだと彼は思った。進之介は膝をすすめて、典膳の方に向き直った。

「典膳、その娘はどうした」

「ふっ、案ずるな。じきに隼の長七が吉報を持って駈けつけるはずだ。久しぶりで娘を一人泣かせるか」

にやにやと淫靡な嗤いを面上に刷いた典膳を、兵庫と進之介が毒気を抜かれた面持で眺めるのであった。

三

「旦那、天堂の旦那」

と、低い声が庭の方から障子越しに部屋の中に流れこんだ。にわかに典膳の表情が鋭く引き緊まり、眼がぎらっと異様な輝きを放ったようである。

「長七か、障子を開けて顔を覗かせろ」

「へい、御免なすって」

障子を開いて濡れた顔を突き出したのは、隼の長七と異名をとる腕利きの目明しである帯にはさんだ銀膳きの十手が行燈を反射して光った。

「どうであった。娘は捕えたか」

「へい、滅法きれいな娘なので、多寡をくくってこずりました」

「それで」

「引っ括って駕籠でこの御屋敷に連れて来ておりまず」

「よし、ご苦労」

と、典膳は長七にねぎらいの言葉を投げると、視線を兵庫に素早く移した。

「江馬どの、娘を責めねばならぬが、この座敷でよろしかろうな」

「結構、存分にお使い下されい」

その返辞を聞いた典膳は、もう一度廊下に座っている長七を振り返った。

「長七、娘をここに連れて来い」

典膳はゆっくりした口調で、兵庫と進之介の好奇心を唆るようにいう。

「名は琴絵、先刻長七が申していたように美

しい娘だ」

その言葉に兵庫と進之介の胸が、これから繰り拡げられる光景を予想して高鳴った。それを見抜いているかのように、典膳の唇には相変らず冷めたい嗤いが刻まれていた。

やがて、廊下に引きずるような足音が近づいた。障子がすうっと開く。

「入れ、入るんだよ」

と、長七のだみ声にこづかれるように娘がいった。

崩れ落ちた。地味な旅姿ではあるが、部屋の中に華やいだ雰囲気が拡がる。

琴絵は高々と後手に縛められていた。捕えられた時の激しい抵抗を物語るように、乱れた髪が頬に垂れかかって凄艶である。長い睫毛の奥で黒くうるんだ瞳が、敵意と恐怖と屈辱を交錯して濡れていた。頬には豆絞りの手拭で猿轡が固く噛ませてある。

兵庫は咽喉をごくりと鳴らして、琴絵の肢体を不遠慮に眺めまわした。好色な彼の嗜好を唆るような美女なのである。

「長七、この猿轡はどうしたわけだ」

「へえ、運ぶ途中に声を出されちゃあまずいもので」

「そうか、取ってやれ」

と、典膳はゆっくり立ち上ると、琴絵の顔を見下ろした。

猿轡がはずされると、琴絵の白い顔がさっと恐怖の色を刷いた。胸の円みがせつなげに動いた。

「琴絵と申したな。よい事を教えてやろう」

典膳は顔をそむけている彼女の、白いおとがいの下に錨を当てながらいった。

「そなたの兄である清水源三郎は死んだぞ」

「嘘ですっ」

と、琴絵は叫ぶようにいった。

「嘘なものか、斬ったのはこの俺だ」

その言葉を聞いた琴絵の表情が暗い絶望に翳った。悲しみの色が彼女の双眸ににじむ。

「源三郎の体には武市半兵太に渡すべき書状はなかったぞ。だれにどこで渡したのだ」

「知りませぬ」

琴絵の紅唇を割ったのは短い答である。予期していたように、典膳の骨張った顔は動かなかった。

「たとえどのように責められようとも、私はいいませぬ」

「おもしろい、俺はどうあってもそれを知りたいのだ。そなたがみごとに耐えるか、俺がロを割らせるか、戦うてみよう」

典膳は惨忍な悦びを面上に漂わしながら、唇を歪めて声もなく不気味に笑った。

琴絵の白い顔がさっと恐怖の色を刷いた。

処女の本能的なおののきである。

「長七、その娘を裸に引き剝くのだ」

「へい」

ぎらぎらと男達の眼が輝きを増して、琴絵の肌を待つように熱っぽく血走った。

「どうだい、裸にされるのが嫌ならさっさと吐いちまうかよ」

と、長七は薄く笑いながら、琴絵のほっそりとした肩に手を掛けた。琴絵は眼を閉じてあえぐのみである。

「じゃあ、すっぽり脱いでもらおうぜ」

長七はもがく琴絵を膝の下に組み敷くと縄の結び目を解き始めた。覚悟は決めているものの、男の手で裸にされ、露骨な視線に射すくめられると思えば生きた心持もしなかった。縄を解かれて自由になった手で突きのけようとするのを、典膳と進之介が押えつける。

「むむっ」

と、琴絵の小さな悲鳴があがった。長七の指が帯に掛ったのである。ずるずると帯が引き解かれて、着物の前がぱっと割れる。

細紐と伊達巻が畳の上に投げられ、男達の

荒い息だけが続いた。

卵の殻をむくように、着物と長襦袢が一緒に剝がされて、部屋の中に鮮かな色彩をふりまいて乱れる。

「あれ」

耐えきれなくなった琴絵の悲鳴も空しく、邪険に手を後に捻じあげられ、捕縄がひしひしとからみつく。ふっくりと盛りあがった胸乳が緊めつけられた縄目で弾んだ。背に高く重ねられた手首と、肩の骨がきりきりと痛んで、琴絵は顔を振って悶えた。

やがて、行燈の光に桃色の湯文字だけをまとったふくよかな裸身が、白く輝きながらくの字なりにくねった。縄は柔肌に深いくびれを残して喰いこみ、うつ向いてあえいでいる琴絵の背で縛り合された指が観念していた。

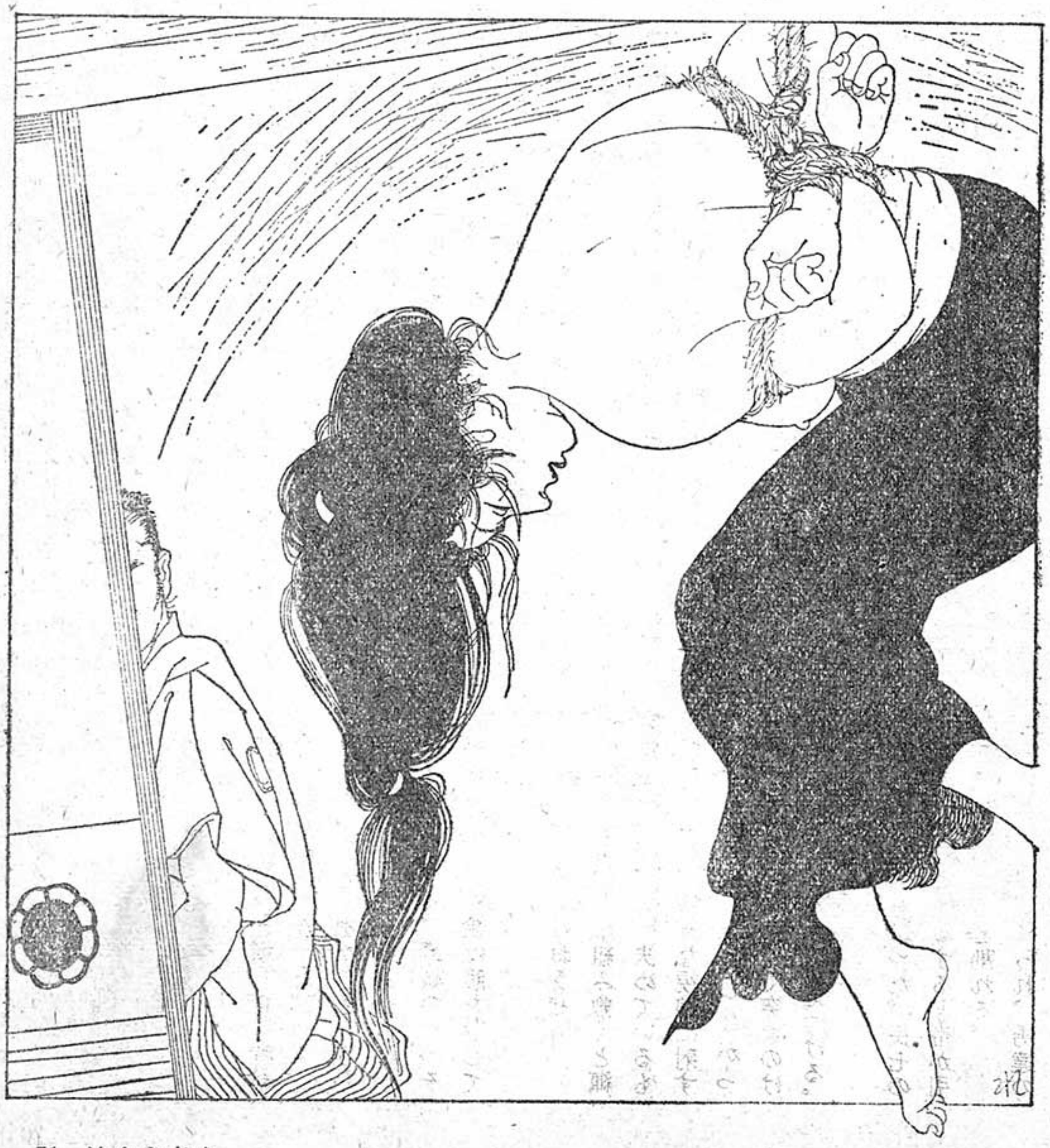
たった一枚の肌を隠している湯文字もめくれあがり、わずかに腰を掩っているだけである。むっちりと肉づいた太腿が、集中する視線に震えるばかりだった。

「旦那、これでようございますか」

「よかろう」

と、うなずく典膳の顔も、見守る兵庫と進之介の表情も同じように朱かった。

典膳は突立ったまま、鐺を縄の間に差しこ



み、ぐいっとこじりながらいった。
「どうだ、まだ口を割る気にはならぬか」
縄目はぐっと締まって肌がよじれる。だが琴絵は唇を噛み、眼をしっかりと閉じていた鐺は胸を緊めつけられて、ふくれあがっている乳房をぐいぐいとこじった。
琴絵が苦痛に体をくねらせるたびに、辛うじて腰にまつわりついている湯文字がずり落ちようとする。それを思うと、琴絵の全身をかっと火照らせる羞恥と、耐えられぬ恐怖が襲いかかって来るのであった。
兵庫も進之介も眼前に展開する光景に、咽喉をごくりと鳴らすばかりである。
「長七、この娘を鴨居に吊り下げろ。責めて責め抜くのだ」
昂奮した典膳の狂気じみた声である。
「へい、承知しました」
と、長七がもがいている琴絵の体を鴨居の下に引きずった。
「あれっ」
湯文字が剝れぬように、ぴったりと両腿を閉じている琴絵の低い悲鳴である。
長七は慣れきった手つきで、突伏して背をまるめている琴絵の後手に、別の捕縄を結びつけると鴨居に投げあげた。
「吊るせ」
典膳の冷酷な声に、縄尻をつかんでいる長七の手に力がこめられた。ぎしぎしと縄が軋んだ音をたてた。
琴絵の裸身がゆっくりと宙に浮く。
吊られた体の重量はすべて縄目にかかる。縄は肌にうずまり、ぎりぎりと締まるのである。
「うむむ、うっ」
と、琴絵の唇から苦悶の声がもれた。悶える度に体がぶらぶらとゆれる。餓狼のように長七の指が湯文字の裾をつかんだ。
「それだけは、お許しを」
始めて琴絵の口から哀願の言葉が出た。だが、湯文字は足元にはらりと落ちて、豊かに肉づいた双丘が剝き出しに光った。

五

吊り下げられた裸身は、秋の冷気すら感じないであろうか、琴絵の柔肌にはうっすらと脂汗が浮いていた。
やがて、典膳は新しい責め手を考えたのか長七に命じて蠟燭を持って来させた。彼の手に握られた蠟燭の炎が乳房の辺りに這い寄ったのべられ、蠟燭の炎が琴絵の苦痛に耐え得る限界点であった。
「止めて」
「知っていることを話せば許してやる」
「琴絵、すべてを吐き出すなら今の内だぞ」
と、琴絵はわずかに顔をそむけて黙したままである。
「よし、一踊り踊ってみるか」
典膳の声に部屋中の空気が凍るかとさえ思えた。誰れもが、これから典膳の始めようとしていることを知っているのである。
「あ、あついっ」
と琴絵が体をよじった。炎が彼女の柔肌をなめたのである。
それは凄惨をきわめる拷問であった。肌に近づく炎を避けようと体をくねらせる度に、縄目が異様な厳しさで喰いこみ、間断なく骨身に達する苦痛が襲うのである。かよわい琴絵の脳裡は混濁した。
全身は凝脂を塗ったように脂汗をべったりと噴いていた。
「ひえっ」
悲鳴がほとばしる。しかし、それも次第に弱まっていくようであった。典膳の手が差しのべられ、蠟燭の炎が乳房の辺りに這い寄った時、それが琴絵の苦痛に耐え得る限界点であった。
「止めて」
「知っていることを話せば許してやる」

「い、いいます」
と、琴絵はかすれた声で弱々しくいった。
ぼうっと曇っている意識の中を、どうにもならぬ敗北感が走るのであった。
「いえ」
非情な声が琴絵の耳朶を打つ。
「今宵、亥の刻、法念寺」
とぎれながら言葉を続ける琴絵は、依然として吊られたままである。
「それからどうしたのだ」
「その寺に武市様からのお使いが」
「密書を受取りに来るというのだな」
がっくりと琴絵がうなずいた。
「武市半兵太の居所はどこだ」
「知、知りませぬ。法念寺にて会えば――」
そこで、琴絵は完全に気を失った。だらりと垂れ下った裸身がぬめぬめと光る。典膳が眼で合図をすると、長七が鴨居の縄をゆるめる。琴絵の体が畳にくねった。
「村井、武市半兵太を討ち取る絶好の機会だ、法念寺に行くぞ」
「よし、出かけよう」
と、典膳に応じて立ち上る進之介の面上にも、殺気が噴きあがっていた。
亥の刻にはまだ半刻余りあった。

二人が長七を連れて、兵庫の役宅を出たのはそれからすぐだった。兵庫は剣に自信がないので、典膳も進之介も頼みにはしない。所司代与力を引き入れておけば、彼等の行為はすべて正当化されるから、兵庫を利用しているに過ぎないのである。
いまや兵庫も倒幕を企図する不逞浪人のこととなどは念頭になかった。彼は気を失っている美しい娘を、どう楽しむかに夢中であった。
やがて、兵庫は素裸の琴絵を寝所に運びこんだのである。琴絵が意識を取り戻したのは絹布の夜具の上だった。縄はすでに解かれていた。
「琴絵と申したのう。可愛がってやるぞ」
「離して、離して下さい」
兵庫は悶える柔かな肉体を抱きすくめながら、熱い唇を肌に押し当てるのである。嫌悪感が電撃のように琴絵の背筋を貫ぬいた。
夜具に押し倒されて、絶望にのけぞった彼女の双眸に、床の間にある刀架が映じた。
「これ、そのように暴れるでない。静かにするのだ」
燃えるような息を吹きかけながら、好色な歪んだ兵庫の顔が迫った時、琴絵は両腕に力をこめて必死に突きあげた。
「なにをするっ」
虚をつかれて、仰向きざまに兵庫は見苦しく転倒した。琴絵は眼もくれず刀架に向って走った。
「あっ」
狼狽の声は恐怖の叫びに変った。
「覚悟っ」
琴絵が絶叫した。
刀架の脇差に手をかけると同時に、振り返った琴絵は真向から刀身を叩きつけていた。
眉間を割りつけられて血を噴いた兵庫に、裸身をまるめるように琴絵がぶつかった。
血の匂いがむらむらと漂った。

六

雨はやんでいたが、空は相変らず漆黒の雲におおわれていた。
法念寺は深い闇の底に横たわり、異様なほどの静寂に包まれているのだった。のびるにまかせた雑草が、湿りを帯びた風にゆらゆらとゆれている。
山門をくぐった歌菊は、幽鬼の住居のごとき不気味さにぞっとした。彼女は頼まれた書状を、届けるためにこの破れ寺に来たのであ

時刻は亥の刻に近かった。

歌菊は閨の中にふと人の気配を感じた。

「どなたどす」

と、歌菊は黄色い悲鳴をあげてしまった。

「それはこちらのいうことじゃ」

陰気なしわがれた声が返り、草を踏む足音が歌菊の耳に聞えた。眼をこらすと人影はどうやら僧侶らしい。

「女子の匂いがすると思うて、庫裡から出て来たのじゃが、案の定若い娘じゃのう」

「あの、このお寺のお和尚さまどすか」

「さよう、わしは良念と申すこの寺の住職じゃやわい」

と、良念は歌菊の匂いを嗅ぐように鼻を鳴らした。

「祇園の舞妓じゃの、可愛らしい娘だのう」

語尾が消えぬ内に、ぬるっとした感触の骨張った指が、歌菊の手首にからみついた。

「あっ、なにをしやはるんどす」

「この時刻、この破れ寺に来るからには覚悟もあろう。わしのことを淫僧と呼ぶ奴もおる。どうじゃ、今宵はわしとしっぽり濡れるか」

「離して、離しておくれやす」

歌菊は恐しさに息が詰まるばかりである。手をふりほどこうとするが、良念の指は粘りついたように離れない。

「声を出しますえ」

「かまわぬ、咽喉のかれるまで叫ぶがよい」

と、良念は歌菊の腕をぐいぐいと後に捻じあげるのだ。悲鳴をほとばしらせようとも、深い閨の中に消えるばかりである。

「ふふふ、たまらぬのう。娘の匂いは」

淫らな声を歌菊の震える顔に吐きつけて、良念はもがき続ける彼女を横抱きにして歩き出した。老いぼれてはいるが、力は異様なほどに強い。

「ご無体な、止めて、止めておくれやす」

かすかな絶え入るようなうめきをもらし、

「なんの、この結構な獲物が手離せるか」

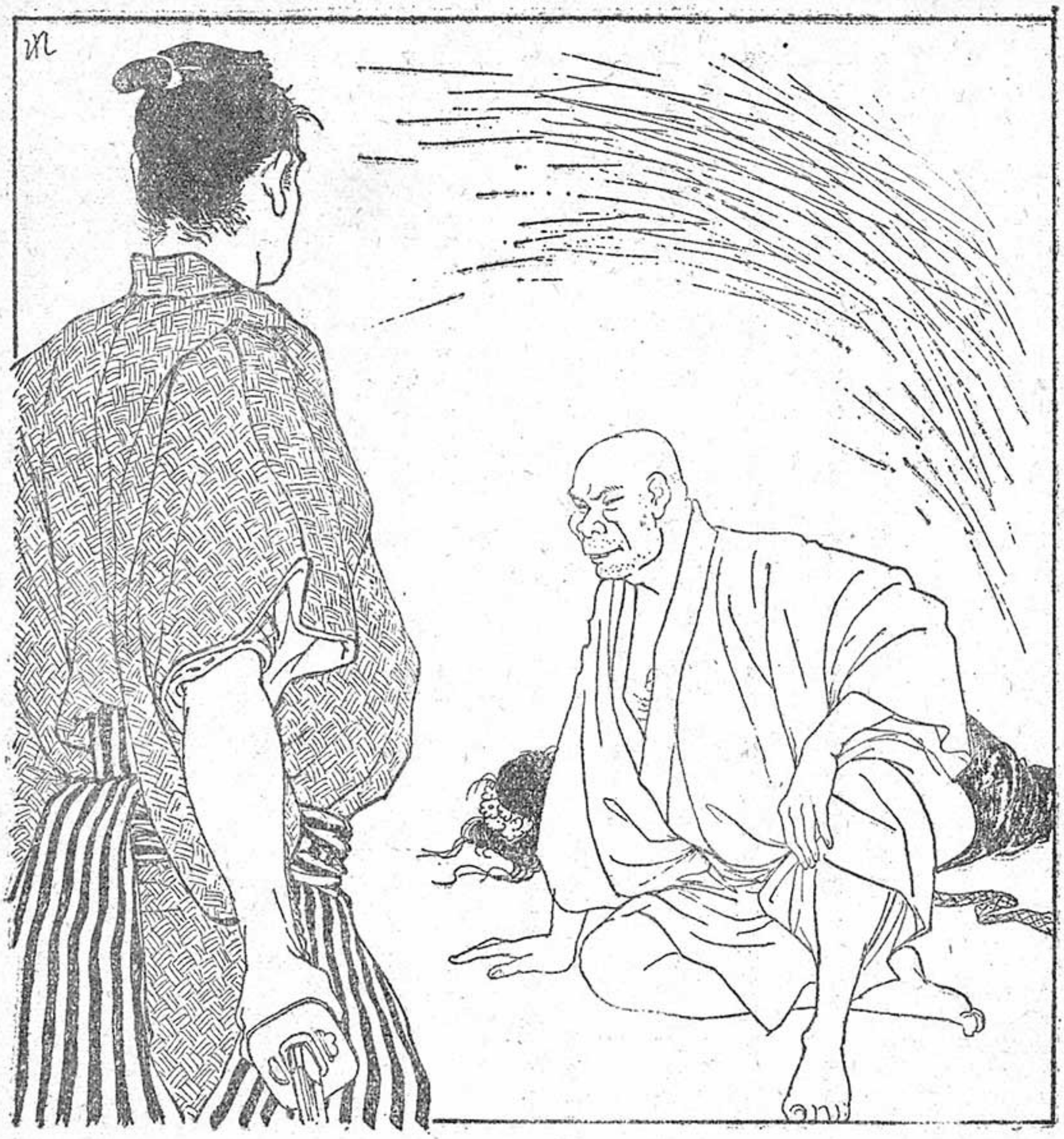
痛みに耐えかねて首を振った。紅い唇が開いて、白い歯の間に桃色の舌が苦しそうにあえいでいた。髪に差した簪がきらきらと光る。

「これほどの美女なら責め甲斐があるというものじゃ。たっぷり楽しませてもらおうか」

良念は楽しむように、両手でぬめりとした歌菊の咽喉をじんわりと締めつける。

「ううっ」と歌菊はくの字なりに体をくねらせ、つぶれた悲鳴をあげて、顔を畳にこすりつける。縛られる時にもがいたので、めくれ返った裾から、すんなりと白い足が膝頭のあたりまで覗いていた。

ぎらぎらと眼を妖しく輝かせた良念は、ずるずると歌菊を引き寄せた。



「きれいな脚じゃのう」

と、抱きすくめた歌菊を、良念はゆっくりと撫でまわし始める。

縛られた体をすくめて、歌菊は恐怖に打ちひしがれて声すら立て得ないのである。

七

すすけた暗い行燈の灯芯がじいっと鳴る。

歌菊は襟を大きく引き拡げられて肩から乳房の下まで剝き出され、部屋の片隅にある柱にぎりぎりと縛りつけられていた。

白絹のようにぬめぬめとした肌が、薄暗い行燈の光を浴びて浮きあがり、胸を緊めつけている縄目は厳しかった。縄の喰い入った間から、むっちりと盛りあがった乳房がせつなく息づいていた。

頬に柔らかな陰翳を落した睫毛は、羞恥と恐怖と屈辱に濡れるばかりである。

「こたえられぬわい」

ふっくらとした双つの隆起には処女の紋章である固い苺のような乳首が、反抗するように震えていた。

「わしはそなたのように、若く美しい娘を責めるのが大好きじゃ。舞妓を責めるのは始めてじゃが」

「かんにん、かんにんしとくれやす」
屈辱と羞恥に歌菊の胸は張り裂けんばかりである。
「ひえっ、ひいっ」
と、たまりかねた歌菊の悲鳴は、良念の興味を唆るだけであった。
歌菊の咽喉はからからに乾き、眼のくらむような衝撃を感じる。剝き出された肌はすっかり紅く染まっていた。
「あれえ、止めてえ」
歌菊の全身が震えた。
「どうじゃの、今度はその豪勢な衣裳を脱いで、湯文字一枚に引き剝かれた肌はそのぬめ肌をたっぷり楽しませてもらおうわい」
淫僧の手が帯にのびて、歌菊の心が新しい戦慄に打ちのめされた。
その時である。
突然、庫裡の破れ障子を踏みはげしい勢いで躍りこんで来た少女を見た以蔵の方に向き直った。
「誰れじゃっ」
と、良念は狼狽と楽しみを中断された激怒を、そのしわがれた声に籠めて叫んだ。
「なるほど、貴様は噂通りの淫僧だな」
灯の中に足を踏み出したのは若い武士であった。精悍な風貌が俊敏そうである。
「やかましい。無住の寺ではないわい。出て行けっ」
「そうはいかん。拙者は岡田以蔵、人斬り以蔵とも呼ばれている男だが」
その言葉を聞いた歌菊の顔に、喜色が甦えった。書状を渡す相手だからである。
「坊主、貴様如きは殺しても飽きたらぬが」
「なにをするんじゃっ」
「こうするのだ」
と、いいざま、腰を割った以蔵は電撃の一刀を鞘走らせていた。良念は肩口を一撃されて土間に転げ落ちて悶絶した。峯打ちである。以蔵は歌菊の縄目を斬った。
「とんだ災難だったな」
と、肌を隠している美少女を見た以蔵の方に、歌菊がすがりつくように向き直った。
「岡田さまどすな」
「そうだ、拙者は岡田以蔵、人斬り以蔵とも呼ばれはりましたえ、それはげしい勢いで躍りこんで来たんどすか」
「これを預りましたんえ」
歌菊は急いで袂から書状を取り出して彼に渡した。いぶかしくそれを受取った以蔵の表情が、心なしか蒼ざめたようだった。
「これを預けたのは誰なのだ、そして、どうなったのだ」
「清水源三郎というお侍どした。そのお方は見廻組の人にうて預けはったんどす」
「そうか、清水は斬られたのか」
と、以蔵は悲痛な呟きをもらした。
「連れがいたはずだが、娘はいなかったか」
「いいえ、お一人どした」
歌菊がかぶりを振った瞬間、以蔵の表情が鋭く引き緊まった。草を踏みしだく足音が、闇の中に殺気を滲ませて響いて来るのである。以蔵は歌菊をかばうように立った。

八

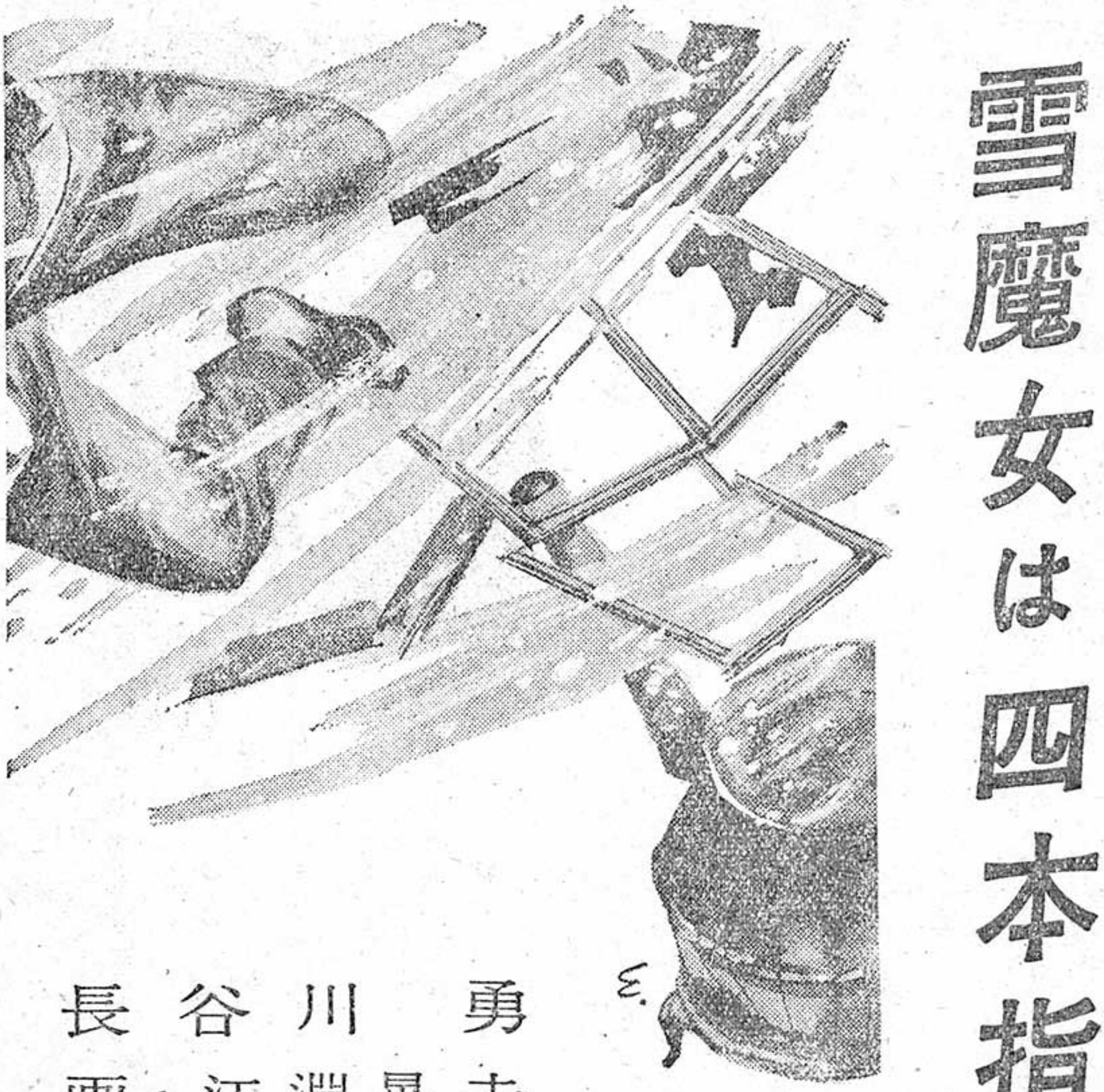
以蔵は庫裡の外にすべり出すと、闇の中をすかすように眼を凝らした。
人影は三つ、庫裡に向って静かな、殺気を秘めた足取りで近寄って来る。以蔵は機先を制するように一歩を踏み出した。
「だれだ」
以蔵の口から抑揚を失った声がもれた。三人の動きがはっと止まった。
「武市半兵太の使いだな。われわれは見廻組だ」
その声は村井進之介である。続いて天堂典

膳がいった。
「貴様は何者だ」
「拙者か、おぬしらが探している男よ。土佐の岡田以蔵だ」
「人斬り以蔵かっ」
と、進之介は叫びざま抜刀した。履物を脱ぎ捨てた彼の足は、じりじりと湿った地面をこするように進む。以蔵の剣尖が迎え撃つように光った。
「見廻組の犬退治をやるぞ」
「ほざくなっ、不逞浪人」
進之介の絶叫が夜気をつん裂いた瞬間、振りかぶった白刃が風を生じながら走った。薄い光茫を引きながら以蔵を襲う彼の剣を、はね返すように以蔵の刀身も躍った。
ぱきっ、と異様な音を発して、進之介の大刀は鍔元からぽきりと折れていた。そして、同時に斬られたのか、彼の面は眉間から鼻柱にかけて血泡を噴いていたのである。
「無念」
眼を剝いて倒れる凄惨な進之介の濁った声であった。
「やるのう、さすがは人斬り以蔵だな」
「鏡心明智流の極意、見せて進ぜよう」
「来い」
二本の刃影は冷たく鋭い。
典膳の眼光は炎を噴くように輝き、以蔵の面上にも凄烈な闘魂が露出していた。
やがて、かすかに典膳の剣尖が動くと見えた刹那、
「とおうっ」
と、墨色の空間に薄青い線を描いて典膳の剣が空気を裂いた。
「おうっ」
吼えるような以蔵の雄叫びである。続いて刃の噛み合う音と共に火花が散った。
「むっ」
と、よろめいた典膳の体をめがけて、
「兄の仇」
叫びざま躍りかかった人影があった。いつの間に駈けつけたのか、琴絵である。彼女の手にした刃は深々と典膳の脇腹をえぐっていた。
「野郎」
残った一人、隼の長七が匕口をひらめかして琴絵を狙う。琴絵が背後に飛び退ると同時に、以蔵の剣は血飛沫を立てて袈裟がけに斬り下ろしていた。
闇に消えた。
「岡田さまっ」
「琴絵どのか、安心されい。書状はあの舞妓の助力で無事に落手した」
と、振返って庫裡を見る以蔵と琴絵の眼に、剣の舞に脅えて立ちすくむ歌菊の可憐な姿が映じた。
血臭は黒闇に包まれた法念寺の境内に、修羅の嵐を告げるように拡がるのであった。

★編集部より★

◎「或る美容体操」は予想外の反響を呼び、各地の愛読者の方からお問い合わせが山積しておりますが、小社では現在のところ、直接の分譲は致しておりませんので、御了承下さいますようお願い申し上げます。いちいち御返事は差上げているつもりですが、事務輻輳のため、御返信が洩れている方もあるかと思いますので、誌上にて御連絡申し上げます。
◎本誌記事中に広告を掲載してほしいというお申し込みが、最近特に多く参りますが、本誌は自社以外の広告は掲載しない建前をとっておりますので、何卒お申し込みにならないようお願い申し上げます。

白ずくめの小魔女ととんでもない約束をしてしまった！★



雪魔女は四本指

長谷川　勇
画・江淵晃夫

その日は朝から、外はひどい吹雪が荒れ狂っていた。

家の中ですっかり私は縮みあがり、小さな家の中で何年も前から使っている小さな古びたストーブにかじりついていた。昼食もそこですませ、それからは背中を丸めたきり、冬眠に入った熊のようにじっとして動かなかった。

もし私のお婆さんが今でも生きていたら、こんな日にはきっと、こう言ったものだ。

「本当だとも、ジョン。このひどい吹雪をごらん！　恐ろしい雪魔女が来たんだよ。ジョンや、一人でおもてへ出たりしてはいけませんよ！　雪魔女にさらわれるからね。そして、さらわれたが最後、人気のいないところへ連れて行かれ、そこで冷たい息を雪魔女がお前に吹きつけるよ！……　こわいだろう、誰でも雪魔女にさらわれたら、最後には凍らされて石のようにコチコチになってしまうのさ！　え、その雪魔女がどこから

★私は何とかして森を出るために



来るかって？　それはお前、雪魔女はもう冬になったからどこからだって来るよ。あの向うの方の淋しい山か、誰も住んでいない谷からも知れないね……それとも深い深い森の奥の、またそのずっと奥からこんな吹雪の日には遊びに行けないよ。一人で雪の中にいたりすると必らず雪魔女に騙されてしまうのさ、『約束しよう』って言ってね……」

指を一本立てて背中を丸くしながら本当に雪魔女に出遭ったかのようなお婆さんの話しぶりを私は本気にしてこわがり、蒼くなったものだ。

そうしているうち時計は三時を打ったが、吹雪はまだ少しも衰えなかった。こんな日に外出するというのは実際気の進まないことだ。ところが、あいにく今日は三マイル離れた隣り町へ行かねばならない用事があったので、私はまったくやりきれない思いだった。

舌打ちをして立ち上がると、ストーブから離れ、ゴソついた外套に腕を通した。

外へ出ると案の定、ひどい風だった。横なぐりに吹きつける雪のつぶてがいきなり私の顔をまともに襲って、うかうか眼さえも開けていられなかった。

帽子を眼深かにかぶり、外套の襟を立ててさらに両手で胸元をしっかりつかんだまま歩いて、やっと私は街道にたどりついた。

街道は人など一人も歩いていないようで、右を見ても左をみても一面灰色にかすみ、北風のビュウビュウいう音しかわからなかった。

街道をさらに歩いて、榛が二本自生しているところまで来ると、そこで私は乗合馬車を待つことにした。都合のいいことに榛の根元には、腰をおろすのにあつらえ向きな石が一つあった。そこで私はマイル離れた隣り町へ行かねばならない用事があったので、私はまったくやりきれない思いだった。

舌打ちをして立ち上がると、ストーブから離れ、ゴソついた外套に腕を通した。

外へ出ると案の定、ひどい風だった。横なぐりに吹きつける雪のつぶてがいきなり私の顔をまともに襲って、うかうか眼さえも開けていられなかった。

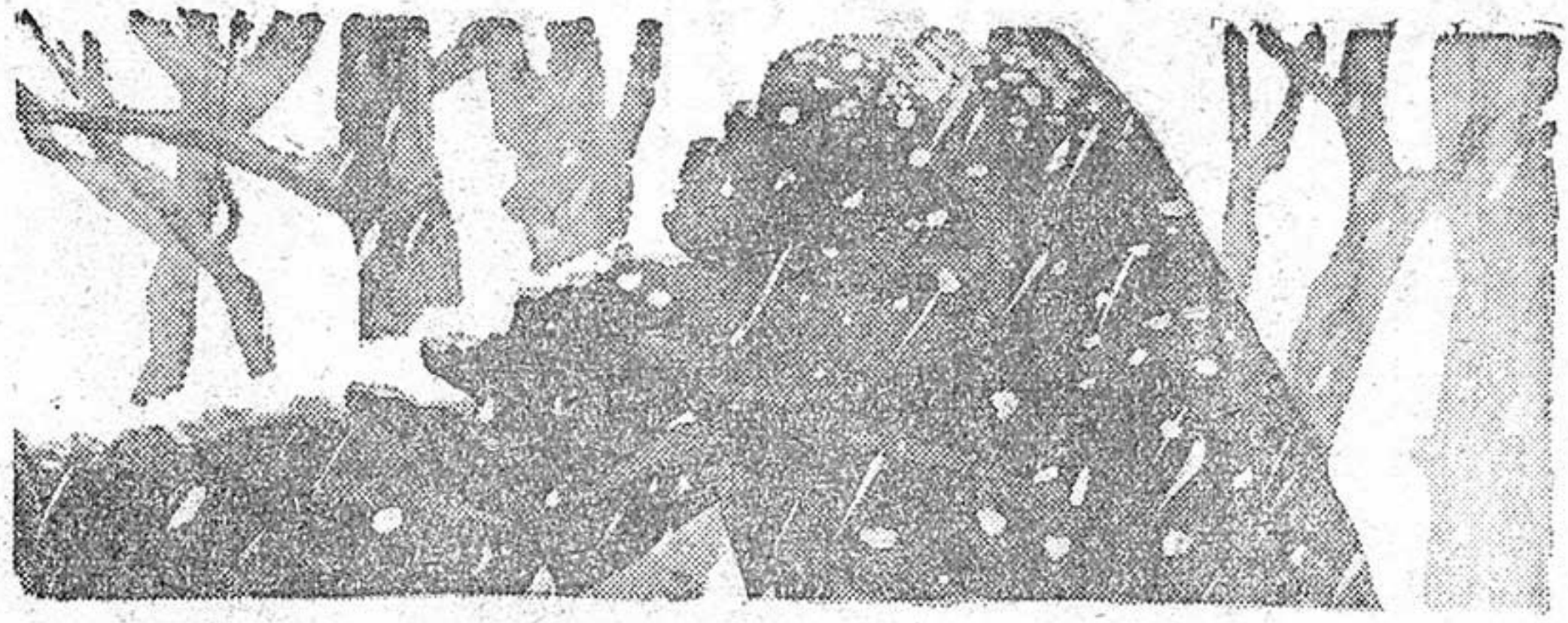
帽子を眼深かにかぶり、外套の襟を立ててさらに両手で胸元をしっかりつかんだまま歩いて、やっと私は街道にたどりついた。

街道は人など一人も歩いていないようで、右を見ても左をみても一面灰色にかすみ、北風のビュウビュウいう音しかわからなかった。

街道をさらに歩いて、榛が二本自生しているところまで来ると、そこで私は乗合馬車を待つことにした。都合のいいことに榛の根元には、腰をおろすのにあつらえ向きな石が一つあった。そこで私は石の上の雪を払い除けると、そこへ腰を据え、乗合馬車を待った。ところが私の座った場所はどうもそれほど都合がよくはないものだということがわかった。それは私の座った石が街道とはちょうど反対側を向いていたからである。

従って私が腰をおろした石の上からは街道がまるでみえなかった。つまりそっぽを向いて馬車を待つことになる。私は再び立ち上がった。そして街道側へ場所を変えようと思った。が、そう簡単にはいかないことを、私はいきなりまた雪のつぶてをくらったことによって思い出した。榛の表側は吹雪が占領しているのだ。

そこであわてて私は、やどかりのように榛の裏へ身を隠した。この石の上にやはりこうやって腰を据えているのが風も来なくて一番有利である。馬車が来たときにはそれ相応の音がするはずだからその音にさえ気をつけていれば、ま



ず逃がすことはあるまいと思ったので、今度は安心して乗合馬車がやってくるのを待つことにした。

ところでその馬車だが、今日はどうしたことか、すこしもそんな音のやって来る気配がなかった。そこで何時間待ったものか、ついに一台の馬車もやって来ないので私は諦め、吹雪の街道へ出ると一人で歩いてゆくことにした。

北風が雪を追ってすさまじい音と共につっ走る野をトボトボと私はたった一人で歩いて行った。途中で出遭う人もなく、そのうちだんだん日も暮れて、私は心細くなるばかりだった。引き返えそうかどうしようかと思いあぐねながら歩いているうちやがて私は古樫の森まで来てしまった。

私はそこでやれやれと一息ついた。ここまで来てしまえばもう後は半分である。やはり来てしまってよかったと思いなおし、今度は元気よく古樫の森を一人で歩いて行った。

口笛を吹きながら、唄ったりして、私はわざと恐ろしくないと思いながら歩き続けた。古樫の森の中の径はまるで雲の上でも歩くかのように真白で、それがいつまでも続いていた。

まったく森は深かった——実際いつまで歩いても抜けられなかった。しかし森の中では吹雪は忘れたように静かであり、ただ細かな雪が音もなくゆっくりと上から下へ舞い降りてくるだけだった。

そんな好都合のため、しばらくは森の深いのも我慢していた。しかし実に不思議なことだが、それからも古樫の森はさらに続いて、いつまで歩いてもきりがなかった！

私の唄う歌も口笛も種が尽きてしまったが、それでも森はまだまだ続いていた！

（こんなことがあるだろうか？）

私は不審をいだき始めた。道を間違えたりするはずはないのだった。この森はずっと入口から出口まで一本の道があるだけなのだから——。

（ではどうしたのだろうか？……おかしいぞ！……いや、そんなことを考えちゃいけない、気のせいかも知れないからな）

そんなふうに考えてはまた休んで、立ち止まったりしながら、な





お道のある通りに歩き進んでみたが、やっぱりまだまだ森はずっと先まで、目の届くかぎり続いているのだった。

しかももっと妙なことは……妙でないようで実に妙なことだ……もうとっくに——先ほどこの古樫の森へ入りかけた時日が暮れ初めていたので——古樫の中は暗くなっている頃なのに、それがいつまでたっても古樫の森の中は昼間のような明かるさが続いていることだった！

立ち止まって後を振り返ってみると、前の径と同じ格好の径がやはり、眼の届くかぎりに続いて、足跡もずっと続いてきていてそこには別に不思議はなかった。

それが私を勇気づけた。

（やっぱり気のせいだったぞ。この通りちゃんと足跡も道も自然のとおりなんだ……）

私は気を軽くすると、また粉雪の降り続く古樫の森を黙って歩き続けてみた。そのうち人にも遭うだろうからと考えているうちに、何だか径が、森の中の径がだんだんいっそう細くなるようで、私はまたすっかり体中が寒気に見舞われた。

そして径が細くなるにつれて左右の老樫が私の周囲に近くなったのだが、どの樫をみても変てこな枝ぶりで、眺めるほどにいっそう恐ろしくなった。

妙だと気がつき私はびくびくしながらも前進するよりなくなっていた。戻ることはもっと恐ろしくなりそうだし、そのうちにきっと出口に行き着くに違いないのだと勢い込んではみたが、細い径は今度はどんどん左へ廻り始めたのだ！……私は不可解と恐ろしさで気が変になりそうだった……ついにたまらなくなって（止めてくれ！）と声が咽喉まで出掛った時——そこまで早足で歩いていた足ははたと止まり、全身はそこへ棒のようにすくみ上ってしまった。

道が！……森の中の唯一の小径

がそこで尽きているのだ！……つなくも女の子の声がしたので、
いに私は古樫の森から出られなび上がってしまうほど私は驚い
なってしまったのだ！　しまった。
　迷うはずのない一本径で私は迷「この辺にあたいの手袋が一つ
わされた！　ちていなかったかい？」
　呆然とした私は、その場へすわ　私は恐る恐る、声のした方へ
り込んでしまった。いよいよこれり向いてみた――慎重に、用心
で駄目になるのかと生き心地は失く……
せ、次第に気が遠くなるような耳
鳴りを覚えたとき、身体が前へ倒　振り返ると、そこには眇の女
れるにつれて、両手を雪の中へ深子が一人立っていた。十二か三
く埋ずめてしまった。ぼんやりしらいのとしで白い頭巾と肩掛け
た眼であたりをもう一度見てみるつけており、着ている服も近頃
と、そんな時私のすぐ眼の前に白は田舎のお婆さんぐらいしか着
い小さな手袋が片一方落ちていないような旧式ないでたちだった
のに気がついたので、まさか？しかもその旧式の服までまっ白
と思いながらも、それを拾い上げったのだが……その眇の女の子
てみた。　私の顔をみるとニッ、と笑い、
　ところが、よく手にとってみる から非常に尖がった犬歯を二本
と、その手袋は指が四本しかない せた！
ものだった！　私はギョッとして　それからもっと私がぞくっと
思わず四本指の手袋をすぐ抛り投 した。やはり白い色だったのだ
げた。　そいつは三角に先端が尖ってお
　と、ちょうどその時、　り、しかも反り上がっている
「小父さん！」と背後で思いがけ　膝をぶるぶると震わせながらど
んな挨拶をしたものかとびくびく
していると、
「一体、小父さんはここで何をし
てるのさ？　もうじき日が暮れち
まうよ！」
　眇の女の子はそう尋ねた。
「私か、うん、私はそのな……」
　妙に口がこわばって思うように
しゃべれなかった。
「実は、なあにね、径に迷ってし
まっただけだよ」
「どこから来たんだい？」
　首を斜めにかまえて女の子はな
おも尋ねた。
「向うの方だよ」
　私はでたらめの方角を指して答
えた。
「向うって、どこさ？」
「向うって向うだよ。女の子には
わからないところさ」
「ふうん……向うからきたのかい。じゃあこれからどこへ行くのさ？」
「あっちの方へだがね」
「あっちって、どこなのさ？」

「うるさいな。あっちはつまり向こうじゃない、あっちだよ」

私はいよいよ白魔女に弄ばれてしまうと思ったので、眇の女の子に構わず一人で今来た径を引き返し始めた。

「これから一体どうするのだい？」

一緒に眇の女の子は私の後へ着いてくると後から問い続けたが、私は今度は相手にしなかった。

「今に日が暮れるから、そうすると山犬がたくさん出てくるよ」

「……」

「こわくないのかい？　小父さん」

「……」

「あたい、この森から出られる道順を知ってるよ」

それを聞くと私は立ち止まって振り返った。

「じゃあ、径を教えてもらおうか」

私がいうと眇の女の子はまた、大きな犬歯をみせてニッと笑った。

「本当に道を知っているのかね？」

「ああ、知っているよ。だけど小父さん、そうしたら一体あたいに何をくれる？」

「何でもやるよ！」咳き込むような声で私はそう答えた。

「何でもって、何をさ？」

「お前がほしいという物は何でもさ！」

「じゃあ、ね」

そこで女の子は舞い降りてくる雪を二つ三つ口で吹きながら、

「小父さんの家をあたいにくれるかい？」

「えっ？　家を！」

私は驚きのあまりそう叫んだ。

「家をだって！　それだけはだめだ。その他のものなら二つでも三つでもいいが……」

「嘘つきだよ、小父さんは！　たった今あたいに何でもくれるっていったんじゃないか！」

女の子は急に不気嫌になった。

「それならもう何にもいらないよ。そのかわり、道は教えてあげないからね！……一人で道をいつまでも探がしておいでよ」

「……」

「山犬は本当に出るからね。じゃさようなら、迷子の小父さん」

「ま、まちなよ、やっぱり道を教えてもらうよ。仕方がない、約束する。お前に私の家をやるよ！」

「本当だね？　じゃあ、小父さんの家はもらったよ。あたい小父さんの小さな家知っているよ。あの可愛い家を前からほしいと思っていたところだったんだよ……」

白い頭巾をかむった女の子は眇の眼を細めて嬉しそうに笑った。そうなると、実は本気で家をやるつもりはなかった私も急に後暗い物につきまとわれた。

「じゃあ、小父さん手を貸してごらん。そう、そうやって両眼をつむるんだよ、あたいが手を引いて森から出してあげるからね。だけど絶対に途中で眼を開けて景色をみたりしちゃだめだよ。どんなことがあってもね。

もし小父さんが途中で薄眼を開けたりしたら、あたいは小父さんの手を離してはぐれさしてしまうからね！　絶対にしっかり眼をつむっていて、途中の景色をみないと約束できれば……さあ、ついておいで！」

私は白い頭巾をかぶった女の子の命令通り眼を固くつむり、両手を前に差し出すと、女の子にひかれる通りについて歩いた。

道は長かった。眼を閉じているのでどこを歩いているのかはわからなかったが、しかしどうも同じところをただ、ぐるぐるとまわっているような様子なので、私はすっかり変な気持ちになり、一度だけ眼を開けてみたくなった。

その上、右や左で人の笑い声や、動物の鋭い鳴き声がすぐ私の近く——足元や、首筋——などできこえ、はっとしてあやうく眼を開きそうになったことが何度もあった。

そして私の心もすっかりこの妙な白頭巾の女の子を信用したわけではなかった。どうもこんなこと



をさせて私の手をひいているのが不安に感ぜられて恐ろしかった。きっと私をたぶらかしてもっと森の奥へ連れ込もうとしているのじゃないだろうか？　と、そう考えると、そう考えるといよいよ何が何でも自分の眼を開けてあたりを確かめてみたいと思い立った。ほんの一瞥だ、見つかりっこあるまいと、まさに冒険にかかろうとしたとき、女の子が私の手を離した。

「もう眼を開けてもいいよ。小父さん！」

その声と同時に私が自分の眼を開くと、そこはやはり前と同じ森の中だった！

「ここはさっきのところじゃないか?!」

私はすっかり腹を立てると女の子をどなりつけた。

「さっきのところだって？　ここが！」

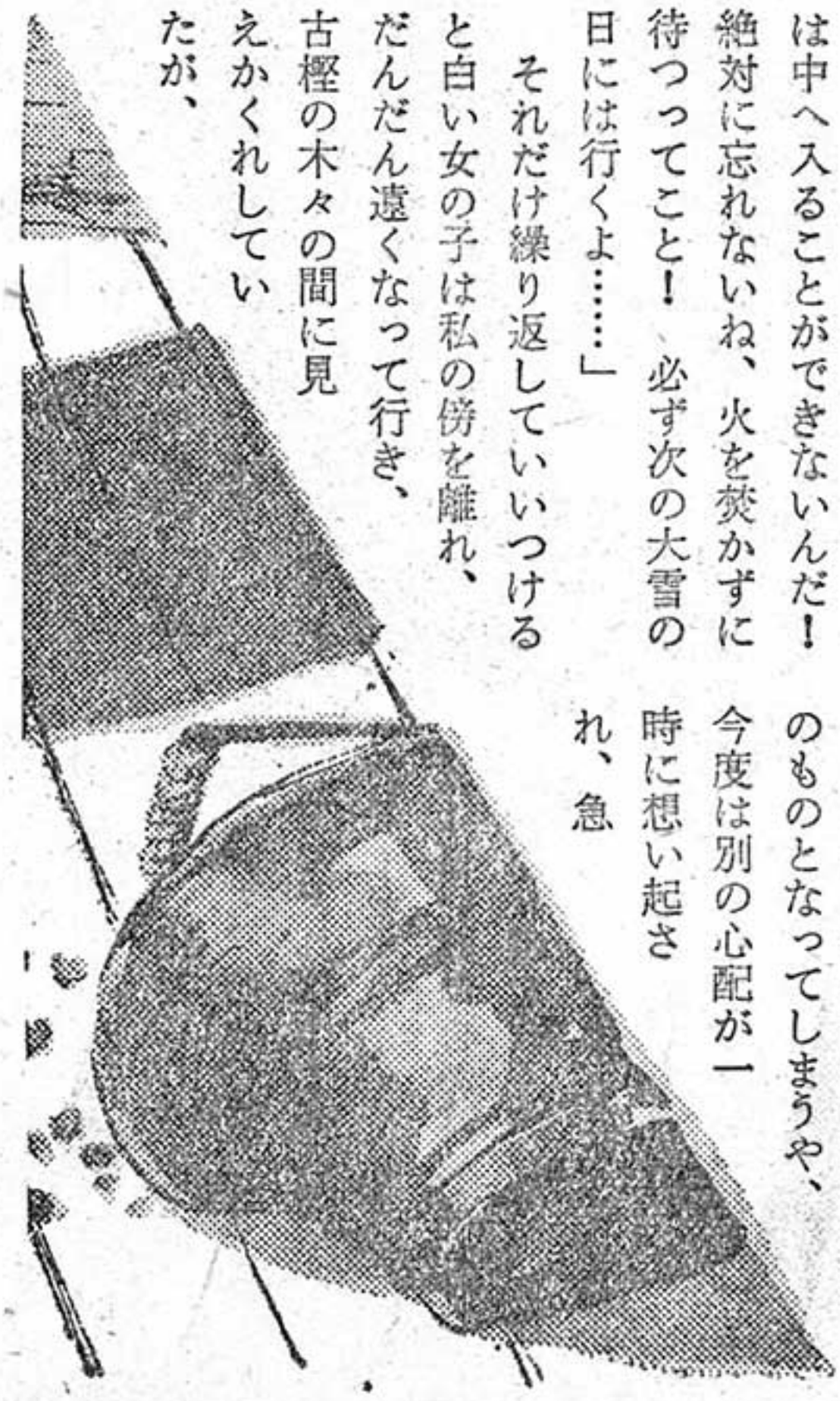
砂の女の子は大笑いをした。

「あそこをごらんよ！　ほら、出口が見えないかい？」

女の子の指さす方を見るといつなんと、なるほどそこには百ヤードばかり離れた森の出口が見えた！

「これで私の約束は終りだよ。ここから小父さんは一人で出られるものね。それじゃあたいは小父さんの可愛い家をこの次の大雪が降ったらもらいに行くからね。その日は小父さん、家の中でストーブを焚かないで待っておくれよ。家の中で火が燃えているとあたいは中へ入ることができないんだ！絶対に忘れないね、火を焚かずに待つってこと！　必ず次の大雪の日には行くよ……」

それだけ繰り返していいつけると白い女の子は私の傍を離れ、だんだん遠くなって行き、古樫の木々の間に見えかくれしていたが、



やがてそれもすっかり見えなくなった。

教えられた出口から私が森の外へ出ると、外はもう真暗だった。しかもまだ吹雪はピュウピュウと恐ろしい音をあげ、すさまじい勢いをみせては駈けめぐっていた。

やっとのことで隣りの町へ着き用事をすませると帰り途は医者の馬車に便乗させてもらって帰って来た。

そんなふうにして私は無事に自分の家へ帰り着くことができたのであるが、安全がすっかり自分のものとなってしまうや、今度は別の心配が一時に想い起され、急

にそれは大きくなりいつものように睡ることさえできなかった。

（えらいことを約束してしまったぞ！）

それはあの眇の女の子に自分の家をやると古樫の森で約束したことであった。

（まったく、正気じゃなかった！この家をやってしまったら一体自分は次の日からどこへ寝泊りするつもりだったんだ？）

考えれば考えるほどに自分が情けなくなって来た。私は心で存分に自分を救ってくれた眇の女の子を罵倒した。

（あの憎たらしい小悪魔奴！……

めっかちの顔があの犬歯を見せて笑った時に小悪魔だとわかったんだが……本気でやってくるつもりなんだろうか？　……本当にしょうに！）

しかしいくら考えてみたところで今さら、取り返しがつくはずもないので、とどのつまりは諦めるより仕方がなかった。

（大雪が降ったら降った時のことだ……）

そう成行に任せることにきめ、その夜はそれっきり睡ってしまった。

それから何日過ぎたものか、はっきりは覚えていないが、その日は確かに日曜日だった。

朝から暖かなよいお天気だったので、今まで何日も家の中で閉じこもっていた私は、久しぶりの運動に喜んで戸外へ出た。

が、それがあまりにも上等な陽ざしに誘われてついつい私は遠出をしてしまった。

久しぶりに町の空気も吸い、短かい日をせいいっぱいに楽しむ気分だった。私だけではない。町を歩いている人の顔はどれもそんなように、多少の差はあれ、見うけられていた。

ところがままならぬものは人の運と空模様である。今まであれほど明るく晴れていた空が夕方近くになるとみるみるうちに全天灰色に変わりはて、風が北に向きを変えたとなるやちらちらと白いものが舞い始め出した。

だれもがこの突然に崩れた天候に驚いたが、白い頭巾の女の子との約束を思い出した私は一ぺんに蒼くなった。とりわけ大急ぎで、雪魔女のやってくる前に帰っていなければと思い、自分の小さな家へ駈けつけた。

家に帰りつくや否や、外は一どきに吹雪がやって来た。たちまち窓は吹きつけられる雪でもって外がのぞけないほどに白く塗りつぶされ、家の中も急に冷えて寒くなった。

時刻はもう、晴れていても黄昏にかかるころだったので、吹雪を一段と凄味が加わったように感じさせた。

私は家の中で寒さに震えながらこれはきっと、今夜こそ、あの雪魔女が約束通りにやってくるに相違ないと思い、恐ろしさでいても立ってもいられなかった。

だんだん暗くなる家の中でどうしたものかと私はあせったが、急に意を決するとまず入口へ飛んで行った。開けられないように錠を掛け、窓にも筋交(すじかい)を打ちつけることにした。それが一応終ると次に私はストーブに火を入れた。〝ストーブを焚かないで待っていておくれ〟といった言葉に逆らって、はち切れるほど私は薪をストーブの中へ詰め込んだ。

簡単に自分の家をとられたりしてはたまったものじゃない。私はどんどんストーブを焚いて、白い女の子が一歩も家の中へ入れないように、ストーブの釜をできるだけ早く真赤にしておいた。

煙突まで赤くなるほど火を焚いたことは焚いたのだが、今日はまたよりによって何と寒い夜なものか、いっこうに私の家は温たまらないのだ！　これでもか、これでもかと私は見る見るうちに薪を減らしてしまった。

そんなふうに必死になって火を焚いていたが、いいあんばいに白い女の子はなかなかやって来なかった。こんなひどい吹雪なのであの古樫の森から出て来られないのだろうと、考えてもみた。

（しかしいくら薪を焚いても、どうしてこう寒くてやりきれないものかな？）

何だか家の中で火にあたっている感じがさっぱり身につかないのだから妙だった。

（隙間から風が入ってきているのかも知れない！）

私は立ちあがると隙間風の入って来そうなところを探し出そうとして一回り家を調べて見た。

しかし風の漏れるようなところ

も見つからないので、腑に落ちぬまま、ストーブの所へ戻り、しばらく考えてみた。

雪を蹴ちらすように凄い風は相変らず私の家の入口をガタガタと痛めつけていたが、ふと、私はその時風が扉を鳴らす音に混って誰かが外で扉を弱く叩いている音を聞いた！

はっとして、そのまま耳をすましていると、すぐにまた、今度は三つ続いて聞こえて来た！

（来た！）思わず私は腰を浮かせ固唾を飲み下した。

（とうとう、ここまでやって来たんだ！）

ポーカー（火掻き棒）を摑むや、私はいっそう火の燃え具合をよくさせた。それからは何の音もたてぬようにそこでじっとして、ただ耳だけを澄ませた。

五分ばかり、入口の戸は外から叩かれ通しだった。私は息を殺して手にはしっかりとポーカーを握りしめていた。

十分ばかりしてノックの音が急に止んだ。

私はほっと安心して、肩から力を一ぺんに抜くと、間違いなく救われた気になった。

ところがそれはあまりにも早合点だった。私は窓があったことをすっかり忘れていた……私が振り返った時、忘れもしないあの、四本指の小さな手袋が——窓を塗りつぶした雪を拭っていた！

それをみた私は胆をつぶしてしまった。

窓わくの一つをきれいに拭い去ると、そこへガラス越しに白頭巾をかぶった顔が現われた！

またたきもせずに呆然と私はそのガラス越しに現われた顔をみつめ、ポーカーをとり落したのさえ気がつかなかった。

「いれてよう！　小父さん、ほら！　あたいだよう……」

弱々しい声が窓の向うから聞こえた。

しかし窓の外から覗いた白い女の子の顔は、すぐおぼろにかすんでぼうっとなった。吹雪でガラスがすぐに雪を溜めてしまったからだ。

「あたいだよう！　火を消して中へ入れておくれ。……約束だよ！」

私は進退きわまってぶるぶる震え出した。雪を拭って再び眇の女の子はそこへ顔を現わした。一方の眼で私を、一方の眼でストーブの火を見ているようだった。

「あたいを入れてよう！　あたいを入れておくれよう！……小父さんてば！　あたいが来たんだよう！」

「知らんよ！　お前みたいなめっかちの子は。まったく、金輪際想像もしたことのない顔だ！……さあ、早いとこ古樫のあの森へ帰るこった！」

私は中からできるかぎりの大きな声でそうどなりつけた。

「そうだよ！　その古樫の森から来たんだよう、小父さん、あたいだよう。よく見ておくれよ！　ほら！……ほらあたいなんだよう！」

そう叫びながら眇の女の子はガラスへ自分の顔を押しつけ、手でとんとんと窓を叩いた。

「小父さんは森であたいに何でもくれるっていったじゃないか！　早く火を消してあたいを入れておくれよう！」

そう女の子が夢中になって叫ぶのを聞くと、私は顔色を失なった。

「とっとと失せるんだ！　知らんといったら絶対に知らん！　お前の顔は初めてだ。舌を抜かれたって！」

唇を震わせながらせい一杯私はそう叫ぶと、もう何にも聞かないよう指で両耳をふさいだ。

それから夢中になってストーブへ薪をくべ込んだ。

しかし外では白い頭巾の女の子がいつまでたっても窓を叩き、私を一生懸命に呼ばわった。

そのうち窓ガラスをカリカリと引っ掻いたり、ゆすったりし始めた。

「何年そこでそうわめいていたって、絶対に入れないぞ！　とんでもないこった……このめっかちめが！　なれなれしくも、なんてずうずうしいことをいうんだ。早く樫の森へひっこんでしまえ！」

そうどなってやったが、それでも外の女の子は少しも諦めず、相変らずカリカリと窓ガラスを掻いていた。

火さえ焚いておけば、いくら外で家を取りに来た女の子が泣きわめこうと、まず安全である。

私は火勢が少しも衰えたりしないよう、ストーブが音をたてるほど火を燃やし続けた。

ところがそのうちには諦めてしまうだろうと思っていたのは誤まりで、もうストーブに焚く薪が尽きようとしているのに、まだ外の女の子は眇の眼でじっと中を窺い、ぶるぶる震えながら窓にへばり着いていた。

戸外ではまだ吹雪が猛りどうしなので、次第に私は心細く感じるようになってきた。

そしてとうとう薪が一本もなくなったとき、それまでガラス越しに中を覗いていた眇の白い女の子は尖がった犬歯を見せてニッと笑った。

それを見て私はぞくっと背筋を冷やされた！　いよいよ頼りになる物が尽き、敗色濃くなると前後のことも考えず、いきなり椅子を叩き毀してそれをストーブの中へ投げ込んだ。

しかしそれもほんの束の間で、ストーブはすぐに椅子を消化すると色を黒く変え始めた。私はためらうことなく次に机を打ちこわして薪にした。

今度は椅子よりも長かったが、やがてそれも最後の一片までストーヴの中へ消えてしまった。

そんなふうにして次から次へ、私は燃えるものなら何でも惜しまずストーブの口へ押し込み続けてやった。

しかしそれにも限りはあった。ついには家の中に、たった一つを除いては何にも燃す物がなくなってしまった。私は蒼くなった。一つというのは窓へはすかいに打ちつけた棒のことである。しかし躊躇したのも一瞬で、すぐに私はその棒をも取りはずして薪にしてしまった。

最後と頼むその薪はあっけなかった。見る間に全部燃え尽きてしまい、ストーブは色を黒く変え、どんどん今度は冷え始めて行った

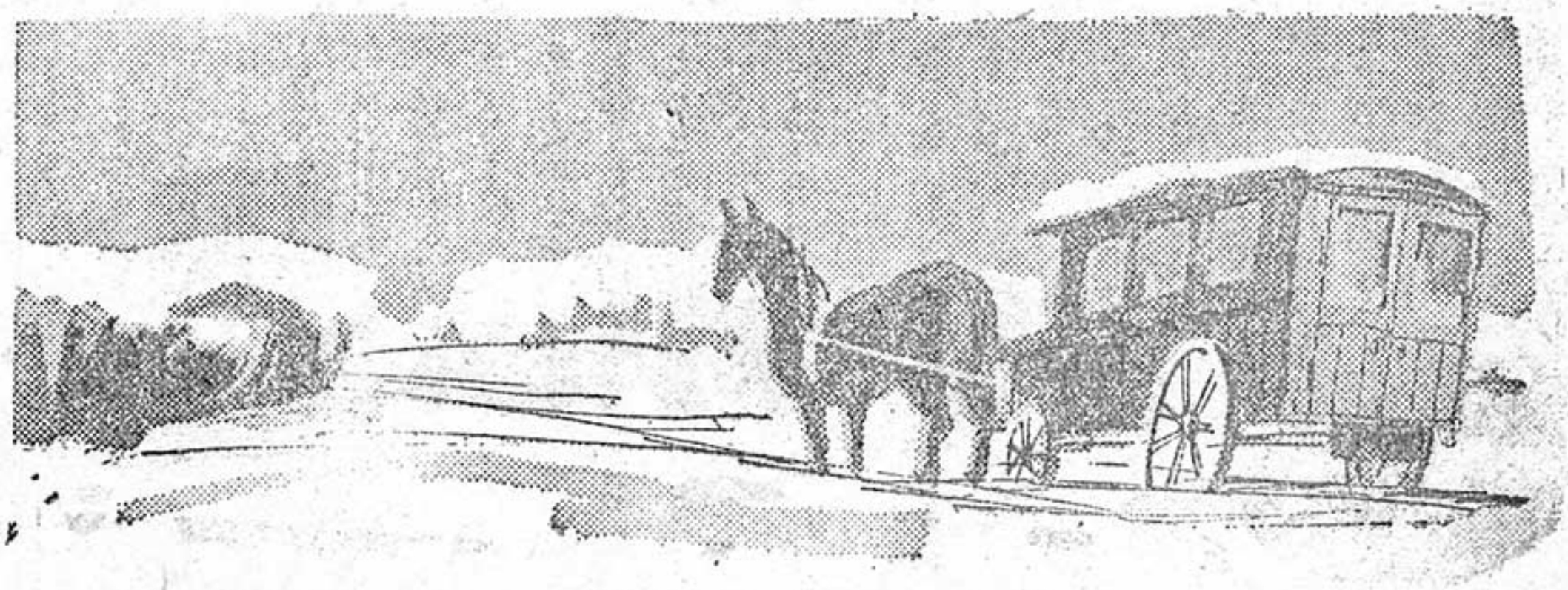
「あっはっはははは」

眇の女の子は四本指の手袋で窓を叩きながら甲高い笑い声をあげた。

「小父さん！　あたい入ってもいいんだね？」

私はそれに何とも答えなかった急に家の中が暗くなると、前よりいっそう冷えて来て私はガタガタ震え出した。

「じゃあ、小父さん。約束通りにあたい小父さんのこの可愛いい家をもらって行くよ……そうら！」



その声が終るか終らないうち、ばあん、という音がして窓ガラスが吹き飛ばされた。

続いて、うなりとともに吹雪が家の中へ飛び込み、私はあっと叫ぶ間もなくストーブの足元へ叩きつけられた。あわててすぐ起き上ろうと、私は力のかぎりを振りしぼり、腕と膝とを……いや、もうだめだった。どこをどう打ちつけてしまったのか、私はまったく起き上がることができなかった！

窓ガラスの吹き飛ばされたうつろな窓からは、それからますます勢いよく雪と風とが飛び込んできて、容赦なく私を襲いかかった。ぐるぐると雪の子達は家の中で廻り、あたりかまわず飛び廻った。

やがて柱も、壁も、その他すべてが真白くなり、私は後から後から止めどもなく乱入する雪に埋もれてしまうばかりだった。

「助けてくれえ！」

私は大声をあげてそう叫んだ。

「あっ、はっ、はっはっはっ、はっ……」

私の叫び声に答えて甲高い声が起った。それは私が家をやると約束した白い頭巾の——今まで外にいたあの女の子の声だった。

「あっ、た、頼む。助けてくれ！私だ、ほ、ほら、お前と森の中で約束した小父さんだよ！　あのと



きの！　早く助けてくれ！」
「はっはっはっ、いやだよ。助けてやらないよ小父さんが早く逃げなかったからいけないんじゃないか！　あたいのせいじゃないね。……はっはっは」
「悪かった！　この通り何回でもあやまるから助けてくれ！　頼む私を助けてくれ！」
「あたいが小父さんを助けてあげるんだって！　約束で一回助けあげたじゃないか！　それであたいはこの家をもらったのさ。そうじゃなかったかい？　もう約束はすんじゃったんだよ！　この上また小父さんを助けてあげるのなら、またお礼をもらわなくちゃあね」
「やるよ！　何でも好きな物をやるよ！　何でも好きなものをやるから早く助けてくれ！」
　私は必死になって頼み込んだ。
あの眇の女の子は声だけで姿が見えなかったが、吹雪が窓から入ってくる時、それが女の子の声になって家中一ぱいに響きわたった。
「『何でもやる』だって？　あっはっはっはっ……あっはっはっはっはっはは。そんなこといったってだめだよ。もう小父さんは何にも持っていないじゃないか！……一体何を持っているつもりなんだい」
「……」
「小父さんは間が悪かったんだ。諦めた方がいいよ。……いや諦めるより仕方がないんだよ！」
「ま、待ってくれ、この服をやる！　このズボンもだ！　それから靴もやるよ！　それから……」
「いやだよ！　あたいはそんなものちっともほしくもないんだ！　あたいはこの可愛いい家だけでたくさんだよ」
「じゃあ、私は一体どうなるんだ?!　お前が助けてくれなけりゃ私はこのまま雪に埋って凍死してしまうじゃないか！　お願いだ…もう一度だけ助けてくれ！」
「きっとそうなるね。はっはっはっはっ、やっぱり小父さんは間が悪かったんだよ。だけどあたいはちゃんと小父さんのこの家はもらったからね。小父さんがいつ凍死しようともういっこう平気だよ。……だから小父さんはとっとと自分一人で雪に埋まることさ。あっはっはっはっはっ」
「待って！……待ってくれ！　頼む！　もう一度だけ、もう一度だけでいいんだ、私を助けてくれ！　助けてくれ！」
　それから白頭巾の女の子の声は消え、再び吹雪のうなる音が激しく雪を、またこわれた窓から送り込んで来た！
「助けてくれ！　助けてくれ！」
　私は夢中になって叫び続けた。と、その時何かが私を摑むと激しく私の身体を揺り動かした！
「旦那！……旦那！　しっかりなせえよ、旦那ったら！」
　ゆり起されて私は顔をあげるとぼんやりと周囲を見渡した。ところがよく見るとそこは二本の樫の根元だった!?
「一体どうしたっていうんです？
「止みましたよ。もう大分前にね。吹雪は？」
「五時に少し前頃でしょう」
「ところでもう何時頃になりましょうかな？」
　と、顔を赤らめて尋ねた。
「五時に少し前頃でしょう」
　私を抱き起したのはよく私が乗る乗合馬車の馭者だった。
　私は立ち上がると帽子で服に着いた雪を払って馭者へ礼をいい、
「ところでもう何時頃になりましょうかな？」
　と、顔を赤らめて尋ねた。
「五時に少し前頃でしょう」
「吹雪は？」
「止みましたよ。もう大分前にね。だから私の馬車は通りかかったのです。しかしあなたも無事でよかった。実際、あの悲鳴をきいたときはずいぶん驚かされてね！　てっきり犯罪かと思って胸踊らせながらでしたよ。お客さん方も目を丸くしましたぜ！　馬車にお乗りで？　あなた」
「もちろんだよ！　君。たった今私は一人で歩いて行ったためにあの古樫の森でひどい目に遭わされたんだ。二度と歩いて行けるものかね！」

続・隠密覚書

忍び夜秘帖

大江戸の闇に蠢めく情痴と不気味な謎
を追う公儀隠密鳴子善四郎の大活躍！

島本春雄 著
喜多玲子 装幀

千鶴の乱れ髪を引っ摑んで、ぐいと覗き穴に押しつける。

嫌応なしに、千鶴は覗き穴から向うを見た。

「――ア！」

そこは、一つの地獄図絵といってよかった。

男がいる。女がいる。

全裸の女、湯文字一枚の女、長襦袢のしどけない女……青畳の上を蛇のように、くねくね這いずり廻り、畳に爪を立て、掻きむしり、口々に何やら言っている。

「お茶を……」

男は一人。五十年配の脂切ったのがこれは白綸子の寝間着一枚重ねの緋褥の上にふんぞり返ってニタニタ笑っているのだ。

「フフフ、お茶が欲しいか。欲しい奴はおれの足の裏をなめろ」

どたりと毛脛を突き出した。

千鶴は現実にはっきりと眺めながらすぐには信じられないような事態が起った。

女たちが、争って男の汚ない足に殺到したのである。足は一本、女は数えてみると全部で十一人……醜い、奇妙な、おぞましい争いが始まった。

男の足をなめようと争う女……これが信じられようか。

摑み合う者、ひっぱたく者、叫ぶ者、泣く者、一人が押しのけて、男の足の裏を、赤い舌でペロペロなめた。――と、たちまち別の一人に、黒髪を摑まれて引きずりのけられる。

罵しる声……これが女の声であろうか。汗と女の体臭がムンムンたちこめて、千鶴の鼻に迫る。

「今、なめたのは、お浜――ふふ、あとで一杯くれてやる。あのお茶をな。ふふふ……次はそうじゃ。カンカンノウを踊って見い。一番うまく踊れた者に、望みのお茶をくれてやるぞ」

すると、われがちに、立ちあがって踊り出すのだ。全裸の女、湯文字一枚の女、長襦袢の女……手を振り腰を振り、足をあげ……拡げ、黒髪が乳房が……統制も何もない、狂気の乱舞である。

浅間しい。余りにも浅間しい地獄図。

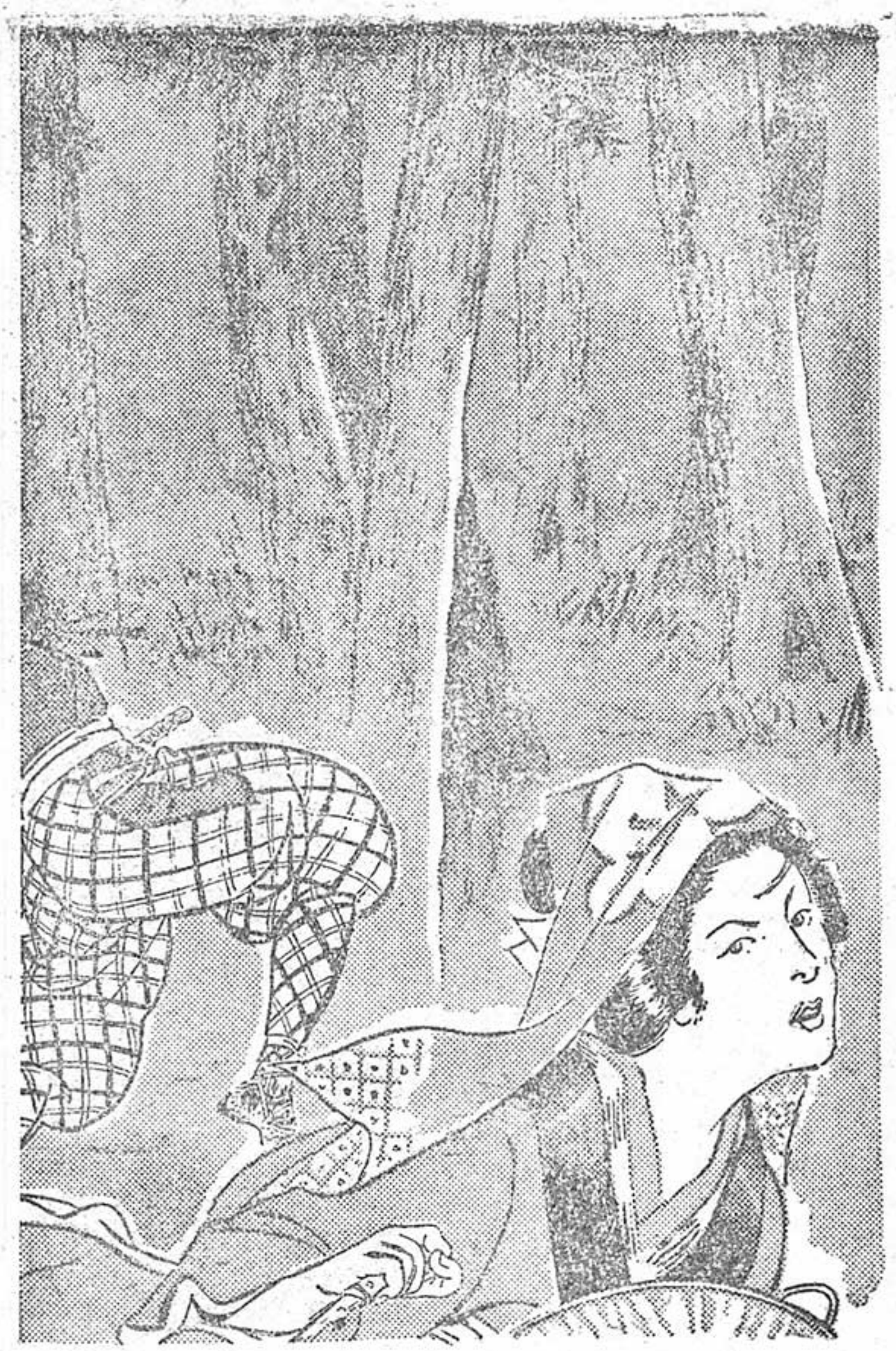
定価二六〇円・送料四〇円
あまとりあ社・発行

女密使受難

伝奇 狒々族 呪縛

★半人半獣の怪部族に捕われたお京は容赦なく密書を探る手に身をもんだ！

水沢雪夫 画・灘 五郎



闇の白刃

雲の切れ間から、いざよいの月が蒼白い光を落しています。右も左もしんしんと茂った杉木立、胸を突くような山坂道が曲りくねって見通しもきかず、月光の中にシンと静まり返っている深山でした。

信州伊那谷、天龍峡の間道です。暗い中を急ぎ足にやって来る一人の人影が、ふと、夜の山道にピタッと足を止めました。

細い竹杖を右手に突き、あねさんかぶりの手拭、夜目にも白い顔がキリッと唇を結び、左右の木立をすばやく見廻します。かいがいしい手甲脚胖の旅姿ながら、まだ若い、匂うような娘の素顔でした。

娘は左右に目をくばりながら、一足あとへ下ると、持っていた杖を無雑作に横へ捨てました。



「どなた？　そこにかくれているのは？」

静かに声をかけながら、右手は帯の下の懐剣の柄へかかります。

「出ておいで。あたしを待伏せして、何か御用なんでしょう。二人……三人かい、男らしくサッサと面を出すがいいよ」

娘の口からこれはまた伝法な巻舌、その言葉が終るか終らないかに、左右の木立の闇がゆれました。

左から二ツ、右から一ツ……三人の黒い人影が茂みの中からゆらりと現れたのです。

「さすがだの、お京」

真中の一人が、頭巾の下から低く呼びかけました。

「おや、あたしの名を御存じ。してみると、ただの山賊や追剝ではなさそうですね」

「その通りだ。いうまでもなく江戸家老鍵山伝兵衛様の手の者。そちの持っている連判状一巻が所望だ。素直に進判状を渡しなさい」

三人はぐるりと娘を取囲んで、詰め寄ります。

「連判状ですって、さあ、何の事かしら」

「白ッぱくれるな。そちの兄長沢英三郎が御家老屋敷から盗み出した連判状、そちが持って国表の殿のお目にかけるべく江戸表を発足した――と、御家老よりの急使で承知しておる。そのためにそちの来るのを待伏せしていたのだ。素直に連判状を渡さねば斬って捨てるぞ」

「おやおや」

威丈高の三人を見廻して、娘は大胆に微笑むと、

「何のことやら、あたしにはさッぱり。あたしが江戸を立ったのはそんな面倒な次第じゃありません。あたしはね、兄の屋敷に仲間奉公している膳平という男にぞッこん参って、恥ずかしいけど付文までして言寄ったのを、運悪く兄に見咎められ、不義はお家の御法度、こんなあばずれの妹を持てそうでなくてもあましていたところだから、兄に屋敷を追出されて、仕方なくお国表の親戚を頼りにやっとここまでたどりついたというわけなんですよ」

「ええ、ぬけぬけと白々しい。あくまで渡さぬとあらばやむを得ん。斬って捨てて連判状を取上げるまでだ。お京、覚悟するがいい！」

正面の敵が腰をひねって抜討ち一閃、銀光がぱッと娘の頭上に曜りました。

「ええッ」

「う、ああッ！」

裂帛の気合と悲鳴が交錯して、バサッと鈍い響。倒れる黒影を越えて、しなやかな姿が飛ぶように彼方へ走りました。

「おおッ」

「しまッた！」

驚いたのは左右の二人でした。抜討をかけた男が逆に血しぶきを吹いてのけぞるのと、娘が懐剣を閃かして右手の木立へかけこむのが一瞬の間に視界を過ぎたのです。

「待てッ、お京！」

二人はあわててお京を追って木立へ飛びこみます。追う影、追われる影が、深い杉木立の闇の中へ見る見る吸い込まれるように消えてゆきました。

あとには、胸の急所を刺された男の死体、それに娘の捨てていった竹杖が月光の下に気味わるく横たえられているばかり……。

と、さっき、娘のやって来た方角から忙しく小走りに近寄る足音がして、また一人、別の男があたふたと姿を現わします。

これは紺看板に法被姿、木刀を腰にさした仲間風、同じ旅姿ながら、ひどくあわてた様子で足も地につきません。

「はあて、いま、たしかにお嬢さまの名を呼んだ人声がしたっけ。お嬢さまが誰かに追われているんじゃ……ああッ！」

倒れていた男の死体につまずきそうになって飛退きながら、

「こりゃあ変だぞ、お嬢さまがこんな夜道をかけてまでお急ぎなさることといい、この男の死骸といい……はて、おらあとんでもない考え違いをしていたのかなア……」

うろうろあたりを見廻しながら仲間は一人言に呟きます。

「おらア、お嬢さまが、おれに付文までしてくださって、おれを口説いてくださったもんだから、すっかり真に受けて、お嬢さま恋しいと思ったんだ。お嬢さまが旦那さまのお咎めを受けて、お屋敷を追い出される、江戸を御出立になる——おらアお嬢さまお痛わしさに、無我夢中であとを申訳なさ、お慕わしさに、無我夢中であとを追って江戸を飛び出し、お嬢さまを追っかけてここまで来たんだが、おかしいなア、ひょっとすると、お嬢さまが江戸をお立ちになったのかも知れねえなア……」

きょろきょろ見廻している眼がふと、そこに落ちていた竹の杖に止りました。

膳平、近づいて杖を拾い上げます。細い竹杖だが、元の所に白い布がぐるぐる巻きつけてあり、よく見ると、竹の端にかすかな割目が入っていました。

もっとよく調べて見ようとする所へ、杉木立の中から人声と足音がこちらへ近づいて来る気配。膳平、はっと反対側の大木の蔭へ身をひそめました。

木立の中から姿を現わしたのは、さっきお京を追っていった二人でした。

「恐ろしく身の軽い奴だ。無念だが見失ってしまったのう、北島氏」

「うむ、さすがは藩中第一の使い手、長沢英三郎の妹だけある。組頭の抜討をかわして懐剣で一撃した手練、敵ながら天晴れな早業だったぞ」

「左様、しかし、われわれが見逃しても、狒々族の眼はくらます事はできまい。御家老から白狒々族にも使者を立て、この伊那谷の間道という間道は残らず見張りをつけてあるはずだ」

「それじゃ。いかなお京も、山中ではあの獣のような一族の網を逃れる術はあるまい。早野氏、約束の合図は何刻であったかな」

「明け六ツ、狒々が嶺の頂きからのろしを上げるはずじゃ。組頭に宛てた手紙にそう記してあったのを見た覚えがある」

「そうか、何にしても、今夜はひとまず引上げじゃ。万事は明朝の合図を待ってからに致そうよ」

声高に話し合いながら、二人の影は山道の立の中から人声と足音がこちらへ近づいて来彼方へ消え去ります。大木の蔭から姿を現わ

した膳平は不安そうに彼等を見送って、それからぎゅうっと両の拳を握りました。

「そうかッ、畜生。おらア……お嬢……お京のあまにだまされたんだッ。江戸の屋敷を飛び出す口実に、好いてもいないおれに付文をして、畜生ッ、偽のいろごとで、おれを、おれをだましゃがったんだ！」

狒々族

「ふふ、どうやらあの武士たちは私を見失ったらしい、危いところだったけれど、まさか、あの竹杖の中に、めざす密書が仕込んであろうとは、誰にもわからないはず。そろそろ行って、杖を拾って来ようかしら」

木立の奥では、お京がゆっくり、元の場所の方へ歩きながら一人言でした。

「ここさえ切り抜ければ、飯田のお城下まであと一息。明日にも、あの連判状をお殿様のお目にかけ、お家騒動のもとになる悪者共をなんとかしなくては……」

お京の白い頬には楽しげな微笑がひろがります。

「お家騒動さえ片づいたら、江戸へ戻ってお兄様のお屋敷へ帰るんだ。あたしには武家のお長屋なんか窮屈で仕方がないんだけれど。まア仕様がない。そうそう、それに膳平には気の毒なことをしてしまった、お家のためとは言いながら、嘘の付文やら口説やらであの男をだまし、屋敷を追い出される口実に使ったんだから……。お兄様も人が悪い。いくら人眼をごまかす苦肉の計略にしても膳平にはすまなかった――」

歩いていた彼女の頭上で、その時キイーッとけたたましい獣のような声がひびきました。

思わずはっとして上を見ると、高い杉の木立の上に、黒い影がゆらりと動きました。

キイーッ。

キイーッ。

あちら、こちらから、答えるかの

ような声が呼び交します。ゆらり、ゆらり、ゆらり、と頭上の枝から枝へ、どこからともなく現われた影が、八方から彼女の頭上へ迫って来る様子――。

「あッ、狒々……族！」

さすがのお京もぎょっと顔色を失って立ちすくんでしまいました。

甲州から信州一帯にかけて、狒々族という山窩の一族が住んでいました。その祖先は武田信玄の家中の武士たちとかいわれます。徳川の世には、人里はなれて住みかくれ、武田の残党を追究する徳川方の目をくらますために、猿や、狒々や、その他獣の皮を身にまとって狒々族と呼ばれて、深山の中に潜んでいました。彼等はつねに獣も同然の兇暴俊敏さで山中を神出鬼没、人里を襲っては掠奪、放火、殺りく、残虐の限りを尽しては引上げてゆく。世にも恐ろしい半人半獣の怪部族といわれていました。

お京が顔色を変えたのも無理はない。この一族に見つかって無事に逃れられた者は一人もないのです。

次の瞬間、彼女はさっと地を蹴ってその場を走り出しました。が――

キイーッ。

一際甲高い叫びと共に、頭の上から一すじの長い綱が飛んで来て、彼女の足にくるくるッとからみついたのです。

「あッ」

前のめりに倒れたお京の、起き上ろうとする背中へ、黒い影がひらりひらりと飛び降りて折り重なって来ました。

さすがの彼女も身をもむばかり、気がついた時には手足をがんじがらめにされて、彼等の手にかつぎ上げられ、山の中を奥から奥へと運ばれてゆく自分を見出していました。

やがて――

木立を抜け切った屋根伝い、小高い一つの嶺の頂きに赤々と燃えるかがり火を囲んで、獣の皮を身にまとった男女ばかり、中に一ごめいている場所へ出ました。ふふ、いい子だねえ。若い娘の肌を調べるのは悪うないものじゃ」

「ふむ、大方、肌身深くかくしてあるのだろう。よし、わしが調べてみよう。娘、こちらへ来るがいい。ふふ、いい子だねえ。若い娘の肌を調べるのは悪うないものじゃ」

老婆はお京を引立てると、自分で縄尻を取って祠の扉を開け、彼女を堂の中へつれこんで行きました。

落し穴

「これ、娘、密書をどこへかくしたのじゃ。申せ、申さぬか。ええ、申さぬとあらば……」

ぴしッと鋭い鞭の音がひびき、同時にうら老婆の姿でした。

「おお、御苦労だったの。お京という娘を捕えて参ったかや」

「えい、頭、これがその娘で」

かついで来た一同はお京を地面へころがしながら得意そうに答えました。

「よし、よし、あとでたんまり褒美は出そうよ。まず、何よりも先に密書を取り上げてしまおう。娘の肌を改めて見やれ」

「えい」

男達が寄ってたかってお京のふところを探り、帯の下、袖の中などを改めます。

「はて、ないぞ。頭、どこにも見つからねえが――」

「ふむ、大方、肌身深くかくしてあるのだろう。よし、わしが調べてみよう。娘、こちらへ来るがいい。ふふ、いい子だねえ。若い娘の肌を調べるのは悪うないものじゃ」

老婆はお京を引立てると、自分で縄尻を取って祠の扉を開け、彼女を堂の中へつれこんで行きました。

ーんと低く、唇を割る切ないうめきが堂の中にこもりました。

一本の燭台の光が、狭い、すすけた堂内を薄明るく照し出しています。

巫女の老婆は細い竹鞭を手に、堂の真中に立ちはだかっていました。

前に引据えられているのはお京。老婆の容赦ない責折檻を浴びているのでした。

高手小手に縛られたまま、着物は無残に裂かれてむしり取られ、ほとんど裸も同様の姿でした。帯は解かれ、裾は乱れ、襟元もはだけたまま、真白な胸や背や腰や腹部など半ば露わな肌の上に、鞭の跡が幾条も赤く走って責苦の程を物語ります。

「強情を張らずと、白状してしまえ。何ほどそなたが強情でも、言わせずにはおかぬ。この狒々族の恐ろしさを思い知らせてくれるわ」

足をふみ鳴らした老婆が、にくにくしげにお京につかみかかろうとした時でした。

「頭、頭ッ！」

祠の外からけたたましい手下の叫びです。

「何事じゃ？」

「客人が来ただぞ。密書のありかを知っているという客人が、頭に密書を渡したいといってたずねて来たぞ」

「なに」

老婆は意外の知らせに目を輝かして扉へ向直りました。

「それは願ってもない幸いよの。よい、すぐここへ通してくれたら、そなただけは免じて、すぐに許して帰してやろうじゃ、それとも、まだ」

「えい」

ギイッと扉が外から押開けられる。外の暗がりに、三人の手下に案内されて、一つの影が無気味そうに、おずおずと祠の中へふみこんで来ました。

「あッ、お前は！」

その刹那、引据えられていたお京の口から驚愕の叫びが口をついて出ました。

「ふッふ、お京さん、いいお姿でございますねえ。おれだ、いかにも膳平さ。偽の恋とも知らず、お前さんの道具に使われながらお前さんの恐ろしさを思い知らせてくれるわ」を飛び出すことを忘れ切れず、あとを追ってお長屋おれを、阿呆の膳平だ。よくも、ったなアまし手下の叫びです。つけながら膳平はせせら笑います。

げますぜ。今、そのお礼をたんまりして差上

「膳平と」

右手に持った竹の杖をお京の目の前へ見せ

老婆が、その密書はどこにあるのか」

「おお、その密書のことだが、密書を渡すのはいいがてたずねて来たぞ」と横合から言います。

その代り、この娘を、このまお

血祭りに上げるばかりに――うふふ、驚いたかの。なんの、恐がるには及ばん。そなたさえ快く連判状を渡してくれたら、そなただけは、その美しい肌にすことにしよう。どうじゃ、それとも、まだ強情を張って、この

てはなぶり殺しの目

お京、膝を折って

をかんで答えません

けた肩が波打って、

る姿でした。

「ウーム、まだ申さ

て優しく言って聞か

もう聞くまい、この

々族の恐ろしさを思

足をふみ鳴らした

お京につかみかかろ

「頭、頭ッ！」

祠の外からけたた

「何事じゃ？」

「客人が来ただぞ。

るという客人が、頭

てたずねて来たぞ」

「なに」

老婆は意外の知ら

せに目を輝かして扉へ向

れに引渡してくれるかい。つりかえっこにしてくれなくてはいやだぜ」

老婆はそれを聞くと、扉の外に立っている手下の方へ、チラと妙な目くばせをしましたが、

「よいとも、密書をくれるなら、いかにも娘はお前さまに引渡そう」

「ようし、それさえ聞けば結構だい。そら、密書はこの杖の中に仕込んであるぜ」

杖の先に巻きつけた白布をくるくる解きほぐすと、両手をかけてパチンと割目を開きました。中から転がり出した一巻の密書を、老婆を急いで拾い上げます。

「うむ、これこれ、正しく違いない連判状の巻物。これさえ手に入ればしめたものじゃ」

中を調べて老婆は相好を崩しました。

「確かに渡したぜ、さあ約束だ。娘はおれがもらったぞ」

膳平はぎらぎら目を光らせて縛られているお京へ飛びつこうとしました。

そのとたん、老婆の片手がスッと天井への一本の紐のようなものをグッと引きました。

「うわあッ！」

膳平とお京の足の下の床がグラリとゆらぎました。はッと思う間もなく、目の前が真暗になって、二人は折り重なって床下の闇へ吸いこまれてしまいました。

どっとしたたかに背を打って、膳平、必死に立上った時は、もう二人とも落し穴の底に閉じこめられていた後の祭だったのです。

「なッ、何をしやがるんだッ。卑、卑怯者めッ！」

膳平、頭上を見上げて地団駄をふみます。

「うッふふふ、狒々族の掟には卑怯も何もない。網にかかった者は一人残らず、狒々明神のいけにえに捧げてなぶり殺しにする。娘に引かれて、自分から密書を持って網にかかって来た、おのれの愚かさ加減をうらむがよいわ。わッはは、まあ、そこでゆっくり、娘と乳繰り合っているがいい」

老婆は頭の上からこんな悪態をついて、ピシャリと穴の口をふさいでしまいました。

「ちッ、畜生、よくも、だましゃがったな。うーん、覚えてろッ」

足をふみ鳴らして口惜しがる膳平、その耳に真暗な中から、静かなお京の声がひびいて来ました。

「膳平。許しておくれよ」

「……」

「もともと、私が悪かったの。たとえお家のためにもせよ、偽の付文までして、お前の真心をもてあそび、江戸を頭び出す口実に使った。そのため、あたしばかりか、お前までこんな目に会わせてしまった……」

闇の中で、お京が切なさそうに縛られた身をもむ気配でした。

「江戸の御家老、鍵山伝兵衛というのは、今度のお家騒動の張本人で、今までにも散々悪事を重ねている悪い奴……。江戸の若君を毒殺して、自分の息のかかったお部屋様の腹の子をお家跡目に立てようと画策している。その一味の連判状を、お兄様が苦心して手に入れたんだけど、お兄様には若君守護の大事なお役目がある。仕方なく、あたしがその連判状をお国表におとどけする役を引受けはしたものの、そのために、悪人共に怪しまれないように、お前に不義の恋を仕掛けたように見せかけ、お兄様に咎められて追出されたというようにして……。あたしはお前をだましたと思って諦めるけど、何も知らないお前まで、巻添えをくわせて、こんな恐しいハメに落しこんでしまった。膳平、あたしをぶってておくれ、蹴っておくれ、どうでも好きなようにしておくれ！　それで、せめ

て幾分でも恨みを晴らしてちょうだい。あたしは、それで、少しでもお前の胸が晴れればうれしいんだから、――殺されたっていい。お前に殺されれば本望です……」

「お、お京さん、いや、お嬢さま！」

膳平は昂奮に歯をがちがち鳴らしながら、闇の中を、手探りにお京の方へにじり寄ります。

「よく言いなすった。ようし、お前さまの望み通りにして上げよう。男の恨みのほどを思い知らせて上げますぜ……」

真暗な中で、お京の、あたたかい、やわらかな胸のあたりに手がふれました。膳平はブルブルふるえながら、その豊満な肉塊を思わず握りしめ、抱きしめるのでした。

いけにえ祭り

翌朝。

天龍峡の間道を、馬を飛ばせて疾駆する一人の武士がありました。よほど急ぐと見え、秀麗な額に薄い汗をにじませ、不安そうにあたりを見廻しながら、しきりと何か探しているふうでした。

「はて、もう追いつきそうなものだが……いくらお京が旅なれているにしろ、たかが女の足だ。膳平に追いつかれて難儀な目に会ってはいないかと思って来たが、まだ二人の姿も見えぬ……」

武士の顔には隠し切れぬ動揺が浮びます。

「せっかく、苦肉の策でお京を出立させたのに、あとを追って膳平までが出奔したため、もしやお京は悪人共の手に落ちたのでは？」



馬を飛ばして来ながら、武士の目が、ふと右手の山の頂きに吸い寄せられたように釘づけになりました。

その頂きから、真黒な煙が一すじ、朝やけの空へむらむらと濃く立昇ってゆくのが見受けられます。

「や、のろしだ。猟々が嶺の頂きから、何の合図だろう？」

ぎょっと武士の顔色が変りました。

「猟々が嶺……待てよ、このへんは猟々族の巣だが——猟々族が他人に対してのろしの合図を上げる……合点がゆかぬ話だ……」

首をひねりながら、なおも馬を急がせる。

と、前方の木立のあたりから、武士は突差に決心に驚いたらしい山鴉の群が数十羽、パーッと空へ舞上ります。

「やッ、死骸だ！」

はッと手綱を引締めると、馬を止めてひらりと降り立った。山道の中に倒れている黒装束の死骸——武士はつかつかと歩み寄りました。

「む、胸を一刺しした短刀の傷——お京に仕込んでやった八重垣流捨身の突きの一手だが——血の跡の新しさから見て、昨夜ここで斬り結んだな……」

武士は死骸の懐中へ手を入れて探ります。

と、一通の新しい書面が懐ろから出て来ました。武士は早速押しひらいて見ましたが、

「あッ、これは！」

秀麗な顔色がさッと変って、書面を持つ手がぶるぶる震えます。

「猟々族がお京を捕え、密書を奪い返したる時は、明け六ツの刻限に猟々が嶺よりのろしを打揚げて合図すべきこと……さては、先刻のののろしは——お京が捕われたのか！」

書面を握って立上ると、武士は突差に決心を固めたらしく、木立の中を、猟々が嶺の方へ一散に走り出しました。

「お京よ、死ぬでないぞ。兄が助けに参るぞッ！」

下草をふみ、藪を分け、小枝をくぐって、武士は一散に猟々が嶺へ走ります。

キイーッ。

不意に頭上ではげしい叫び、同時にビュンと風を切って飛んで来た投縄一丁。はッと身を交しざま、武士の手から一本の小柄が電光のように空を飛びました。

「うウーッ」

凄まじいうめきと一しょに、頭上の大枝から大きな猟々の皮を頭からかぶった男が、投縄を握ったまま、ドーッところげ落ちました。

一方、猟々が嶺では明神の祠の前に、毛皮をまとった大勢の男共が、手に手に山刀をふりかざして、気が狂ったように踊り廻っていました。

太鼓が鳴り、女共の唄う、わけのわからない神楽歌がどよめきます。猟々明神のいけにえ祭りの真最中でした。

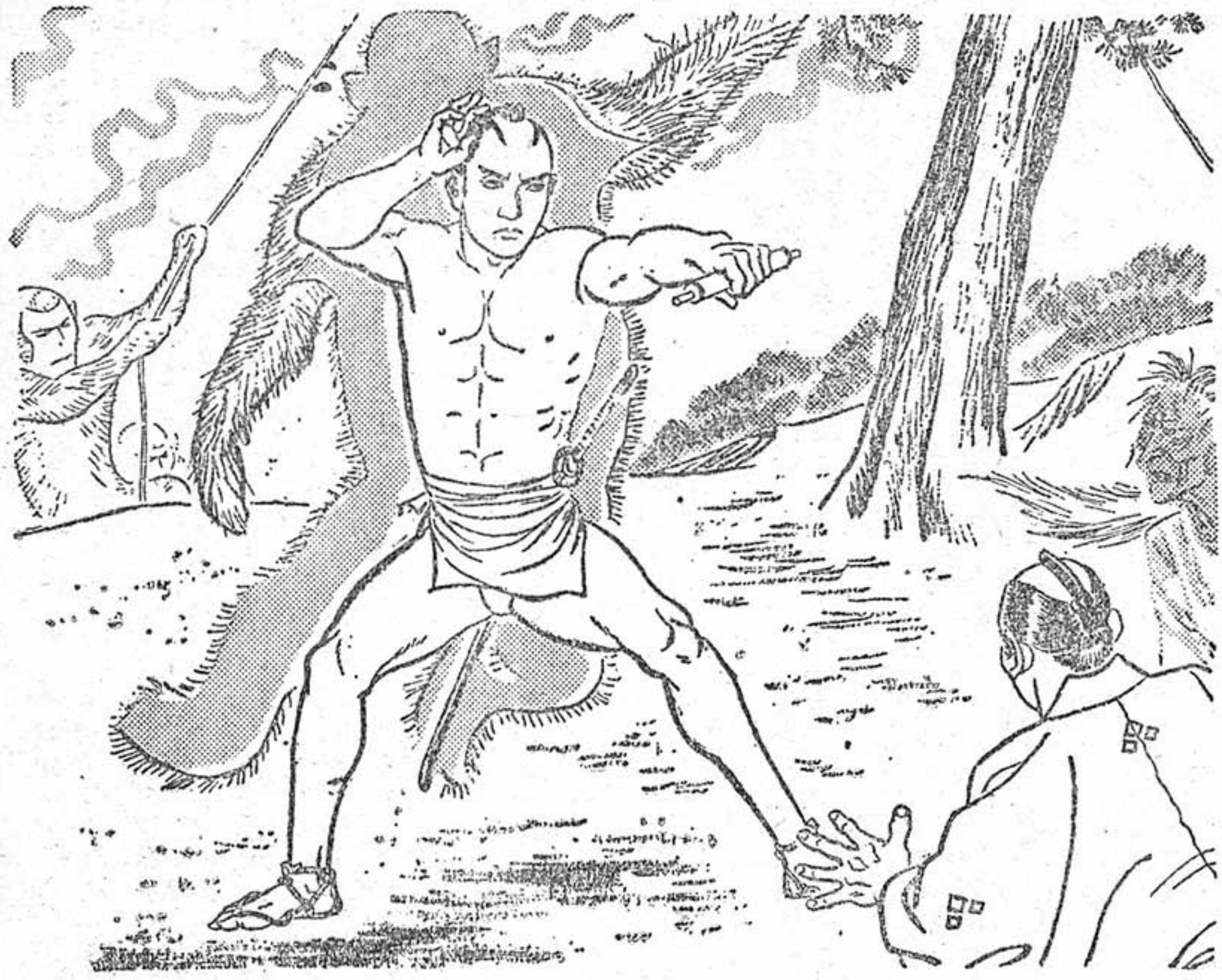
踊り狂う群衆、いや群獣の真中に、あわれな、いけにえの犠牲者が二人、大木の下に引据えられています。いうまでもなく、お京と膳平の二人でした。

二人とも植物の蔓で編んだ荒縄でがんじがらめに括り上げられていました。仲間姿の膳平はとにかく、お京の方は昨夜よりさらにひどく、着物は裂け放題に裂けて、ちぎり取られ、かろうじて胸や腰をおおう程度の裸形、そのあらわな肌を、荒縄がきびしく高手小手にいましめているのでした。

「ふふふ、どうじゃ、お京、よいざまじゃ。我等に手向いした天罰じゃぞ」

お京のみじめな姿を見下して、さも心地よげに嘲笑している二人の武士姿の男がありました。

「左様左様、北島氏のいう通りじゃ、昨夜、



おとなしくわれわれに密書を渡しておけば、かような目に会わずにすんだものを。女さかしうして牛売り損うとは貴様のことじゃ」

二人は昨夜、お京を待伏せしていた曲者でした。

「畜生ッ、お京さまに手をふれたら承知しないぞッ。俺のお京さまをどうするんだッ」

かたわらの膳平が身をもんで口惜がります。

「うるさい下郎だな。お前のお京さまなら、もう少し大事にしてやればよかったろう」

「なんだと？」

「ははは、こういうことになったのも、もとはといえば、下郎、その方の無分別からだぞ」

「な、なぜだッ？」

「わからんか。この娘が貴様に付文して屋敷を立退いた。そこまでは天晴れな企み、江戸の御家老も娘が密書を持って行ったとは思わなかったのだ。そのままにしておけば、娘はまんまと密書をお城下へ運んでいたろうよ。ところが、貴様があとを追って江戸を出奔したものだから、御家老は、はてなと思ったのだ。まさか、娘がたった一人で国表へ立つとは思わんから、娘を疑っていなかったのが、貴様も出奔したために、さては、娘は貴様を供にして国表へ密書を運びに行ったのだなと気がついた。そこでわれわれに急使が来て、われわれは網を張って娘を待伏せしていたというわけだ。貴様が無分別に江戸を飛び出したために、娘も貴様も、こういう身の破滅となった次第だ。これで貴様のおめでたさがわかったろう」

「そ、それは本当か、本当かッ」

「嘘をついたところで何になる」

「ああッ、おれは……おれは！」

膳平の顔色は死人のようでした。

「おれを殺せ、お京さまの代りに、おれを殺してくれッ」

身をもんで叫ぶ膳平の顔には、後悔と自責

の念があり浮び出しました。

「うふふふ、そうはいかぬ」

二人の武士の後からぬッと姿を現わしたのは巫女の老婆のいやらしい顔でした。

「狒々が嶺の明神は若い女が好きじゃ。さあ皆の者、女を早う木に括り上げい」

「えい、合点だ」

老婆の差図に従って、獣のような男共は寄ってたかってお京の体を大木の枝から高々と吊上げました。

見る見る、彼女の体は五、六尺高い大木の幹へ引上げられ、高手小手の縄尻を幹へグルグルと縛りつけられます。両足は太い枝をまたぐようにして、同じように幹へ括りつけられました。

「ところで巫女どの、お京の処置はお任せするが、かんじんの密書を、われわれの方へ渡してもらいたいな」

北島といわれた武士が老婆に要求します。

「おお、そうじゃ。いけにえに気を取られて忘れておった。密書はここに持って来たわ」

巫女は白衣の懐ろを探って、例の連判一巻を取出しました。

「かたじけない」

北島は巫女の手から巻物を受取ろうとしました。

その一瞬、横合からヒョイと毛むくじゃらの腕が伸びたかと思うと、巫女の手からサッと巻物をつかみ取ってしまいました。

裸女阿修羅

「あッ、何者だ」

老婆も、北島も、つれの武士も、愕然とふり向きました。

巻物を横取りしたのは、大きな狒々の毛皮を頭からかぶった男。巻物を両手に捧げて、ヒョコヒョコ人を馬鹿にした身ぶりで踊っています。

「だれだ、顔を見せい、そして巻物を返せ」

と、男はゆっくりと三人に向き直りました。

「顔を見せたら何とする」

声と共に、パッと狒々の毛皮がはねのけられました。

「あッ、貴様は！」

三人は思わず叫びました。毛皮の下には褌一本に脇差をぶちこんだ、素っ裸の男。秀麗な額、色白の筋肉、ニッコリ笑った武家髷の青年があったのです。

「長沢英三郎、密書と妹を受取りに参った。ついでに貴公等の生命もな」

「なにッ」

「こうだッ！」

さッと裸身の腰をひねった英三郎、脇差を抜討に二人の頭上へ閃めかしました。

「わッ」

「うッ」

一瞬にして二人の口から悲鳴が洩れ、血しぶきが二筋、ぱッと物凄く上りました。二人は相次いで左右へ崩れ落ちていたのです。

「やッ、曲者、曲者じゃ、皆、こやつを斬り捨てい！」

老婆は飛退いて大声に叫びました。

呆然としていた狒々族の男共、老婆の声にはッと山刀を取り直すと、潮のように英三郎へ殺到して来ました。

「来い！」

社殿を楯に取った英三郎、大勢を相手に斬結びます。凄まじい乱闘の場がくりひろげられました。

「ウーム、にくい男、そうじゃ、万一、いけにえに逃げられては一大事。一刻も早く血祭りに上げてしまおう」

巫女の老婆は、みずから山刀を口にくわえると、お京を括りつけた大木へ、スルスルと身軽によじ登りました。

「あ、兄上さまッ！」

大木の上ではらはらしていたお京は思わず叫びました。醜悪な老婆は見る間に彼女のそばへ登って来ると、彼女がまたいでいた太枝へ、自分も馬乗りにまたがって山刀を取直しました。

「娘、覚悟せい。いけにえの血祭りじゃッ」

刀を右手に、左手を伸ばして彼女の胸に残った着物を手荒く引剝がしました。ズルズルと裂けた着物を剝取ると、むっちり盛上った左の乳房を狙って、山刀の切先をピッタリ押しつけます。お京は観念の眼を閉じました。

今にも山刀の切先がキリリと乳房へ突立てられる——まさに危機一髪の際でした。

「旦那さまア、お嬢さまが危いッ！」

膳平の絶叫に、斬結んでいた英三郎の目がはッとこちらに向けられたのです。

「えいッ」

英三郎の手から、例の手練の小柄が飛びました。

「ううッ、ぎゃーッ」

物凄い悲鳴が巫女の口をついて出ました。のけぞって山刀を引いた老婆は、次の瞬間、逆にお京の体へしがみつくように前にのめりました。山刀を真直に立てて、お京の胸に両手をついて身を支えようとする。山刀の刃が縄目にふれて、ブツ、ブツ、と一二本の縄が切れました。

そのまま、老婆はついに支える力を失ってドーッと横倒しに太枝から地面へ落ちてゆきます。その首筋に小柄が深く刺ってドロドロと赤い血が噴出しているのでした。

「頭がやられた」

「頭がやられた——」

「明神様のたたりじゃぞ」

「引け、引け！」

どこからともなく、そんな声が津波のように湧き起り、潮が引くようにどうッと崩れたち、見る見る社前からクモの子を散らすように逃げ出すのでした。——

兄妹は無事に狒々が嶺を降ると、首尾よく密書をお国表の殿様のもとへ届けました。

めでたく悪人共が誅に伏した後、兄妹は再び江戸へ帰り、そこでお暇を願って浪人暮しを始めたとか——悪人にもせよ、同藩の人を手にかけているので、清く身を引いたというわけでしょう。

あぶないところを助けられた膳平は、兄妹に従って江戸へ帰り、英三郎が浪人した後も仕えていたとか。ただし、今度は仲間ではなく、英三郎の義弟としてです。

例の穴蔵の中の一夜以来、女になったお京と、どうしても離れられなくなったのでしょう。お京の方も異存なし、嘘から出たまことというか、偽の付文から始まったのが、いつの間にか本物の恋に変ってしまった。世の中は皮肉のようでうまく行ってるものです。

愛読者短評募集

◎本誌では愛読者の皆様方から、読まれたあとの短評を募集して居ります。シンラツな御意見、御希望等もおりませて、御投稿下さいますようお待ちします。

◎掲載させて戴きましたものには、掲載の翌月号と謝礼をお送り致します。

◎読者短評送り先は左記の通りです。

東京都中野区江古田一の二三〇二
久保書店内　裏窓編集部読者係

陶酔の花園

屑籠が招いた



ったろう。これこそ憧れの人そのものだった☆

お色気戦術

「駄目だ、駄目だ……幾らねばってたって無駄だよ、さ、帰った帰った！」

東京歌劇団吉例の「初春の踊り」の公演で賑わう浅草大劇場の楽屋裏。

声をはりあげているのは楽屋番の柳本である。

客席やエプロンステージ前に陣取り、嬌声をあげていたファンの少女たちが、一回目のステージが終ると、憧がれのスターをその楽屋に尋ねるために殺到して来たのだ。

「ね、おじさん、非番の時つき合ってやっからさ、通しとくれヨ、よォ……」

お色気で柳本を釣ろうという娘もある。

が、そんな戦術でよろめくような柳本ではない。五人いる楽屋番の中でも、一番年嵩のこのおっさんは特にうるさがただった。

一度でも楽屋裏を尋ねた経験のある方ならご承知と思うが、楽屋番は偏屈者といっていいほど不愛想が揃っている。大きな劇場になるほどその傾向が強い。

浅草大劇場は少女歌劇という特殊な団体の常打ち劇場だけに、規則がうるさいのだ。

熱狂した少女たちが、どんなに哀願の言葉を並べても絶対にとりあげて貰えない。



笠文彦

檜山紀太郎・画

☆サインなどほしがっていたのは何とばかだ

ファンには無情な仕打ちでも、舞台で疲れきっているスターたちは助かるのだ。

次の公演まで、横になったり、食事をしたりして、解放された僅かな時間を有効に味わおうとするのである。緊張したステージが続くだけに、出演者は身心ともに疲れきっている。いくらファンとはいえ、その時間を襲われて、騒がれたのではノイローゼになってしまう。

しかし、スターとコネがつけば、やあ！　という挨拶だけで気軽に通して貰えるのだ。

同じファンでも何のつながりを持たない者は冷たくあしらわれ、楽屋番に押し帰されるのがオチだった。

「さァ、いつまでもそんな所に突っ立ってないで散ってくれ。君達を通すとコレだからな」

柳本は少女たちに向って首を叩いてみせた。集まった少女たちは、ブツブツ文句を並べながらも去らなくてはならない。

ところが、みんなが去っても、独りだけそこに居残った娘がいた。背の低い眼の大きな、眉の濃い女である。

奥へ帰りかけた柳本は、その娘の顔を見ると露骨に渋面を作った。

「なんだ、また来てるのか……何度足を運んでも駄目なものは駄目なんだ、さ、帰るンだ」

柳本は冷たく吐き出すようにいうと、女の前でピシャリとドアを閉めた。

女は今にも泣き出しそうな顔で立ちつくした。

男装の麗人

この女の名前は今成和枝という。

ここの楽屋を訪ねるようになってから、もう半年近くなる。

和枝は男装の麗人で人気絶頂のスター、天路めぐみに憧がれていた。

断髪で、エキゾチックな容貌、ほっそりした身体をタキシードに包んだ天路めぐみは、舞台の華だった。彼女が舞台から投げる微笑は百万弗のスマイルともてはやされている。

(舞台の天路さんだけではもう満足じゃないどうしても直接逢ってお話がしたい……)

そうした気持が嵩じると、もう押えはきかない。とうとうある日、和枝は天路めぐみに面会を求めた。

が、単なるファンでしかない和枝に、天路めぐみが快く会ってくれるはずはなかった。

そして、半年——。

和枝は毎日のように楽屋を訪れていた。和枝と柳本との根比べだった。

ところが、とうから柳本の方が根負けしていた。思いきって和枝の希望を受け入れてやろうとさえ思った。しかし、勝手な真似はできない。勤務成績に影響するし、職務に私情を混えることはタブーになっていた。

ファンの少女たちにはあくまでも冷酷な男劇場側には職務に忠実な男でなければならないのだ。

とはいえ、柳本も人間である。最近では和枝の顔を見るのがつらかった。逢いたい一心の和枝の心がわかるだけ、哀れでならなかった。

冷たくあしらったことで、柳本は味気ない気持で、遅い昼食の弁当をつかい始めた。

彼は一年前の男のことを思い出した。

一年前——楽屋に通いつめていた男があった。背が低く、眼のクリクリした、どことなく和枝に似た童顔の男だった。

その男も熱心な天路めぐみのファンだったのだ。

一ト月ばかり通いつめられて根負けした柳本はその男のことを天路めぐみに話した。ところが彼女からこっぴどく叱られてしまったのである。

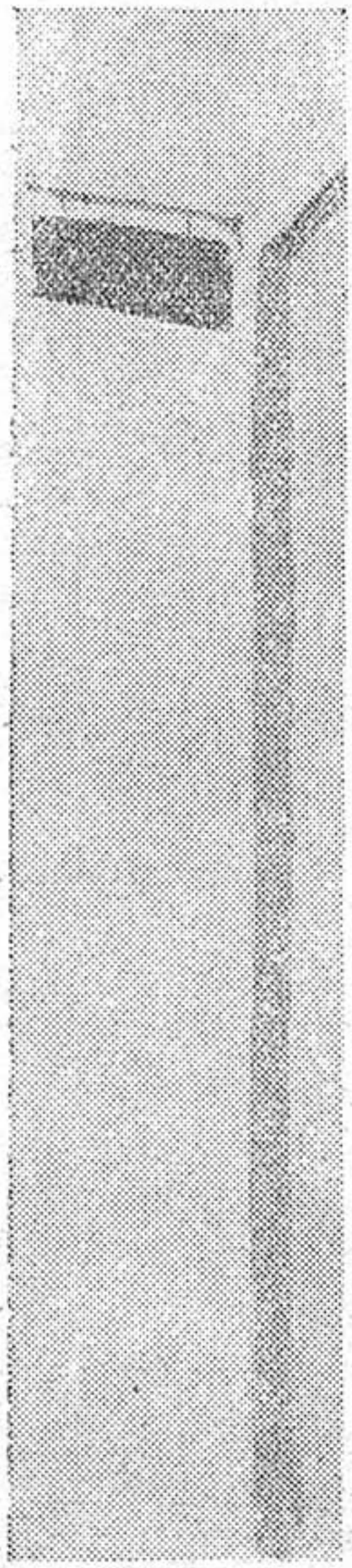
天路めぐみは大の男嫌いだった。四十近い齢になる今日まで、結婚もせずに、少女歌劇スターの座を独占していた。

しかし、裏には裏がある。男嫌いとはいうものの、今までに彼女と交渉を持った女は十指にあまる。現在は彼女のパトロン、銀座に画廊を持つ未亡人の三枝千恵と特殊な関係にあった。この二人のスキャンダルは関係者の間で公然の秘密になっていた。が、スターという人気のヴェールに包まれて、ファンの層までこの噂は滲透していないのだ。

こんな彼女だけに、新聞社も雑誌社も、その楽屋を訪れるのは、女社員に決められていた。

天路めぐみに逢いたいと執拗にねばっていたその男も、彼女の性格を聞かされると、プッツリ楽屋を訪れなくなった。

一ト月間、その男に悩まされ続けていた柳



本がホッとしたのも束の間、今度は和枝に喰い下られてしまった。

（全くついてねえな、俺は……）

そうつぶやきながら、何気なく表へ視線を向けた柳本は思わず腰を浮かした。

追い返したはずの和枝がまだそこに立っていたのだ。

「帰ってくれよ。頼むからもう二度と来ないでくれよ。俺の気持にもなってな……」

哀願するのは柳本の方だった。

その時、階上の楽屋に通じるエレヴェーターが降りて来た。

開いたドアから出て来たのは天路めぐみだった。パトロンの三枝女史も一緒だ。

（あッ、天路さん！……）

言いかけたが、和枝の言葉は声にならなかった。

天路めぐみは和枝のことなど眼にも止めず三枝女史と談笑しながら通りすぎて行く。

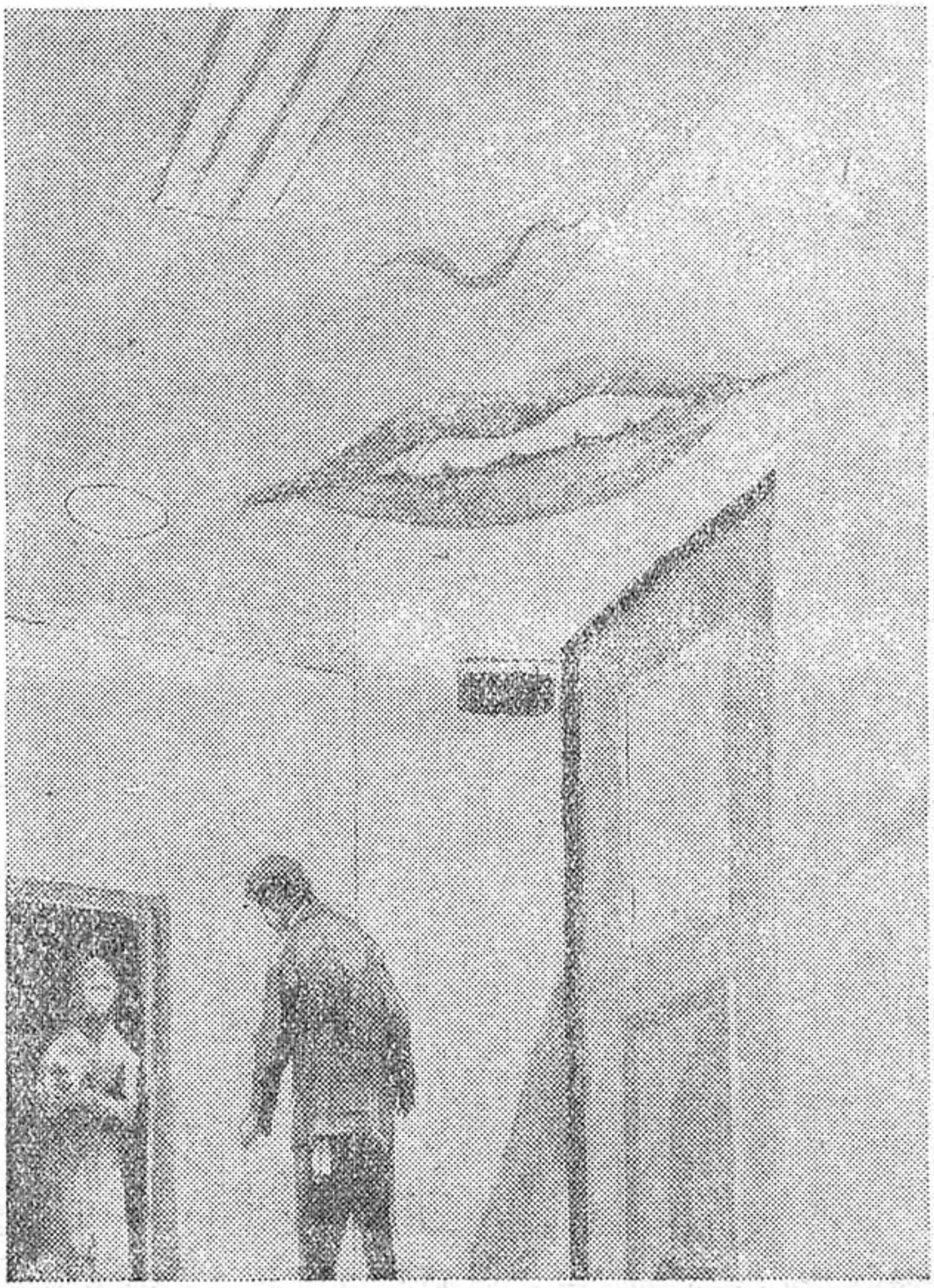
（ああ……）

思わず溜息を洩らした和枝の頬に、一筋、涙が伝っておちた。

柳本は見逃さなかった。

「明日もう一度おいで…逢わしてあげよう」

去って行く天路めぐみの車を見送っていた



和枝に、柳本はポツンとそうつぶやいた。

層籠のチリ紙

柳本の言葉は真実だった。

翌日、半信半疑で楽屋裏を尋ねた和枝を、柳本は天路めぐみの楽屋へ案内してくれた。

雲の上に乗った心地とでもいうのだろう。

夢のような一時だった。

和枝は目の前に座っている素顔の天路めぐみを穴のあくほど見詰めた。

楽屋風呂から上って来たばかりの彼女は、浴衣を無雑作に着込み、顔がまだ上気してい

た。シャンプーと化粧料の匂いが混り合っている。肉のしまった頬っぺたにソバカスが点々としているのが和枝には奇異だった。

「君ィ、半年近くも楽屋裏でねばってたンだって？　はっはっは……」

天路めぐみは男のような口調で、男みたいに大口をあけて笑った。奥歯の金歯がキラキラッと光る。眼尻に小皺が寄っている。彼女は別に気にもせず笑い続けた。

舞台では見ることのできない人気スターの素顔——。

和枝にはふるいつきたくなるほど魅力的だった。

（好きです……天路さんが大好きです……）

精一杯の想いをこめて、和枝は天路めぐみを見詰めた。

そうした和枝の心を知ってか知らずか、天路の視線はよそを向いていた。

「たちの悪い風邪にやられちゃってね。閉口してるンだ……」

そのせいか、天路めぐみはよくハナをかんだ。日本人離れした美しい鼻をチリ紙で押えツンツンとハナ水をかんでは、傍の屑籠に投げ入れた。屑籠は真ッ白いチリ紙で山になっていた。

「君ィ、風邪がうつるかも知れないぜ」

「光栄です……」

「光栄かねえ、病気をうつされて、はっはっは……」

天路めぐみはまた磊落に笑った。

百万弗のスマイルの何倍も何百倍も美しく魅力たっぷりな笑顔だった。

「どうもしつっこいなァ……いい薬がないかねえ」

ひろげたチリ紙に、ペッと痰を吐いて、天路めぐみは独り言のようにいった。

「私の家にあります、とてもよく利く薬が……」

「ほう、君のとこに？　ほしいなァ、明日でも持って来てくれるかい」

「え、ええ……」

和枝はどもりながらうなずいた。嘘をついたのだ。よく利く風邪薬なんてありゃしないのだが、明日もまた天路めぐみの楽屋を訪ねたかったのである。

「私、必ず持って来ます。早く治っていただかないと心配ですから」

「ぜひ、頼むよ」

天路めぐみは人なつっこい微笑を向けた。

「頼みついでに、これも頼もうかな」

ハナをかんだ紙で一杯になった屑籠を和枝の前に置いた。

「ファンの人をこんな用事で使っちゃ悪いンだが、お付きの奴が飯喰いに行ってるンでね、捨てて来てくれるかい？」

和枝は夢中で屑籠を持った。その手がふるえていた。

（天路さんのすてたチリ紙なんだ……これはみんな天路さんの……）

まるで、宝石箱でも抱えるような恰好で和枝は立ち上った。

「廊下のつき当りにダスターシュートがあるよ」

返事もそこそこに、和枝は素早く廊下へ出て行った。

（天路さんが汚したチリ紙だ……棄てるなんて勿体ない——）

ダスターシュートに棄てようとした時、和枝の心がそう叫んだ。

（棄てちゃいけない！　大事にするんだ……持って帰るンだ！……）

とっさに、和枝はあたりを見廻した。

なんという幸運——人影はなかった。

（さァ、今のうちに……）

和枝は屑籠のチリ紙を摑んだ。

チリ紙の柔らかさ、ハナ水でしっとり湿った感触、ウズウズするほど手のひらに心地よかった。いつまでもチリ紙の中に手を浸しておきたい気持だった。

（ぐずぐずしてたら誰か来る。早くしまわなきゃ……）

和枝は無我夢中で、汚れたチリ紙をポケットというポケットに押し込んだ。

それでも、半分以上も残ってしまった。

（棄てちゃいけない……みんな持って帰らなきゃ……）

しかし、それを入れるところはどこにもないのだ。和枝は迷った。諦めて捨ててしまおうかと……。

（あッ、あった！）

突然、和枝の脳裡に絶好の隠し場所がひらめいた。

その隠し場所は——。

肌と肌着の間に押し込もうというのだ。

和枝は素早くブラウスの前ボタンをはずした。胸許をあけると、肌着をひっぱってチリ紙を詰め込んだ。

（冷たいッ！——）

胸から、腹部にかけて、スーッと鳥肌のたつのがわかる。

ヌルヌル……、ヌメヌメ……。

押し込んだチリ紙が肌にねばりつく。

そうした感触が妙に心地よい。

和枝はあるだけの汚れたチリ紙を胸許に押し込んだ。

胸といわず、腹といわず、天路めぐみのハナ水で汚れきっているだろう。

そう思うと和枝は陶然とした満足感に包まれるのだった。

ブラウスのボタンをはめ終った和枝は、上気した顔の汗をブラウスの袖で拭った。

胸許のチリ紙は体温で暖められて、ホコホコと和枝の肌を愛撫しているようだった。

まるで、直接天路めぐみから触れられたような感覚だった。

楽屋へ戻った和枝は、容易に顔をあげることができなかった。彼女の行為を天路めぐみに見られやしなかったかと、不安だったからだ。和枝は天路めぐみを盗み見た。

彼女は鏡台にもたれて、煙草をくゆらせてみた。

カサカサ……、カサカサ……。

チリ紙が、みんな私の胸許に抱かれていると知ったら、天路さんはどう思うだろう……）

和枝はまた天路めぐみを見上げた。こちらを振り向いた彼女の視線をまともに受けて、和枝は思わず後すざりした。

「あのう、お忙がしいところ、お邪魔しまして……」

全く不用意な言葉が口をついた。和枝はまだまだ天路めぐみの傍にいたかったのだ。

「じゃ、頼むよ……薬」

お辞儀をして楽屋を出てからの和枝は、地に足が着いていなかった。肝腎の天路めぐみのサインを貰わずに出てしまったことに気づいたのは、黄昏の街を夢中で歩いている時だった。しかし、和枝にはもうサインなどどうでもよかった。

チリ紙の花園

アパートへ戻った和枝は、自分の部屋のドアに鍵をおろした。電灯のスイッチを切る。四十ワットの光がぼんやりと四畳半を照し出した。

和枝はブラウスの上から胸許をそっと押えてみた。

カサカサ……、カサカサ……。

チリ紙が乾いた音をたてた。

和枝はブラウスのボタンをはずすと、胸許

に詰め込んだチリ紙を、一つ、一つ、取り出した。

くしゃくしゃに丸められたチリ紙は、肌のぬくもりでほとんど乾き、一部分がチョッピリ黄ばんでいる。

和枝は大事そうにたなごころの上でもてあそんでから、ゆっくりと畳の上に置いた。

一つ……また、一つ……。

チリ紙はどんどん並べられて行くうちに、和枝の頬は次第に紅潮していった。

眼がキラッ、キラッと輝く。

ドキンドキン……胸の動悸がハッキリ耳にまで聞えてくるようだ。

(天路さんのチリ紙……あの人が汚したチリ紙……)

和枝は心の中で叫びながら、部屋一杯にチリ紙の花園をこしらえて行くのだった。

丸められたチリ紙は咲きほこるバラの花なのだ。

真ッ白いチリ紙は純白のバラ——。

黄ばんだチリ紙はクリーム色のバラ——。

部屋を埋めたチリ紙のバラは、天路めぐみの匂いを漂わせてくれた。

並べ終った和枝は、眼を瞠ってバラの一輪を手にとった。

見詰めているうちに、バラの花よりももっと美しい、もっと高価な花のように思えてきた。金では絶対に買えない、ダイヤの数倍も価値のある花だ。和枝の部屋に咲いた花の一輪一輪が、貴重な財産のような気がした。

(ああ……)

和枝は上気した顔を、チリ紙の花壇に埋めた。バラの花と違って、この花には棘がない。頬に触れる感覚は和枝をしびれるような恍惚とした世界へひきずり込んだ。その心地よさは、和枝にとって生れて始めての体験だった。

それは、天路めぐみの膝に抱かれているとき同じ感触に違いなかった。

和枝は何度も何度もチリ紙の花園に身を埋めずりした。

(こんな素晴らしいものがあるのに、サインを貰おうとした私はなんてバカだったろう……)

陶酔に身を沈めて、和枝はいつか眠ってしまった。

翌日、近所の薬局で風邪薬を調合して貰うと、和枝はとぶようにして浅草大劇場へ向った。少しでも早く天路めぐみに会いたかった。

和枝は何度も何度もチリ紙がダスターシュートに捨てられたりしていては大変だったからだ。

天路めぐみは一人ではなかった。付け人の少女、真弓が傍にいて、何くれとなく世話をやいていた。

和枝のさし出した薬を受取ると、天路めぐみは例の人なつっこい微笑を向けた。

ニッコリ、和枝も笑顔でそれに答えた。と

ギラッと和枝の眼が光った。

ヌルヌルした痰の塊り——。

電灯の光を受けて、猫目石のようにきらめいている。

和枝の眼にふっと微笑が浮んだ。

(明日から、天路さんのハナをかんだ紙や、痰をすてた紙を集めよう……それでこそ、本当の天路さんのファンなのだ……)

チリ紙の花園に身を埋めているうちに、和枝はいつか眠ってしまった。

明け方まで、天路めぐみの懐に抱かれている夢を見続けだった。

ソレが欲しい……



ころが、真弓だけが怒ったような表情で、意地の悪い冷たい眼で和枝を睨みつけた。付人として、少女たちの憧がれの的である天路めぐみと、あまり、親しくして貰いたくないのだ。

「親切にしてくれてありがとう。何かお礼したいけど、欲しいものある？」

薬を飲み終えた天路めぐみは和枝にそう聞いた。

和枝は返答に窮した。喉から手の出るほど欲しいものがあるのだが、それはいえない。

（天路さんの汚したチリ紙をください……）

そんなことをいおうものから、気違いと見なされ、楽屋からつまみ出されるに決まっている。自分で掘った穴に自分からとび込むような愚かな真似はしたくなかった。

が、和枝は欲しかった。

天路めぐみの傍にある屑籠は、チリ紙で一杯になっている。和枝はギラギラした眼でチリ紙の山を凝視した。

「遠慮しなくってもいいんだ。あるでしょ？いってごらん？」

そう聞かれて、和枝はあわてて視線を屑籠からそらした。

「どう？　このコンパクトは……」

天路めぐみは鏡台の前のコンパクトを取りあげた。すると、真弓が鋭く叫んだ。
「駄目よ、先生。そんなことしちゃ、三枝さんに叱られますわ」
それを聞くと、天路めぐみはニヤニヤ薄笑いを浮べた。
「三枝のおばちゃんか。あの人はこわいからな、はっはっは……」
大声で笑い出した時、入口の扉を押して入って来た者がある。
三枝女史だった。
「やあ、噂をすれば影だ。タイミングがよすぎるな、おばちゃん」
「どうせ、よくないこと噂してたンでしょ？あなた」
三枝女史は気味の悪いほど艶然とした微笑を天路めぐみに向けた。媚びを含んだ、キラキラした眼だった。
天路めぐみはもう和枝のことなど忘れてしまったかのように、三枝女史と話しを始めた。
部屋の隅に小さくなっている和枝に、ジロッジロッと、真弓が勝ちほこったような冷たい視線を向けている。
もう帰れといわんばかりの眼の色だった。
（帰るもんか、天路さんのチリ紙を手に入れるまでは……）
和枝は真弓の視線を無視するように、屑籠に眼を注いだ。
「あら、君ィ、まだいたの？」
天路めぐみがそう声をかけた時、和枝はとっさに自分のことをいわれているとは気づかなかった。
「あ、そうそう、プレゼントあげる約束だったっけ」
和枝は強く首を振った。
「いりません……その代り――」
「その代り、なあに？」
いぶかって、天路めぐみはゾッとするほど美しい顔を和枝に向けた。
「あのう……私にお仕事をさせていただきたいンです」
「お仕事？――そいつは困るな。こうしてお付きもいるし……」
目顔で、天路めぐみは真弓の方を振り返った。真弓は怒った眼を和枝に向けている。
「いいえ、そうじゃないんです……ただ、昨日手に入れたチリ紙が盛りを過ぎたバラだ。とすれば、今日のチリ紙は満開のバラだ。日みたいに、その屑籠の中味を捨てに行かせてくださるだけでいいんです」
天路めぐみは、また、大きな口をあけて笑った。

「じゃ、捨てて来てくれるかい」
そういって、彼女はチリ紙で山になった屑籠を和枝の前にさし出した。
和枝は素早くそれをとりあげると廊下へ駈け出して行った。今にもとび出しそうな眼で睨んでいる真弓の視線を背中に感じながら。
ダスターシュートの前に立った和枝は、あたりに誰もいないのを見きわめると、ブラウスのボタンをはずした。
チリ紙を掴むと、肌着の間に突っ込む。
肌にヒヤリとするチリ紙の感触が、ワクワクするほど心地よかった。
あわてて押し込み、ヌラッとした液体が手にねばりつくこともある。
和枝は拭おうともせず、夢中でチリ紙を押し込んだ。

チリ紙と戯れる女

アパートへ戻ると、和枝は早速盗って来たチリ紙で花園を造るのだった。
昨日手に入れたチリ紙が盛りを過ぎたバラとすれば、今日のチリ紙は満開のバラだ。
無雑作にかんで捨てたチリ紙が肌にねばりついている。
それをはがす時の感触は、また格別の興味

があった。

ネバネバした液体を肌身に残さず、チリ紙を損なわずに離さなければならない。ちょっとしたコツが必要だった。

呼吸を止めて、ゆっくりはがすのだ。

手がふるえる。カッカッと顔が紅潮する。

そんな時の和枝の顔は満足感に酔いしれていた。

いつか、部屋はチリ紙で埋められた。

その一つ一つが天路めぐみの分身なのだ。

口に入れて噛みしめたいくらい愛おしい。

和枝はチリ紙の花園に顔を埋めた。秘密の花園に忍び込んで、バラの一輪を手折るように、チリ紙の一つを取り上げると、それに顔を寄せて匂いをかいでみる。

プーンと脳髄までひびく甘美な香りが心を酔わせる。それは天路めぐみの香りだった。

その香りに惑わされて、和枝は花びらの一

ヴァンデヴェルデ著

好評重版・発売中!!

《あまとりあ社の豪華新訳決定版》

杉靖三郎氏評— もっとも正確な訳文である上に難解といわれているヴェルデ特有の文体を読みやすくしたことに賛辞をおくります。これを読んで正しい性知識を理解し、結婚生活の実際面を的確に把握することを望みます

高木健夫氏評— 戦後離婚がふえたのは性の知識がゆき渡ったためといわれるが「むしろ生半可な性知識」と訂正すべきであろう。生半可な知識は危険がある。やさしく美しい文章の本書がその危険を正してくれるであろう

完全なる結婚

《全一巻》

医学博士 金子栄寿

厚生技官 青木尚雄 共訳

定価500円

〒70円

A5判総クロース箱入上製

本文498ページ多色図版挿入



東京都中野区江古田1の2302

株式会社 あまとりあ社

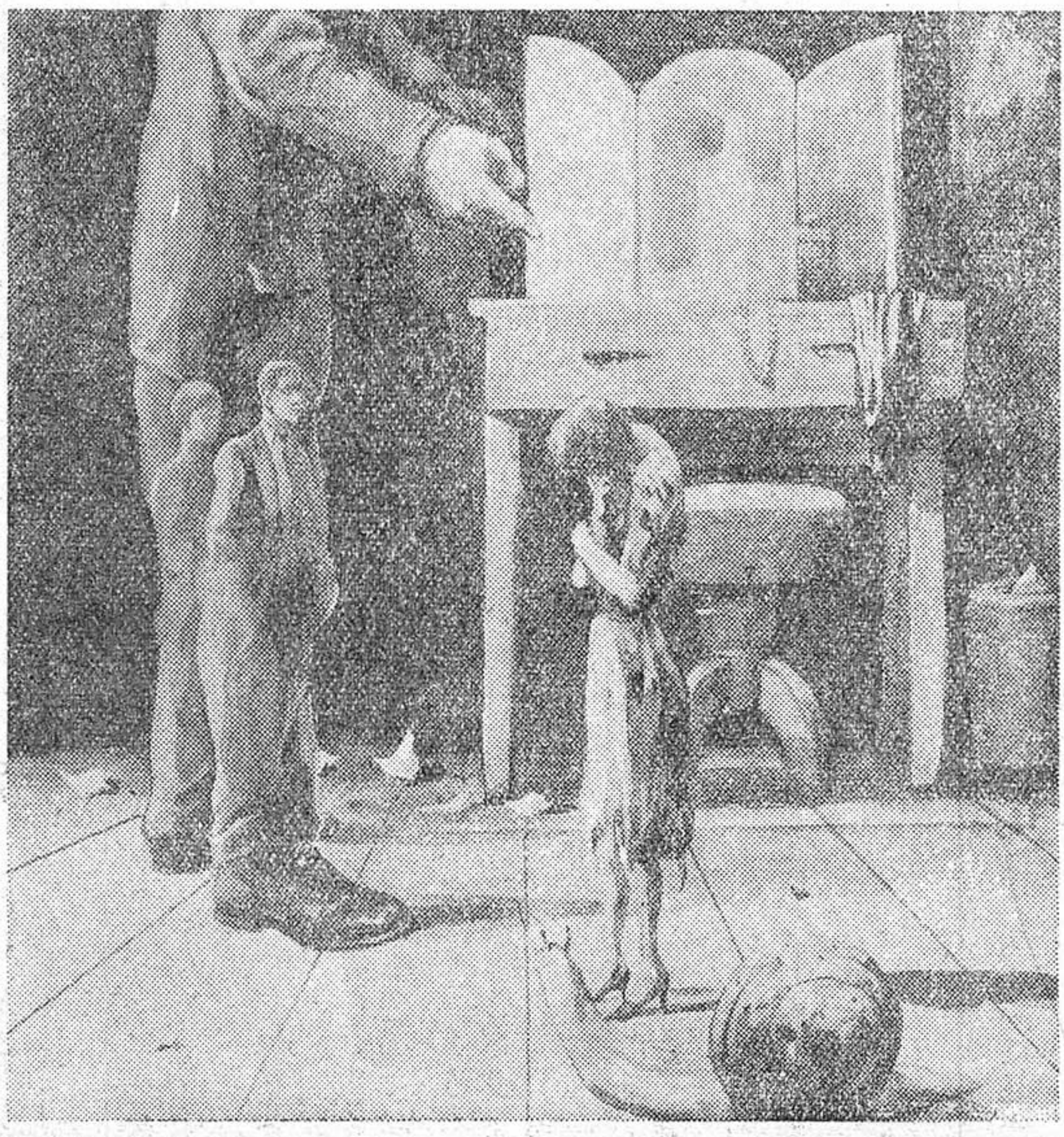
振替・東京 10756 (久保書店宛)

枚一枚に唇を押しあてて行った。
和枝には、眼の前にばらまかれたチリ紙はすでに白い花以外の何物でもなかった。
手にとってもてあそび、愛撫して、両手に持ち上げてハラハラとまき散らす。
深夜、薄暗い電灯の下で、白いチリ紙と戯れている和枝の姿は、外国の物語によくある月のない夜に無人の廃園で饗宴の酒に踊り狂うという妖精のそれに似ていた。
こうして、和枝が天路めぐみの楽屋を訪れるのは彼女の日課のようになってしまった。行くたびに、天路めぐみの眼を盗んでは、彼女の汚したチリ紙を掠めて持ち帰った。
こんな行為をくり返して行くうちに、和枝は独り天路めぐみのチリ紙だけでは満足できなくなっていった。ファンたちがスターのサインを集めるのと同じ心理で、いつか、和枝は他のスターたちの汚したチリ紙も蒐集するようになっていた。
五月輝子、西条由美、江戸川滝乃……いずれも、男装スターのものばかりである。
一日ねばっても、何も得られない日もあれば、持ち帰れないくらいの収穫のある日もあった。
和枝の部屋は完全に、それらのスターたちのチリ紙で埋めつくされた。
和枝にはそれのスターたちに分けられ千羽鶴のように糸に通して天井から吊したりレイのように輪をこしらえて部屋を飾った。
深夜になると、そのチリ紙に包まれた御殿の中で、和枝の狂宴が始まるのだった。
チリ紙の上を素ッ裸で転がったり、チリ紙で身体をすっぽり埋めたりするのである。

盗難容疑

そうした、ある日——。
和枝は例によって天路めぐみの楽屋に尋ねた。あいにく、出番で彼女はそこにいなかった。もちろん、付人の真弓もいない。和枝は誰もいない部屋に上り込んだ。天路めぐみの熱心なファンとして、もう誰からも怪しまれなくなっていたのである。
和枝は屑籠を覗き込んだ。
ある……。ハナをかんだのか、痰を吐いたのか、チリ紙は大部溜っていた。
ところが、そこでは大変な事件がもち上っていた。一歩、その部屋に踏み込んだ和枝を指して、真弓の鋭い声がとんだ。
「この人です。私が戻って来る前にここにいたのは……」
突きさすような視線が和枝に集っている。
天路めぐみ、三枝女史、劇場支配人、柳本の姿もある。
やっと、最後の一枚をしまい込んで、ブラウスのボタンをはめ終った時、真弓が入って来た。
最初逢った時から好意的でない真弓は、和枝に白い眼を向けた。和枝はその視線をはね返すように見返して部屋を出た。
ステージのフィナーレまで、和枝は舞台の袖に立ってスターたちの熱演を見入っていた。フィナーレでスターたちが舞台から挨拶を送ると、客席の若いファンたちからわッという嬌声があがる。
かつて、和枝も客席から声援を送っていたファンの一人だったのだ。それが今では、自由に楽屋の出入りが許されている……。
(全く、夢みたいだ……)
和枝はふっと微苦笑を洩らしながら、天路めぐみの楽屋へ引き返した。

ただならぬ雰囲気がその場を包んでいた。
「ちょっと、ここに座ンなさい」
天路めぐみが静かにいった。激情を押し殺したおそろしい声だった。
何のことかわからない。いぶかって、和枝は天路めぐみの前に座った。
「私は君を信用してたンだ……それなのに、よく私の信頼を裏切るようなことをしてくれましたね」
語尾がかすかにふるえている。神経質に眉がピリピリと動いた。そうした天路めぐみを見返して、和枝はためらいながらいった。
「一体、何をしたとおっしゃるンでしょう?」
「白っぱくれちゃいかん！　返したまえ」
どなったのは劇場支配人だ。
「返すって、何をです?」
和枝にはサッパリわからないことだった。
「指輪よ、ダイヤの……天路さんの大事にしてた……」
棘々しい声でいったのは三枝女史である。和枝も知っている。三十万はする天路めぐみ自慢のダイヤの指輪……和枝も知っている。三十万はする天路めぐみ自慢の指輪だった。
今、それがなくなって、和枝に容疑がかっているのだ。
(そんなバカな……！)

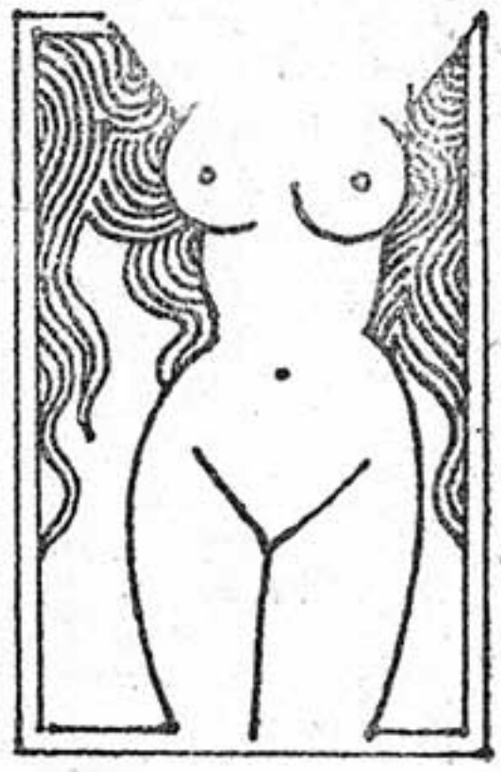


和枝は真ッ赤になって抗議した。
「あんまりです！　私じゃありません」
「今成君、悪いことはいわない。出来心だと思うが正直に戻してくれないか……君を天路さんに紹介した手前、責任が僕にもあるんでな……」
柳本が珍らしくショボショボした声で、和枝に哀願した。
「柳本さん、信じてください。私じゃありません。私は確かにこの部屋に独りでいましたけど、人の物に黙って手をつけるような破廉恥な真似は絶対にしません！」
和枝の声は口惜しさにふるえている。
「信じてください、天路先生……本当に、私じゃないんです」
和枝は激しく天路めぐみを見詰めた、
「嘘おっしゃい！」
そういって、口許に冷笑を浮べた真弓が、和枝を見すえた。天路めぐみたちも、ハッキリ和枝を疑っているような眼を向けている。
「証拠があるンでしょうか、私が盗ったとでもいう……」
和枝はオロオロしながら一同を見廻した。
「あるわ！」
真弓はキッパリと言い切った。
そして、手をあげると人差指で、和枝の胸許を指した。
「そこに何を隠したのよ」
チリ紙を盗んだことがバレて、みんなから軽蔑されたくないし、それに……。
容易に頭をあげない和枝を見て、真弓が誇らしげにいった。
「ほらごらんなさい……先生、やっぱり犯人はこの人よ。だから、あんまり親しくしちゃいけませんていったでしょう？」
真弓の甘ったれたような声――。和枝は無性に腹が立った。
なぜ、真弓はこうも和枝を攻撃するのだろう？……
和枝は盗った覚えはない。あるとすれば、彼女がこの部屋へ入る前に誰かが来て盗んで行ったか、彼女が出て行った後で入った誰かの仕業ということになる。
真犯人を探し出して、五人の眼の前に突き出してやりたい、和枝はそう思った。
しかし、そんな余裕はない。
今、和枝がしなければならないのは、自分の身の潔白を証明したらどう？」
そういって、三枝女史は眼を細めた。
「ね、今成君……君が本当に犯人じゃないンなら、どうだろう……天路さんの前で裸になっちゃ……私たちは男だからね、遠慮するけど……裸になれるね？」
和枝は唇を噛んだ。
ハッと眼を伏せて、和枝はどうしても裸になることができないのだ。

どもりながら、柳本はそういった。
和枝は顔をあげると、ゆっくり、彼女を取り巻いている五人を眺めた。
真弓は相変らずさむような眼を向けていた。和枝は挑戦するように見返した。

裸になります

和枝は視線を天路めぐみに戻した。
「先生、私、裸になります」
ざわめきが五人の間から起った。
「柳本さんも、支配人もここにいてください その代り、どんなことが起きてもおどろかないと約束していただきたいンです……」
五つの顔がうなずいた。
「天路先生、私は先生が死ぬほど好きだったから、素顔の先生とお話がしたかったンです。一眼でいいから先生の姿を見て満足してりゃよかったンだけど……でも、こんなことになるンだったら、客席から先生に逢ってしまうと思います――」
そういいながら、和枝は静かにブラウスのボタンをはずし始めた。
スカートを脱ぐ。
スリップに手がかかった。
五人の眼が吸い着いたように、和枝のゆっくりした動作を見守っている。
ゴクリと、柳本は思わず唾を飲み込んで、首筋の汗を拭った。
(あッ!……)
和枝が最後の下着を脱いだ時、五人の間から、溜息とも、うめきとも知れぬ声が洩れた。
和枝の胸許から、一同の前に丸められたチリ紙が、花のようにこぼれ落ちたからだ。
いや、それだけではない。
下着を脱いだ和枝の胸は、板のように平らなのだ。
こんもりと盛り上った乳房はない!
「すいません!……」
ワッと泣き崩れたのは真弓だった。
やがて、冷静を取り戻した真弓は、和枝をこにもなかったように指輪を盗んだと自白した。
陥し入れるために指輪を盗んだと自白した。
この事件以来、今成和枝、いや、和夫の姿は二度と浅草大劇場の楽屋に現われなくなった。スターの汚したチリ紙を蒐集しているということがバレて、恥かしくなったのであろうか?
その推察は当っていないようだ。
なぜなら、和夫は相変らず女装して、今度は撮影所へ現われたのだ。グラマー女優の後を追い廻して、その女優の捨てたチリ紙を蒐集しているという。
そんな噂を耳にしたが、筆者はその後の彼にまだ逢ってしてください……でも、これだけは信じてください、指輪を盗ったのは絶対に僕ではありません。僕が来る前にこの部屋へ入った者か僕の後にやって来た人が盗ったンだと思いま す……」
和枝はそういって、一同を眺め廻した。
真弓と視線が合った。うろたえて視線を泳がした真弓には、もうさっきまでの元気がどこにもなかった。



読者短評

◎待望の二月号拝受本当にありがとう存じました。

表紙のすばらしさに先ず眼を奪われました。毎号工夫をこらしておられるのを感心していたのですが、今月号のしぶい色調が、凄婉な女のポーズや顔とよくマッチしていて正に傑作といえます。作品では「鉄瓶の中の赤ん坊」と「黒髪を織る兵隊」を先ず読みましたが、期待を裏切らず面白いものでした。九月号の短評で裏窓の小説をどうして東映あたりが映画化しないのかという人がいましたが、お世辞ぬきに小生もそう思うと一言申したいのです。

飯田豊吉氏の時代物などさしずめ最初にそうあるべき作品ではないでしょうか。それ程裏窓誌の中には単に「アブ」だけでない立派な作品が揃っていると思うのです。他誌によく見る流行を追っているような上べだけは大家ぶった浅薄さがないことに大変好感が持てるのです。

右又々くどくどと書いてしまいましたがお礼かたがた、失礼しました。（静岡・R・Sより）

◎新年号は「美女密使」がよかったと思います。甲冑と女体とのきしみが聞えて来そうな本文さし絵の出来ばえです。こうしたアイデアのものが欲しいと前から思っていたところでした。登場人物がみんなはつらつとしているので、カラッとした後味が残りました。

表紙はこの頃、一月おき位にすばらしい出来です。すつかり見とれましたが、新年号に四十七士の討入りは少し変ですね。少し発行を急ぎ過ぎるからではないでしょうか？　このまま出し続けて、一冊だけ特別号として数えなければ、発行日を変えないで、月の数を一つへらすことが出来、このようなずれは発生しなくなると思いますけれど……

毎月発表されるカラー・ヌード、期待しています。

（文京区・かおる）

◎新年号は前月号よりも一段と水準を高めながら、惜しいことには文学という文字に拘泥し過ぎた。もっと自由奔放な肉欲の喜びを描写するか、あるいは救いを与えて欲しかった。個別的には仇討修羅道は本格的な文学作品で、史実といい、筋といいただ感服の外はないが、欲をいえばもっと微細なところまで描写すべきだった。

お雪さんの乳房は、慕情の人妻が遊女に堕ちた境遇に同情しながらも、彼女を買う青年の立場に拍手したい。軍鶏屋敷異変受難桜、比丘尼忠臣蔵、魔像屋敷、東京の顔の名篇は、絵、文ともに面白いが、結果が略同じになるのはどういうものか。大穴のないのが難点だ。

隅の鬼が体にさわるは、生理の真実を追求している態度に共感を覚えた。（京都　異端者）

◎二月号裏窓を拝見しました本号はグラビアヌード傑作選は非常に今迄に無い物を暗示して居り、デコラチブヌードとして目をひきました。又海外フォートの鮮明キャビネ版で紹介され、悦虐絵物語共々楽しく拝見しました。読物の内容もSの物ばかりでなく〝美貴の矯正室〟の様な M的な物も加わり、大変広い意味でのアブ読物が掲載されていることは、一つの進歩といえましょう。又茨城（粟野正様）裏窓も愛読されていること思います、ぜひ御連絡下さいませんか。私も同様貴方様 Teeth のフエティシズムももっており又フォートも希望されておるのもありますのでぜひ御連絡下さい。読者短評にはもっと書き度いこともありますがあまり一人で長々と書くことは他の方々の

読者短評

投稿もあることでしょうからごく簡単に致しておきます。来春も裏窓編集部の皆様又愛読者の皆さんで只一つの雑誌裏窓をより良きものに致し度いと思っております。今後の発展を心より願っております。

（板橋区　岡本敬）

◎小生は、以前からの大の裏窓ファンです。さて二月号、女隠密・女スパイ特集で、特に良かった小説で中林先生の「隠密釣天井」と篁文彦先生の「足に惹かれる」豊田先生の「暗黒街の女猫」と南村先生の「美貴の矯正室」これは女性がSで男性がMと言ううまく出来ている作品でした。竹谷先生の作品は久々によみました。ここで一まず編集部の皆さんにおねがい。「あ」る美容体操」と「悦虐絵物語」はこれからずうっとつづけて下さい。それとさしえですが、このごろハイライトばんで書いて下さってるのに小生感謝いたします。裏窓は小生たちの本ですから他の広告はいっさいのせないで下さい。編集部の皆さんの御健闘をいのります。

（宮城・良）

◎二月号では、鉄瓶の中の赤ん坊――の奇妙な味に、まず感心させられました。この作者のものは、毎回こんな風に、変った味が楽しめますので、いつも第一番に読むことにしておりますが、期待を裏切らぬ出来栄えです。

つぎに読んだのは、これも毎回楽しみにしている――黒髪もの――「黒髪を織る兵隊」の㈡でした。これは裏窓ならではの作品でしょう。作者の黒髪に対する愛着……執念、とでもいうような心情が字間の中から、火のように感じられます。今後もこういう作品をお願いしたいものです。終りに、裏窓の発展を祈ります。

（京都・岡田）

◎はじめて投書します。二月号を読んで、つい筆をとる気になりました。編集部の皆様、没にしないで下さい。ある美容体操……これは、是非今後も続けて下さい。このページだけで、私は一冊買う気になるでしょう。といったからって、他の読物がみんなダメというのではないのです。ただ、鬼哭妙国寺や、女間諜暗躍譚なぞは、頭の悪い私には、むずかしい漢字が出てきてどうも弱ります。もう少し、わかりやすく出来ないものでしょうか。いきなり注文ばかりですが、でも、ほかのものは結構楽しんで読ませていただいております。

（秋田・S）

◎新年号の珠玉集、そして二月号のボリュームに、まず楽しくなりました。美容体操が美しい写真になったことが、まず第一の喜びです。欲をいってはきりがありませんけど、もしアート写真に出来たらどんなにいいでしょう。――と思っているんですが……。

読物の中では、「夜霧の中で……」の乳房の烙印に、ツーンと来るものをまず感じ、話には聞いた事があっても、よく知らなかった堺事件――あの凄烈な土佐藩士の切腹の話を詳しく読むことが出来、まるで眼前に見る思いがしました。両先生の今後の活躍を期待します。

（中野・大村）

◎「黒髪を織る兵隊」は本当にゾクゾクするほど面白かった作品です。それと「足に懸かれる」もよかったと思います。

女性の全体ではなくて髪とか足とか、そういった部分だけの美しさが生き生きと書かれていて、その上、その部分の持主の心情がまつわって主人公に働きかけてくるのです。欲をいえば長い長い黒髪の主が「足」の女性のように驕慢な女王タイプの女である作品をお願いしたいと思います。私はまだ裏窓を読みはじめて日が浅いので、志摩不二先生のほかの作品に、そういうのがあるのかどうか知りませんが、あったらぜひ読みたいと思います。

（名古屋・梅本）

◎私は中康弘通先生の悲愴美の世界が好きですが、最近の武士の切腹ものよりも、美女、美少年が花の盛りを無残にも自刃して行くふうなものを期待します白虎隊や会津娘子軍など、大変心を打たれて読みました。裏窓の発展を祈ります（千葉・K）

◎御投稿はこの他にも多くありますが、スペースの関係で掲載できませんでしたことをお詫びします。住所をお書きにならない方は没に致します。

この号に掲載しました方には本誌35年四月号と薄謝をお送り致します。御投稿の場合は誌上匿名は御自由ですが必ず御住所氏名はお書き添え下さい。（係）

やくざ仁義
浅太郎しぐれ

古国沢隆 正英生・画



猜疑

忠治は近頃、腹の立つ事ばかりだった。

三郡の百姓を救う大義名分の下に、代官との交渉を始めたのはいいが、やくざにこうした政治的な駈引は不向だったのだ。腹立ちまぎれに思わず小松五郎を抜いて、一刀のもとに代官を斬ったあと、

「しまった！」

と思ったが後の祭、赤城へ籠る破目になったが、それから先、する事なす事みんな忠治の裏をかくような結果が出るのだ。

昨夜もそうだった。

義重山新田寺、太田の大光院へ忍び込んだ。金蔵から、千両箱を小脇に、庫裏―納所―書院―客殿と摺り足で、外廊下の欄干を越えれば庭から裏山伝い――

重ねてりんとした声が夜気を貫ぬく。気魄が忠治の足を、金縛りにする。

「へい、申しわけございません。ちと、願いの筋がございまして……」

覚悟をきめると、案外すらすらと言葉が出る。だが体中は、この夜寒に汗びっしょり。

「願いとあらば聞こう。こちらへ来なされ」

回廊を半回りすると、西口から本堂へ入った。畳際に千両箱を置いてぴたりと座る。

須弥壇の前に端座している僧は、本尊に向った姿勢のまま、

「お主、ただの物盗りでないな」

「へえ、手前生国は佐位郡国定……」

「いや、名を問うているのではない。阿堵物が、何の為に要り用かな」

「実は三郡二十五ケ村の、民百姓を救う為」

「なるほど、三年続きの飢饉は儂も聞き及んでいる。それを、お主が、救おうとての――



かび臭い土蔵の地下室に、湯文字一枚の女たちが八人！地獄の使者の到来を恐怖の胸で待っている

してお主、何ゆえ、当山を頼って参ったかの」
「恐れながら、百姓町人の財貨は、みなその者たちの努力の賜物。みだりに侵すことはできやせん」
「当山の財は、不労の宝と、言わるるか」
「いや、そうは思いやせんが、人を助けるのが仏の道と聞いておりやす。あまたの浄財も蔵で眠るより、外で生き働いてこそ、真の浄財……そう考えました故」
「眠る浄財を、目覚めさせる、か。じゃが、それで民百姓が、永久に救われようかな」
「何とおっしゃいやす」
「今年はそれで救われようが、来年、再来年に、もし飢饉が重なったらどうなる。末稍の事に追われて、生きる根本を見失ってはおるまいか。土地を豊かに、旱魃にも長雨にも耐え得る方法を考え、教えてやってこそ、百姓たちの救い主といわるる。地味な仕事じゃ。阿堵物をまき散らすなど、単に一時のがれ。それに、悪く考えれば、お主の人気取りとも思えよう」
濡れ雑巾で顔を逆撫でされるような言葉に忠治はハッとうつむいた。はっきりいわれて見ると、多分にそんないい気になりたがっていた事が、改めて反省されるのだ。代官斬りもそうだし、今夜の事もそうだ。国定忠治という看板を、いかに誇大に宣伝しようか、その為にはどんな手段をも選ばない、そんな気持が、心の隅に、考えて見れば確かにあった。
「人の上に立って事を行うには、八方美人になれとは言わぬが、よくあとさきを心得て、人に疑念を持たれぬよう、心掛けねばならぬ

得てして小人は、猜疑の強いものでの」

負けた。いながらにして忠治の行動を見透しているかのようなこの僧は、訓戒が終ると静かに経を誦え始めた。瞻矚と廊下へ出る忠治の背へ、

「待て、そこに置いてあるもの、どうする」

「……」

「眠る浄財、生かして使え。この龍誉が寄進しよう」

思わずペタッと廊下へ腰をつく忠治に、

「一時押えの虫封じ、当山のまじないじゃがないよりはましじゃろ。帰りは裏山から金龍寺、浅間（せんげん）山から鶴生田までは当山朱引用じゃ。心して行けよ」

ピリピリ……

呼子笛が鳴った。

太田を真北に抜けて、如来堂から天王宿、大間々宿に入る十町ばかりの所だ。

予期しなかった事態ではない。八州役人が鵜の目鷹の目で忠治を追い回しているのだ。代官斬り以後どこにも網は張られている。

が、今夜はまずい。小脇に掻込んだ千両箱の重みが、次第に加わってきた頃だ。

右は渡良瀬の渕が夜目に黒々と横たわっている。左は小山一つを突切れば平地へ出るのだが、捕吏はその方面の固めを厳重にしているらしい。

「畜生ッ、荷物さえなけりゃあ――」

包囲がだんだん狭められる。

「あそこだッ」

「おーい、いたぞうッ」

仕方ねえ、渡良瀬を乗切って向う岸へ逃れよう。パラパラ飛んでくる六尺棒を交しながら、熊笹の崖を降りると、川原までは六間あまり、忠治腹巻を解いて箱を背負おうとした時――。

「おーい。忠治は川へ逃げたぞう」

「大丈夫！　三室の勘助が控えてるぞう。川は滅多に渡しゃあしねえ。それより、相生へ抜ける道を気いつけろ、あそこを手薄にしちゃあなんねえぞう」

闇を透かすと、川原に一艘。三室の勘助一家が川沿いを守っているらしい。

勘助は浅太郎の伯父だが、十手捕縄を預っている以上、役目の上では忠治の敵に回ってもいつか（俺の跡目はお前にやるぜ）といった事があり、事実、無事平穏だったら今頃、浅太郎が二代目になっていたかも知れない。

助と争いたくはない。間違えば、俺が捕まるか勘助が斬られるかの結果が出る。そう思うと忠治は、今降りた崖をよじ登って、パッと捕方の主力に正面からぶつかって行った。

それからは無我夢中、暴れまくって、斬りまくって、ようやく血路を開いて大胡へ走った。乾分の専六の家を叩き起して、ひとまず休んだのが明け方。その昼頃、出掛けに、

「親分、ゆんべの捕方に、勘助も出張ってたでやんしょう」と専六が聞く。

「そりゃあ、奴も役目だもの」

「ところで話は違いやすが、千貫沼のお染、ありゃあ勘助の姪ですが、近頃、身内の誰かと、いい仲んなっているとしたら……」

「何だか判じ物みてえな話だが」

「浅太郎とは従兄妹同志、それに、親分がもし、もしですよ、いなくなるような事があったら、一家の跡式は、どうなりやす？」

勘助とお染、浅太郎と、連絡をつけて見ると、朧ろ気ながら専六のいうことの輪郭が、忠治の頭の中で組立てられる。（まさか）と打消して三代沢へ立ったのだが、途々、よく考えると思い当る節がないでもない。浅太郎に

忠治の正面に回った態度が。そして今までにない真剣さで（三室の勘助が控えてるぞう。川は滅多に渡しゃあしねえ）と叫んだ声！

「誰も彼も、何も彼も、俺を見限っているような気がする。落ち目になっても国定忠治、まだ上州一の貫録は失せねえぞッ」

千両箱の重味を背にして、誰もいない街道で独り言を吐いて見たが、ひょっと浮んだ龍誉和尚に（人の上に立って事を行うには、八方美人になれとはいわぬが、よくあとさきを心得て、人に疑念を持たれぬよう、心掛けねばならぬ。得てして小人は、猜疑の強いものでの）と訓された言葉——。ヘッ、この俺も猜疑の強い小人の部類か、自分自身にさえ無性に腹が立ってくるのだ。やりきれなかった。

難題

三夜沢の赤城神社、拝殿を背にして忠治、半円を作った乾分たちの前に、

「これで二十五ケ村が少しでも息がつける。いいか、めいめい、夜に入ったら山を下り、各村の名主総代へ、この金を渡すんだ」

千両箱から小判を分配して、おのおのにいいつける。分配が絡ると、乾分たちは腰を上げ、隠れ家へ戻りかけた。

「親分、この浅太郎にはいいづらい事だ、御用はねえんですかい」

円蔵と、頑鉄だけが残っていた。晩秋の斜陽を背に、浅太郎はけげんな面持だ。

「うん、お前には、ほかに用がある。ちょっとむずかしい事だが、三室の勘助を、首にしてきて貰えるかな」

ズバリ、いい切って、忠治はいやな気持だった。昨夜、乱闘の場で顔を合わせたくなかったはずの勘助を、甥に殺させようというのだ。

自分ひとりの考えじゃあない。円蔵も、頑鉄も、話をすると（俺もそんな懸念を持っていた）というのだ。それに勇気づけられていい出した言葉だ。

「え!?　伯父貴を首に——そりゃ、どんな訳で、しかも、このあっしに……」

「いわなくっても、覚えがあるはず」

「何が何だかわからねえが、事と次第によっちゃあ、どんないいつけも厭いやせん。ひとまずその訳を聞かしておくんなさい」

浅太郎には寝耳に水、日頃物わかりのいいやくざの世界の浅ましさかと、気太郎はしみじみ感じた。堅気になろう。堅気になろう。幾度も思いながら、忠治の人柄に惚れ込んで、つい足を抜く機会がなくなっていた自分が馬鹿だったのだ。

理非の区別のない掟に生きる稼業、それがやくざの正体なのだ。勘助の首を打って戻れば疑いは晴れる。だが首になった勘助は再び生きてかえらない。それも、手塩にかけてわ

「親分には、御用はねえんですかい」

円蔵と、頑鉄だけが残っていた。晩秋の斜陽を背に、浅太郎はけげんな面持だ。

「うん、お前には、ほかに用がある。ちょっとむずかしい事だが、三室の勘助を、首にしてきて貰えるかな」

ズバリ、いい切って、忠治はいやな気持だった。昨夜、乱闘の場で顔を合わせたくなかったはずの勘助を、甥に殺させようというのだ。

自分ひとりの考えじゃあない。円蔵も、頑鉄も、話をすると（俺もそんな懸念を持っていた）というのだ。それに勇気づけられていい出した言葉だ。

「え!?　伯父貴を首に——そりゃ、どんな訳で、しかも、このあっしに……」

「いわなくっても、覚えがあるはず」

「何が何だかわからねえが、事と次第によっちゃあ、どんないいつけも厭いやせん。ひとまずその訳を聞かしておくんなさい」

浅太郎には寝耳に水、日頃物わかりのいいやくざの世界の浅ましさかと、気太郎はしみじみ感じた。堅気になろう。堅気になろう。幾度も思いながら、忠治の人柄に惚れ込んで、つい足を抜く機会がなくなっていた自分が馬鹿だったのだ。

理非の区別のない掟に生きる稼業、それがやくざの正体なのだ。勘助の首を打って戻れば疑いは晴れる。だが首になった勘助は再び生きてかえらない。それも、手塩にかけてわ

が子同然に育てられた俺に、首を打てというむごい命令、親分も近頃、すっかり人柄が変ったなあ――。

よし、男を捨てよう。どうせ満足に死ねねえ体だ。勘助親子を他国へ落し、申し訳にはこの命一つ投げ出せば済むことだ。それが俺の精一杯のやくざの掟に対する抗議なんだ。心の中でそう決めると、無言で取巻く円蔵、頑鉄を流し目に、正面の忠治にぴったりと視線を据えた。

「致し方ござんせん。いかにも浅太郎、小斎村へ出向きましょう」

チラ、と捨身の嘘に心が痛んだ。気を取直して立上ると、くるり背を返して、足早に鳥居をくぐり抜け、入陽の畠道を南に走った。

お染は座敷へ入るなり、はっ、と顔色を変えた。

「フフフ。浅太郎でなくって、気の毒だったな」

盃を手に、大胡の専六が、好色そうな目を細めて、池に面した出窓に腰を下している。

不吉な胸騒ぎが、形のいい双の隆起の下で躍ってきた。

「ま、一杯やろう」

坐り直した専六は、盃を出しながら、蛇のような眼差しでお染の体をねめ回す。そっと寒気がするほど、気味悪い目の光だ。

「今夜は、大変な話があって、お前を呼んだんだ。ひょっとすると、浅太郎の命にもかかわる話だ」

「えっ、浅さんの命？」

「うん。実はな、浅と勘助と、お前とがぐるになって、国定一家乗っ取りの疑いが、かかってるんだ」

「まあ……そんな恐ろしい事が……」

十八のおぼこ娘、鮒料理笹屋のお染は、きゅっと顔をこわばらせる。血の気の引いた頬は灯影にいっそうなまめかしい。

実はこうこう……。と専六の話は虚実取り混ぜて、自分に都合よく仕立ててあるのだが初めて聞くお染には、胸を塞がれるような意外な事柄ばかりだ。

「で、勘助は浅が首にする。浅はまだもう一つの疑いが解けねえうちは、命が危ねえ」

「もう一つの疑いとは？」

「それは、お前の事さ」

あまりの話に前後を忘れて、知らず知らず膳の上へ乗り出すお染の、白魚のような指を太い掌の中で弄びつつ、専六は言葉を続ける。

「つまり、お前と浅の仲が、切れたら、浅の疑いは晴れるわけだ」

従兄妹同志の幼馴染、まだ体を許しはしないにせよ、末は夫婦と固く契った二人だ。堅気になって共稼ぎ、そんな夢を小さい心に描いていたお染だ。簡単に別れる切れるという訳にはいかない。

（でも、浅さんの命にかかわることなら）

別れなくてはならない。やくざの掟が、こんなところにまで、ひびを入れるとは、今日まで思っても見なかった。ほろり、泪が梅花散らしの小紋にこぼれる。

「浅さんと、別れれば、浅さん、助かりますか」

「別れるか」

「ええ……辛いけど仕方ありません」

「だが、ただ別れたじゃあ、親分たちへ証拠にならねえぜ」

「どうすれば、浅さんの命が助かります？」

「その方法はな――」

ぐっと握られた手を引張られて、お染は体の中心を失い、専六の懐へ飛び込んだ形で、

「あっ」

身を引こうとするのを、男の腕力で押えつ

けられた。
「他の男を持つ、それが浅を助ける唯一の方法だが、どうだ。俺もまんざら、悪いようにはしないが……」
「放してください。あれッ」
裾が乱れる、衣紋がゆるむ。
「どうだ、うんといえ、浅の命の瀬戸際だ」
抵抗に腥もあらわな女体を、胸元に引寄せると、酒臭いい中にもえもいわれぬ香りが、欲情をますますたかぶらせる。
「あっ、そんな！」
荒々しい手が、誰にも触れさせた事のない谷間へ、羞恥と嫌悪に身を悶えさせるのもかまわず、にたッと歪めた分厚い紫色の唇が迫ってくる。
「ああ……」
左右に顔を振って、鋭峰を避けるのが精一杯の抵抗だが、か弱い女の力、次第に抵抗意識が衰える。
ぜひもなさ——。
荒々しく、帯や着物を剝がされる。長襦袢一つだ。ゴロリ、と投げ出して、舌なめずりをする専六は、人間というより、オスの野獣なのだ。半殺しの鼠を弄ぶ猫の様に、らんらんと情欲の炎が目の底に燃えている。
ツツ……
猿臂を伸ばして、失心状態にあるお染の懐を探る。
とたん、ガラッ、と合の襖が開かれて、
「やい専六、手前の筋書あ、みんな読めたぞッ。おおかたこんな事だろうと思っていた」
「あっ、親分！」
「何が親分だ。荒砥の権太と共謀で、国定一家に仲間割れを起し、縄張りを横取りする手筈、みんな調べ済みだ」
「えっ、そいつを知られちゃあ」
ガッ、と跳飛ばす煙草盆を、肩先に流し、
「うぬッ！」
小松五郎がさっと鞘走った。
「わあッ」

ドサリ、倒れた物音に、ようやく意識を取戻したお染が、上半身を起す。

「あ、あなたは、親分ー」

胸や裾の乱れを直して、立上ろうとした目の先は、唐くれないの血しぶき――。

「あれっ――」

取りすがるお染に、忠治は優しく、しかも緊迫した口調で、

「おうお染、この場は間に合ってよかったが気になるのは浅と勘助。よしない俺の心の迷いから、浅に無理難題を吹っかけたが、二人の潔白のあかしは立った」

「では、浅さん、助かるんですか」

「助かるも助からねえもねえが、ひょっとすると今夜のうち、浅か勘助、どっちかが命を捨てるかも知れねえ」

「ひえッ、そりゃどうして……」

「浅は勘助を逃がして、手前で腹あ切るつもり、勘助は浅の男を立てたさ。だがどっちもそんな心配はいらなくなったんだ。訳を知らずに犬死させちゃあならねえ。お染、お前駕籠で一っ走り、小斎村へ駈付けて、浅や勘助に、疑った忠治が悪かったと、いってくんねえか。早くしねえと、どっちかの命にかかわる事だ」

お染はすぐに駕籠を飛ばして小斎村へ、夜風を切ってひたひたと急ぐ。二人の命が、この駕籠が着くまで、どうか無事でいてくれるようにと祈りながら――。

義理

「お前の来た用件は、いわずとも知れてる。この勘助の首を、親分が取ってこい、というのだろう」

三室の勘助は、囲炉裏の残り火を掻き寄せる手を休めず、静かな口調で、浅太郎のいい出しかねる話の核心を、日常茶飯事の如くあっさりというのだ。勘太郎は昼の遊びに疲れ納戸で軽い寝息を立てている。

「感違いといっても通らねえ世界の事だ。いわけめいた事はいいたくはねえが、昨夜の大間々の一件な。どうにかして親分をお助けしてえと、ちょうど近くに親分が降りてきたのを幸いに、勘助の船がここにいると、それとなく知らせたつもりの名乗りを、逆にとられたんだ。人間は誰でも見込み違いってもんがある。しかし善意でしても、結果が悪く出たら、潔よく、その始末をしなきゃあならねえ。それが、やくざばかりじゃあねえ、男の掟だ。俺あ、お前が入ってきた時から、覚悟していたよ」

「そりゃあ伯父貴、悪い考えだ。なるほど、俺あ親分にいいつかってきたが、親同様の伯父貴に向ける刃は持合せがねえ。それよりいっその事、勘太郎と一緒に、ほとぼりの冷めるまで、他国へ退いちゃあ、と途々考えてきたんだが」

「そうしたら、お前はどうなる？」

「え！　いや、俺あどうにでもなるさ。心配しねえで、そうしてくんな」

「浅、お前、死ぬ気で俺に、他国をすすめるんだな」

勘助は居ずまいを直すと、さとくも浅太郎の心中を読み取って、そういうや否や、懐の七首を素早く抜いて、わが腹へ突立てようとする。囲炉裏を飛越して手元を押え、

「早まっちゃあいけねえ伯父貴、俺のいう事も一通り聞いてくれ。倚も今日という今日、つくづくやくざに愛想が尽きたんだ」

七首をもぎ取り、なおも語り続ける浅太郎どうで畳の上で死ねない体、わが身一つを捨てて育ての親に報いる恩義と、熱涙こめた言葉に、なおさらどうにかしてこの甥の命を助ける手段を、勘助の老いの胸に、あれこれと考え浮ばせる。

「浅、お前いま（男を捨てる）といったな」
「へえ。男を捨て命を捨てる覚悟でいやす」
「その、男を捨てて命を捨てずに済む方法があるんだが」
「……」
「俺たちと一緒に他国へ行く。落ち目になった国定一家を見限った卑怯者と、わらいそしられても、お前がじっと我慢してくれりゃあ俺たち親子も、恥を忍んで生き永らえる。どうしてもできねえというんなら、俺と勘太郎を首にして、赤城へ帰んな」
どっちにしても、忠治のいいつけ以上の難題だった。伯父を殺して男を立てるか、男を捨てて伯父を救うか、自分の犠牲によって伯父が救われれば結着はつくが、いったん腹を見透かされた今となっては、この二つのどちらかより方法がないのだ。
囲炉裏の火はもう乏しくなって、隙間風がひんやりと襟元を過ぎる。
「伯父貴の言葉通り、一緒に他国と決めやしょう」よんどころないが、安心させるためにはそう返事するほかはなかった。一、二日旅をして親子を他国領へ送り、道を撒いて赤城へ戻って、立派に腹を切ろう、と考えたのだ。
「そうか、よく決心してくれた。もうこれで安心して寝られる。細かい事は明日にして、浅、お前も早く寝な」
肩を叩いて勘助は立上ると、囲炉裏の傍へ煎餅布団を敷き出した。納戸の、勘太郎の寝ている布団にもぐり込んで、浅太郎は緊張を解いた疲れに、直ぐさま眠りに落ちる。
ドサッ！
不意の物音にがばと跳起きた浅太郎、障子をあけて表の間へ……
「ややッ、伯父御、こりゃ一体、どうした訳なんだッ」
古机に線香が一本、その前にさっきの匕首でみごとに腹を掻切っている勘助、畳の上は流れ出る血潮の真赤な海——。
「伯父貴、しっかりしてくれ、何だってこんな早まった事を……」
抱き起して、鷲摑みにした両肩をゆすると気がついたのか、苦痛に歪んだ顔を僅かに動かし、
「い、いさいは……あれに……親分に……も……た、の……む……」
ややたって、涙に濡れた顔を上げ、
「浅さん、親分の疑いは、晴れたんだよ。妾は二人の命を助けたさ、急いで駈けつけたんだけど——とうとう問に合わなかったんだね」
そうか。疑いは晴れたか。でも伯父貴は死んでしまった。一体この先は、どうなるんだ。
やくざの冷酷なしきたり、掟も、こんなつまらねえ些細なことで、人一人の命を雑作なく

奪っちまうんだ。

「お染、俺あ、つくづくやくざが嫌んなったよ。山へ帰って親分にこの事を報らせたら、暇を貰って堅気になる。勘坊と三人で、三文商いの共稼ぎでも、改めて出直すんだ。それが伯父貴にはいい供養、親分も許してくれるだろうよ」

香煙と血の臭いの中で、しんみり述懐する浅太郎の言葉は、哀しみに濡れたお染の胸中に、一縷の希望を、光明を与えるのだった。

「小父ちゃん、父っちゃん！」

不思議な空気は、夢路をたどる勘太郎にもわかるのか、寝ぼけ眼で起き上る気配に、浅太郎はあわてて勘助の死骸を布団に横たえ、お染に納戸を目顔で知らせた。

入ってくる音だ。

日毎夜毎、裸の女を連れ出して、折檻、拷問だ。女の弱味につけ込んで、恥かしい責め方をする。死ぬより辛い屈辱に、女たちは日々に痩せ細ってゆく。

「出ろ！」

一人の女が立上った。よろめく体を、後から小突きながら男が出ると、残った女たちは顔を見合せ（助かった！）安堵と、いま連れてゆかれた女の身に受ける凌辱の恐ろしさを思いやって、いっそう、寒気を覚えるのだった。

不思議な空気は、夢路をたどる勘太郎にも、座敷から灯の届くあたりに女は引据えられた。柔らかな素足に、玉砂利がたとえようもなく痛い。

「おいお染、いい加減で泥を吐かねえか」

荒砥の権太、二足の草鞋を履く五十男だ。酒光りの顔を縁先へ突出してねめ回していたが、庭下駄を突掛けてお染の傍へ寄る。

国定一家の女房や娘を引括って、忠治たちの巣を白状させる名目だ。お染は、浅太郎が勘助の首と手紙を持って忠治の所へ行き、必ず堅気になるという許しを得て戻るのを、鳥程ましだろう。体をくねらせても、身をよじっても、避けられない。体の隅々までも幾千の毛虫の蹂躙に任せられた苦しさだ。

毛石の辻まで出て待っている所を捕まったのだ。それから三日三晩のこの責苦——。

「なあ、強情張らねえで、忠治の巣を、白状させちまうんだ。

裸女

黴臭い土蔵の地下室に、湯もじ一つの女が八人、互に寒気を防ぐ為に体をすり寄せてひしめく。

よね、お俊、豊、お倉……。いずれも十八から二十四五の女盛り、むっちりした体に、縄目が痛々しく喰込んでいる。

重い軌りが、女たちの顔を、恐怖に青ざめさせる。土蔵の前扉が開いて、地獄の使者が

気を失うと、池の水を浴びせかける。ハッと気がつくと、またしても羽根の責苦が襲いかかる。身も心も、くたくたと正体がなくなってしまうのだ。



「どうだ、苦しいだろう。儂も、見ているのが痛々しい。この辺で、何もかも思いきり、儂のいうことを聞かぬかな。そうすれば、こんなひどい目には合わせねえ」

夢うつつに、甘い言葉が聞える。

「うッ……」

気を取り直すと、権太の淫らな目が、ぎらぎらと狗の燐光を帯びて迫っている。腕のつけ根が抜けるほど痛い。すぐに張り詰めた気がゆるんで、元の夢幻境へ引戻される。

突然、裏木戸の方でざわめきが起った。

「やい権六、罪もねえ女たちになんてことしやがるんだ。板割りの浅太郎、手前の非道に承知できねえ、素っ首叩き落しに来た！」

叫びながら奥庭へ躍り込んできた浅太郎、お染の哀れな姿を見ると、あっと驚いて飛鳥の素早さ、権六配下の打下す刀を潜って、

「お染、もう大丈夫だ」

「あっ、浅さん」

パラリ、縛めの縄は切れる。なりふり構わずお染は、男の胸にしがみついた。

「野郎、とうとう出て来やがったな。若造、待っていたんだ。まあ、あれを見ろ」

憎々しくしゃくる顎の向う、夜目にも白々と浮ぶ七人の女体。それぞれ胸元に匕首を突きつけられているのだ。

「どうだ。驚いたか。一匹が惜しいか七匹を助けるか、早えとこ恐れ入って刃物を捨てた方が、よさそうだぜ」

「畜生ッ、計りやがったな」

歯噛みをしても遅かった。女たちは囮りなのだった。誰を殺しても親分や仲間に済まない。こんな奴に、と思っても落ち込んだ罠は逃れ様がないのだ。

「お染、約束した、堅気の暮らしも、どうや

ら夢になったらしい」

「いいの、いいのよ、浅さん。ここで一緒に命を捨てましょう。その代り、あの世で…」

浅太郎はひしとお染を抱いた。

「やいやい、濡れ場は、冥途でゆっくりしろい！　浅、刀を捨てろ」

「それには及ばねえ」

座敷からピン、と響く声――。忠治だ。

「国定忠治、手前ッちが預った、女たちを引取りに来たんだ」

狼狽する権六一味の前、襖がサッと開かれる。勘太郎を背負った忠治と、山籠りの総勢十二人。庭隅の女たちを脅していた権六配下は、いつの間にか、国定勢と攻守転倒していた。庭からも数名、忍び込んでいたのだ。

「無用な殺生はしねえ、おとなしくすりゃあ忠治が赤城落の置土産。命だけあくれてやる」

呆然とする一味を手際よく裸の数珠繋ぎ、女たちは、引剝いだ着物を肩に掛けられ、恐怖と苦痛に痩せ衰えた体を、男たちに助けられて権六の邸を出る。

「この忠治が赤城を離れる明日の朝まで、お前、お染と勘坊と三人で、堅気になるんだったな。勘助の供養も頼むぜ」

忠治の合羽の前にひざまずいた浅太郎、

「あっしも、さっきまで堅気の夢を見ておりやした。だが、今夜の危い瀬戸際を助けていただいた、いわば命一つを貰ったも同然の現在、親分を捨てて、自分一人が安穏に暮すことあできやせん。御恩報じの済むまで、一緒にお連れなすっておくんなせえ……。勘坊、小父ちゃんは、すぐ戻ってくるから、それまで、お染姉ちゃんと、おとなしく待ってるんだぞ」

「小父ちゃん、本当に、すぐくる？」

「ああすぐ戻るとも。お染、聞いた通りだ。勘坊を頼むぜ。仁義に生き、仁義に命を懸ける、俺あやくざのまことを果してえんだ。わかねて用意の旅仕度、大胡の宿はずれまで乾分に見送られて忠治は、名残り惜しげに闇空を赤城から下る。八州きっての俠児も、時の利には抗しがたく、ついに故郷を売る身となったのだ。乾分は迷惑のないように、一家を解散し、ただ一人行方定めぬ旅に出る顔は、一時の焦悴を脱した温情が戻っていた。

「親分、待っておくんなさい」

勘太郎を抱いて、旅ごしらえの浅太郎だ。音を立てて落ち始めた。

「お前、お染と勘坊と三人で、堅気になるんだったな。勘助の供養も頼むぜ」

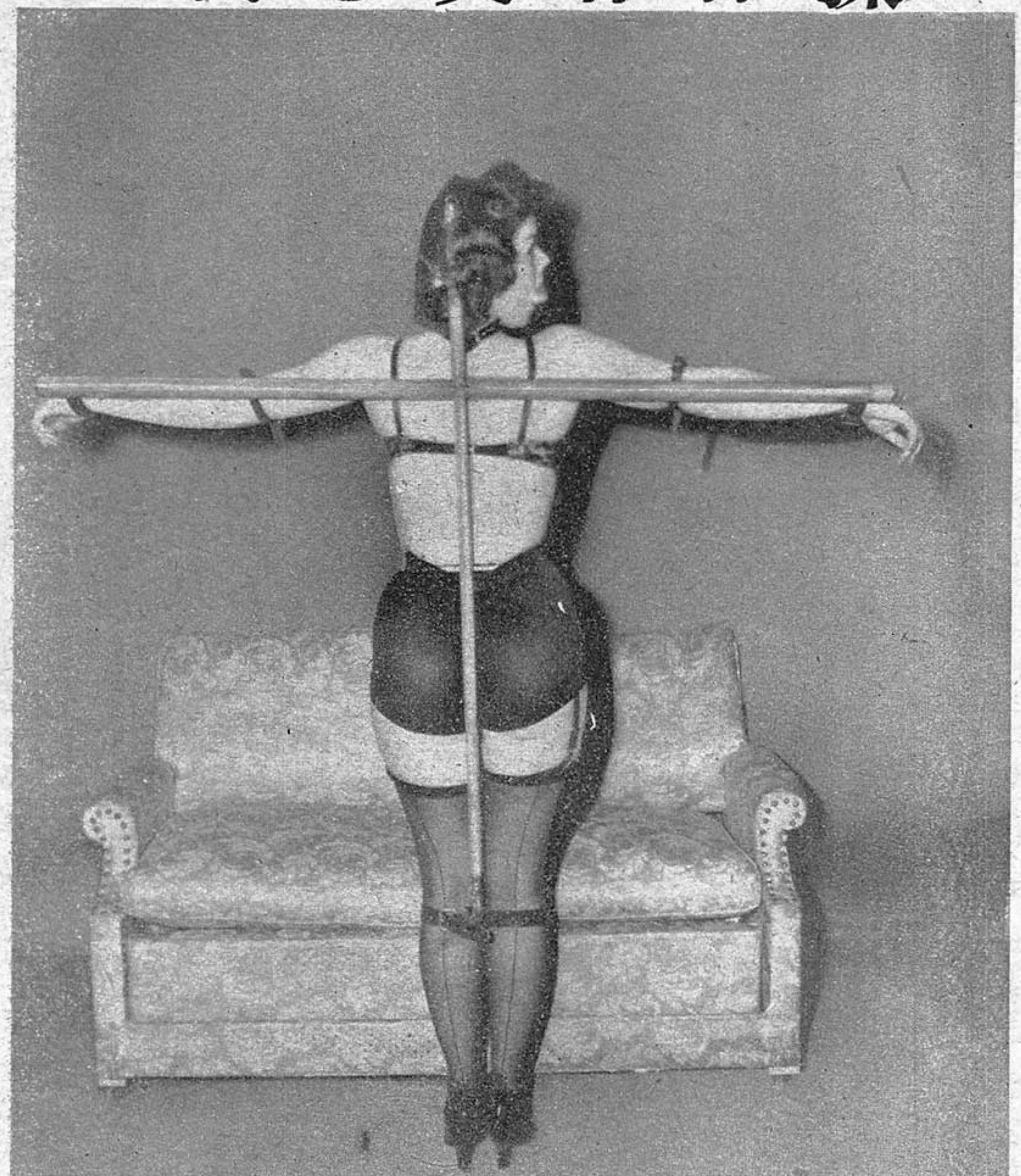
「浅さあーん。きっと帰ってくださいよーッ」

もう一度、声を絞って叫んだが、二人はもう時雨の闇の中へ姿を消してしまっていた。

後記――浅太郎はついに戻らなかった。赤城落ちの途中、親分の義に殉じて斬死した。お染は生涯縁付かず、勘太郎を連れて伊勢崎で菓子商を始めた。あの夜の追憶を託して、自製の菓子に〝赤城しぐれ〟と名づけたが、店でもこの菓子が一番好評だった。成長後の勘太郎はどうなったか、詳らかでないが、お染が明治二十九年に七十八歳で病死した時は喜兵衛お徳という夫婦養子が入って、すでに孫が二十六だったというから、何か事情あって維新前に家を出、別の稼業についたらしい。

別　離

或る美容体操



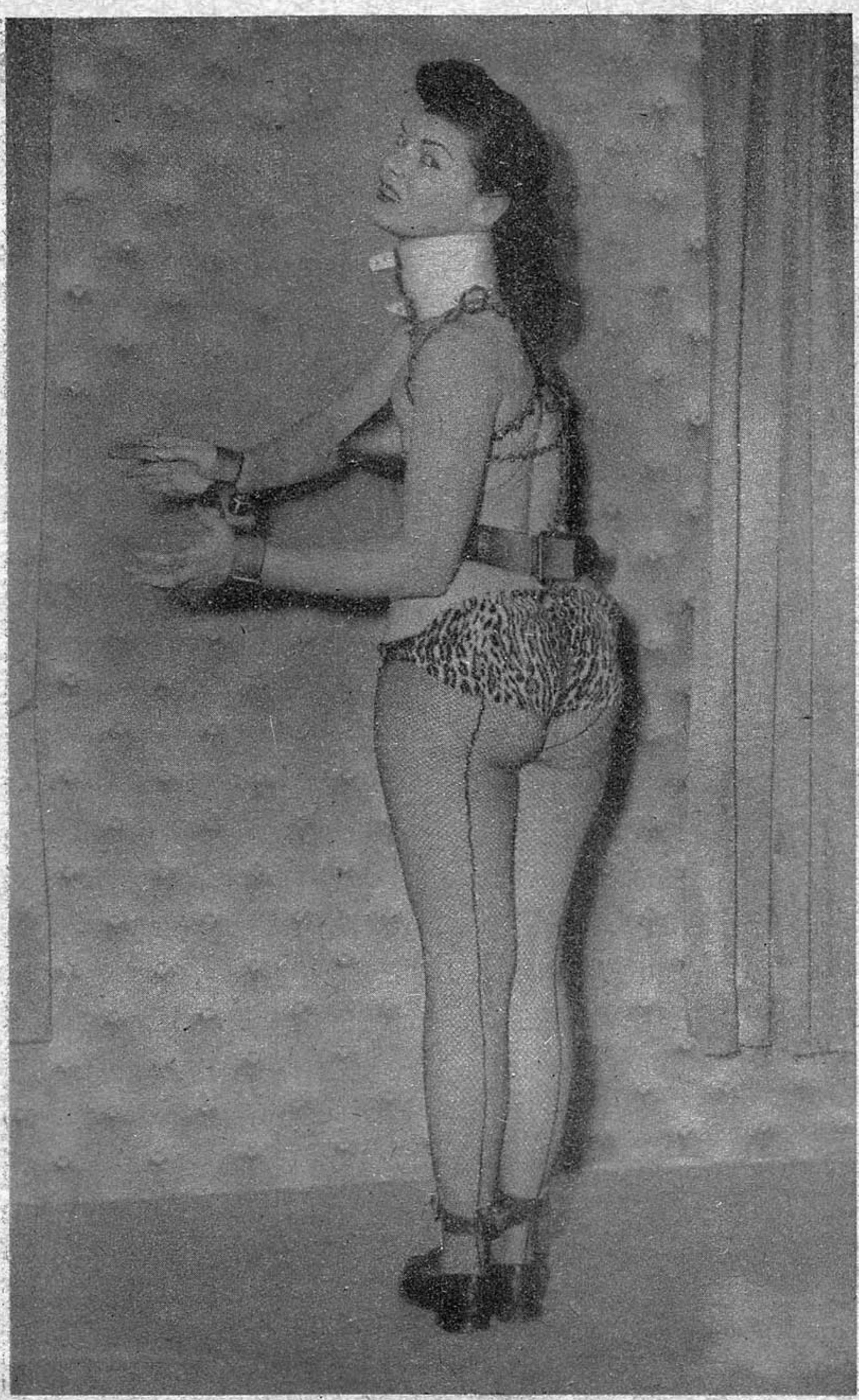
編集部・編

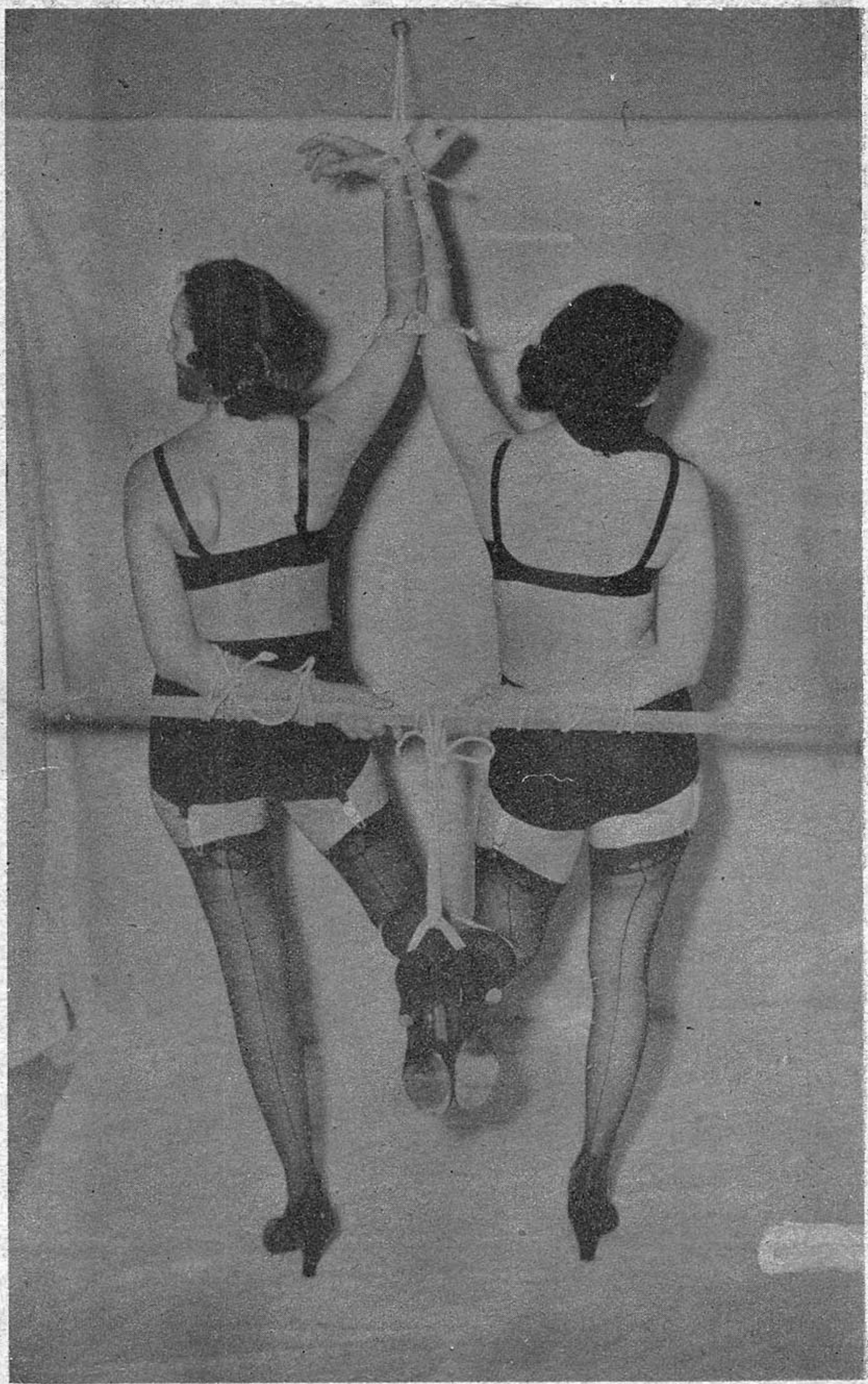














裏窓寄稿

未発表作品一覧



他誌にみられないような特異性のあるもので，本誌にピッタリすると思われる作品をお待ちします。

ある港の出来事……（大　阪）室井　郁哉
四人の脱獄囚……（三　重）宮崎　紀
カムイの賛歌……（北海道）黒田　圭太
毒花の蜜……狛　勝彦
地底人類……（長　崎）原田　源治
波に消えた命……古川　洋造
悲風八幡船……（東　京）渚　洗十郎
あっ、女の悲鳴が聞こえる（香川）玉井一郎
素浪人刺客……（横須賀）久我風太郎
シグナルは黒……（東　京）福原　律
地獄の夜……江良　九里
ストリッパーは夜歩く（神　戸）沢村　匡
或る風変りな老人……（静　岡）文津部三郎
底無し女……（東　京）石坂　覚
道なくして……杉　一男
太郎怪……（大　阪）田島　義雄
偏見……不通　暁人
不義の扉……（東　京）沖野　信介
餓　孳……不通　暁人
キッスナンバー86……（滋　賀）大喜多　勇
私と或る女との情事……黄山　史郎
淫　鍵……（秋　田）帆村　誠
変った夫婦の話し……（大　阪）室井　郁哉
蝙蝠獄伝奇……（千　葉）加島　養人
魔女の唇……（東　京）逆木　怠介
紫房の閨……（岡　山）村田信一郎
狂覗時代……（東　京）栗林　誠
狂図の秘密……（松　江）宇賀野　清
御主人はお尻で殺せ……（新　津）佐々木　力
血　蠟……（小　倉）工藤　文江
女のあがき……（浜　松）浜松　武
蝦夷愛怨譜……（福　井）菅原さだを
白虎党秘聞……（東　京）志村　光
川太郎ざんげ……（栃　木）芦部　権
影の恐怖……（大　阪）神林　司郎
女医の部屋……（東　京）長坂　絹夫
狂怨の館……（京　都）石田　昌治
オブジエ乱舞……（山　口）花森　賢
厚化粧……（大　分）古林　毅
S旅館の女……名　なし
泣き貝……（東　京）村上　大治
罠にかかった男……（埼　玉）峯田　良介
黄色い罠……（千　葉）村田　春夫
妻はオナニー愛好者である……虹村　史郎
悪魔は後ろにいる……（佐　賀）横山多三郎
サムサイ女将奇聞……（横須賀）久我風太郎
火焔娘……（奈　良）五島　春夫



戦国秘史

堀主水一件始末（上）

亡君の信頼のまなざしが主水を奮い立たせた。危急の秋、諫死の肚は決った！

瀬川泰子
木原三樹・画

一

鎌倉松ケ岡東慶寺の山門から、一挺の早駕籠が江戸に向けて発ったのは、寛永二十年三月十八日のことだった。

この日は、朝から霧のような細雨が、新緑の鎌倉をしっとりとうるおしていた。

東慶寺は、元寇の国難に心身をすりへらして、三十四歳の若さで他界した執権北条時宗の未亡人覚山志道尼の開山になる尼寺——由緒書によれば、不法な夫の虐待に泣く女人のために、この寺に駆け込みの上、三年在寺すれば離縁できるという特別の寺法を勅許によって創始し、女人救済を実現したとなっている。「縁切り寺」の俗称もこれに由来するわけだが、実は、縁切願いだけではなく、とにかく救いを求めてここに逗留することを目的とする女人たちにも、ひろく門戸を開

放していたことは、今に残る「松ケ岡文書」を一見すればわかる。

寛永二十年といえば、この時の住持は、第二十三世天秀法泰尼——豊臣秀頼の遺児で、大坂落城ののちこの寺に入った人だった。

「大坂一乱の後、天樹院様の養女になされ、権現様（家康）上意に依り当山に入り雍染し、瓊山尼の弟子となる。時に八歳」と記録されている。

天樹院は、家康の孫娘千姫——七歳で秀頼に嫁し、大坂城にあること十三年、落城後江戸にもどり、翌年、姫路城主本多忠政の子忠刻に再嫁して一女を挙げたが、忠刻の死後落飾して、江戸城内で尼僧生活を送った人だ。

千姫が秀頼の最期に殉ぜず、また命の恩人坂崎出羽守をさえ憤死させて、美男の若殿と再婚したことは、当時の人心に不興の種を蒔きや思念は、もともとそんないやらしいものではなかった。この頃はすでに天樹院と名告って江戸城中にあり、三代将軍家光の姉君という立場で、種々参与するところもあったひとかどの女性だった。

天秀尼は、秀頼とその妾成田五兵衛助直の女との間に生まれた子で千姫がこれを養女として救いあげた。その斡旋で、大坂落城の際にも幸い断命の災をまぬがれている。天秀尼の兄国松は、乳母に守られて伏見まで逃れたが、捕えられて六条河原に斬られた。「満世院殿雲山智清大童子」という落命の幼君がこれだ。

天秀尼は、秀頼の血を伝える唯一の人間として、尼寺入門によって新しく生きる道をあたえられたわけになる。

寺入りに当って、家康は、

「何ぞ望みの筋あらば、心おきなく仰上げらるべし」

という文を送った。

「尼の身とて、さしたる願望も無之候えども、開山以来の寺法断絶することなく、永く相立ち候えば、これに過ぎたる望みは無之候」と返事している。

当時わずか八歳の幼女にこれだけの返事ができたとは思えぬが、実はこの一書を送るについては、天樹院の介添えがあった。

家康からは早速「望みに任せる」という再度の消息があり、これで「女人擁護の寺法」は「権現権お声懸り」として、改めてその特権を確認されたことになった。

二

この日東慶寺を出た駕籠は、天秀尼自筆の願状を天樹院のもとに届けるという火急の用命をおびていた。

願状の要旨は左の如きものだった。

『唯今入寺中の女人の中に、前会津藩家老堀主水の妻子二人がおりますが、この身柄の引き渡し方を、藩主加藤明成より申し入れがありました。御存じの如く、堀主水は謀叛人としての非違を追及され、去る十八年三月、江戸において死罪と相成りし者。しかし、主水謀叛の行状に就いては、世上に兎角の風評も有之、真相のほどは相判りませぬ。むろん将軍家直々の御裁断によることなれば、われら如き者のあげつらい申すべき筋ではありませぬ。されど、妻子には何のお咎めもなかりし事、剰え、当寺逗留の身にて、権現様特許の寺法を破り、無辜の女人を引き渡せと申し越しし加藤明成の所行こそ、お上を怖れぬものと申すべく、この際、将軍家の御意をお伺い致したく、何卒然るべきお口添えを願い上げます。古来より当寺は、来る者は、たといいかな

る罪人たりとも出すことはありませぬ。この理不尽の申し出は、無道至極と愚考仕ります。加藤明成を滅却せしむるか、当寺を退転せしむるか、事ここに至れば、二つに一つの道しかありませぬ。何卒御賢察のほどを……』

という文面だった。――天秀尼の怒りは、言々にあふれている。

これを見た天樹院の頬には、にわかに血の色がさした。

三

「堀主水の一件」というのは、旧主加藤明成の悪事を列挙して幕府に訴願したもので、将軍の裁決によって、身柄は旧主へ引き渡しとなり「成敗は勝手たるべきこと」との結末のもとに死罪となった事件で、これは当時天下の評判となったものだ。

会津藩の重臣堀主水が、こうした非運のもとに一命をおとすに至ったについては、かなりの経緯がある。

堀家はもと、多賀井の姓を名告る伊予国正木の郷士だった。主水の父多賀井治兵衛が、先代左馬助嘉明に召し出されたのが天正十三年――これが、加藤家と主従の契りを結んだそもそもの初めだった。

それから八年――文祿の役とよばれる初回の朝鮮征伐に従って、熊川の船戦に治兵衛はなばなしい戦死を遂げた。

熊川の戦は、敵将李舜臣の巧妙な策戦と、亀甲装いの兵船から撃ちだす鉄砲組の優秀さに押されて、嘉明の軍はひどい苦戦に陥った一度は押し返したが、黄昏時を目がけて一気に挽回せんと襲いかかった敵軍の猛射の前に釘づけにされ、軽舟をあやつって敵船団に斬りこんだ嘉明も、この十字砲火の中に危く見えた。舟は間もなく岸にとって返した。

多賀井治兵衛は鉄砲組三十人を指揮して、終始嘉明の面前で防戦につとめたが、やがて鉄砲組は岸に布陣し、一斉に撃ちかける最後の手に出た。敵首二つをぶら下げて、みずからも全身に返り血を浴び、

「撃てっ！」

と号令したとたん、流れ弾丸が治兵衛の胸もとを貫いた。治兵衛がもしその位置にいなかったら、背後にいた嘉明は、この弾丸をまともに受けていたにちがいない。

「治兵衛。気をたしかに持てっ！」

嘉明は咄嗟に、崩れかかる治兵衛を支えようと手を伸したが、それより早く前のめりにうち倒れた。

「御武運を……」

といいかけたが、音をたてるように噴きだした血が口から溢れて、もうことばにならなかった。嘉明はすっくと立ちなおると、

「撃て、撃てっ！……皆殺しにせいっ！」

と、大音声に叫んだ。

この日の軍功帳筆頭に「多賀井治兵衛」の名が記されたのは、嘉明直々の指示によるものだった。

時に主水は九歳、弟又八郎四歳、小兵衛は当歳の男ばかり三人の兄弟だったが、嘉明は凱旋ののち治兵衛の軍功を賞して金五枚を遣族に贈り、妻女には、

「亡夫の武功を恥ずかしめざるよう、遺児お取り立ての機を俟つべき事」と、特に入念なことばを伝えた。

主水がはじめて嘉明に御意を得たのは、慶長三年の秋で、この時主水は十四歳の少年だった。慶長三年は、朝鮮征伐二度目の会戦に嘉明は蔚山の戦に大功をたて、関白秀吉より三万七千石加増の教書を得て凱旋した年にあたる。――しかし、一代の英傑秀吉は、諸将引き揚げに先だつ八月十八日に、六十三歳を一期としてすでに他界していた。

伊予国正木の城に凱陣した嘉明は、ある日



藩をあげての大酒宴を催したが、酒宴に先だち武術試合の一幕がさしはさまれた。

この日。年少組槍試合に十数人を突き破って勝ち残ったのが、十六歳の加藤九郎兵衛友秀と主水の両人だった。

最後の立ち合いは三度にわたって闘われたが、遂に勝負がつかなかった。——友秀の突っかける槍先を右に左に払いのけて一進一退芝生の上を飛鳥のように動く主水のけなげな振舞いに、「突け。……そこじゃっ！」と、軍扇を握りしめて声をかける嘉明の熱中ぶりに、側近は思わず顔見あわせた。

この勝負は、当日の圧巻だった。——嘉明の御感斜めならず、両人ともに近習に取り立てられてお机廻りの御用に任ぜられた。

四

慶長五年九月——関ケ原の合戦が起り、嘉明は、かねてこころよからず思っていた石田三成に敵対し、家康側に加担して起った。友秀は、

「某、このたびの戦に初陣仕りたく……」

と、血書をもって願い出た。——日頃、なにかにつけて「主水、主水」と引き立てられる殿の御仕儀に業を煮やしていた友秀は、この合戦にこそ祖先伝来の累功を顕わし、抜群の戦功をもって一挙に殿の御愛顧を勝ち得ようとの心組みだった。関ケ原は、友秀にとっても、まさしく悲願をかけた一戦だった。

嘉明の軍は、岐阜城の七曲口を目指して殺到した。この時、討って出る敵勢の中に槍をしごいて突っこんだ先頭の騎馬武者は加藤友秀だった。すでに敵首九つを挙げての奮戦だった。友秀は、槍を突っかけたままドウをゆりあげるような砲声が城櫓から一斉にとどろいた。ウヮーッという鯨波の声に応じて、腹の底

ッと落ちた。一弾はまさしく友秀の眉間を撃ち抜いていた。

友秀の死は、主水にとって好敵手を失った形となった。主水の前には、洋々たる前途が約束されている。そして、慶長十三年、大坂の乱に至って、主水の、加藤家に占める位置を不動のものとする幸運を摑んだ。

五

五月七日の真昼時——嘉明は、長男明成を従え、大和口から大坂城攻めの軍勢を起した前年冬の陣の果てにすでに外濠を失った大坂方は、はじめから勝ち目はなかった。それだけにまた、大坂方決死の奮戦は壮絶をきわめた。

旗指物を背負った三騎の側近に守られていた嘉明は、たちまち敵の狙いの的となった。徒歩と騎乗の十数人に襲いかかられた嘉明は、しだいに側近と隔てられ、防ぎあぐんだ嘉明は、単騎この奇襲の渦波を逃れ出ようとあせった。——四騎が執拗に後を追った。先頭の一騎が嘉明の連銭葦毛を目がけて槍を投げた。槍は馬の尻をしたたかに打って滑り落ちた。その刹那、馬は後足を高く蹴上げた。不意をくらった嘉明は馬首にしがみついたが、その腰を狙って槍がまた斜めに流れた。一騎は、刀を振りあげざま、すでに嘉明の馬に並ぼうとしている。嘉明は、手綱をグッと右に控えると馬首をめぐらした。決戦をいどむ覚悟に、頬は蒼白の緊張を見せた。

しかし、決死の若武者四騎にかこまれては五十三歳の老将嘉明は分が悪かった。「賤ケ嶽の七本槍」で勇名をはせたのは、もう三十年の昔なのだ。

その時、この一団を目がけて槍をかまえると、騎があった。——先頭は堀主水、つづいて明成だった。

主水は、夢中になって駆けあがった。

「主水。でかしたぞ。急げっ！」

頭上から嘉明の声がかかった。

「はっ。唯今っ」

主水は、斜面を転って堀割の中に落ちた。泥水は二人の姿を一度呑みこんだが、再び現れたのは、鎧通しの切尖を陽にきらめかせて、腰丈のふかさに立った主水だけだった。肩で大きく息をはずませると主水は水をかきわけて堤の斜面にとりついた。

「主水。でかしたぞ。急げっ！」

頭上から嘉明の声がかかった。

「はっ。唯今っ」

主水は、夢中になって駆けあがった。

翌八日——大坂城は遂に落ちた。その夜、戦捷を祝う篝火の中で、嘉明は、主水抜群の功を公表した。

「このたびの堀割の血闘は、そちの武名を輝かすものじゃ。この美名を永く伝えるため、今日以後、多賀井の姓を改めて堀といたせ。堀主水と名告るのじゃ。よいな」

主水は、陣中筆頭の栄誉をになって御前を退った。その後姿を、父嘉明の傍から見つめる明成は、この奔馬を制御するだけで精いっぱいだった。

三人まで突き突った主水は、最後の一人に馬を寄せられて馬上に四つに組むと、ひとかたまりとなって落ちた。上になり下になり、このかたまりはのたうち廻った。はたからは

さえなくば、むざむざ功を独り占めにはさせまじものを……〃

かみしめた明成の唇が目に見えて慄えた。

――しかし、卓抜の武術と、膂力に物いわせて四人の猛者を討ちとった手練の鮮かさはもともと明成の遠く及ぶところではない。その非のうちどころのない堂々たる武者振りが、明成にとっては、ひときわ嫉ましく恨めしかった。

「お触れ書」よりも有効だということを嘉明は充分心得ていた。百姓家の庭先に床几をすえさせ、なんの屈托もなく湯茶のもてなしを所望したりした。

もはや六十五歳の老翁嘉明は、白髯をしごきながら、口数少なく温容をほころばしてはときどき意味ありげにうなずいて見せた。そういう仕種は、嘉明を目のあたり仰いだ多くの領民達をぐんと惹きつけることに役だった。

六

寛永四年二月十日――嘉明は松山二十万石から会津四十万石に転封ときまった。

旧城主蒲生下野守忠郷が痘瘡をわずらって二十五歳の若年で薨じたのが正月二日、嗣子なきため、六十万石の所領が没収されたためだが、会津藩は、由来東北の重鎮だ。誰を後釜にすえるかは幕政の重要事だった。

会津転封が下命された日、三男民部少輔明利は三春三万石に、長女の婿松下石見守重綱は二本松五万石に就封ときまり、それぞれ嘉明の指揮下に入った。

嘉明が会津に入城したのは五月五日――彼はまず手初めに、領内をひろく巡視する方法を選んだ。領民に親しく接することが百千の

江戸への要路背炙峠を廃して、新たに滝沢坂新道を開いたのも着任早々のことだった。

十月二日、二本松城主松下重綱が四十九歳で病没し、幼児長綱が



跡目を継いだが、二本松の要衝をこの幼主に預けることはできない。――嘉明は配置替えの必要を痛感した。

その年の暮、堀主水をぬきんでて猪苗代の城代家老に当て、越えて正月二十二日、松下長綱を三春に移し、三春城主明利をもって二本松に転封せしめた。

「主水、猪苗代の出城は、この若松の城にとっては、攻防二様の要害じゃ。そちを措いてほかに城を預ける人物はない。わしの名代じゃと思うて行け。民に対しては、ただ愛撫の一手あるのみじゃぞ。心して頼む」

嘉明のことばは、主水の胸にしみた。――彼もすでに四十三歳だった。

主水は、猪苗代の城代になって赴くと、嘉明そっくりの巡視を丹念に試みた。――床几に腰をおろして湯茶のもてなしを所望し、ときおりうなずいて見せる仕種の中に、主水は自分の中に乗り移り、浸みついている嘉明の大きな影を、改めて意識せずにはおれなかった。

七

八年九月――江戸表出府中の嘉明のもとより、猪苗代に向けて早馬の急使がたった。

――殿、急の御不例につき、早々出府致すべき事――

主水は、江戸よりの急使と聞いて愕然とした。……わしはあの時、討死している身じゃった。礼を申すぞ」

書状一見に及んで、みるみる眼頭がかすんだ。

実のところ主水は、いつの日にかこの凶報の至るをふかく心に期していたはずだ。その思いは、日とともに刻々迫るいい知れぬ恐怖に直結していた。思うまいとしつつ、ついそこに落ちる思いを、無理に払いのけるように避けて来た主水だった。

「主水。わしは……もう行くぞ」

と、もう一度いった。主水は、はや嘉明の顔を見上げることができなかった。

その日の夕刻、嘉明は遂に息を引きとった――行年六十九だった。

遺言により、主水は嘉明の遺骨を奉じて高野山に登った。宿は文殊院だった。主水はここで七日間の山籠りをした。初冬を迎えようとする高野のふかぶかとした山気の中で、主水の味わったものは、底知れぬ孤独感だった。

下山の日、主水は、くろぐろと老杉に蔽われる山容を振り返りながら、二度とここをおとずれることはないかもしれぬと思うと、遣り場のない悲しみが切なくこみ上げた。

〝殿は、もはや幽遠の地へみまかられてしまった。小さな壺に納まって、物いわず、ひそやかな眠りの底に沈んでしまわれた。あの温

容、あのふくよかな声音……すべては消滅した。ただこの胸の中に、鮮かにお姿が烙きつけられているのみだ〃——と思うと、

「そちは、わしになり代って四十万石の行く末を気づこうてくれ」

といわれたことばが、いまさらのように生きる灯火だった。さむざむとした孤愁の底から身のひきしまる思いが湧きあがって来た。

八

明成が父の跡を継ぐや、次弟の監物明信を家老として二万石を与え、藩政の上に新風を送りこもうと企図した。

亡父嘉明の治政は、晩年に至って、あまりの温情主義に堕したというのが明成の第一の批判だった。——あまりに大きかった父の名声を背負っていることが、明成にとっては、宿命的な重荷に感じられてならない。これを突き破ることが、明成自身の存在を、亡父の功績の外に独り立ちさせるものだと、明成はかたく信じた。

東北随一の雄藩としての貫禄は、嘉明時代にあっては、嘉明自身がその象徴であり、貫禄のすべてだといってよかった。だが、巨星地に墜ちたいま、雄藩の面目を維持し昂揚するものは、実質的な備え以外にはないという

のが、明成の根本的な考え方だった。

第一着手は、大がかりな道普請だった。

先に嘉明の開いた滝沢坂新道の修理には最大の計画がたてられた。狩り出された領民役夫は延べ八万人だった。一方、南の御蔵入を通過する日光街道には三万人が動員された。計画はいささかの猶予もなく施行された。明成はその都度、過分の賞物を与えてその労にこたえたが、競争心をあおるこの方法は、やがて役夫たちを過労と困憊に追いこむ結果となった。——道路改修は、すべて軍用を主眼として進められたことはいうまでもない。

新田の開発もまた、明成の着眼したところだった。——猪苗代牛沼新田、河沼郡鴨田新田、大沼郡境新田、耶麻郡上原新田の開墾はその例だ。しかし、新田の開拓は、農民の生活をうるおしはしなかった。重ね重ねの新工事のために、税高がしぜんと水増しされたからだ。

明成はさらに、他国との往来口をかため、以て領内道普請の最後の仕上げを企図した。

出羽の国境檜原に新関を設け、衛兵六十騎を常置せしめること。——これを耳にした時の冷酷非情な視線をまともに感じた。

主水は、猪苗代から駆けつけると、面をおかして明成に説いた。

「殿。このたびの新関の構えは、隣藩鳥居左京亮殿への慮りもいかがかと存ぜられます。松光院殿（嘉明）御薨去の後いくばくもなくしてこの挙にいでらるるは、世上の噂もはばからるることと故、なにとぞお思い止まり下されまするよう」

「主水。予には予の行き方があるでのう。それに、新関の件は予の一存ではない。家老の面々だれ一人として意見をさしはさむ者はなかったのじゃ」

明成の自信にみちた声を聞くと、主水は居流れた家老、中老、番頭をひとわたりキッと見わたし

「主水。それでも、そちの一存にてこの謀るわ」

明成は、眦に皮肉な笑みをたたえて、上席に控えた弟明信に目配せした。主水は、明信の冷酷非情な視線をまともに感じた。

「御心中、不肖主水め拝察仕っております

る。されど、新関の構えと申し、軍用道路の改修と申し、いずれも時機がござりまする。軍家におかせられては、謀叛敵対のけはいありと思召さば、親藩、譜代、外様のわかちなく切腹お取り潰しの挙にいでらるる今日この頃の御仕儀。もし姦心ある者の奸計にかからば、いかようの御疑いあるやも測り知れず。これを思えば、主水め、松光院殿のおことば身に沁みて、お家御安泰のため、たってお諫め申上げずばなりませぬ。……殿、ここの道理をなにとぞ御勘考下さりませ」

主水はそこまでいうと、額をこすりつけて平伏した。

――主水は、明成のことばを期待してじっと待った。

……だが、再び面をあげた時、もう明成の姿は座になかった。

九

寛永十二年、十二月――。

「耶蘇宗門之儀、於二国々所々一、弥堅可二禁止一之事」

という示達が江戸表から届けられ、領内には一斉に切支丹狩りの手が入った。

探索は厳重をきわめた。



特に主水は、組頭に厳命を下して、虱潰しに捕縛の手を伸ばした。――異端邪教を駆逐することが幕府の大方針なら、それを忠実に行うことこそ、お家安泰の道だと主水は確信したからだ。

領内において捕えられた者は、首斬横沢丹波をはじめ百二十四人の多きにのぼった。その中には、横沢丹波宅に潜匿の伴天連二名もふくまれていた。

十二月十七、十八、二十日の三日にわたって、若松の西郊薬師堂河原に刑場を設け、倒懸けの極刑が行われた。

竹矢来の中には、猪苗代から出張った主水も立ち会っていた。

薄鼠色の囚衣をまとい、高手小手に縛りあげられた者どもが、厳寒の河風の中を引きたてられ、一様に竹槍の先に突きかけられる群像の図は、戦場の血腥さとはちがった凄壮酸斉の極だった。

――ある者は狂い、ある者は静かに天の一角を見つめていた。

最年少の十二歳になる少女が、乳下に槍をもみこまれた瞬間、のけぞるように胸を張り出しながら、

「イエズスさま。……イエズスさま」

と叫んだ声が、主水の耳にはっきり聞きとれた。

しかしその声は、口から噴き出した血泡に塞がれ、血は頭を逆に流れ落ちて地にしたたった。

主水は、おのが腸を抉られたような苦しい衝撃に、思わず目を瞑った。

――血に染まった無残な死骸が、河原の端から端まで、宙吊りにされて並び立った。

主水は、死を賭けて信奉する邪宗門徒の輩輪な魂に、いまさらの如く目を見張る思いがした。

「死をかける」という生涯の一大事が老幼男女の別なく、このようにあからさまに行じられたという事実の前に、主水はいたく打ちひしがれたのだ。

〃――わしは、あの新関一件の折に、死をかけてお取り止め願うべきであった。――わしのイエズスさまは、松光院殿ではなかったか！〃

散って行く群衆の河原石を踏む足音が、主水にはげしい自負を強いた。

十

越えて十三年二月十七日

――明成の夫人は、かりそめの病のため、世を去った。

名は高雲院。

「御愁傷いまだ癒えたまわざるに、御軫念を相かけ奉るは恐れ多きことながら、領民、累年の重税に喘ぐ状を黙視するに忍びず、殿の御寛容を仰ぎたく懇願仕りまする」

と、主水が目通りを願ったのは七月の末だった。

この月の七日に隣藩鳥居左京亮忠政は病歿し、嗣子なくして所領没収となり、その後に信濃高遠の城主保科正之が転封ときまったのが二十一日だった。



これは、加藤家にとって重大な事態にたちいたったと主水は直感した。

――保科正之は三代将軍家光の異腹の弟。保科肥後守正光に養われて保科姓を名告ったが、若年にしてすでに名君の聞えが高い。明成夫人高雲院は、保科正之にとっては義理の叔母にあたるが、その夫人はすでに他界してしまっている。

正之は、将軍連枝の故をもって、天下の目付役として、雄藩会津を隣国にひかえたわけだ。明成の行状は細大洩らさず江戸表へ筒抜けになるは必定だった主水が居ても立っても おられぬ気持にかられたのも無理はない。

「恐れながら、民貧苦におち、御政道の非を恨み奉るの念うちに萠し候うては、いかほど城中、国境の備えが成りましょうとも、事はうちより崩るるは火を見るより明らかでござりまする」

「主水。猪苗代の出城暮しでは、世事に疎くなるのう。……と申せば腹も立とうが……。そちの忠節一徹はようわかっておる。だが、予の謀り事によって、若松の城備えはずんと強うなったぞ。すでに伊達中納言殿（政宗）も身まかられしいま、会津は名実ともに東北

の雄藩じゃ。この強みをもって、はじめて東北の睨みもきくとは思わぬか」

明成の面上にはたえず冷笑の翳があった。

「さりながら、隣藩肥後守様このたびの御転封は……」

「ええい、申すな。……恐れよというのか。縮みあがれと申すのか。……主水、予は父上の御功績に押し潰されはせぬぞ。なにものにも憚らぬ。予は予の独力で、予の時代を築いて見せる！」

「……」

「そちのその一挙手一投足には、亡き父上の御仕種がそのまましみついておるわ。そちは父上の影武者を装って、なにかにつけて予の面前にしたり顔の口説を吐きくさる。……予は負けぬぞ。……亡き父上が、歴戦の功を誇られし黄金の軍配をそちに下し賜わりし殊寵は、すでに昔語りじゃ。そちの忠義面もはや時効物じゃわ」

明成は唇を慄わしてまくしたてた。

〝なんと仰せられましょうとも、某は、松光院殿の御遺言を守り、四十万石を護りぬかねばなりませぬ〟――主水は心中に叫んだ。

「それよりも、の、主水」

明成の声音ががらりと変わり、ふと見あげた主水の目とかちあった明成の眸の中に、ギラリと底意地の悪さが光った。高い頬骨と濃い眉毛が、いっそうその冷酷さを隈取った。

「真実そちが高雲院逝去の愁傷を思いくれるなら、そちの独り娘弥生を予の側に上げぬか。横田清四郎との縁組はまとめて見せるぞ。そちの伴せを守り通せぬほど不甲斐ない父ではありとうない。……弥生。あと三年の辛抱じゃ。清四郎が藩儒正席のお取り立てにあずかる時こそ、晴れて清四郎を背の君と呼ばせてやるぞ！〟

「ハハハ。主水、そちは泣いておるのか。……たわけ！　麝香しゅうてならぬわ。遠乗りじゃ。馬引けっ」

明成は、あらわに頬をひきつらせながらガバと席を蹴った。

十一

主水は面を伏せたまま答えた。――情けないという気持がまっ先にたった。

〝なんという穢わしきことを……弥生をお慰みの相手にあげろとの仰せは、あまりに淫らがわしい。……わしのこの真情が、どうしてこの殿には通じぬのか。事毎に相隔り、相反撥し、しらじらしいものがいつも二人の間に低迷している。このもどかしさは、いったいどうすればよいのだ！　松光院殿のあの温い血と、ものに感ずるあの素直さと寛容と聡明とが、どうしてこの殿にはおわしまさぬのか！〟

主水は妻子を若松においていた。本一ノ丁と三日町通りの一劃を領する広大な邸内には病身の妻が寝たり起きたりの日を送っている猪苗代には、別に側女がいた。

ある日、城勤めの仕女（つかいめ）が新たに抱えられた――猪苗代湖畔福良村の肝煎（名主）伊右衛門の養女登勢と名告る女で、どこかに愁いをふくんだ十八歳の清楚な顔立ちだった。横か

ら見る面ざしが、ふと弥生を思い出させるものがあった。

「親もとを離れての勤め、さびしゅうはないか」

凍氷が書院窓の外にさむざむと下っていた炭火をつぎに来た登勢の細い指先と、襟足の白さが、そこはかとないいじらしさをそそった。

「からだをいとえよ」

「勿体のうございます」

登勢は面もあげえず、影のように下を退って行った。

主水はこの頃「松光院殿軍語」と題して、嘉明の武人としての折々のことばを、思い起すままに書き綴っている。その時その折のことばを書き記している間に、主水は思わずふかい溜息をもらすことがある。——この書冊の中に、嘉明はありありと生きてはいるが、死に隔てられた寂寥と孤独の思いはひとしおなのだ。たった一人の知己であった景仰と思慕を捧げ得る唯一の対象を失った痛手はあまりにも残酷だった。

〝わしは、この殿のために生涯をなげうつ覚悟だった。そのためにわしは、妻子に注ぐ愛情の仕種に欠けて来たかもしれぬ。弥生を生むとひきつづき病床に親しむようになった妻に、冷やかであったことも事実だ。うるわしかった容色も、病のために衰えはてた。元気な母の笑顔を知らずに育った弥生もまた、幸薄き娘といわねばならぬ〟

主水は、「軍語」の筆をとめて、長い間呆然と机に倚っていた。登勢の後姿が弥生の面影とかさなりあって、主水の脳中に何度も流れてはまた映じた。

妻の役目を果たせなくなったと知って、側女をすすめたのは妻自身だ。いじらしさとうしろめたさが交錯して、一度はさりげなくこ

とわったこともある。しかし、そういう心根とは別に、生の激刺とした女体にうつつをぬかさずにおれぬ「男の性」を通して来たおのれだった。追いきれぬ煩悩のはげしさを、主水はわれながらいまいましく思い返す時がある。

主水が、いま加藤家に占めている位置は、昔日の座をはるかに滑り落ちた。——そういう実態を知ることもなく、「主人よ」「父よ」と絶っている妻子のいたましさが、ふと主水の心をかすめるのだ。

十二

磐梯山麓は一面の新緑に色どられた初夏のけはい——城楼から見渡す湖水の碧緑も一段と色さえて見えた。そういう頃のある早朝、

「御家老様。昨夜、東天に箒星現れ、半弦の月を貫いて消え失せました。妖しげなる運気の兆、凶変、あるいは一大事出来の萠しかと愚考仕りますが……」

陰陽師、生井常方が、憂わしげな面持ちで主水の胸をさわがせたその翌々日、若松より

「緊急評定の件有之、早急登城可致事」

との急触れが届いた。主水は、供廻りを整えると急遽出立した。

評定は、物頭以上を集めてものものしく開かれた。

天主閣二層を取り壊して五層とすること、ならびに西出丸の増築の件——これが当日の議題だった。

上席家老加藤明信から議題の発表があった時、主水は陰陽師常方のことばを思いあわせてドキッとした。

「耶麻、河沼、稲川、大沼の四郡、ならびに安積、岩瀬の両郡に役夫を徴し、賞野権兵衛菅勝兵衛を以て築城奉行に仰せつけらるる旨にござる」

と明信が語をつぐ時、主水はむらむらと

わきたって来る憤りを抑えかねた。――〝これでは、評定の形をなさぬ！　単なる示達にすぎぬではないか！……〟

主水は膝頭をグイと上座に向けかえるや、

「殿。突然の築城改修を御発念なされしは、いかなるお心組みによられまするや。当今、将軍家の御主旨としては、よほどのことなきかぎり、城の手入れはお差止めと聞き及びまする。……殿」

「治に居て乱を忘れずじゃ」

「ご尤ものおことばなれど、このたびの御企て、あまりに大がかりに失し……」

「猪苗代の出城だけでは心細うなったのじゃ。ハハハハ。……そう申せば、そちにも納得がいくかの。世は泰平無事ではないわ。諸国に根をおろせし邪宗門の奴ばら、いつお上に敵対の暴徒と化するや測り知れず、島原の一揆が火を見るより明らかな証拠ではないか。それを変節と見るればかりではない。豊臣の残党、いまだに報復の機を狙いおるとは思わぬか。治に居て乱を忘れずとはこのことじゃ」

「殿。恐れながら、邪宗門と申し、豊臣の残党と申し、城構えを堅固にして待つべきほどのことにてはござりませぬ。諸国諸藩足なみを揃えてのことなればいざ知らず、これはまた……あまりに……」

といいかけて、主水はギクッと咽喉がつまった。――天来の声の如く、主水の胸をうつ鮮かな記憶が、ふと蘇ったからだ。

〝殿はいま「豊臣の残党、報復の機を狙いおるとは思わぬか」と仰せられたが、……わしは思い起す。大坂の陣おわって凱陣の後、松光院殿のお居間で、殿は「秀頼公追慕のため剃髪いたしとうござる」と駄々をこねておられた。「太閤殿下御恩顧のこの嘉明の行状をそちは変節と申すのか。それを変節と見るは、そちの浅慮じゃ。佞奸の臣に食い滅ぼされし大坂城。内からするか外からするか、落城は所詮時を俟つばかりの有様であった。秀頼公追慕の情は、それは心のうちのこと。世を捨て、これ見よがしの仏道三昧にふけったとてなにになる。後先かまわぬそちのその短慮が、わしは気がかりでならぬ。ふかく思いを致せ」と、諄々と戒めておられた松光院殿のお声。……いまもなましくわが耳にある。……殿はひょっとすると、あの時のお気持をそのままに、おことばとは裏腹に、豊臣残党に通じる心根を持っておられるのではあるまいか。暴徒、残党に備えるのだというその口裏に、実は大それた御企てを秘めておられるのではあるまいか〟――そこまで考えると、主水は、スーッと血の気の退いて行く思いがした。死をかけても諫止すべきは今だ、と咄嗟に熱い思いがこみあげた。

「御免！」

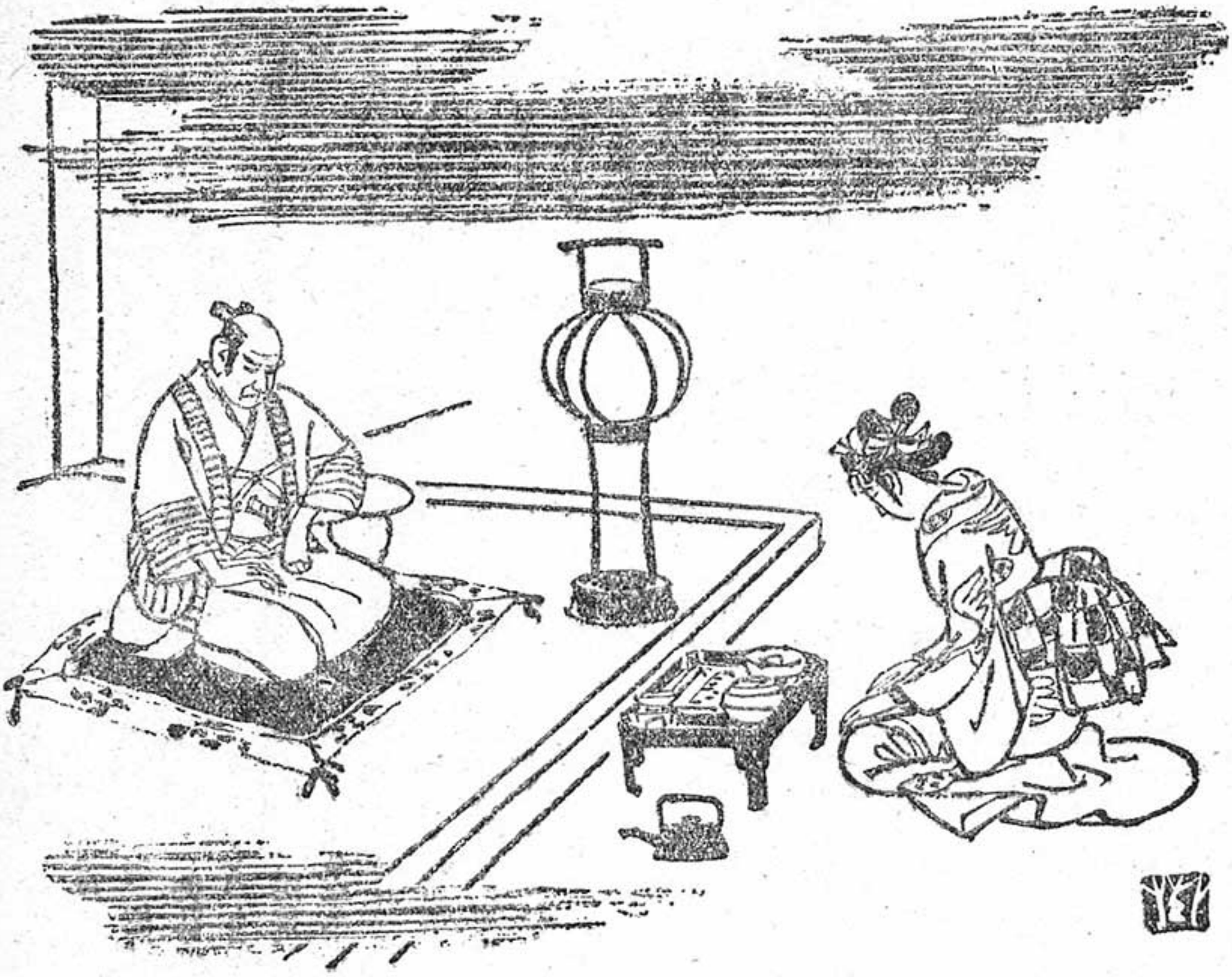
一礼すると主水は、廊下を足ばやに、控えの間に入った。そのあとを弟の多賀井又八郎が摺り足で追った。

又八郎が襖をあけた時、主水はすでに裃を払って、脇差を腹に突き立てようとしていた。

「兄上！　御乱心めさるなっ」

又八郎は鋭く叫ぶと、倒れこむようにして主水の手を抑えた。

「兄上。犬死でござる。側近の腰抜けども同心いたして、殿の御意を迎えるに汲々たる昨今、殿の御奸癖を抑え奉る道はござりませぬ。このたびの議も、先般すでに成案を得たるもの、兄上の死を以て諫止し得べきものではござりませぬ。それよりは、事毎にお苦しみはござりましょうとも、命永く御意見役をなされてこそ松光院殿の御遺志に添うものと存じまする。監物殿をはじめとして、側近ことごとく兄上を疎んじおる仕儀は、腹にすえかねか。暴徒、残党に備えるのだというその口裏を見るにつけ聞けにつけ腸の煮える思いにはご



ざりまするが、近頃には、某ならびに小兵衛の上にも、なにかと厭がらせのあの手この手。じっと堪えておりまする心中もお察し下されたく、……兄上の誠忠は、われら兄弟とくと存じておりますれば、なにとぞお心強う……」

主水は、又八郎の肩口をつかんで、不覚にも涙を落した。

〝又八郎は、命永うして御意見役をと申しおった。しかし、松光院殿亡きあと、わしははたして御意見役を勤めおおせて来たであろうか。老いぼれ声をふりしぼって、お止め下され、お思いとまり下されと、事毎に楯ついただけの結果ではなかったか〟——猪苗代への道すがら、主水はくり返しくり返し思いつづけた。

ひさびさに逢った妻子との三日にわたる邸暮しの間にも、笑顔ひとつ見せてやれなかった憂悶の思いが、いつまでも胸を塞ぎとおした。

〝わしは、態よく猪苗代の城にとりこめられているようなものだ。わしはもはや骨董品に祭りあげられ、つんぼ桟敷の愚者扱いで、若松と猪苗代の間を往ったり来たりする雲助なのかもしれぬ〟

猪苗代に着いたのは、夕方も間近かな頃だったが、着くとすぐ主水は馬場に出た。愛馬にひと鞭くれた主水は、片肌ぬぎのまま狂ったように駆けめぐった。ときどき素手のまま馬上に槍構えの姿勢をとると、ウォーッ、ウォーッと雄叫びをあげた。さすがに息がきれた。戦場を駆けめぐった頃の不死身の力が、すでに抜けてしまっていることが、無性に腹立たしかった。

夜に入って主水は、浴びるほど酒をあおった。風邪気味で臥せっていた側女の代りに、

主水は登勢を名指しで酌に召した。

主水は酒の勢いを借りて、なにもかも忘れたかった。忘れたいとあせった。ささらだつ神経が、昂奮と沈鬱をじりじりと胸に食い入らせた。

「登勢。もっと注げ。なみなみと注ぐのじゃ」

主水の濁み声で登勢の手が目に見えて慄えた。いとおしさが、ふっと主水の心をかすめた。その上に、弥生を偲ばせる面ざしが、いじらしさをいっそうかきたてた。――穢れを知らぬ肌の白さが眼の底に灼きついた。主水は、つと登勢の手首を握ると手もとにひいた。登勢は、膝頭を抑えたまま斜めに傾いた。主水の目は、酔いのふかさによどんでいた。

主水は登勢の肩に手を伸ばすと、少しよろめき加減に立て膝になり、灯を吹き消した。その暗がりの中で、主水は、登勢を横抱きにし、強く頬をつけた。冷たいものが、その頬と頬の間を流れて、登勢は声も立て得なかった。

もはや抑えようのない、熱した兇暴なものが、主水の五体を駆けめぐっていた。――〝猪苗代の出城だけでは心細うなったのじゃ。ハハハハ〟

〝……そちは泣いているのか。……鬱陶しゅうてならぬ。遠乗りじゃ。馬ひけっ！〟……〝兄上！　御乱心めさるなっ！〟

……いくつもの声が主水の耳底に蘇り、悶笑、嘲笑、罵言、雑言、の渦紋が、闇の四辺からワッと主水を襲った。切ない思いが主水の胸をひたし、みじめさと堪えられぬ汚辱感が咽喉もとにこみあげた。

暗黒の中に身もだえしながら、まさに犯されようとする小娘よりも、むしろ犯そうとするおのれの無態さ、あわれさが、一瞬主水の脳裏をかすめた。

渾身の力をしぼって、かぐわしくうごめく女体にしがみつくことで、主水はやっと自分を支えていた。

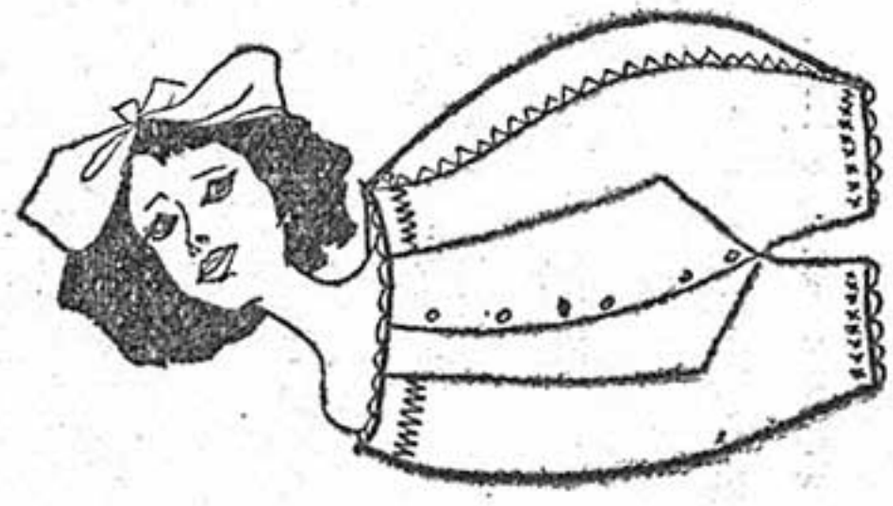
登勢の全身から、急に力が脱けて行くのを主水は感じた。

高足膳の上の皿小鉢がカチカチと触れ合う音とともに、ウッと登勢の唇を洩れるかすかなうめき声が聞えた。

（未完）

ハガキを下さい！

面白い内容見本を
差し上げます！



◎タッター枚の葉書で，ソクソクするような内容見本を送ります。いますぐに，ハガキに御住所と名前をお書きになって「裏窓三月号で見た，内容見本送れ」とだけ書き，お送り下さい。スグにあまとりあ社の出版物の内容見本を，お送りします。

（ハガキ送り先）
東京都中野区江古田1の2302
株式会社　あまとりあ社

妖異サスペンス

怪異愛霊教

妖しい宗教の魔殿の奥にくりひろげられる、笞と縄の責め地獄の狂宴！

飯田豊吉 著
喜多玲子 装幀

三津子は、唇を噛んで覚悟した。いまさら弁解は無駄だ。

（わかっているよ。さっさとはじめたらどうだい。お前の縄には馴れているさ……）

そのとき、ゆうべのあの真吾の身体に包まれたときの陶酔が、なぜかふいに三津子の胸によみがえった。

剛造と真吾、どちらも同じ男性なのに……しかも真吾に抱かれたのは、ゆうべがはじめてなのに……。

（ああ、そのたった一度が、私の心と身体をうばってしまった。冬島真吾、おそろしい鬼だわ。女殺し……。だがもうあたしは、あの男からはなれられない！）

この緊迫した場にもかかわらず、真吾の熱い息づかいを想って、三津子の血がみだらにうずく。

その三津子の不敵な表情に、剛造は業を煮やして立ちあがった。

鬼塚にむかい、眼で合図する。

唇をむすんで、うなずく鬼塚。

落下しそうになると五人の男がまわりから、竹刀の先きで突っついておさえるのだ。

「――ううむッ……」

三津子のうめき。

破邪之室である。

しかも、早くも、三角木馬の上。かって、多くの無知な女信徒の血と汗と脂を吸いこんだこの木製の妖しい形をした木馬。

まさか、自分が裸にむかれて、これにまたがるとは、夢にも思わなかった。

三津子。喰いしばる歯のあいだから、苦痛がほとばしる。

「うふふふ、痛いか」

剛造、鬼塚、黒林ほか三人の破邪組の荒くれ信徒たち。

うしろ手に縛った縄。縄で責められるのなら、三津子には耐えきれる自信があった。

しかし、いきなり木馬の上にのせられると……。

「む、むむウ……」

身体を海老のように折りまげて、三津子はこらえる。

みずからの重みで三津子の腿のあたりへ、メリメリと喰いこむ。

背中から、頭のてっぺんまで、突きとおるような苦痛。

定価二五〇円・送料四〇円
あまとりあ社・発行

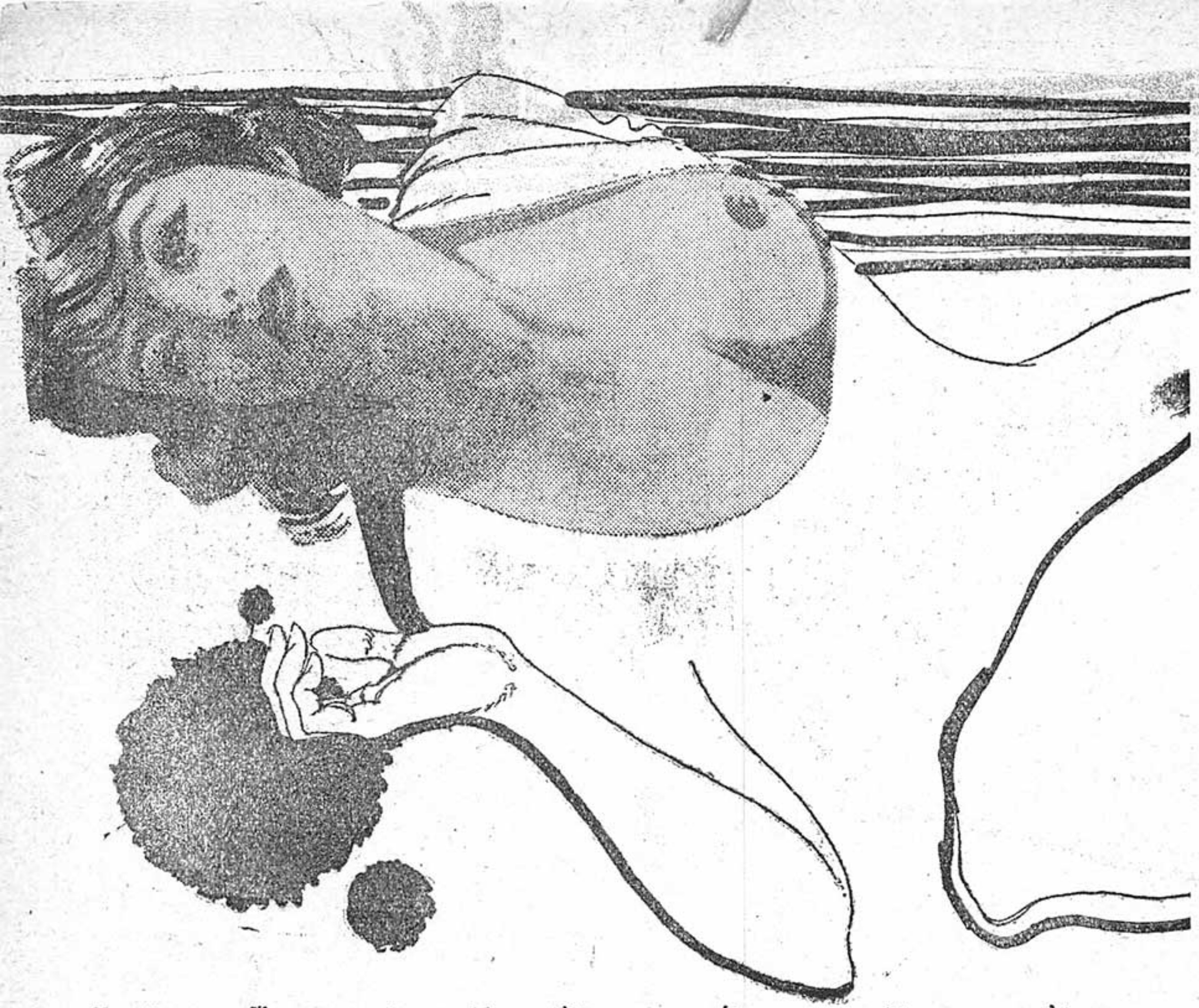


鳥羽商事株式会社の事務室——。

クリーム色の明るい壁にかかった時計は、四時半を示していた。

机をぎっしりと並べた社員たちが、けだるそうな顔で仕事をしている。退社時間がせまり、どの事務員の顔にも、疲労と倦怠の色があった。

三杉英樹は、左肩を落とすようにかたむけて、隣りの机の青田春夫にささやいた。



「――今夜、きみに折り入って頼みがあるンだが、つきあってくれないか……」

春夫は、うつろにひらいた丸い瞳を、チラと三杉にむけた。

「頼み？……」

春夫の白いまるい手は、仕事をしていなかった。無意識の指は、インクのなくなったペン先で、しきりに机の表面を傷つけている。

「うむ……一生の頼みなんだ……」

三杉は、なおも肩を寄せていった。真剣な声音だった。

三杉の体臭が、春夫の鼻さきに襲った。春夫には、やるせないその匂いだった。

「一生の頼み？……大げさですね……」

ポッテリとまるい春夫の顔に、皮肉な微笑がよぎった。

三杉が、さらに春夫の耳もとに語りかけようとしたとき、この事務室のドアが、廊下側から勢いよくあいた。

スラリとした、まるでファッションモデルのような洋装の鳥羽美根子が、靴音を鳴らして入ってきたのである。

社員たちは顔をあげて、それぞれの表情をうかべ、この美しい来客に目礼した。

美根子は、社長鳥羽要造の一人娘なのである。

「ふン……」

思いもかけぬ殺人容疑の汚名が彼を身動き出來ぬようにしている！　罠だ！　誰かの罠だ！

春夫だけが、唇をねじまげ、机の上に山積している帳簿類のかげに顔をかくした。

三杉と美根子の視線が、カチリと合ってすぐはなれる。

この事務室の奥のつきあたりに、社長室がある。

美根子は、コツコツと靴を驕慢に鳴らし、まっすぐにその社長室のドアをあけて入っていった。

「――フィアンセがやってきましたよ」

美根子の背中にチラと眼をやって、春夫が皮肉な口調で、三杉にいった。

「……」

三杉は苦笑し、意味もなく手もとの帳簿をひらいた。

と――社長室から、ドア越しに声がかかった。

「三杉君、三杉君――」

鳥羽社長が、三杉を呼んでいるのだ。

「ほら、未来のパパさんがお呼びですよ」

また、春夫が皮肉った。

「はい――」

返事して立ちあがり、三杉は社長室のドアを押した。その三杉を、ほかの社員たちの眼が、かすかな嫉妬と羨望で見送る。

「三杉君、すまんがきみ、今夜、美根子の買い物のお供をしてくれんかね」

鳥羽社長は、温顔を三杉にむけていった。温顔の上に親馬鹿の情愛がある。

「はあ……じつは、わたくし、今夜はちょっと……」

三杉は口ごもった。

「なんだ、ほかに用があるとでもいうのかね？……」

鳥羽社長がいった。

「いえ、あの……じつは、さっきから、下腹がシクシクと痛んで……」

われながらまずいウソだと思ったが、これが一番無難だと思えた。

三杉は、眉のあいだに縦皺を寄せて、痛みをこらえているようなそぶりをした。

「つまンないの」

美根子の顔に、あらわな失望がうかんだ。

「珍らしいな、いつも健康を誇っているきみが腹痛だなんて……しかし、用心しなくちゃいけない。今日は早く帰って寝るんだな。明日は日曜日だ。よくなったら、うちへ遊びにきたまえ」

社長は、親身の表情でいった。

若いが商才に長じているこの社員を、鳥羽社長はひどく気にいって愛している。

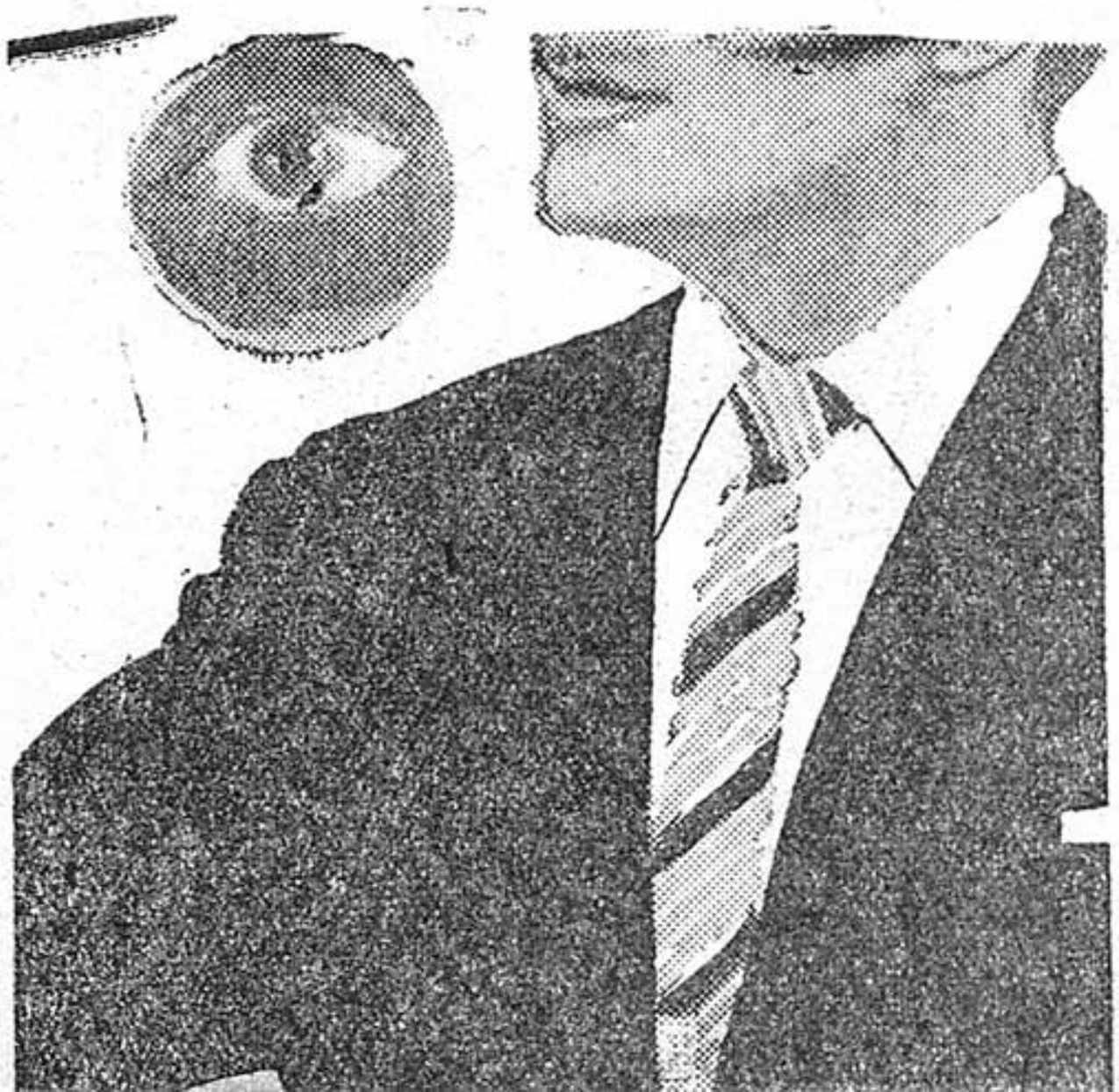
「いえ、寝るほどでもないのですが……。ただ、ちょっとぐあいがおかしいので……すみません」

三杉は、鳥羽社長と美根子にむかって、ペコリと頭をさげた。

2 陰花の恋

それから、二時間ほど後――
三杉と春夫は、バー〝ロンヌ〟のカウンターに、寄りそって坐っていた。寄りそっているのは、春夫のほうだった。
ひっそりと暗い店内で、妙に陰気、というよりも、妖気めいた雰囲気があった。
「――で、ぼくに頼みというのは？」
春夫がグラスのウィスキーをなめながらいった。紅い唇がアルコールに濡れて、よけいに紅くなるのだ。口紅を塗った女の子の唇よりも紅いのだ。
そして、まるくふくらんだ顔の色は、女よりも白く、キメがこまかい。
美青年――いや、実際の年令よりは五つも六つも若く、美少年――とも呼べそうな春夫だった。
「――きみに、いまさらこんなことを言うのはすまないンだが……金を貸してもらいたいンだ……」
「ほう……いくらほど？」
唇をなめて、春夫がいった。
「――五万円……」
三杉が思いきったようにいった。
「大金ですね、なんに使うンです？」
春夫は、なんに使うンでなけりゃならないンだが……」
春夫は、なぶるように三杉の顔をみた。
「……」
三杉はだまった。きゅうに傲慢な口調になった春夫を、彼は憎んだが、いまはどうしても、した手にでなければならない。
「三年来の親友にもいえない使い道ですか」
シンユウという語句に、妙な重みをおいて春夫はいった。
「社長令嬢との結婚を前にひかえて、精算しておかねばならないことが、あるとみえますね、ウフフ……」
春夫は、ねばっこいふくみ笑いをした。
「いや、たいしたことじゃないンだが……」
三杉はごまかした。
（この男は、おれとアケミのことをカンづいていやがるのか。いやな奴だ……）
三杉は、そう思った。
「お貸ししますよ、五万でも六万でも……。三杉さんになら、安心して貸せますよ。なにしろ、近いうちに鳥羽商事株式会社のご令息になられるお方ですからね。そして、そう遠くない将来には、三杉さんは新社長だ……」
「そんなこと、まだわかるもンか」
「美根子さんとの式は、いつでしたっけ？」
ときく春夫の口調には、嫉妬のひびきがあった。
「一ヵ月後だよ」
「とうとう、ボクを捨ててしまうンですね」
春夫は、暗い瞳をカウンターの上に落とした。うめくようなつぶやきだった。
――いつかは、この日のくることを覚悟していた春夫だった。
しかし、いざその別れが目前に現われてみれば、さすがにさびしく苦しかった。
この半年ばかり前から、三杉がどこかのバーの女給と、ただならぬ関係に入っていることを、春夫は本能的に知っていた。

三杉は、いわゆる「両刀使い」なのだ。
春夫はそんな三杉を（汚ない！……）と思った。
その女が憎かったが、三杉の愛情をまだ自分につなぎとめる自信はあった。
しかし、こんどは駄目だ。
相手が社長の娘なのだ。三杉の出世は眼の前にぶら下っている。
春夫は絶望した。もう、三杉との絆は切れるだろう。
春夫は、三杉を心から慕っていた。愛していた。身も心も捧げていたのだ。
が、それにこたえる三杉は、ただの、享楽的な、猟奇的な、タフ・ガイにすぎなかったのだ。
（——それでもいい。三杉さんが、いつまでもぼくを抱きつづけてくれるなら……）
春夫は、三杉のたくましい体臭のなかに溺れた。その厚い胸にすがった。
三杉は学生時代にラグビーの選手をやっていたという。三杉の肌には獣の皮の匂いがした。春夫は、その彼の男性的な、あまりにも男性的な、動的な汗の香りに愉悦し、むせた。
荒く息づく三杉の体温に鼻孔を密着させ、春夫は過去幾夜、いや幾つの結びつきも考えられよう。
十夜、幸福な陶酔に泣いたことだろう……。
しかし、同性が愛を求め得る同性を見つけだすことはむずかしい。
——もとよりこれは、湿った日蔭に咲く、秘密の恋だった。
（——いま三杉さんを失ってしまったら、ボクはもう孤独の地獄にお
陰花の恋であり、花は咲いても実のならぬ暗い色彩の愛欲なのである。
ち入るよりほかにない……）
春夫は、胸のなかで泣いた。
三杉の精力的な「男女両刀使い」が呪わしかった。声をあげて、三杉のふところで泣きくずれたかった。
だが、春夫は、この場ではそれを耐えた。
「——お金、五万円でしたね？」
春夫は、苦しい心で、話をもとに戻した。
「そうだよ、たのむ……」
三杉は、卑屈な微笑で、頭をさげた。
「明日の夜、八時にボクのアパートへきてください」
「ありがたい、助かった」
三杉の顔が、ホッとゆるんだ。
失うことであった。
男性と女性とのありふれた恋や愛欲だったなら、別れても、またべ



壁際に置いてある机の前までのばしているのだ。
ちょうど、距離を計っているようなポーズであった。
「なにしてるンだい？」
三杉は、背後から声をかけた。
「あ、三杉さん」
春夫は、あわててその麻紐を手すりから解き、クルクルと手の中で
まるめると、机のひきだしにしまった。
三杉は、窓際にいって、下をのぞいた。
黒い川がながれている。
「あいかわらず、裏のドブ川はよく匂うね」
顔をしかめて、三杉がいった。……。腐った泥水でも、夜はむかい
「馴れれば気にならないンですが……。魚のハラ
側のネオンをうつして、ちょっとした都会の夜景ですよ」
ドブをまたいだ対岸には、安っぽいキャバレーやバーが、
ワタのような醜悪な裏面をみせている。女の嬌声や酔っぱらい客のど
なり声がきこえて、ひどくうるさい。
窓のひさしの下には、かんたんな物干し場ができていて、古びた物
干し竿が一本わたされていた。
その竿に白いハンカチが一枚、洗濯バサミでとめられている。夜風
に吹かれているハンカチは「陰花」を象徴するかのようだった。
「五万円でしたね……」
春夫はつぶやいて、一万円サツで五枚、畳の上に置いた。
その金を妙なところから出したので、三杉は眼をまるくした。
机の上に、銅でできた立派な獅子の置き物がある。小猫ほどもあっ
て、ツヤツヤと黒光りしている。春夫は、その獅子の頭に手をかけ、
ぐいと左へねじり、スッポリとはずすとその中から金を出したのだ。
獅子の胴は、がらんどうであった。
「ほう、妙な金庫だね？」
と、三杉はきいた。
「その中へ、きみは貯金しておくのかい？」
春夫には貯金癖があった。といっても、べつにシマリ屋とか、ケチ
とかいうのではなく、もらったサラリーを一般の男なみの歓楽で費消
することがすくない。したがって、しぜんに貯まるのだ。
だから、三杉への五万円も、すぐに用だてられるのだった。
「この獅子の置き物は、海軍の将校だった親父のカタミなんです。イ
タリヤのナポリで買ってきたというンですが……」
説明しながら、春夫はその獅子のたてがみを撫でた。
「ほう、イタリヤ製かい。……ところで、この金、借用証でも書こう
か？」
三杉は、卑屈な眼でいった。
「そんなものいりませんよ。――だけど、そのお金、案外、たかい利
子がつくかも知れませんよ……」
春夫の紅い唇が、妖しい微笑を洩らした。
三杉は不安をおぼえたが、いまはなんとしてでも五万円欲しい。
「春夫くん、ぼくだって、きみと別れるのはつらいンだよ。だけど、
しかたがないンだ。わかってくれ……」
三杉は、春夫の肩を抱いた。演技の愛撫だった。
「三杉さん！」
春夫は、待っていたように、三杉の胸のなかであえいだ。

4 手切れ金

それから三十分後に、三杉はもうアケミのアパートに現われていた。
春夫の部屋とはちがって、こちらはどこまでも明るく、なまめかしい色彩にあふれた、女の一人ずまいである。
三杉は、借りてきたばかりの五万円を、アケミの手に握らせた。
「これ、すくないけど……」
さすがに、やるせないような感情が、三杉の胸に湧いた。
春夫にはもう飽きていたが、このアケミとは、つき合いはじめてから、まだ半年しかたっていない。
「――手切れ金ね……」
ほうぜんとして、アケミは受け取った。
三杉のたくましい若さに、アケミは女として参っていた。本気で惚れていたのだ。
三杉にも、アケミと別れたくない気持ちはある。
だが、彼は美根子と結婚し、鳥羽商事の社長になりたかった。
春夫やアケミとの愛欲よりも、その欲望のほうが強かったのだ。
「ぼくは、ほんとうをいえば、きみと別れたくない……。なんとかして、別れないですむ方法はないだろうか……」
未練にもだえる、という演技の表情で、三杉はいった。
「欲ばっちゃいけないわ」
アケミは笑ったが、顔はゆがんでいた。
「そうだな、欲ばっちゃいけない」
三杉は苦笑した。そして、一語一語をはっきりとアケミにささやいた。
「今夜かぎりで、きみとぼくとは、アカの他人だよ。二人の間には、なにもなかったんだよ。道で逢っても、お互いに知らん顔をするんだ……」
「わかってるわよ。半年前、別れるときがきたら、きれいに別れましょうと言ったのは、あたしだったわ。――でも、男って勝手ね」
「きみとの関係が知れれば、こんどの話は、いっさい、ぶちこわれてしまうからな」
「お金に困ったら、あなたのところへ脅迫にいくわ。むかしの女を忘れたかッて。うふふふ……」
「それが一番こわい」
二人は顔を見合わせて、複雑な笑いをうかべた。
「ウソよ。冗談よ。安心しておムコさんにいきなさい。童貞みたいな顔をして……」
「きみは女のくせに酒飲みだから、酒でからだをこわさないようにしろよ」
やさしい言葉が、三杉の口からでた。
三杉の腕が、ついさっき春夫を抱きしめたと同じポーズで、アケミを抱いた。
「社長の娘なんかより、ほんとうはアケミのほうが好きなんだ」
「もう、やめて！」
アケミは、三杉の胸を突きとばした。
部屋の隅にいき、くるりと三杉に背をむけると、いきなり畳に突伏して、アケミはわあッ……と泣きだした。
はげしくふるえるアケミの背中を、三杉はだまって見つめていた。



ら下までを、素早い動作でパタパタと叩くようにまさぐられた。

「なんだ、きみたちは！」

三杉はどなった。

「三杉英樹さんですね。ちょっと署まで同道ねがいます」

二人の男は、刑事だった。

「なんです、ぼくが何をしたというンだ！」

三杉は、愕然として身をもがいた。

「青田春夫——知ってますね？　青田春夫が殺されたンです……」

「ええッ！」

三杉は棒立ちになった。信じられない。つい一時間前に逢ってきたばかりではないか。

悲痛な女の泣き声をきくうちに、三杉の胸底からゾクゾクするような快感が湧いてきたのだ。

三杉が、自分のアパートの前に帰ってきたのは九時半だった。

玄関のドアに手をかけたとき、暗がりのなかから、いきなり二人の男が現われて、左右から三杉の両腕をつかんだ。

と同時に、背広の上から「だ、だれに殺されたンです！」

三杉は、口をパクパクさせて、かすれ声をだした。

「まだはっきりはわかりません。が、だいたいの見当はついている。とにかく、署まできて下さい」

三杉の腕をつかんだ刑事の手は、鋼鉄のように固かった。

5　殺人現場

春夫は、アパートの自分の部屋で死んでいた。

拳銃の弾丸が一発、みごとに春夫のこめかみをぶちぬいていた。

部屋の内部はひどく散乱し、金品を物色したような形跡があった。

死体が発見されたのは、八時四十分ごろである。春夫の部屋のドアが開け放しになっていたので、管理人がひょいとのぞきこんだ。

そこでこの惨事を発見し、あわてて警察へ通報したのだ。

銃声をきいたものは、一人もいなかった。

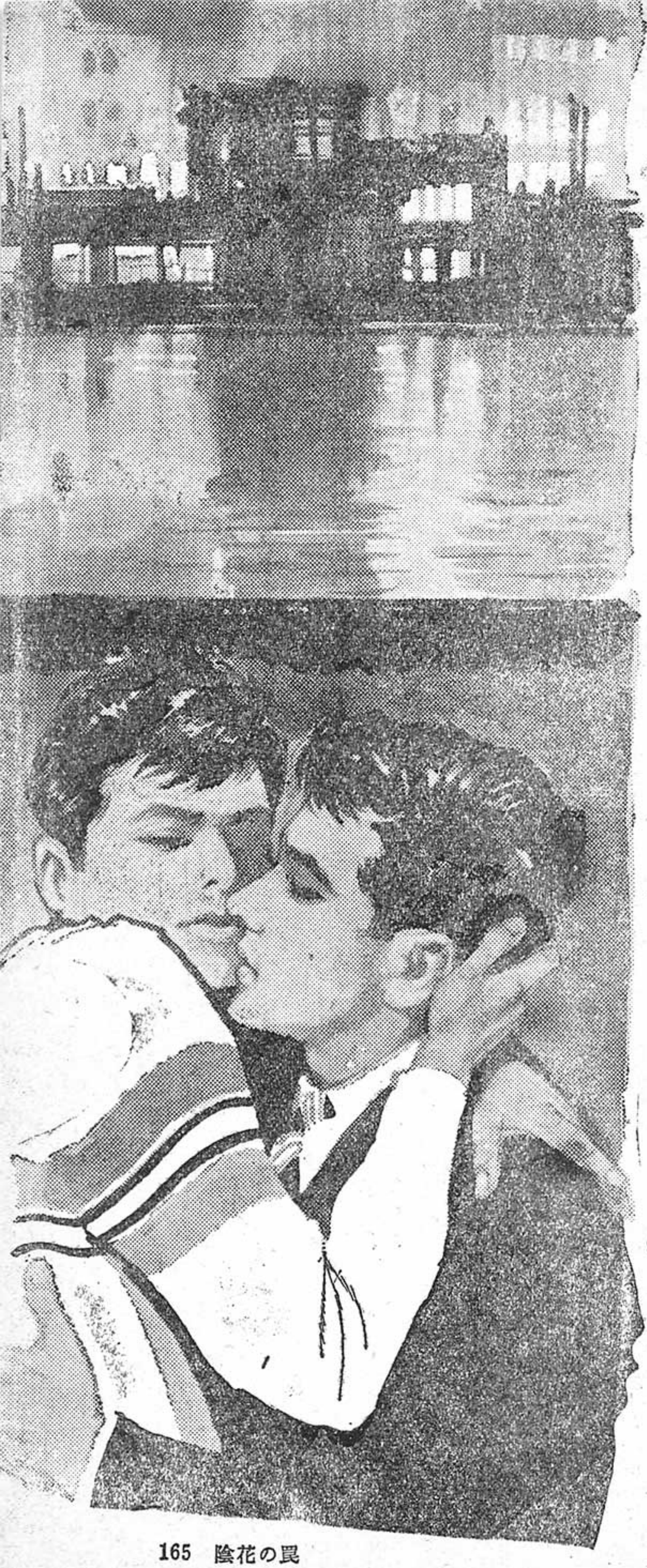
裏のほそいドブ川をへだてて、すぐむかい側には、安キャバレー、三流バーが並んでいて、このあたり騒音がはげしい。

銃声を耳にした者もいるにちがいないのだが、気にとめなかったらしい。

現場をひと目みて、殺人——と断じられたのは、まず兇器の拳銃が死体の近辺から発見されなかったからである。

そして、前のめりになって突伏している死体は右手の指さきが、黒インクにまみれて、畳の上に〝三〟という字を書いていた。

黒インクの瓶は、その死体の指さきから、三十センチほど離れたところに、横倒しになっていて、畳はどっぷりとインクを吸っていた。



春夫が射たれて瀕死の際、犯人の名を教えるために、インク瓶に指を突っこんで、この〝三〟という文字を書き残したということは誰にでも想像できることである。

ドアのノッブからは、三杉の指紋が検出されたし、灰皿に残っていたタバコの吸がらも三杉が吸ったものと断定された。

なお、鑑識の結果、春夫の頭骸骨を射ち砕いた弾丸は、旧日本海軍の十四年式陸式拳銃のものだったことが判明した。

6 駒地

三杉は、いま自分の頭上に、殺人容疑の汚名がかぶせられていることを知った。

三杉に対する石神警部補の訊問は峻烈だった。

「きみは事件の当夜、被害者の部屋をたずねたそうだね？」

「ええ、いきました」

「なんの用があって、たずねたのかね？」

「なんの用……遊びにいったのです。同じ会社に勤務する仲の良い同僚でしたから」

「金を借りにいったとは言えなかった。

五万もの金を借りたと言えば、当然その使いみちをきかれて、よけ

いなことまで追求される。
アケミのことを警察に知られたくはなかった。警察に知られれば、やがては鳥羽父娘の耳に入る。
せっかくつかんだ三杉の幸運は、たちまち破滅だ。
しかし、三杉は自分にかけられた容疑が、すぐ晴れることを信じていた。
(おれは、ゼッタイに青田殺しの犯人ではない。だから、すぐ釈放される！……)
べつのところから犯人が検挙され、自分は警察から陳謝低頭されて威張って帰れるだろう。
なにしろ、数日後には、美根子との結婚式をひかえた、たいせつなからだなのだ。
「――きみは当夜、何時から何時まで被害者の部屋にいたのかね？」
「八時から、八時半ごろまでだったと思います」
「きみが、きみの住むアパートの前まで戻ってきたのは、九時半だった。これは、きみを連行してきた刑事が証人になる……」
「すると、被害者の部屋を出てから、自分のアパートに戻るまでの一時間、きみはどこでなにをしていた？」
「……」
窮地に追いつめられた三杉は、凝然と眼をみひらき、宙の一点をにらんだ。

7 灰色の部屋

壁も天井もうす汚れた灰色の部屋だった。
窓一つない、つめたく湿った面会室に、華やかなピンクのコートを着た美根子が立っていた。
「――信じて下さい、美根子さん。ぼくは青田を殺しやしません。ぼくに青田を殺す理由なんかないじゃありませんか。こんなところへ拘置されて、とんでもない迷惑なんです」
三杉は、余裕のある微笑をみせていった。
をにらみすえた。
「――きみは、たしかに一度は青田の部屋を出た。これはきみの後姿を見たアパートの管理人が証言している。――だが、きみは、いったん外へ出て、誰も見ていないのをたしかめると、ふたたび階段をのぼり、青田の部屋に戻って彼を射殺し、彼が金庫がわりにしていたライオンの置き物やら、他のめぼしいものを盗んで逃げた……」
「そ、そんなバカな！」
「兇器やら、盗んだ品物やらを処分するために一時間かかって、それから自分のアパートに戻った……」
「でたらめです、ぼくはそんな……」
「きみ以外に、あの夜青田の部屋に入った者はいないのだ。いいかげんに本当のことを言ったらどうかね！」
「……」

「私だって、三杉さんを信じているわ」
美根子は、三杉のやつれた顔を、まじまじと見つめた。
「だけど、青田さんの部屋を出てからの一時間、あなたはどこにいたの？　なぜそれを、ハッキリ警察の人に言わないの？」
三杉の微笑が、かたくなった。その一時間には、この美根子にもっとも知られたくない事実がある。
「街をブラブラしていたンです……」
「それを証言する人が、一人もいないのよ」
三杉を見つめる美根子の瞳に、疑惑の光りが生じた。
「美根子さん、信じて下さい。大丈夫です。もうじき、きっと真犯人がつかまります。ぼくは釈放されます！」
三杉は、噛みつくようにさけんだ。
しかし、三杉への容疑はなかなか晴れなかった。
それどころか、彼にとっては、ますます不利な事実が発見された。
青田の日記が書棚の中からでてきて、その一ページに、
――ぼくは三杉さんのたいへんな秘密を知ってしまった。このことが三杉さんに知れれば、ぼくは彼に殺されるにちがいない……。
という、不穏な数行が書かれてあったのである。
日附は、事件の日から三日前だった。
このことは、さっそく石神警部補に追究された。
「きみの秘密というのはなんだね？　被害者の日記によると、たいへんなことらしいが」
三杉は、ドキリとした。
（春夫のやつ、やっぱりおれとアケミのことを感づいていたのだろうか？……）
しかし、三杉は強く否定した。
彼の心には、まだ一片の望みがあった。
彼は、あくまでも無実を主張した。
（真犯人さえつかまれば……）
（警察はなにをグズグズしているんだ。犯人はどうせあの近辺に巣喰うヤクザかグレン隊で、ながしの強盗殺人にきまってるンだ！）
三杉は歯がゆくてどなりつけたいほどだった。
こんなひっかかりあいで、鳥羽社長が美根子との結婚を中止させるような気になったらたいへんだと思い、そのことが心配だった。
居ても立ってもいられないほど、心配だった。

8　バカな女

三杉は殺人罪で起訴された。
ここに至って、はじめて三杉は危機感に襲われ慄然とした。
（警察側は、どうしてもおれを犯人にしたてる気なんだ！……）
客観的に考えてみれば、彼を犯人ときめつける情況も証拠もそろっているのだ。
自分がのっぴきならない不利な立ち場に陥ち入っていることを、彼は強烈な恐怖で感じた。
「石神警部補を呼んで下さい。話したいことがあります」
彼は、ついにアケミのことを告白しようと決心したのだ。
「――八時半に青田君のアパートを出たぼくは、それからの約一時間

を、アケミという女の部屋で過したのです……。ぼくのアリバイは、だからその女にきけばハッキリします。——だけど、このことは絶対に秘密にしておいて下さいよ。このことが新聞にでも書かれたら、ぼくは身の破滅です。ぼくは無実なんだから、もしそれがほかへ洩れたら、あなた方を、人権蹂躙で訴えますよ……」

石神警部補は、ただちにアケミのいるアパート、白馬荘にとんだ。

石神警部補の訊問に対して、アケミは待っていたというような顔でしかし、ひややかな声音で言った。

「——三杉英樹？……さあ、知らないわ、そんな人。見たこともきいたこともないわ。ええ？　ああ、このごろ新聞によくでている人殺しの容疑者の名前ね。そういえば、どこかできいたことがあると思ったけど……。いやだわ、そんな人とは、過去にも現在にも、つきあったことなんかないわよ。失礼だわ」

石神警部補は、その言葉を、アケミと同じひややかな口調で、三杉につたえた。

「そ、そんなバカな！——わかった！　あいつは、おれとの約束を守って、そんなことを言ってるンだ。バカな女だ。場合が場合じゃないか。なぜ本当のことを言ってくれないンだ！　このままいけば、おれは死刑じゃないか。石神さん、おねがいだ、もう一度、あの女のところへ行って下さい。そして、ぼくが本当のことをしゃべってもいいと言ったと伝えて下さい！」

三杉は、キチガイのようにわめいた。

いままで黙否していた事実を、セキ切ったようにしゃべりだした。

アケミとの最初の出逢いから、現在に至るまでの関係を、こまかく述べたのである。

「——あの夜、青田君の部屋に行ったのも、アケミに渡す手切れ金の五万円を借りるためだったンですよ！」

「ふうむ……」

石神警部補は、眉を寄せてうなずいた。

三杉のつきつめた表情には、多分の真実性があった。

しかし——。

ふたたび石神警部補が白馬荘アパートを訪れたとき、アケミは、皮肉にもこの世から去っていたのである。

アパートじゅうは、ひっくり返るような騒ぎであった。

アケミは酒を飲みすぎて泥酔し、ガスの栓をあけ放したまま寝こんだために、中毒死を遂げたのである。

三杉のアリバイを証明する唯一の人間が、死んでしまったのだ。

「——アケミが死んだ！……」

三杉は、瞼の裏がクラクラした。

（酔っぱらって、ガス中毒！……くそッ、だから、酒には気をつけろと言ったンだ！）

三杉は、フラフラと椅子から立ち上った。

灰色の固い壁に自分の額を押しつけ、咽喉からしぼりでるような声でうめいた。

「——くそッ……くそッ……」

9　獅子と拳銃

ようし、おれは負けないぞ、こうなったらおれは自分で自分の無実を証明してやる！

三杉は立ち直った。
タフ・ガイの本領を発揮しはじめた。
三杉は、混乱しつづけている頭脳を、努力して平静にもどした。
春夫が誰に殺されたか、その犯人を突きとめる必要はない。

——要は、おれがやったのではないことだけを証明できればよいのだ。

春夫を射ち殺したのは、いまどき珍らしい旧海軍の使った十四年式の拳銃だったという。

——待てよ。春夫の父親は海軍の将校だと言っていたな。すると、春夫が父親ゆずりの拳銃を持っていたということも、あり得ないことではない……。

——あの夜、おれ以外にあの部屋に入った者がなかったとすれば……もしかしたら、春夫を殺したのは、春夫自身ではなかったか。つまり、自殺だ……。

三杉の推理は飛躍した。

——だが、なんのための自殺？……

三杉の脳裏に、春夫の異常な執念がよみがえった。

あの紅い唇、まるい顔、白くポッテリとふくらんだ弾力の裸体。数ヵ月前のある夜、春夫は、三杉の腕の中であえぎながら、きれぎれにうめいたのだ。

「——三杉さん、永久に、ボクから離れないで……ボクから離れるときは、ボクを殺してね……三杉さんの手で殺されるなら……ボクは本望だよ……」

その三杉は、数日後に社長の令嬢と結婚する。春夫は絶望し、死を計った……。

——おれを冥土への道連れにするために、計画的にやりやがったンだ！……あいつは、おれを死刑にするための罠をつくっておきやがったンだ！……

——おれを自分の部屋に呼び寄せるために借金の申し出にも軽く応じた。金を渡す時刻も夜を選んだ。畳の上に黒インクの指で〝三〟という思わせぶりな字を書いてから、拳銃弾を自分の頭にぶちこんだのだ！……

——だが、自殺だとすると、現場に拳銃が残っていないのはなぜだ？……

自分の頭を射ってから、裏のドブ川にでも投げ捨てたか？

いや、こめかみをぶちぬいたら即死だ。死体にそんな力はない。

——しかし、弾丸を発射した拳銃が、誰の力も借りずに、ひとりでドブ川の中に歩いていき、落ちてしまえば、あとはどうみても他殺の現場になる。

三杉の脳裏に、そのとき、急激によみがえった一事があった。

春夫の部屋から、獅子の置き物がなくなっていたという、石神警部補の言葉である。——あの銅製の獅子が、拳銃をかくす小道具に使われてはいないか？……

三杉の眼は鋭く血走って、灰色の壁の一点を凝視した。拳銃と獅子とドブ川を、なんとかしてつなげなければならない……。

「——そうだ！」三杉は思いだした。

あの夜、ノックなしに春夫の部屋のドアをあけたときの光景。

春夫は、麻紐の先端を窓の手すりに結びつけ、それを引ッ張って、室内の机附近までの距離を計るようなそぶりをしていたのだ。

三杉は、さらにあの部屋の窓際につきでたひさしと、その下の物干竿とをおもいうかべた。

——拳銃に約三メートルほどの麻紐を結びつけ、その反対側の端にあの獅子を縛りつける。銅製の獅子は、おそらく拳銃より三、四倍は重いだろう。そして、その獅子を物干竿の上から外へ垂らす。ひさしの下の物干竿を頂点として、室の内と外に、麻紐の左右の先端に結びつけられた拳銃と獅子がぶらさがるわけだ。

その仕掛けをほどこすと同時に、拳銃はしっかりと握っていなければならぬ。さもないと、拳銃は、獅子の重みに引ッぱられて、スルス

ルと物干竿までのぼり、さらに竿を越えて、下の黒いドブ川に、獅子もろとも落ちてしまう。ということは、つまり、春夫が拳銃の引き金をひいて、自殺を遂げると同時に、拳銃は春夫の手をはなれて、スルスルと物干竿へのぼるさらに竿を越えて、窓下の黒いドブ川へ、ぼちゃりと落ちて消えてしまうわけだ。

「――そうだ、それにちがいない。おれに罪を着せるために、あいつが考えた陰険で狡猾な罠なんだ！」

罠でもあり、これは嫉妬に根ざした復讐でもあったろう。

ここまでくれば、春夫の日記にあった、れいの数行の証拠も、三杉の不利を強調するための創作だったことが考えられる。

三杉の必死の訴えと説明をきいた石神警部補は、半信半疑ながらも約三メートルほどの長さの麻紐につながれて、発見されたのである。

・

底はかなりの深さだった。臭気がはなはだしく、このドブさらいは難渋をきわめたが、三杉の推測は的中していた。拳銃と獅子の置き物が、・腐った塵埃と泥が重なりあって、川

釈放された三杉は、まっすぐに会社の社長室をめざした。

そこには、三杉の帰りを待ち受けて鳥羽社長と美根子が坐っていた。

「――よかったな、無事にもどれて……」鳥羽社長は、ジロリと三杉を見あげて言った。美根子は感情を殺した顔でうつむいていた。

「はあ、おかげさまで。……もともと、ぼくには、なんの罪もないンですから……」三杉は、昂然としてこたえた。

「――だが、きみには今日限り、社をやめてもらうよ。もちろん、美根子との約束もとりやめだ――」

鳥羽社長の声音には、怒りをおさえたひびきがあった。

「えッ？　どうして、どうしてです！　ぼくにはなんの罪も！」

「――三杉さん！」

美根子が、つめたい金属的な怒声を発して立ちあがった。

「――アケミさんが、私に手紙をくれたの。この半年間のあなたとの関係を、便箋二十枚にぎっしりと書いて……。あなたのアリバイも、ちゃんと証明してくれているわ。あなたが青田さんから借りて、アケミさんに渡した五万円も、手紙と一緒に入っていたわ。その五万円があなたの無実を証明する証拠になればいいって……」

「アケミが、美根子さんに手紙を！」三杉は、呆然としてうめいた。

「ただの手紙ではないわ。遺書よ。遺書なのよ！――アケミさんは事故死なんかじゃないのよ。自殺したのよ、あなたに捨てられて。アケミさんのおなかには、あなたの子供がいたのよ！」

「ああ……アケミは自殺だったのか！……」

「アケミさんは、はじめはあなたのアリバイの証言を拒否して、あなたを死刑台にのぼらせてやろうと思ったらしいわ。けれど、やっぱりそれができなかったの。あなたを愛していたからよ！　私がこの遺書を警察に見せたからこそ、あなたの釈放も早められたのよ。そうでなかったら、あなたはまだあの灰色の部屋よ。あんな自殺の仕掛け、殺人犯人だってつくれるもの……かわいそうなのはアケミさんよ！　卑劣で醜悪なのはあなたよ！」

罵りつつ、美根子の顔は陶器のように白く硬ばっていた。

三杉は、蒼白な表情で、凝然と床を見つめていたが、やがてそのうすい唇をまげると、片頬をひきつらせ、フフン……と笑った。

「――まずかったな」

低くつぶやくと、愴狼とした足どりで、部屋から出ていくのである。

江戸暗黒秘録

刑具囚俗抄

★国民性によって拷問法も違う。西洋のそれは奇抜であり
★機械的であり、そして残酷さもまた筆舌に尽し難い！

鈴木和夫
東桂史・画

拷問と自由主義

江戸時代の拷問の話、法律の話、刑罰の話牢獄の話、等々は本誌旧号にいろいろと御紹介したが、読物としての構成の都合上、書き洩らした事柄もたくさんあるので、今月はそういうものを拾い集めてみよう。昔の言葉でいうと、これを「拾遺」と称する。つまり「拷問と処刑・拾遺」というわけである。

兼好法師の「徒然草」――というと、「ああ、つれ〴〵草か。中学校の教科書に何かそんなのがあったが、あれはつまらん。鞍馬天狗の方がおもしろかった」などと思う読者もおられることだろうが、古典はやはり読んでみるもので、第一、下手な芥川賞ものなんかよりは、ずっとおもしろい。

同書の第二百四段に、昔の拷問のことを伝えた記述がある。

犯人を笞（しもと。鞭杖のこと）にて打つ時は、拷器によせてゆひつくるなり。拷器のやうも寄する作法も、今はわきまへ知れる人なしとぞ。

というのである。つまり「犯人を鞭打つ場合は拷問器へ括り付けるのであるが、昔の裁判は「自白主義」だったからであり、裁判官は被告人の自白状がなければ判決を下せなかったからである。

では、無実の罪で官憲に捕われた者は、一体どうすればよいのか？　よほどの名裁判官がいて「銭形平次なみ」や「ホームズばり」の意味だ。ここでいう「犯人」とは真犯人の意味ではない。昔は「白か黒か？」などということにはあまり神経を使わなかったのだから、「被疑者」と「真犯人」の区別がなく、囚人であればすべて「犯人」であり「咎人」なのだ。「疑わしきは罰せず」ではなくて「疑わしきは犯人と見なして拷問する」という仕掛けになっていたのである。

なぜそう軽々しく拷問をするかというと、昔の裁判は「自白主義」だったからであり、裁判官は被告人の自白状がなければ判決を下せなかったからである。

では、無実の罪で官憲に捕われた者は、一体どうすればよいのか？　よほどの名裁判官がいて「銭形平次なみ」や「ホームズばり」

の推理力とヒューマニズムなどを示してくれるならば話は別である。しかし、ホームズや平次や大岡越前守みたいなお歴々は、そういつでも間に合うように登場するわけではない。

今から約二百年ほど前の人、チェザーレ・ベッカリーアは、不朽の名著「犯罪と刑罰」で、次のようにその恐るべきやり方を指弾している。同書の第十二章「拷問に就いて」という文章には——

等しく無実か、等しく有罪かの二人の人間があっても一人は自然から力強さと勇気とを頂戴しているために放免され、他の一人は自然によって力弱く臆病につくられているために処罰せられるだろう。それは次の如きものである。お前——力弱き者よ、お前は苦痛に耐えることができた。だからお前を放免してやる。お前——力弱き者よ、お前は苦痛に負けた。だから処罰するのだ。だから、無実の者は真犯人より不利だということになる。なぜかというと、かりに苦痛に耐えきれず自分が犯人だ



正確な推理によってである。曰く、「俺——裁判官——は、否応なく、この犯罪の犯人を見附けねばならぬ。お前——力強き者よ、お前は、そういた自白は無力だということを。だがもしお前が今しがた自状したことを確認せねば俺は、もう一遍お前を苛めてやろう（風早八十二氏訳）とある。ベッカリーアはさらに続けて次のような意味のことを書いている。砕いて紹介すればこうだ——

「こういうふうに拷問を当然とする制度のもとでは、必然的に生れる一つの奇妙な結果として、無実の者は真犯人より不利だということになる。なぜかというと、かりに苦痛に耐えきれず自分が犯人だ

た心にもない白状をするならば、処刑されてしまうのだし、あくまでも無実だといい張っても、やはり受ける理由のない不当な責苦を受け続けなければならない。一方、真犯人はかえって都合がよい。彼が、その悪党精神とタフ・ガイぶりにものをいわせて責苦に打ち克てば、無実放免という結果にもなろうというものだ。すなわち、無実の者には損なことばかりであるがそれに反して真犯人は、大いに儲かる立場にあるというのであって、無実の囚人は全く立つ瀬がないのである。

拷問の歴史

さて——読者は、こういうことを考えないだろうか。

「ベッカリーアさんあたりのお国柄とくらべると、わが日本などはよほどブンカ的だったわけだな。何しろ、兼好法師さんあたりの時代に鞭打ち拷問が廃れていた、というんだからな」

相当に高名な法律家の中にさえ、そういう意味のことを述べ



ている人があったくらいだから、これは無理もない。

だが、残念ながら「そういうお人好しの解釈は間違いである」と、ズバリ申し上げていることになる。

兼好法師は鎌倉時代——ちょうど、元寇の役があった頃の人であるから、これは今から七百年近く昔の世相の一端を示していることになる。

そもそも、拷問の拷という字は「打つ」という意味であって「拷問とは、打ち叩きて問うこと又、ハリツケ柱ハ昔ノ笞トイフモノナラン」というような定義ができ上ったのはいつ頃か、ということになると、大宝年間から養老年間にかけて——今から約千二百五十年ほど前の時代である。すなわち、大化の改新から七十年ほどたった頃であり、日本が法治国としてようやくその形が整ってきた時分の話なのである。

この時に制定された法律を「大宝律令」というが、その中の「獄令」及び「断獄律二十二箇条」によって、裁判や拷問などの方法が定められたのである。

当時の制度の大略を述べてみると——、役人が犯人を取調べ

るには、まず「五聴」という方法をマスターしておかねばならぬ。

「令義解、巻十、獄令」には——

一に曰く辞聴、辞聴は其言葉を出すを観るに、正直ならざれば則ち煩ふ。

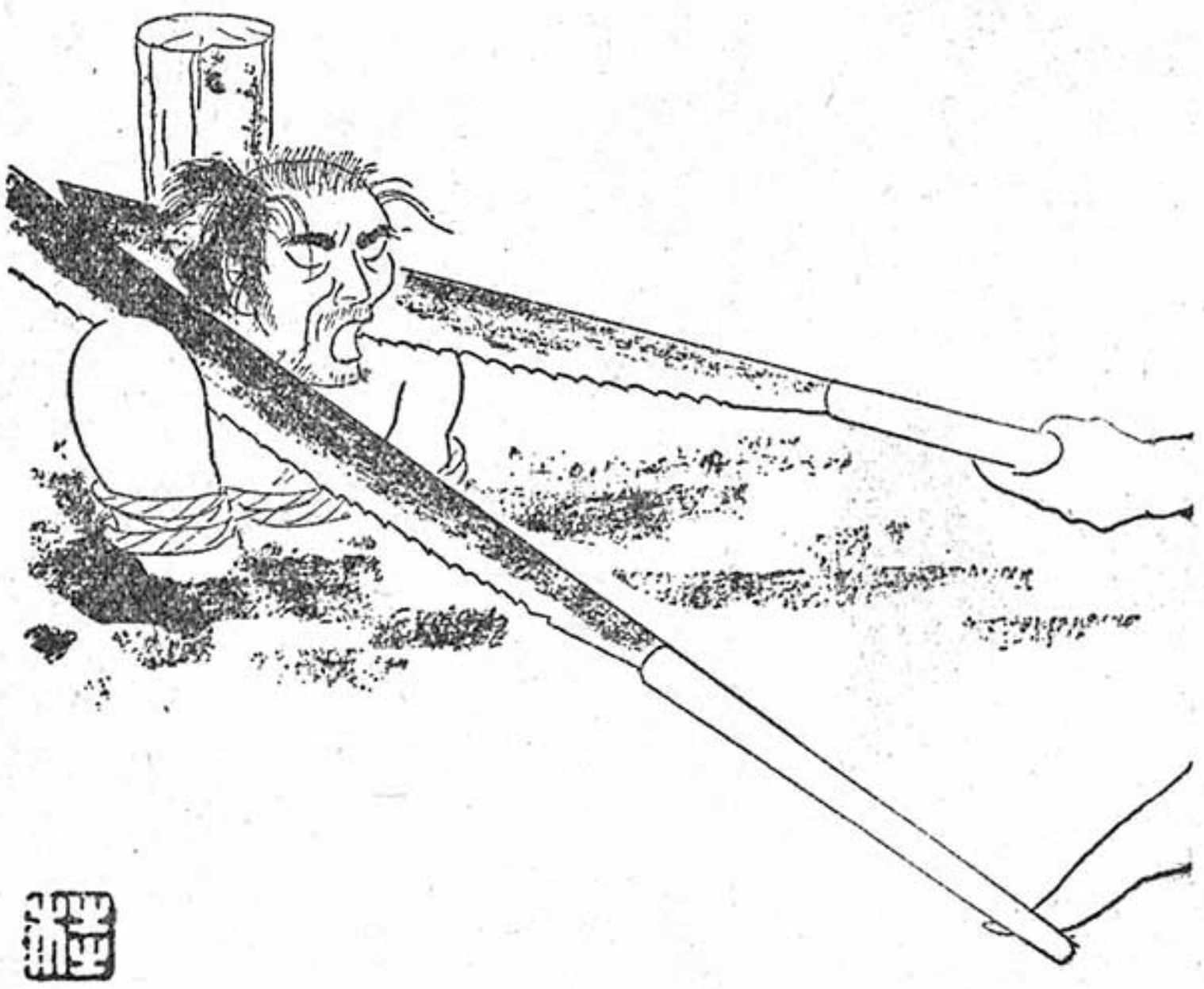
二に曰く色聴、色聴は其顔色を観るに、正直ならざれば則ち赧面す。

三に曰く気聴、気聴は其呼吸を窺ふに、正直ならざれば則ち息喘ぐ。

四に曰く耳聴、耳聴は其聴聆を観るに、正直ならざれば則ち惑ふ。

五に曰く目聴、目聴は其眸子を観るに、正直ならざれば則ち眊然たり。

と解説してある。また「徳隣厳秘録」は、是れ上古罪人の罪の実否を察するの法也。思案するには必ず顔を仰向け、女は思案するには俯す。又、偽りを云ふ者は、向て其者の眼中を見つめて其事を問ひ返せば、必ず目たたきをして答る也。是れ偽りを云ふ者のすることなり。云々——



と註釈している。なお、念のために「五聴」の方法を現代語で述べてみる。

第一の「辞聴」とは、被疑者の供述であれば、とかく前後のつじつまが合わず、首尾一貫したところがないのみならず、話し方も渋りがちである——。

第二の「色聴」とは、被疑者の顔色を観察する。取調べが事件の核心に触れた時、表情に動揺が現われるような奴は怪しい——。

第三の「気聴」とは、その息づかいを観察する。問い詰められて喘いだり、呼吸が乱れるような奴は怪しい——。

第四の「耳聴」とは、虚偽の申し立てをする奴ならば、巧くいい抜けようとして自分の頭の中で種々と知恵を絞るから、その間には刑事諸君のいう言葉を聞き違えたり、聞き洩らしたりして「今、何て聞いたんですか?」などと聞き返すようなことがある。だから怪しい——。

第五の「目聴」とは、眼の澄んだ人間は列車の転覆などやるはずはない、という広津和

郎氏の大先輩に相当する推理法のこと——。

以上、五つの推理的観察をしてみて「どうもやはり、こいつは怪しい、伝染病の予防薬と称して言葉たくみに青酸カリぐらいは飲ませかねないタイドの人間である」というような判断がついたならば、上役から書類に判コを貰って、拷問を開始するのである——。

拷問の規定

（話が江戸時代から遠ざかってしまうが、いましばらく大昔の制度の紹介を続けてみよう。何事によらず、源をたどってみることは無駄ではないのである）

拷問は笞打ちのみと定め、他の方法による苛虐は禁じられていた。

笞の数は最高二百回を限度とし、それ以上打ってはならない。その二百は三度に分けて打つ。

第一回目に六十五を打ち、白状をしない場合は牢へ戻す。二十日間がたつと第二回目の拷問として六十五を打ち、それでも白状しない者は、さらに二十日後、七十を打つのである。（「延喜刑部式」及び「金玉掌中抄」という書物による）

打つ場所は背中と臀に限られ、七十度の笞任務を辞退することができた。（「令義解」）

笞の形は、長さが三尺五寸。両端の直径が四分と三分のもの、と定められ、消耗品であるから、毎年十一月には物部丁の仕事として千本を揃えさせることになっていた。（「延喜刑部式」）物部というのは物品調達係のことである。

拷問中の囚人は牢へ拘禁しておくのを原則とし、こういう未決の囚人を「禁囚」という。罪状によっては牢舎の中でも、手枷、足枷、捕縄、等をかけておく場合があった。

手枷は長さ一尺八寸以下一尺二寸以上、首枷は長さ四尺以下三尺以上、というような事柄まで定められていた。

牢内で身体を拘束されず戒具を免ぜられる囚人を称して「散禁」という。「牢の内ではよろしい」と、罪状によって少し優遇したわけである。

また、極寒の日、極暑の日、正月などの祭日は、いずれも拷問を行なわない。（「延喜刑部式」及び「金玉掌中抄」）

拷問の担当者が、被拷者の肉親や親族、または恩義ある者、あるいは互いに宿怨ある者等という皮肉な組合せになった場合は、被拷者は役人を忌避することができ、役人はその

牢舎は区別され、男牢と女牢とに分けられていた。囚人の衣食はすべて官給品である。懐姙の女囚は確実な保証人がある場合、一時保釈出獄の上で分娩をすることができるほか、父母や配偶者の死に際しては

同様の条件で一時の保釈が許された。また囚人が病気になった場合、家族の者が牢内へ来て看護をすることも許された。（「令義解」及び「延喜刑部式」「日本法制史」等）

以上のほか、まだ細かい定めが幾つもあるが、何とも念入りなことである。江戸幕府の制度とくらべてみるのも一興（本誌旧号、及び、拙著「江戸暗黒秘録」参照）だが、一つ決定的に相違する点は、前後三回、答二百の拷問に耐え得た囚人は釈放される、ということにある。もとより身柄引受人を必要とするのだが、前述のベッカリーアが「真犯人は儲かる」といったのは、こういうことを指しているのである。

日本最古の水責め

ここで「大宝律令」以前の拷問や刑罰について触れておこう。

「播磨風土記」に、書物に現われたものとしては日本でも最も古い時代の例だろうと思われる「水責め」の話がある。

仁徳天皇の治世。贅沢をした咎で水責めに遇った一族が二組あって、その中に執政大臣の娘が二人いたので役人は大いに驚き、ただちに女二人を放免した——というできごとである。

弥加都岐（みかづき）の原、難波の高津の宮の天皇（仁徳天皇）の世に、伯耆の加具漏（かぐろ）、因幡の邑由斯（おゆこ）の二人、大きに驕りて節なく、清める酒（すめる酒。当時の特級酒だ）もて手足を洗ひき。ここに朝廷、度に過ぎたりとして、狭井連佐夜（さいのむらじさや）を遣はしてこの二人を召さしめき。その時に佐夜、すなはち悉（ことごとく）に二人の族を禁め（いましめ）。捕縛して）赴参ける時に、屢（しばしば）清水の中にして酷く拷めしに（水責めにかけて苦しめたが）中に女二人あり手足に玉まとひけり。ここに佐夜、怪しみ（身分ありげな女だと思って）問ひしかば、答へけらく、「吾は服部弥蘇連（はとりべのみそのむらじ）が、因幡の国造、阿良佐加比売（あらさかひめ）に娶ひて生める子、宇奈比売（うなひめ）久波比売（くわしめ）なり」と云ひて、ところ。水責めをした場所）をやがて美加都岐の原と号く。

というのである。

伯耆と因幡——現代でいうと鳥取県だ。この辺りから贅沢な男二人と、その一族郎党を検挙して大阪へ曳き立てたわけである。道中何十人かの罪人をしばしば水責めにかけたというのだから、水のある場所を通るたびに感興が湧いて、何遍も同じことをくり返したのかも知れない。やがて兵庫県に入った時、大臣の隠し子か何かで宝石を手足につけた女が二人いることに気づいた。このまま都へ連行しようものなら自分の命が危ない。そこで、急拠、二人を釈放した——というお粗末の一席である。

妙に水責めに熱中したのは「酒で手足を洗うとは不届きな奴！　第一、もったいないではないか！　体は水で洗うものだ。よく覚えておけ！」というようなつもりで「因果応報主義」を行なったのだろう。

贅沢が罪とされたのは、何しろ仁徳天皇の治世であるから「民のカマドに煙が立たぬのを見て朕は三年間の免税を実施したのに、酒で手足を洗うとは何事であるか！」という怒

りがあったのである。

この連中は、もっと遅く生れていれば笞打ちの拷問ですんだわけだが、はたしてどちらがよかったか——となると何ともいえない。真夏なら水責めの方がよろしいようである。

次に、仁徳天皇の子孫にしてはひどくできの悪かった天皇——雄略天皇の話を一つ。

この雄略天皇という人は仁徳天皇の孫にあたるが、生れついての異常性格で「夕に見ゆる者は朝に殺され、朝に見ゆる者は夕に殺される」と日本書紀にもあるほどの殺伐な人であった。まずは歴代天皇中でも屈指の殺し屋であったことは、誰しも異存のないところであろう。もっとも、ひとり雄略天皇だけが異常だったわけではなく、当時、この一族はメンデルの遺伝の法則を有弁に立証するが如く、異常性格者を大量に輩出させていた。当時の天皇家は非道徳と暴虐と殺人の記録の連続であり、いちいち例をあげていては際限がない。

雄略天皇一代の間だけでも枚挙にいとまのないほどに大量の殺人がくり返されたが、中で、その方法最も惨虐なのは、池津媛と石河楯を火刑に処した事件である。

雄略帝の二年——。百済(くだら。朝鮮)から貢せられた池津媛という美女があったが、この美女は雄略天皇の性格を嫌って石河楯という二枚目と相思相愛の仲となってしまった。

怒ったのは雄略天皇である。何しろ、無動機殺人に近いようなことをさんざん行なってきた天皇だから、ここで怒らなければ理屈に合わないというものだ。

「おのれ！　朕の妃に処した女を、横取りするとは何事であるか！」

というので早速に二人を捕えさせ、火刑に処してしまったのだが、その方法が変っていて、背中を叩く拷問などでは間に合わなくなったのは前述の通りである。二人の手足を木に縛りつけ、カバ焼きのように下から火を焚いて焼き殺したのである。(日本書紀、巻十四)

こういう性格異常者の話は、例とするにはあまり適切ではないかも知れないが、要するに「大宝律令」以前は、拷問や刑罰の方法についても法的な定めがなかったわけであり、それを行なうに際しては、個々の状況の相違によって「気分次第」であったのだ。

その後、文化の進歩とともに人間は利口になり、また狡くもなって、背中を叩く拷問などでは間に合わなくなったのは前述の通りである。ことに、武家政治が始まってからは大宝律令など有名無実の存在と化してしまった寿永年間の末、悪七兵衛景清の行方を岩永左衛門致連から問われた遊君阿古屋などという美女あたりは、火責め水責めの厳しい拷問にかけられたりするありさまとはなる。

しかし、このあたりから人間も単純ではなくなったとみえて





武家政治と拷問

「拷問に強い」美女、などという挿話が表われ始める。

阿古屋などもその一例で、いくら責められても白状をしないそこで登場するのが、名判官秩父ノ庄司畠山次郎重忠という大岡タイプの侍だ。

彼は、まず阿古屋の縄を解かせ、情をかけて義理詰めにヤンワリと問いただす。その場の情景はというと——

姿は伊達の褞や、縛めの縄に引替へて、縫の模様の糸結び、小裾取る手も儘なれど、胸は解けぬ思ひの色、形は艶に気は悄れ、筒に生けたる牡丹花の、水上げ兼ぬる風情なり。

というようなスタイル。

岩永左衛門の拷問主義と畠山重忠の温情主義とでは、どちらがまさっていたかというと、被告阿古屋の感想として——

重忠様の計らひとて、榛沢様の今日の詮議、縄も掛けず責も無く、六波羅の松陰にて、物ひそやかに義理諫め、様々と労わりて、サア景清が行衛はと、問われし時の其の苦しさ、水責火責は堪えようが、情と義理とに挫ぢかれては、とあるから、重忠の判定勝ちは明白なところであり、「柔よく剛を制す」とはこのことだ。



ところが、畠山さんぐらいの名裁判官ばかりならば文句はないのだが、理想と現実とは常に喰い違うものなのであって、「あの人、イカスね」などと噂されるような判官はめったに出現しないのである。

この頃の犯人取調べの物凄さを「庭訓往来抄」は、

犯人を宛て行ふ様の事、先づ過人（とがにん）を召し籠め置きて、一には推問とは先づ推し問ふ也。仔細を云はざる時、梯に載せて水をくるるなり。（水責めである）又小蛇を口より入るる也。二に拷問とは張付にする也。其後、二十の爪を起す（はがすこと）也。又、錐にて脚をもむ也。三に拷訊とは火頂と云ふ鉄の鉢を赤く焼きて、犯人の頂（うなじ）に覆ふ也。頭則ち焼け砕くる也。

と伝えている。

「平治物語」に、筑後守家貞が長田忠宗を罵

った言葉として「きゃつを、二十の指を二十日に切り、首をば鋸にて引き切りにし候ばや」というのがあるし、同書にはまた、女の指を二十日で切り落した話なども見えている。

この辺りになると、拷問と刑罰が接近してきて、白状しない者は責め殺される——という形で「事件」が終結するようになり、またそれを怪しまない、という恐るべき事態になった。そして、なかには「指を切るなどは生ぬるい。手や足をズバリと切った方が効果的である」などという考え方の役人もいたとみえて、「百練抄」という書物の七十六条には、仁安二年六月十日の出来事として継父母を殺害した娘の足を切った、という話が出ている。仁安二年というと、平清盛が全盛時代の頃である。

それから十二年後の治承三年五月十九日には、十二人の強盗の手を切った、という出来事があったと「玉海」は伝えている。「山槐記」という書物はその日の状況を詳述して、「手首の上に刀を当て、槌で打って切ったが強情我慢の者に対しては、苦痛を多く与えるために、一度で切り落すことをせず、二度に分けて切った」と書いている。

こういう、身体を斬ったり刺したりする刑罰のことを「肉刑」または「毀傷刑」というが、「大宝律令」の頃の刑罰には肉刑は定められていなかったのである。

答刑は苦痛のみを与えることを定めたもので、どうも軍人が政治の実権を握るとロクなことはないのである。

この時の法律が「御成敗式目」であり、江戸幕府の法律が「御仕置百箇条」だ。

「何だ、昔の法律は御成敗だの御仕置だのと刑法のことばかりに力を入れたんだな……」

というような疑問が湧きやすいところだが、どっこい、昔は法律といえばすなわち刑法のことなのであり、御仕置といえば、つまり法律を意味したのであって、民法だの商法などという国民の権利を保護するありがたい法律はないのである。

武士、ことに刑事事件を扱う往人は大威張りなもので「法律など知ったことか！　俺が法律だ！」とばかりに、アメリカ西部開拓期の拳銃使いみたいなセリフを吐いて、拷問などは仕放題に気の済むまでやるというありさまであった。

封建制度と拷問

さらに時代が流れて北条氏が政治の実権を握り、封建制度が固まると、六波羅探題などという町奉行の先祖みたいな役所が京に置かれ、また、貞永元年には時の執権北条泰時が「貞永式目」という法律をしいた。

この時の法律が「御成敗式目」であり、江戸幕府の法律が「御仕置百箇条」だ。

「何だ、昔の法律は御成敗だの御仕置だのと刑法のことばかりに力を入れたんだな……」

というような疑問が湧きやすいところだが、どっこい、昔は法律といえばすなわち刑法のことなのであり、御仕置といえば、つまり法律を意味したのであって、民法だの商法などという国民の権利を保護するありがたい法律はないのである。

武士、ことに刑事事件を扱う往人は大威張りなもので「法律など知ったことか！　俺が法律だ！」とばかりに、アメリカ西部開拓期の拳銃使いみたいなセリフを吐いて、拷問などは仕放題に気の済むまでやるというありさまであった。

これは庶民の犯罪者は対しては、火印捺面とは顔に焼印を捺して火傷を造り、容貌を一生消えないまでやるという、身体を斬ったり刺したりする刑罰のことを「肉刑」または「毀傷刑」というが、「大宝律令」の頃の刑罰には肉刑は定められていなかったのである。

答刑は苦痛のみを与えることを定めたもので、どうも軍人が政治の実権を握るとロクなことはないのである

此僧達を嗷問（拷問）せよとて、侍所に浅して、水火の責をぞ致しける。文観房、暫しが程は如可に問はれけれども落ち給はざりしが、水問重ければ、身も心も疲れ心も弱くなりけるにや、勅定に依つて、調伏の法行ひたりし条、仔細なしと白状せられけり、云々。

と書かれている。

朝廷が北条氏を討たんと謀って事成らず、執権北条高時が弾圧を加えた「正中の変」の一挿話である。元来、僧侶は特権階級として拷問などは受けないはずの身分とされていたのだが、北条さんあたりの手にかかるとそんな建前は無視されてしまうのである。

同じく「太平記」は、六波羅探題の火責めの拷問のありさまを伝えて、

雙べ（並べ）少し隙をあければ猛火炎を吐いて烈々たり。朝夕雑色（ざうしき。ここでは牢屋下男のこと）左右に立雙びて、両方の手を引張りて其の上を歩せ奉らんと支度したる有様は、只四重五逆の罪人の焦熱大焦熱の炎に身を焦がし、牛頭馬頭の苛責に逢ふらんもかくこそ有らめと覚えて、見るも肝は消へぬべし。

と書いている。その様相を地獄にたとえて、見ただけでも恐ろしい、と述べているわけである。これも「正中の変」の時の話であり、責められた者は二条為明卿である。

ただし、さすがに公家のことだから実際に火の上を歩かせたのではなく「今からあなたを歩かせますよ。よろしいですな。覚悟をして下さいよ。本当にやるんですから……」などともっぱら言葉で脅かしたのである。その時に為明



さんは「麿に筆と紙を貸してたもれ」というので「さては脅しが利いたか」と喜んだのは拷問担当者の常葉駿河守範貞という侍だ。

早速に注文通りにしてみたところ、白状の次第を書くのかと思いのほか、為明さんはサラサラと一首の歌を書きつけたものである。

思ひきや、我が敷島の道ならで

浮世のことを問はるべしとは

というのである。これを見た駿河守は涙をハラハラと流し、「ああ、あなたはさすがに学がある。お公家さんを拷問するなど、私にはとてもできません」と釈放してしまった。

人間、敷島の道の一つも心得ておくと、何かの時に役に立つこともあったわけである。

ロンドン塔の拷問具

さて——この辺で少し外国の封建時代のことを書いておこう。あいつはわれわれの祖先の悪い面ばかりを書くイヤな奴だ」などと思われるのは心外だからである。

西欧諸外国の封建時代における刑罰や拷問はなかなかに物凄いものであって、日本などはそれにくらべたらアマチュアみたいなものである。日本人の祖先ばかりが残酷だったわけでは決してないのだから、どうか御安心願いたい。

これは現代についても同様のことがいえるのであり、例えば映画などでもそうだ。日本の犯罪映画やスリラー映画、あるいは怪奇映画などが「子供っぽくてとても見られた代物じゃないね」などといわれるのは、せんじ詰めれば要するに創意の上に於いてサディズムが足りないからなのである。異論はあるだろうが、戦争映画でさえそうだ、と筆者は思っている。

一例を挙げると——フランケンシュタイン、ドラキュラ、ミイラの幽霊、等の怪物映画だ。これらは昔、ハリウッド製のアメリカ映画がレパートリイとしたものだった。ユニバーサル社のお家芸だったものである。ロン・チャニイ、ベラ・ルゴシ、ボリス・カロフ、等の怪物役者を思い出す人も多いはずだ。ところが最近は、これらの怪物がイギリス映画の方へ引っ越しをしてしまった。イギリス人の感覚の中にある残酷性が、怪物映画の製作に打ってつけだからである。ヒヤリとさせ、ギクリとさせ、ソッとさせる点ではアメリカ映画などは、もはやその比ではない。元来ハリウッド製の怪物は無邪気な連中が多くて、例外なしに「女には甘い」という特性を持っているが、イギリス映画となると女の胸へ杭を打ち込む場面などを冷然と造ってしまう。ために、ユニバーサル社では、今やそういう映画の配給権を貰って、わずかにお茶をにごしているような具合である。

——ということで、まずイギリスから始めると、この国の残酷と流血の歴史を伝える名所として今も残るのは、いうまでもなくロンドン塔である。



テームズ河に面するこの城は一〇七八年にウィリアム征服王がローチェスターの僧正ガンダ

ルフに命じて造らせたものだ。

日本でいえば藤原氏の時代であり、八幡太郎源義家の活躍期だ。

ロンドン塔にまつわる惨話についてはいちいちあげていられないから英国史にゆずるほかはないが――ここでは単に「機械」のことを紹介しておく。

後に塔内へ陳列されるに至った数々の奇酷な刑具のうち、中でも代表的なのは「伸肢刑架」である。これは樫の木で造った大きな枠で、地上から三フィートの高さがある。罪人の手足を回転機に縛り付けて、その体を上下に伸ばそうとする。人間はゴムではないから機械の固転に従って苦痛が増大し、キリキリと音を立て、さらに限界を越えれば四肢の関節がはずれてしまう。いかに剛勇な囚人でも悲鳴を上げる物凄さだったという。女がこの拷問にかけられた記録もある。

人の頭から咽喉をめぐってさらに全身を締め付ける鉄製の帯のような道具があった。これを囚人の体にかけて梁へ吊り上げると、囚人は坐れもせず、眠れもせず、食事もできずただ立ったままで苦しみ続けたという。

ヘンリー八世の頃、塔の獄吏であったスケ



ドイツで有名なのは「鉄の処女」である。ヴィングトンという男が「スケヴィングトンの娘」と呼ばれる責道具を考案した。鉄の輪を両方から合わせるようにできていて、囚人の膝から首の間へ掛け徐々に締め付ける。体が腰から二つ折りになってしまう仕掛けで、日本の江戸時代の「海老責め」を機械にしたような物である。

ガントレットと呼ばれる責め具がスペインから輸入されてロンドン塔へ備えられたことがある。これは締まる手錠のような物で、ネジで最大限度まで両手首を締め上げた後に宙吊りとするのである。

ドイツの拷問

ヴィングトンという男が「スケヴィングトンの娘」と呼ばれる責道具を考案した。鉄の輪を両方から合わせるようにできていて、囚人の膝から首の間へ掛け徐々に締め付ける。体が腰から二つ折りになってしまう仕掛けで、日本の江戸時代の「海老責め」を機械にしたような物である。

ガントレットと呼ばれる責め具がスペインから輸入されてロンドン塔へ備えられたことがある。これは締まる手錠のような物で、ネジで最大限度まで両手首を締め上げた後に宙吊りとするのである。

ドイツの拷問

ドイツで有名なのは「鉄の処女」である。

ウンの胸を扉のように左右に開くと、内部の空洞には鋭い鉄の針が無数に植え付けられている。この中へ入れられる囚人は蓋が閉ざされると同時に全身を針で刺され、激甚な苦痛に呻吟する。念入りなことには、この処女の「鳩にもまがう双眼」とある書物が形容した二つの眼の裏側にも、同じく二本の針が植えてあり、囚人の両眼を串刺しにする。鮮血が迸り、苦悶の声がやがて弱まると、ガウンの下の床板が開いて半死半生の囚人を数十メートルの穴の底へ落とすのだが、落ちて行く間が狭い鉄管となっており、これまた内側に、刃を上に向けて植え付けた無数の小刀が出ている、というのだからたまったものでない。体重に数十メートルの鉄管の長さを合わせた加速度が死体を寸断し、皮も肉も骨もバラバラとなり、どこの誰という面影をとどめることもなく城の周囲の堀の中へ吐き出されて行く、という。

日本人では、とてもこういうオートマチックな処刑法は考えつかないだろう。

これはやはり、大陸間弾道弾の先祖たるV1号だの2号だのをロンドン市に叩き込んだドイツさんのものであって、風船爆弾などというフワフワしてはなはだ頼りないものを、飛ばせたり飛ばせ損なったりしたどこかの国の人間には、こういうアイデアは生れてこないと思うのである。

昔、ドイツで行なわれた拷問に「ハンブルグ拷問」という方法があった。

これは「木馬責め」に鞭打ちを併用するのである。木馬型の拷問台に囚人を乗せ、背中を屈折させて縛り付ける。そして、その背中を皮鞭で打ち叩くのだが、鞭打ちの度数に関する制限はやはりあった。第一回目の拷問は鞭八十をもって一応終る。背中の傷痕には軟膏を塗るのが定めであった。この台へ後手に縛った囚人をまたがせ、両足に鉄または石の錘りを結び付ける——というのであるから、実に言語道断、沙汰の限りだ。真犯人であると否とにかかわらず、人間である以上はこんな拷問に耐えられるはずはないのである。

この「馬」は、ドイツのほか、フランスにも伝わっていて、同様の拷問が行なわれていたという。

また、古代ドイツでは「鉄牛責め」というような拷問法が行なわれていた。牛の形をした鉄製の拷問具の中へ囚人を入れて、火で炙

三回目の拷問を行なう。

こうして、鞭打ちの数が三百度に及ぶと、「ハンブルグ拷問」は終了となる。ただし、ほかの拷問法に代えるだけのことであるからこれほどんな方法があったかというと、責められる者は全く立つ瀬がない。

ほかにはどんな方法があったかというと、古代ローマから伝わった拷問法で「馬」というものがあった。

この「馬」は、三角錐、または四角錐の形に造られた木製の台である。そんな奇妙な馬がいたらお目にかかりたいようなものだが、ともかく「馬」と呼ばれる尖った台なのである。この台へ後手に縛った囚人をまたがせ、両足に鉄または石の錘りを結び付ける——というのであるから、実に言語道断、沙汰の限りだ。真犯人であると否とにかかわらず、人間である以上はこんな拷問に耐えられるはずはないのである。

この「馬」は、ドイツのほか、フランスにも伝わっていて、同様の拷問が行なわれていたという。

また、古代ドイツでは「鉄牛責め」というような拷問法が行なわれていた。牛の形をした鉄製の拷問具の中へ囚人を入れて、火で炙

るという方法である。牛を炙って食用とするなら話はわかるが、人間が鉄牛の中で炙られるのだからただごとではない。

ローマ・フランスの拷問

昔のヨーロッパ諸国で行なわれた種々の拷問法は、古代ローマから伝わった方法が多かった。では、その古代ローマはどこから拷問法を習ったかというと、これは古代ギリシャである。ギリシャ文明の裏側には、こういう残虐な蛮風も存在していたわけである。

大体、洋の東西を問わずして共通なことは拷問の最初の鞭打ちである、ということだ。ヨーロッパでのそれも、もとより例外ではない。しかし、人間がオリジナリティを示したがるのは自然の欲求である。

その結果、吊り下げたり、機械を使って引っぱったり——という「引き伸ばし型」が生れ、また逆に、前述の「スケヴィングストンの娘」や「海老責め」や、小さな箱の中へ無理やりに詰め込む、というような「圧縮型」を考えつく。「圧縮型」に似たものでは「圧迫型」がある木馬責めや、江戸時代の「石抱き」などがそれである。

持久戦スタイルのものとしては、「うつつ責め」などの「不眠拷問」や「飢渇拷問」がある。これはローマでは盛んに用いられたという。

拷問吏の人件費や塩代がもったいない、と思えば、予算節約のために手近にいる小動物やら虫やらを利用する手口もあって、蚊、鼠、さそり、蛇、等の人間にとってあまりいい感じではないお歴々をけしかける手法も編み出される。古代ローマでは囚人を裸体として仰向けに縛り付け、サソリを臍の上に置いて、その上にコップをかぶせたという。サソリは行きどころがないから烈火の如くに憤り、もっぱら被拷者に向って攻撃を開始するそうな水などは八マタの大蛇ではないから、そだが、人間は八つの桶を眺めながら獄吏に訊ねたというエー公爵夫人の水責め、という話が伝えられている。この国では昔、八箇の桶に水を入れて拷問室に並べておくのが定法だったという公爵夫人は自若として、

「この水を全部、飲まねばならぬのか？」

と八つの桶を眺めながら獄吏に訊ねたという名の医者だったそうで、医者のくせに首斬り機械を発明するなどはけしからん話だ。こういう御仁はとうてい、ノーベル賞の候補には上げられないことはもちろんであって、「因果は回る小車の」という次第か後にギロチン氏は罪を得て断頭台へ追い上げられた。つまり、ギロチンを造ったギロチンにより、ギロチンされた——という。

水責めはドイツではあまり行なわれなかったというが、フランスではこの方法を用いていた。フランスの著名な挿話としてブランビ

方法、または立てかけた梯子に縛り付けた囚人の足を焼く方法の三種が行なわれていた。

これはローマでは盛んに用いられたという。

拷問吏の人件費や塩代がもったいない、と思えば、予算節約のために手近にいる小動物やら虫やらを利用する手口もあって、蚊、鼠、さそり、蛇、等の人間にとってあまりいい感じではないお歴々をけしかける手法も編み出される。古代ローマでは囚人を裸体として仰向けに縛り付け、サソリを臍の上に置いて、その上にコップをかぶせたという。サソリは行きどころがないから烈火の如くに憤り、もっぱら被拷者に向って攻撃を開始する、という寸法である。被拷者が女の場合は三番目の桶まで飲み続けたが、人間は八マタの大蛇ではないから、そだが、人間は八つの桶を眺めながら獄吏に訊ねたというエー公爵夫人の水責め、という話が伝えられている。この国では昔、八箇の桶に水を入れて拷問室に並べておくのが定法だったという公爵夫人は自若として、

「この水を全部、飲まねばならぬのか？」

と八つの桶を眺めながら獄吏に訊ねたという名の医者だったそうで、医者のくせに首斬り機械を発明するなどはけしからん話だ。こういう御仁はとうてい、ノーベル賞の候補には上げられないことはもちろんであって、「因果は回る小車の」という次第か後にギロチン氏は罪を得て断頭台へ追い上げられた。つまり、ギロチンを造ったギロチンにより、ギロチンされた——という。

悲愴美の世界

鏡花世界の女性像

鏡花世界の美しさを築き上げてゆく薄命の美女たちの哀切にして婉麗を極めた女人群像！

中康弘通

栗原伸・画

1、阿浪・小萩

（冠弥左衛門――明26・5）

今や太平三百年徳川の流濁らさるここ近隣の相模の国に、前代未聞の活修羅場、言語道断といいつべく、今目前地獄の形態、歴然と見つんべし。

これが新聞小説の一節なのだから今昔の感も深いものがある。余談はさておき、掲題の二女性を中心に解説を進めよう。

東相模守の執権岩永武蔵は、郷土の長者石村五兵衛と謀って国守に取って代り、不浄の財を貪ろうとした。家中にわずか硬骨の士としては沖野新十郎を数えるのみ、阿浪はその妻であった。

餅屋の娘小萩は、霊山高妙寺に召使われる美少年卯之助と相思の仲であるが、この卯之助が是空和尚に救われたのはちょうど十七年前、石村が弁口をもって愚民を欺むき、長谷八ヵ村の田地を買上げようとしたとき、その心底を見抜いた刀鍛冶利鎌の利平が五兵衛に反対したため、岩永の謀りごとで死罪に処せられ、その妻渚も自害し、卯之助が孤児となったからであった。

ある日、五兵衛の使いの者が、五兵衛の息子五郎蔵の嫁にと小萩を説きに来るが、折から来合わせた鎌倉は権五郎組の親分猿が追い返してくれた。然し後難を恐れる小萩親子のところへ阿浪が訪れ、真相は、岩永が小萩に執心しているのだ、と告げる。途方にくれる親子は、阿浪の義心で、沖野家へ引取られた。

たまたま二百十日の大嵐に痛めつけられた農民は、ついに伝次、卯之助を首領として一揆を計ったが、逸早く通報を受けた岩永、石村の手の者は高妙寺へと押寄せた。そのとき山門に現われたのが、阿浪の義兄、仏師冠弥左衛門である。彼が寄手を翻弄したため、石村と岩永は権燈寺で悪僧頑鉄を交えて密談し相模守弑逆の密謀を凝らす。

これを墓参に来合わせた小萩が立ち聞きし新十郎に告げたので、新十郎は小萩に岩永暗殺の大任を委ねた。

しかし必死必殺の意気込みも空しく、小萩は岩永のもとへ嫁いだ夜たちまち見顕わされ



て、新十郎の策は暴露し、経師が谷の土牢に幽閉された新十郎は、空しく餓死を待つのみとなった。そこで阿浪は気丈にも、愛犬斑をつれて土牢に忍び、夫に短刀をもたらした。

新十郎は、

天晴戦場に毛色好き敵と引組んで、弓折れ力窮る時、末世に残す武士の亀鑑、見事に切るべき腹なるを、岩永が為に幽閉され食に餓えて死せむこと、畳の上にて死ぬるより猶一世の恥辱ぞと、遺恨遺る方なかりしに、人の及ばぬ阿浪が胆力斯ほどの大難に取乱さず、夫に自殺せよやとて、手づから匕首を授らせし、度胸を見込みて頼みおく、我今死なば念仏申すな、経も読ますな、回向は嫌ぞ。藻に縋りて水中に浮ぶより一層危き東殿の御身の上陰になってお扶け申し、岩永の首掻切って我に手向けてくれむ時こそ、九天に浮ぶべけれ。唯頼む此事を、子孫無き身の遺言無し。さらばぞ！　最後を急がむと、袖を払ひて大肌脱ぎ、拳少く鈍りたれど、など十文字に切れざらむ。南無正八幡菩薩、女房眼を閉げ、といふままに、岩角に背を凭たせ、血汐に颯と一文字！

かくして最愛の夫の自刃を目前に見届けねばならぬ悲愁の阿浪に、運命の苛酷はさらに重なった。

時を同じうして相模守弑逆計画の一端たる石村邸の大工事に徴発された農民の中に、伝次や卯之助は身を潜め、冠弥左衛門の出馬を乞うたが、弥左衛門は応じなかった。やむなく伝次は一策を案じ、濠掘りの農民に、「冠来い、冠来い」と唱えて作業させる。やがてこの声が石村邸をめぐって、泣くがごとく怨むがごとく流れるとき、畏怖の念を抱いた五兵衛は伝次を捕えて拷問に処した。

半死半生の伝次を卯之助らが弥左衛門の許へもたらしたとき、初めて彼は決意を固めた

阿浪は弥左衛門の命で、すでに権燈寺に幽閉されている東相模守から、岩永追討の墨付を入手して逃れようとし、頑鉄と争ってこの悪僧を殺害した。しかし農婦に扮した苦心も空しく捕えられた彼女に、拷問は苛酷を極め、白刃の上に坐らせられ、膝に石地蔵を乗せられて、見るも無惨な最期を遂げてしまう。

しかもその最期の際にも、

身は浮くばかりの血の中に、縦々と眼を見開き、此を最後の声幽に、ああ先立たれし我夫様、阿浪は閻の淋しさに、石の地蔵を抱きました。と莞爾笑ふて息絶えたり。

かく哀れにも烈しい気魄の持主阿浪が、この一編において死を必するがゆえにその悲劇的な美しさが、最高度まで高められるところに、こののち永く書き続けられる鏡花世界の女性像の、象徴的な運命観が顕わされていると見てよいであろう。

さて、悪逆無道の輩は、やがて伝次、卯之助、小萩らの活躍で、弥左衛門の指揮どおり計滅され、再度相模一国の和楽を招く。しかし、弥左衛門は辞世を残して風のごとく去り、ついにその終るところを知らず、という。

この作品はあまりおもしろくない小説であった。しかし、全編を貫く鏡花の思想は、善悪、美醜の極端な対立によって示現されている。対立する二つの観念は、一方が度を増せば必ず一方もその度を増す。善が働けば働くほど悪は悪を重ね、悪が加われば加わるほど善は力を尽くす。従って、悪が消滅すれば、善もまた去らねばならぬ。

この作品における女性像が、後年の鏡花世界のそれとまったく異なるのは、阿浪、小萩が主人公を廻って愛慕を競うのではないからであろう。しかし、前述のごとき対立性は、阿浪が士の妻、小萩が町家の娘、という身分だけでも明らかであり、ひとしく惨苦を経ても、阿浪が非命に斃れるとき、小萩は生きねばならないのである。

2、滝の白糸

（義血俠血――明治27・11）

時代小説の筆を断って、探偵もの、次いで戦争ものに転じた鏡花が、ようやく彼の本領とする純愛に身を亡ぼす女人図を描きはじめたのが、女芸人ものである。

三年後、金策に苦しむ彼女は、ようやく得た前借金を出刃打の芸人どもに奪われ、喪心の状態で殺人強盗を犯してしまった。

たまたま暴漢らが遺した出刃を後日の証拠にと懐中して歩くうち、ふと富豪の宅の裏口ごくザッと紹介したあと、鏡花の文章に触れてみよう。

なかんずく高岡から石動まで四里八町を繋ぐ乗合馬車にヒロインが乗り込んだとき、彼女の非命は兆していた。人力車と馬車の激烈な競争の中で、一日、彼女が利用した馬車の御者こそ、後の金沢地方検事局検事代理、村越欽弥だったのである。やがて、客引の小僧が〝腕車より疾い〟と彼女を誘ったにもかかわらず、馬車は人力車に追い抜かれて行った。

乗客一同が騒いだとき、欽弥は、彼女一人を一頭の馬に横抱きにしたまま疾走し、約を果した。

この日から彼女は欽弥を忘れがたく思っていたが、たまたま深夜の見世物小屋から涼を求めて金沢市内を貫流する浅野川の磧に出たとき、そこに仮睡する欽弥と再会した。水芸の太夫として生計に自信ある彼女は、彼の好学を見込んで学費を給し、東京に遊学せしめることを約したのである。

三年後、金策に苦しむ彼女は、ようやく得た前借金を出刃打の芸人どもに奪われ、喪心の状態で殺人強盗を犯してしまった。

〝白糸〟は、鏡花が美容俠艶の一女芸人の、哀れな生涯を描いた初期の作品である。

筋は大方の読者が先刻御存知であろうから

が開いているのに悪心を起し、金を奪って死のう、と思いつめた彼女が、家人に見つけられたための兇行であった。

容疑は出刃打芸人に落ち、金を奪われた参考人として召喚された彼女は、一切を否定したまま公判に入った。この日、新任検事代理たる村越欽弥は、滝の白糸こと水島友に対し真実を告げるように惇々と諭すのである。女が一切を告白して死刑の宣告を受けた夜、欽弥もまた、一生他人たるまじという彼女との約束を守って自殺した。

以上が経過であるが、美貌の女芸人が俊爽の青年に愛恋し、金ゆえに身を亡ぼす物語は必ずしも珍らしいものではないが、その結構の劇的な展開が、新派悲劇の典型として歓迎されたことは想像にかたくない。

文芸作品としても、劇中劇たる絢爛華麗の水芸や、凄惨な殺人、厳粛な法廷など幾多変化に富む設定を駆使した効果は、メロドラマ的な筋に、鏡花的妖美さを漂わすに充分である。一体この作品は紅葉の精査を経て発表されたものであるから、文体も純粋に鏡花のものとはいいがたいが、その意味で鑑賞を兼ねてヤマ場から原文を一部引用し、もってヒロインの哀切な運命を浮き彫りしてみよう。

まず彼女の容姿は、

> 姿は強いて満開の花の色を洗ひて、清楚たる葉桜の緑浅し。色白く、鼻筋通り、眉に力味(りきみ)ありて、眼色(まざし)に幾分の凄味を帯び、見るだに涼しき美人なり。（中略）

挙止俠(とりなりきょう)にして、人を怯れさる気色は、世磨れ、場慣れて、一条縄の繋ぐべからざる魂を表せり。

この女が一とたび太夫滝の白糸として舞台に立てば、



高島田に奴元結掛けて、脂粉濃に桃花の媚を粧い、朱鷺色縮緬の単衣に、銀糸の浪の刺繍ある水色絽の袷衣を着けたり。

「妙齢十八、九」とも見える彼女の芸の華麗さは、

盈々水を盛りたる玻璃盞を左手に把りて、右手には黄白二面の扇子を開き、呀と声発けて交互に投上れば、露を争ふ蝶一雙縦横上下に、逐ひつ逐れつ、雫も滴さず翼も息めず、太夫の手に往まらで、空に文織る錬磨の手術。

こうした手練の繊腕を持つ美女が、たまたま惑乱して兇器を揮うさまは、屈強の壮漢よりもむしろ凄愴の気を漂わすことを、前後照応する文章の妙により読者は容易に感得するのである。

すなわち彼女が思いがけず富豪夫妻を斬殺したとき、

白糸は生れてより未だ如許夥しき血汐を見ざりき。一坪の畳は全く朱に染みて、或は散り、或は迸り、或は滂沱々々と滴りたる、其痕は八畳の一間に遍く、（中略）

白糸は生れてより未だ有恙最期の愴惻を見ざりしなり。如許夥しき血汐！　有恙浅ましき最期！　這は是何者の為業なるぞ。

此に立てる吾身の為せし業なり。我ながら恐しき我身かな、と白糸は念へり。

そして、かかる惨酷な所業を夢中とはいえ果した白糸が、少しも悪女の印象を与えないのは、自身が強盗に所持金を奪われたという事情から殺人が偶発した、というよりは、いわば世の表裏を知った彼女が、欽弥に対しては処女のような純情を持ち続け、彼の懇諭にしたがって断罪に服した心情の哀れさによるものでなくて何であろうか。

こうした女芸人ものは、しかし、「照葉狂言」によってさらにその哀愁美を極める。

3、小親・小六

（照葉狂言――明治27・11―12）

美貌可憐な照葉狂言の女優小親の物語りも、ここでは梗概を省き、あるいは清純、あるいは妖艶、時として怪奇を帯びた場景の数々を引いて、もって鏡花文学の精粋に触れてみたい。

孤児の貢少年が夜ごと観にゆく照葉狂言の人たちの描写はことに麗筆を極める。

まず一座の女師匠小六の妖艶さを、〝重井筒〟の章に採ってみる。

楽屋にては小親の緋鹿の子のそれとは違ひ黒を火鼠絨の座布団に、蓮葉に片膝立てながら、繻子の襟ついたる粗き竪縞の布子羽織りて被つ。帯もしめで、懐中より片手出して火鉢にかざし、烈々たる炭火堆かきに酒の燗して、片手に皺の皮乾かしなどしたる、今も目に見ゆる。手利かねば、割膝にわが小さき躰引挟みて、渋面つくるが可笑しとて、しばく血を吸ひて、小親きてわびて、引放すまでは執念く放たざりし、寛濶なる笑声のはじめは恐ろしかりしが、果ては懐かしくなりて、そと後より小さき手にて目隠して戯れたりし日数もなく、小六は重き枕に就きつ。

彼女の濶達鉄火な気象は、貢少年に戯れるいは妖艶、時として怪奇を帯びた場景の数々を引いて、もって鏡花文学の精粋に触れてみたい。

孤児の貢少年が夜ごと観にゆく照葉狂言の人たちの描写はことに麗筆を極める。

まず一座の女師匠小六の妖艶さを、〝重井筒〟の章に採ってみる。

楽屋にては小親の緋鹿の子のそれとは違ひ黒を火鼠絨の座布団に、蓮葉に片膝立てながら、繻子の襟ついたる粗き竪縞の布子羽織りて被つ。帯もしめで、懐中より片手出して火鉢にかざし、烈々たる炭火堆かきに酒の燗して、片手に皺の皮乾かしなどしたる、今も目に見ゆる。手利かねば、割膝にわが小さき躰引挟みて、渋面つくるが可笑しとて、しばく血を吸ひて、小親きてわびて、引放すまでは執念く放たざりし、寛濶なる笑声のはじめは恐ろしかりしが、果ては懐かしくなりて、そと後より小さき手にて目隠して戯れたりし日数もなく、小六は重き枕に就きつ。

彼女の濶達鉄火な気象は、貢少年に戯れるを、効なく彼に奪らるゝものかは。小親も、ここでは梗概を省き、あるいは清純、あるいは妖艶、時として怪奇を帯びた場景の数々を引いて、もって鏡花文学の精粋に触れてみたい。

孤児の貢少年が夜ごと観にゆく照葉狂言の人たちの描写はことに麗筆を極める。

まず一座の女師匠小六の妖艶さを、〝重井筒〟の章に採ってみる。

楽屋にては小親の緋鹿の子のそれとは違ひ黒を火鼠絨の座布団に、蓮葉に片膝立てながら、繻子の襟ついたる粗き竪縞の布子羽織りて被つ。帯もしめで、懐中より片手出して火鉢にかざし、烈々たる炭火堆かきに酒の燗して、片手に皺の皮乾かしなどしたる、今も目に見ゆる。手利かねば、割膝にわが小さき躰引挟みて、渋面つくるが可笑しとて、しばく血を吸ひて、小親きてわびて、引放すまでは執念く放たざりし、寛濶なる笑声のはじめは恐ろしかりしが、果ては懐かしくなりて、そと後より小さき手にて目隠して戯れたりし日数もなく、小六は重き枕に就きつ。

彼女の濶達鉄火な気象は、貢少年に戯れるを、効なく彼に奪らるゝものかは。小親も、ここでは梗概を省き、あるいは清純、あるいは妖艶、時として怪奇を帯びた場景の数々を引いて、もって鏡花文学の精粋に触れてみたい。

孤児の貢少年が夜ごと観にゆく照葉狂言の人たちの描写はことに麗筆を極める。

まず一座の女師匠小六の妖艶さを、〝重井筒〟の章に採ってみる。

楽屋にては小親の緋鹿の子のそれとは違



以前、観客として小屋の前に立ったときのことである。

見物はいまだ来り集はず。木戸番の燈大通りより吹きつくる風にゆれて、肌寒う覚ゆる折しも、三台ばかり腕車をならべて、東より颯と乗りつけしが、一斉に轅をおろしつ。とみるとき、女ひとりおり立ちたり。つゞいて一人片足をおろせるを、あとなる車より出でたる娘、つと来て肩をかすに、手をかけてひらりとおりたり。さきなるは紫の包を持ちて手に捧げつ。左右に二人引添ひたる、まんなかに丈たかきは、あれは誰れやらむと見遣りしわれを、左なる女、木戸を入りさまふと眼を注ぎて、

「おや、お師匠様。」

また一人、

「あの、このお児ですよ。」と低声に言ひたり。聞棄てながら一歩を移せし舞の師匠は振返りつ。冴かなる眼にキトわれを見しが、互に肩を擦合せて小走りに入るよとせしに、つか〳〵と引返して、冷たき衣の袖もてわが頸を抱くやや否や、アと叫ぶ頬をしたゝかに吸ひぬ。

良ありてわれ眼をみはりたり。三人は早や木戸を入りて見えざりき。

しかし小六はリユウマチをわずらい、やがて舞えなくなると他の興行師に売られた。

湯を呑むにさへ、人の手かりたりしを情なき一座の親方の、身の代取りて、其の半不随の身を売りぬ。

買ひたるは手品師にて、観世物の磔にするなりき。身体は利かでもよし、槍にて突く時、手と足掙きて、苦と苦痛の声絞らするまでなれば、これにぞ銀六の泣きしなるに懸らむとする。

(中略)

世には賤しき業も多けれど、誰か十字架

向うづけに、屋根裏高き礎柱に縛められて、乳の下発きて衆の前に、槍をもて貫かるゝを。これに甘んずる者ありとせむか。其婦人いかなるべき。

小六の膚は白かりき。色の黒き婦人にては、木戸に入るが稀なりとて、然る価をぞ払ひしなる。手品師は詮ずるに半ば死したる小六の身の其うつくしく艶かなりし鳩尾一斤の肉を買ひしなり。諸人の、諸人の眼の犠牲に供へむとて。

小六の伊達な艶やかさとその悲惨な末路の描き分けが、対照的であればあるほど、彼女の潤達さが引き立ってみえるのは、鏡花の筆の力でなくて何であろう。小六が売られて行くとき泣いたという銀六はどういう人物か。

今は一座とともに巡って売子もし、下足もし、時にはうら若い娘芸人の中に交って舞台にも立つ、もと俳優であった。

嘗て大槻内蔵之助の演劇ありし時、渠浅尾を勤めつ。三年あまり前なりけむ、其頃母上居たまひたれば、われ伴はれて見に行きぬ。

蛇責こそ恐しかりけれ。大釜一個先づ舞台に据ゑたり。背後に六角の太き柱立てゝ釜に入れたる浅尾の咽喉を鎖もて縛めて、真白なる衣着せたり。顔の色は蒼ざめて、乱髪振りかゝれるなかに輝きたる眼の光の凄まじさ、瞻り得べきにあらず。夥兵立懸り、押取巻く、上手に床几を据ゑて侍控へ居て、何やらむいひ罵りしが、薪をば投入れぬ。

どろ〳〵と鳴物聞えて、四辺暗くなりし青白きものあり、一条左の方より閃きのぼりて、浅尾の頬を掠めて頭上に鎌首を抬げたるは蛇なり。啊呀と見る時、別なるがまた頸を絡ひて左なるとからみ合ひぬ。恐ろしき声をあげて浅尾の呻きしが、輪になり、棹になりて、同じほどの蛇幾条ともなく釜の中より蜿り出でつ。細く白き手を掙きて、其の一条を掻摑み、アと云ひざま投げ棄てつ。交る交る取って投げしが、はずみて、矢の如くそれたる一条、土間に居給ひたる母上の、袖もてわれを抱きてうつ向き給ひし目の前にハタと落ちたるに、フト立ちて帰りたまひき。

此時其役勤めし後、渠はまた再び場に上らざるよし。蛇責の釜に入りしより心地悪くなりて、はじめは唯引籠りしが、俳優厭になりぬとて罷めたるなり。

こうした一座の中で最も艶麗美貌なのが小親である。貫は小親の牛若が見たさに毎夜通うのである。

髪のいと黒くて艶かなるを、元結かけて背に長く結びて懸けつ。大口の腰に垂れて舞ふ時靡いて見ゆる、また無き風情なり。狩衣の袖もゆらめいたり。長範をば討って棄て、血刀提げて吻と呼吸つく状する、額には振分たる後毛の先端少し懸れり。眉凛々しく眼の鮮なる、水の流るゝ如きを、まじろぎもせで、正面に向ひたる、天晴快き見得なるかな。

一夜、貫が小親に送られて帰宅したとき、花札を弄んでいた伯母が検挙され、貫はそのまま小親の一座に引取られて巡業の旅に出た。その間に、貫を可愛がり、貫も慕っていた隣家の一人娘、雪は不本意な婿を取って、今は不幸であることを、八年経てまた巡業で故郷を訪ねた貫は知る。雪の継母は、婿を離縁するために、彼が思いを寄せている小親との媒を貫に推しつけた。その故に思い屈する貫を問いつめて、小親は涸しい諦めの微笑を浮かべながら諾うものゝ、さすがに悲しくて、

「しかし、貫さん善いことだとは思ふまいね。」

胸痛かりし。われは答にためらひたり。

「善いことだとは思ふまいね、貢さん。」
其心俄に料りかねたる、胸はまた轟きぬ。
「私や、芸人でありながら、お前さんに逢ってから、随分大事に身を持ったよ。よ、貢さん、人に後指さゝれちゃあ、お前さんの肩身が狭いだらうと思ったし、其上また点を打たれる身になるとね。」
小親はなおも、「どうせ、姉の役ツきゃあ勤まらない私だけれど」と掻き口説き、はらはらと涙を落すのである。
小六同様にリユウマチの気配の見える小親は、その身を気づかって詫びる貢に、
「ほんとはお前さんが何てったって、朝夕顔が見て居たいの。然うすりゃもう私や死んだって怨はないよ。」
と、哀しい女心を述べる。勝気で凛々しい美貌の女が年下の男に告げるだけに、この言葉の哀しさ、切なさは弥増るのである。
しかし貢は、小親が寝所に立ったあと、小屋を出て夜の道を独り歩いた。
わが小親を売りて養子の手より姉上（雪のこと）を救ひ参らせむか、はた姉上をさし置きて、小親とともに世を楽しく送らむか。
貢は迷いつつ小道に差しかかった。継母に追われて山に隠れ、薄幸の生を短かく畢えた姫の碑を見たとき、貢は、始めて決心する。
あはれ広岡の、姉上は、われにいかなる女ぞ。小親をだに棄つれば救はるべきをといと強く胸を拍って叫ぶものあり。（中略）
山の端に歩み出でつ。
と唯見れば明星、松の枝長くさす、北の天にきらめきて、またゝき、またゝき、またゝきたる後、拭うて取るやう白くなりて、しら〳〵と立つ霧のなかより、麓の川見え森の影見え、やがてわが小路ぞ見えたる。
襟を正して曰く、聞け、彼処にある者。わが心さだまりたり。いでさらば山を越えてわれ行かむ。慈み深かりし姉上、われはわが小親と別るゝ斯の悲しさの其をもて、救ふことをなし得ざる姉上、姉上が楓のために陥りたまひしと聞く。其境遇に報い参らさと、あえかな純愛の哀しさを、悲愁妖麗の雰囲気の中に訴えるこの作品は、青春小説としてもまた永遠の生命を保つであろう。

4、丁山・お澄

（通夜物語——明治31・9）

鏡花世界の女性像は、やがてそのほろびの美しさの焦点を、女芸人から遊女に移す。風流蝶花形、辰巳巷談、通夜物語、註文帳などがこの系列に属する。まずその中でも、舞台にもしばしば上演され、「丁山さんの遊女だよ」の名台詞で名高い通夜物語から説こう。
清は眉目俊秀なる一個白面の好男子、筆を取って山を描く、山を描けば山に霊あり、水を描けば水に神あり、花を描けば心あり、月を描けば情あらむ。江月照松風吹永夜清宵何所為。
画師玉川清は、従妹で、茶の宗匠久世友房の娘澄子と相思の仲であったが、貧しさと生来の不覇を忌まれ、仲を裂かれるように澄子は軍人の篠山六平太に嫁がせられた。以来清は、北廓で一番といわれる源のお職遊女の丁山こと粂次と深くなり、画筆は立っても放蕩無頼の風評高く、親類縁者すら避けるほどの人間になってしまったことを、澄子は蔭なが

ら深く案じもし、淋しくも思っていた。

たまたま清の唯一の理解者であった業平橋の伯父、これが変りもので、風流に凝って独り淋しく世を畢えた、その伯父の葬らいの日清が、台所の手伝いにでも、と糸次と連れ立ったのを、友房が散々冷罵した。女房か、とすっかり気に入った。操が頭を掉りや、俺の嫁にをいったり、操が頭を掉りや、俺の嫁にする。（下略）」

問われて清が、妹です、と応じたからである。

「年紀は、二十四、少し年増だが、内の操の嫁に欲しいな、何うだ。叔父が頼みだ。可いや、嫣々が文句さすがに糸次の勝気が怏えかねて、

「善は急げですよ、今っからお連れなさいまし。」

いったものの、

「俺も久世友房だ、嫁なら紋着の一枚も着て来て呉れ。」

ときめつけられて、その腹癒せと強請を兼ねて、一両日の後、雨の中を清と糸次は借着の紋着で久世の邸へ出かけた。その道で糸次の下駄の鼻緒が切れたところへ、折悪しく糸次の父親が絡まり、散々の悪態と金の無心に困じ果てた末、女の着物が剝がれかけたときの、思いがけない、磨ぎ澄ました出刃庖丁であった——。

さて一方、久世の邸では、もと丁山と親しかったお松が今は篠山家の女中としてお澄の供で来合せていたが、ちょうど二人が案内を求めた玄関へお澄が取次に出た間に、お澄の母親と口論していた。

「だって出世だの、立派だの、私が産んだやうぢゃアないのッて、いってるけれど、真実だわ。家の奥様は、をばさんの産んだ子のやうぢゃアなくってよ。嘘だと思ふんなら、聞いて御覧なさいな。奥様はね、あの遊女を羨しがっていらっしゃるの、そして丁山さんといふ方は、良月日の下に産れておいでなすったッて然ういっちゃアね、泣いたり笑ったりしていらっしゃるわ。」（中略）

それを、あの、何にも知らないで、いい着物を着て嬉いかの、奉公人が大勢居て威張れるだらうなんのッて、私ヒヤヒヤしましたよ。おばさんはドヂだねえ。」

といっているところへ、二人が入り込んで丁山は留守という友房の代りに、一人息子のお澄は清を蔭へ呼んで、優しかった叔母さん（清の亡母）のために諫めるのであった。

その間に久世家では、お澄の夫である篠山六平太も混って、友房の葬らいと称して強請りの種を封じておいた上で、逆に二人を、伯母や下男、下女まで口を合せて嘲弄した揚句に、篠山は清に酒を無理強いする。偶然ながら、彼は丁山に冷遇された恨みも手伝って、妻の澄の恋人とあって、とうとう片腕を挫いてしまった。

細い腕を、六平太が逆に絞って、ぐっと捻ぢると、清はキャッと悲鳴を上げた。トタンにウムと呻く声、六平太の袖の下に薄紫の三枚襲、裾をあふったが、宙を飛んで、掻潜って、一文字に入ると見た。

「此位の覚悟はして来た。見ろ。」と云って、ひらりと退る、ト、六平太は脇腹を抉られて仰向けにばったり、大の字。

ここで鏡花一流の意表外な結末が読者の前に展開される。すでに早く無気味な妖気を湛えて描かれていた出刃庖丁が、このとき清を救うべく、丁山の手に握られるのである。

「手前達は、誰だと思ふ。」とすっくと立った、丁山が手なる、出刃庖丁から、血がたら〳〵、二の腕をかかげて、血を切って莞爾として、



長襦袢の立姿で、「松ちゃん、手伝っておくれ。」といふので、人心地もない阿松が、勝気で生きて居て、これも騒がず、いふがまゝに手繰って出す、水色縮緬の下締をキリ〳〵と乳の下へ巻いた。

傘次は、こうして自害の仕度を整えたのち、清を介抱し、その痛手が左腕であって、絵を描くに支障ないのを確かめてから、潔く自害してしまうのである。

「お前さん、そんな事で取乱して、まづくなっちゃア、厭ですよ。描いて御覧なさい私が筆と墨を上げるから。」といって、手早く、庖丁を拾った。活きて立って居る、阿松を見て、目を返して座中を見て、

「覚えて置け、達引はかうしてするもんだ。」と涼しくいひ放ったが、首を垂れて、最後に一目、男の顔、丁山は声も立てず、庖丁の柄に握り添へた一折の懐紙ぐるみ、乳房のあたりへ突ッ立てると、あはやと見る間に真紅を染めた。

清は、爾時血を絞った、丁山の襦袢の片袖を断って、五臓六腑を引出した如く、血のしたゝるのを手に捧げて、其襖、四枚にの姿を描いた。一筆、龍の如く、雲の如く水の如く、丁山

「丁山さんの遊女だよ。」

屹と眦して、朱に染まった其の出刃の背を口に銜へると、袖を上げて脇の下から両手を廻して、手さきで帯留をぱちりとはづした、其手でまた下締の端を解きながら、

「私、刃物を持ってゐるからね、騒立をすると危なうございます。逃げも隠れもしやアしないんだから、一寸静かにして居ておくんなさいよ。」（中略）

手棒の画伯は今其名高うして、襖の血のあとは長く暗中に光あり。

あたら美容と俠気に恵まれながら、悪党の父親ゆえに浮川竹の酸苦を嘗めつくした末、白面朱唇の好青年玉川清を愛するあまり、彼をかばって殺人を犯した上、自害して果てる丁山の姿は、凄艶悲愴の極みといえよう。

腕を折られた画伯が、自害した愛人の血をもってその姿を描くという、構想の鏡花的奇騎を問う前に、この詩的な悲愴美を感じ得ないとしたら、それはまったく鏡花を読む意味がないと極言してもよいのではないか。ここで筆者は、先に御紹介した宮原龍雄氏〝ニッポン・海鷹〟に見える美姫ルクレチアの最期を思い出す。そしてかって、宮原氏の御厚意で拝見した、デューラー描くところの〝ルクレチア〟の複製を思い出すがゆえに、鏡花の純日本的な構図の中に描き出される女の、自己献身のかなしさを、より深く味わわされる。

そしてまた、現実に主人公と結びついた女性を遺して性は、主人公の心に生きている女性の宿命は、現実での自己を否定せねばならないけれども、それここにも丁山とお澄との対立として描かれている。その意味で殺身為仁の対象が主人公自身であると、その思いを寄せた女性であるとの差こそあれ、己が恋人で画師の二上秋山とお互にまだ見ぬ恋に憧れる名門の美少女上杉小夜の身を護るために、手馴れた剃刀で執念の鬼となった盲人富の市を刺し殺し、みずからは小夜を秋山のもとへ送り込んだ上で、再度逆手に把った剃刃で、みごと己が咽喉を掻き切って果てる女髪結お島を描く、鏡花初期の作品「黒猫」との構想の類似は注目してよいであろう。

そして、こうした立場におかれた女性たちが、たとえ羨望や御愛嬌ほどの嫉妬は見せてもも、少しも憎み合わないことがまた、鏡花世界を不必要に陰惨ならしめない要素の最たるものといえようか。「通夜物語」においても、お澄はお松に、清と糸次の仲を聞いて羨ましく思うものの、少しも憎しみの色は見せないし、糸次もまた清が、酔に威を借りてお澄に悪態を吐くのを見ては、

「何うだらう、今のアノ容子の好いことッたら、あゝは私たちにゃア出来ないよ、清いもんだ、美いもんだ。」

とまで嘆じ、少しも憎まないのである。「意地と張り」とよく鏡花はいうけれども、それも畢竟は、愛と義の二つの観念が律する鏡花世界にあっては、美しい女性は心までも美しく清いのである。

いずれ紙数も尽きたので、遊女ものとして「高野聖」、芸妓「註文帳」、女妖ものとして「湯島詣」「歌行燈」「南地心中」ものとして「湯島詣」「歌行燈」「南地心中」その変型たる「芍薬の歌」その他、映画で有名な「白鷺」「婦系図」など、巨匠が遺した秘境への御案内を、他日勤めたいと思っている。

（附記）

著作権法の規定するところに従い、最小限必要な節録引用を、泉鏡花先生の御著作から御許容いただいたことを附記しておきます。

研究余話

昭和二十七年「藻屑物語鑑賞」を発表して以来、今日に至るまで、拙稿を御愛読下さる方々は次第に増し、感想や質問、資料提供から告白に至るまで、来信も漸次増加して来るようである。最近も、古くから御愛読下さっている方が始めてお便りを下さり、武士道の倫理に基づき、筆者の研究に共感して頂いている趣きを拝して、はなはだありがたいことと思った。かなり御年輩らしいお方ゆえ、若

識の筆者の方が当然はるかにものを知らないのだが、殊に、年少者や女性の切腹について筆者が深く悲傷し痛く哀惜する所以のものを理解して頂けたのは、とりわけ感銘が深かった。

これが筆者と同じく戦時中に教育を受けた人々であれば、男女を問わずかなりよく理解して頂けるのは、従来の来信によって明らかであった。中には、遠路を公用で西下の途次にお立寄り下さった読者の方もあった。もうまたいつ会えるかわからないと思えば、文筆による縁も不思議なものである。

ところでさらに若い世代の方々ではどうであろうか。

同時にまた、このテーマに関心を持った由来にしても、戦事中にすでに二十歳前後以上であった人々なら、関心があっても不思議ではない。〝逃げず降らず腹を切る〟という趣旨が、武士道精神の発露として娯楽雑誌の中間読物に説かれていた時代である。

しかし、戦後の教育を受けた、殊に相当数の女性に、多大の関心を寄せるものがあるというのは、どういう動機によるものであろうか。人間心理の深奥は、まことに複雑なものと思わされる所以でもある。

いろいろ手紙を頂いても、途切れてしまいやすいのも、女性に多いようである。

とにかく今後とも、誤りを指摘して頂いたり、資料に関してお教え頂いたり、また、こういうテーマで書いてみたら、という御示唆なども大いに頂きたいと思うし、いろいろ心理的な問題についても御教示をお願いしたいものである。

次号予告　四月号を御期待ください！

悲愴美の世界

維新神戸事件　中康弘通



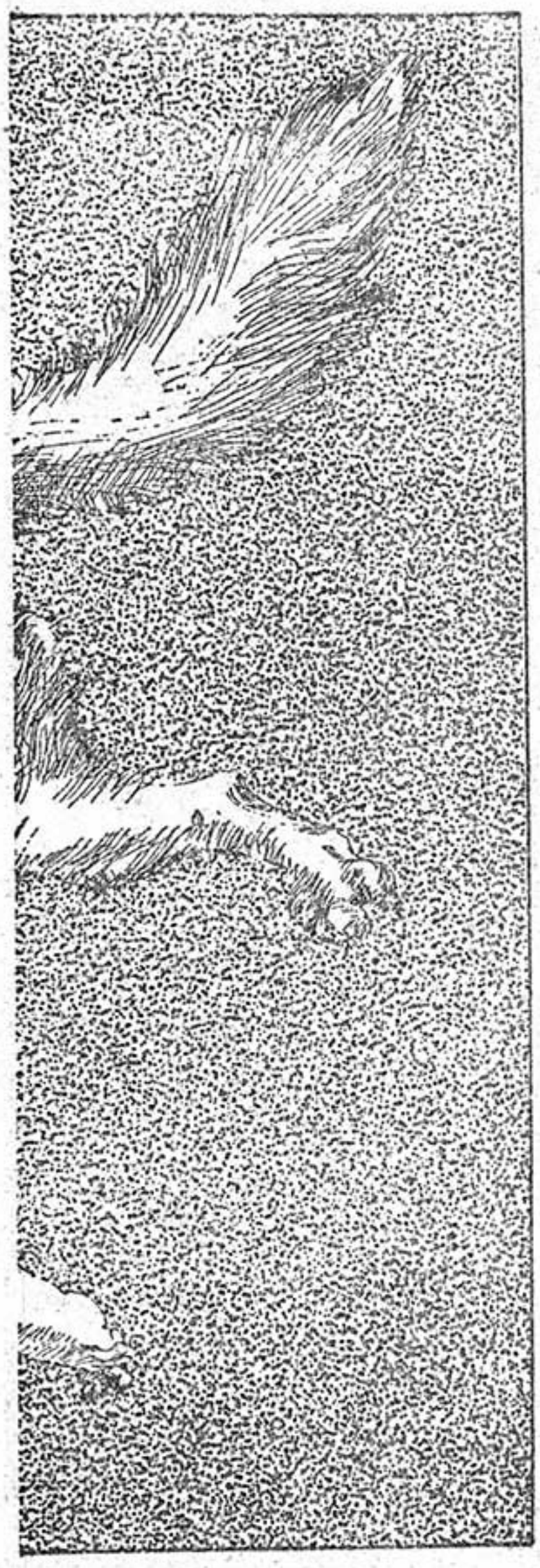
動いてやまぬ激しい世相に武士の道を貫く人々の死をもってあがなう最後の栄誉に臨んで。従容たるその姿こそ悲愴の境地！

切支丹秘宝

伝奇香炉

川魚と遊ぶ娘

画・根元裕　多摩郡平



ふくよかな、美しい、ピチピチした肢態は、もぎたての果物を思わせる。

近くの部落に住む、さつき——。

人魚にも見まごうばかりの美しい素肌を流れにひたすと、巣をとび出した川魚が群をなして、さつきを取り巻く。

山女がいる。岩魚がいる。沢蟹もいる。

魚たちは、さつきの肢を、腰を、腹を、そして、こんもり盛り上った乳房を、楽しい遊び場にした。

流れに漂う黒髪は、水藻である。

ツンツンと口でついばんだり、ヒタヒタと尾鰭で肌を愛撫して、魚たちはさつきに甘えるのだ。

さつきは魚たちのなすがままにさせている。

モゾモゾ、モゾモゾ……こそばゆい感触が、さつきにとっては、天国の夢でも見ているような快感であった。

（おや？……）

★清流にゆあみする娘たちの素膚を邪悪な眼が見下していた！彼らが平和郷に求めるものこそ！



と、さつきは眼をみはった。

澄んだ流れの向うから、何か流れて来る。

ザブッと、流れから立ち上ると、素早く岩の上に脱ぎ捨ててあった布子を身につける。

（なんだろう？……）

なかば警戒と、なかば好奇心で、さつきは近づく漂流物を見つめた。

（あッ、人間！……）

それも、巡礼姿の若い娘。

あわてて流れにとび込むと、さつきはその娘を引き揚げた。

白装束は汚れ、顔や手足に痛々しい傷の跡。

さつきと同じ位の齢頃だ。

蠟細工のような白い顔。唇の色もすでにない。

さつきはうつ伏せにして水を吐かせた。

大して飲んでいない。

（大丈夫……気絶しているだけだ、助かるかも知れない……）

仰むけにすると、娘の胸許をはだけた。

（あ……）

はじかれたように、さつきは手を止めた。

開かれた胸許に、鎖で銀のクルスが下っていたのである。

（切支丹……どうしても助けなければ……）

小さくちぢこまっている胸の隆起の上に両手をあてがうと、さつきは体力をあずけて、ゆっくり押しては、離した。

（一つ……二つ……三つ……）

動作は間断なく、視則正しく続けられる。

ベットリと、さつきの顔が汗ばむ。

（九十八……九十九……百……）

娘は死んだように眼を閉じたままだ。

あせりの色が、さつきの顔をかすめる。

（駄目かしら……いや、諦めてはいけない……まりあさま、姉妹をお助け下さい……）

さつきの努力がむくいられてか、やがて、かすかに、娘の唇が動いた。

（ああ、助かる！）

自然、さつきの手にも力がこもる。

「う、うッ……」

言葉にならない呻きが、口をついて出る。

頬のあたりに血の気が上ってきた。

「あッ……よかった――」

パッチリと、娘が眼を開いたのだ。

さつきは眼をしばたいて、娘の顔を覗き込んだ。

「ここは？……」

ボンヤリと、けげんそうにあたりを見廻す。

その巡礼娘の眼は、なぜか、うつろであった。

「心配することないよ……それより、一体どうして川の中へ？」

そう訊かれて、娘は首をかしげた。

（川？……流されて、助けられたらしい……でも、どうして落ちたんだろう？……）

わからない……と、いった顔で娘はさつきを見返す。

「言えない理由があるんだね？」

さつきは一人でそう決めて、微笑した。

「じゃ、名前だけでも教えておくれよ。あたいはさつき、あんたは？」

（名前？……なんという名前だったろう？）

それも娘は想い出せないらしい。

「名前がないの？」

困ったふうに、娘はさつきを見つめる。

「まァ、いいや。そんな姿じゃ風邪をひく。あたしン家へ行こう。さ、背中に摑まンな！」

さつきは娘を背負うと、岸辺の道のない岩場を上り始めた。一歩誤まると転落しそうなゴツゴツした岩を、器用に跨いで行くのだ。

ようやく上りつめると、さつきは一方の谷間を指さしていった。

「ほら、あれがあたいたちの部落なんだ」

そそり立つ形の違った奇岩に、四方を囲まれて、自然の要害のような中に、二十軒ばかり、粗末な家が並んでいる。

箱庭のような奇妙な雰囲気の部落である。

「下りは早いよ。しっかり摑まって――」

いうが早いか、さつきはもう駈け降りている。娘を背負っているとは思えない身軽さでヒョイヒョイと岩を蹴って行く。

ここは、九州・天草――上島の鬼神ケ嶽山中である。

隠れ切支丹

「なむさんちゃご……さんたまりあ……」

重苦しい読経に似た、数十人の男女の祈りの言葉が、闇の中から聞えて来る。

巡礼娘は暖い臥所の中で眼を覚ました。

さつきの兄、新吾の家の奥座敷。

今朝、さつきに助けられて、この家に連れて来られたのを知っている。疲れ果てて、眠り続けていたらしい。あたりはすっかり暗く

なっていた。

娘は、さつきに助けられた以前のことを想い出そうとしていた。

が——何一つ想い出すことはできなかった。

渦に巻かれ、冷い激流に長い間もまれていたために、記憶をすべて失ってしまったのである。

大勢の読経の声は、壁一つへだてた隣の間から聞えていた。

やさしい子守唄でも聞くように、娘は耳を傾けていたが、また、いつかトロトロとまどろんでいった。

読経の声は、止んでいた。

ふと、人の気配に、娘は眼を覚ます。

「あら、起しちゃったネ……」

枕辺に灯りを運んで来たさつきが、その顔を覗き込むようにして見おろした。

「おお、すっかり顔の色もよくなられて…」

いつ来たのか、新吾がさつきの後から声をかけた。二十五、六の若者である。

「あ……」

寝乱れた胸許を、恥じらって合せながら、娘は床から身を起し、二人に頭を下げた。

「大丈夫かい？　起きたりして」

心配そうにいって、さつきは娘の背中に着物をかけてやる。

「あなたはどこからいらしたのです？　そして、どこへ行かれるのです？」

新吾のその言葉に、娘は申しわけなさそうに首を振る。

「ああ、やっぱり想い出せないのですね。眠っている間に、記憶がよみがえるのではない



かと思っておりましたが……」
同情の眼差しを向けていうと、新吾は床の間の包みを、娘の前に置いた。
「あなたが身につけておられたお荷物です。調べて見て下さい」
娘は包みを開いた。出て出たのは何枚かの木製の巡礼札、手甲、脚絆、そして、僅かばかりの金子。
最後に、袱紗に包まれた香炉が現われた。鉄製の香炉——側面に、不気味な宙を飛ぶむささびの絵が刻まれている。
その片一方の眼に、キラキラ光る鉱石が嵌め込まれてあった。
(妙な香炉ですね、これは？……)
尋ねようとして、新吾はふと口をつぐんだ。香炉を見つめながら、何かを懸命に想い出そうとしている、痛々しい娘の姿をそこに見たからであった。
「これから先も、ずっとこの部落におられるといいですよ」
やさしく、新吾は娘にいった。さつきに運ばれて来たその娘を見た時から、新吾は彼女が、何か不幸な立場におかれているような気がしてならなかったからであった。
「そうするがいい。あんたとあたいたちは同じ姉妹なのだから」
「姉妹？」
いぶかって、娘はさつきの顔を見た。
「姉妹といったのは、つまり、あなたも私たちも、まりあさまの教えを受ける同じ志の者だということなのです」
そう答えたのは、新吾である。
「まりあさま？」
また、娘がつぶやいた。
「あんたも持ってるだろ？　素晴らしいクルスを」
さつきは自分の首に下げていた十字架を取って示すと、娘の胸許を指さした。
いぶかりながら、娘は胸に手をあてた。そこに銀の十字架——クルスが下っていた。
それを手にした娘は、初めてのものでも見るような表情を浮べるのであった。
「あなたがクルスを持っておられる以上、切支丹に違いないでしょう……私たちも切支丹なのです……私たち切支丹は幕府から、非情なまでの迫害をうけております。しかし、神を信仰する力は、どのような迫害にもくじけは致しません……この部落の者はすべて切支丹なのです……つまり、ここは隠れ切支丹の部落なのです……ここにおられれば、あなたも安全でしょう」
隠れ切支丹——。
寛永十四年十月——幕府のたび重なる過酷な迫害に耐えかねて、九州・天草、島原の切支丹は天草四郎を頭にいただき、立ち上った。が——各地での奮戦も空しく、翌十五年二月、原城に立籠った一党は、知恵伊豆、松平信綱の率いる幕府軍の総攻にあって、あえなく惨敗した。
土地を追われ、家を焼かれた切支丹の信者たちは、人跡まれな山奥や、離れ小島に住みついた。
山に住む者は土地を耕し、島に住む者は漁に出る。その生活は一般の農民や漁民と少しも変るところがなかったが、ただ、彼等は熱心に切支丹の教えを守り続けていた。
世にいう、隠れ切支丹である。
新吾兄妹の部落もそうした信者たちの集団であった。
「あなたがクルスを持っておられる以上、切支丹に違いないでしょう……私たちも切支丹なのです……私たち切支丹は幕府から、非情なまでの迫害をうけております。しかし、神を信仰する力は、どのような迫害にもくじけは致しません……この部落の者はすべて切支丹なのです……つまり、ここは隠れ切支丹の部落なのです……ここにおられれば、あなたとあたいたちは同じ姉妹なのだから」
先刻、巡礼娘が聞いたのは、信者たちの捧げる夕べの礼拝の言葉だったのである。

天草四郎の宝

娘はすっかり元気を取り戻した。
さつきと一緒に、谷川へ降りて魚と遊び、山へ上っては小鳥と戯れる。
失った記憶を取り戻すことよりも、部落の人々と暮す日々の中に倖せを覚えるようになっていた。
娘が助けられて一ト月ほどたった。夕方から風もその日は朝から雨であった。夜になっても、衰えなかった。加わり、
深夜——
激しく表戸を叩く音に、新吾をはじめ、さつきたちは眠りを覚まされた。
「お願いじゃ……ここをあけて下されッ！」
風雨の音に混って、叫び続けている老人の声——。
素早く起きて、新吾は表戸を引きあけた。
つんのめるようにして、転がり込んだのは、ずぶ濡れの、痩せこけた老人。
土間に倒れたまま、起き上る気力も失っている。
「どうなさいました、ご老人！」
新吾に助け起された老人の顔は、どす黒く血の色がなかった。

伝奇小説特集

ずたずたに破れ、泥にまみれてはいるが、着ているのは巡礼の装束とわかる。
裸足で歩いて来たのか、足には何もつけていない。血が滲んでいる蒼ざめていった。
枯木のように痩せこけた手足、ざんばらの蓬髪——その手首、青黒くはれ上っている。縄で縛られていた跡だ。
「水……水を、一杯……」
喘ぎながらいって、苦しそうに、激しく肩を波打たせている。
水を運んで来たのは巡礼の娘であった。
老人は、水の器を受け取るのも忘れて、ハッと眼を見開いた。
「おお、か、香織ッ！　これだ……この香炉……」
娘の手を両手で握り血の滲んだ指先で、むささびの絵の上をさすりながら、老人は香織と新吾を見比べていった。
香織と呼ばれた娘は、香炉を香織の手に握らせた。
老人は、香炉を狙っている者が、きっとお前の前に現われるだろう……決して渡してはならんぞ……お願いします、あなたも——」
「この方は、今、何も覚えておられないので す、昔のことは何も——」
手短かに話す新吾の言葉を聞いた老人は、
「香炉は？……香炉は無事であろうか……」
呻くような声であった。
素早く立って、香織は奥から香炉の袱紗包みを持って戻って来た。
むささびの香炉を手にすると、老人は眼を細めて見入った。
「おお、これだ……この香炉……」
血の滲んだ指先で、むささびの絵の上をさ
ッと眼を見開いた。
「誰が来ても、これだけは手離してはなりませんぞ……誰が来ても……」
「この香炉を狙っている者が、きっとお前の
とび込んだ……むささびの道人だ……」
苦しい息の下から叫ぶその言葉にも、香織は反応を示さなかった。ただ、痛々しい眼を老人に向けるばかりなのだ。
「香織……わからんのかッ、このわしが——」
老人は力をふり絞って、香織の肩をゆする。
その手を、新吾がとめた。
「聞いて下され……この香炉には、天草四郎様の隠された財宝のありかが秘められている

のです……」

天草四郎の隠した財宝――。

人里遠い山住いをしている新吾兄妹ではあったが、その噂は聞いていた。

二十年前――原城に立籠った天草四郎が、戦の敗色濃しとみるや、ある夜、重臣の倉島主膳をよんで、巨万の財宝を秘めた地図を渡し、ひそかに城を脱出させたとか――。

その風説は事実であった。

が――落ちのびた倉島主膳の行方は。杳として知れなかった。

そして、二十年の歳月が流れた。

倉島主膳は、天草四郎のただ一人の縁者、香織と島原の黒鶴岳山中で隠遁生活を送っていたのである。その名も、むささび道人と変えて――。

この天草四郎の財宝は、貧乏大名や、一攫千金を夢みる山師たちの狙うところとなった。各地の大名は、隠密を放って倉島主膳――むささび道人の行方を探らせた。

ために、黒鶴岳はむささび道人と香織にとって安全な地ではなくなった。

二人は巡礼姿に身をやつし、各地を行脚していたのである。

一ト月前――鬼神ケ嶽山中で、二人は、肥前、細川藩の放った隠密、加藤甚八、渡辺三郎次に襲われた。

断崖に追いつめられた道人と香織は、激流にとび込んで難を逃れたが――

道人は近くの岸辺に押し流され、気を失っている所を、隠密に発見されてしまった。

香織は――今さら、いうまでもない。さつきに助けられたのであった。

甚八と三郎次は、道人を山中の洞窟に閉じ込めると、責めに責めた。

宝のありかを白状させようとしたのだ。

道人は口を開かなかった。食べ物も与えられずに、毎日、責められていた。

そして、昨夜、折からの闇夜に乗じて、道人は洞窟を抜け出すことができたが、すでに生きた屍同然であった。

弱り果てた身体に鞭打って、ようやく、道人はこの部落にたどり着くことができた。

偶然ではない。目的があった。

この天草四郎の巨万の財宝を埋めた土地にほかならないのだ。

ことの意外に、新吾もさつきも驚くばかりであった。

「香織を……宝を……お願いします……」

失われつつある意識の中で、道人はそう叫んでいた。

「ご安心下さい。私たち兄妹が、きっと――」

新吾は道人の手を握って答えた。

「宝のありかは……この……」

道人は香炉のむささびの上をまさぐった。

「宝のありかは……むささびの……こ、この……」

いいかけて、二三度口を動かした。が、言葉にはならなかった。

「お爺さまッ！」

初めてそう呼んだ香織に、微笑を向けるとガックリ崩れるように、道人は息絶えた。

しっかと香炉を握った指が、むささびの眼の鉱石を押えている。香炉をその手から離そうとして、新吾がそれに気づいた。

よく見ると、宙を飛ぶむささびの形は、そっくり部落の地形を示している。四方に伸ばしたむささびの手足は、部落を取り巻く四つの奇岩だ。

（すると、眼の位置はもしや……）

香炉を狙う者

慾に憑かれた亡者たちには、どのような犠牲を払っても手に入れたい財宝であろう。

が――香織にとっては、巨万の財宝よりも



山で小鳥と戯れ、谷で川魚と遊ぶ、平和なくらしの方が、はるかに倖せであった。

まして、神のしもべ新吾兄妹には、宝など必要ではない。

（できるなら、香炉を処分したい……）

むささび道人に懇願され、依託された香炉ではあったが、新吾は真剣にそう考えていた。

香炉が、いつまた、香織の身に危難を招くとも限らない——。

新吾の懸念は、的中した。

むささび道人の後を追って、山を降りた甚八と三郎次が、岩場の上から、谷川で遊ぶ香織の姿を発見したのである。

「ふっふっふ……素っ裸で沐浴みか……今にみろ、あの美しい肌を鞭打っても、宝の地図を取りあげてみせる——」

眼を輝かして呟いたのは甚八であった。

男たちに好奇の眼差しを向けられているとも知らず、香織とさつきは、その美しい素肌を流れにまかせていた。

どちらも、その肌は雪のように白く、絹のようにすべすべとなめらかだ。そのぬくもりと、やわらかな感触を慕うように、競って川魚の群れが、二人を取り巻く。

脇の下にもぐり込んだ岩魚が、モゾモゾとくすぐる。

（キャーッ！——）

顔を思わず赤らめて、香織は逃げ廻る。

ザ、ザッ……水から立ち上ると、濡れた肌に、カッと夕陽が照り映えて、二つの肉体は黄金造りの仏像のような、まばゆい輝きを放つ。

と——。

さつきは何か聞いたようだった。

足音？……それも、驚くほど軽い。

さっと、さつきの顔から微笑が消えた。

「香織さん、早く着物を——」

さつきのただならぬ表情から、危険を感じ

取って、香織は素早く布子を身にまとう。
「さ、急ぎましょ！」
いち早く、着終ったさつきが、香織の手をとって、駈け出そうとした。
「待て！」
行手に仁王立ちになった男――甚八だ。
無意識に、香織をかばって立ったさつきは甚八を睨みつけた。
「お前には用はない。そっちの娘だ――」
甚八が香織の腕を取ろうと、手を伸ばした瞬間――
ピシッ！　さつきの平手が、甚八の頬で鳴った。
「あ――」
ひるんだ隙に、さつきは香織の手をとって駈け出す。
「うぬッ……待て！――」
満面、朱をそそいだように真ッ赤になって甚八は二人の後を追う。
独りなら早いさつきの足は、香織のために遅れがちだ。
甚八が、すぐ背後に迫った。
「香織さん、あんたは先にお逃げ！」
「でも……」
「私は大丈夫……ぐずぐずしないで、早く」
叱咤されて、香織は後も見ずに駈け去る。
さつきは、小石を拾って、スクッと甚八に向って立った。
ピューン！
駈け寄る甚八の額を、飛んで来た小石がしたたか打った。
「ぎゃッ！」
思わず叫んで、頭を押える甚八。
「一歩でも近づいてごらん。今度は眼を狙うよ。右かい？　それとも左にするかい？」
小石を握ったさつきが、ニヤニヤしながら甚八を見下している。
「うぬッ！……」
すさまじい勢いでさつきを睨みつける甚八の額から、鮮血がふきこぼれている。
「わかったかい。あたいの石投げはね、百発百中――種ケ島よりよく当るンだ」
ピシッ！……ピシッ！
小石をもてあそびながら、さつきは一歩一歩、後退を始めた。
眼をむいて見送る甚八の頬が、ヒクッと動いた。
「あッ！」
短く叫んだのはさつきだ。
不意に背後から、腕を掴まれたのである。
はさみうちにしようと、後へ廻った三郎次が襲ったのだ。
「ちくしょう！」
激しくあばれても無駄であった。容赦なくグイグイとしめつける。
「この野郎、よくも俺の面体に傷をつけてくれたな！」
駈け寄った甚八の手に鞭が握られている。
ピューンと風が鳴って――
ピシッ！　甚八の鞭がさつきの肩を激打する。
「ひいーッ！」
苦痛に、気丈なさつきも耐えきれず、悲鳴を洩らした。
力まかせに、激しく、甚八は乱打を続ける。
「あッ……ああッ……あーッ！……」
鞭をさけて、海老のように背中を曲げて、川原石の上をごろごろと転がるさつき。
ピシッ！……ピシッ！
鞭は的確にさつきをよじると、布子の裾が乱れて、白い肌がちらつく。内腿のあたりまで激痛に喘いで身をめくれる。恥かしさに胸もさけんばかりだ。
「む、むむうッ……」
「甚八、大事な囮だ。無茶はよせ」
三郎次にたしなめられて、甚八はようやく



鞭をおろした。

倒れたままのさつきは身動き一つしない。

そのさつきに、甚八は素早く縄をかける。

グイグイしめつけられて、胸許がぷっくり

とふくらむ。

ニャッと笑って、甚八は指で小突いた。

「む、むうッ……」

さつきがもがけばもがくほど、いたずらに

甚八の激情をそそるばかりであった。

バリッ……襟許を摑むと、甚八は布子を引き裂いた。

ムクッと、かくれていた乳房があらわになる。ツンツンと、甚八はポッチリしたふくらみを爪弾じく。

「あッ……あッ！」

さつきがもがけばもがくほど、いたずらに

甚八の激情をそそるばかりであった。

交換条件

香織の報告を聞くと、新吾は血相を変えて川原へ駈け降りた。

すでに、さつきの姿はない。

呆然と引きあげようとした新吾の前に、三郎次が立ちはだかった。

「貴様たちだな。妹をどこへやった！」

語尾が怒りにふるえている。

「ふふ……返してほしければ、香織の持っている宝の地図を渡せ」

「なにッ？……」

「いやならいい。お前の妹の命は保証せぬ」

むささび道人と香織が襲われたといっていたのは奴らだったのか——新吾は無言で三郎次を見返した。

「刻限は明朝の陽の出まで——少しでも遅れ

ると、妹の命はないものと思え」

呵々と破顔して、三郎次は夕闇の迫る川原を去って行く。

（さつき……）

吐息とともに、新吾はつぶやいた。

香織を助けたばかりに、たった一人の妹が危難にさらされている。助けに行くこともできない――。

だが、不思議に、香織を恨む気にはなれなかった。

同じ神を信仰する切支丹であるからか？

それもある――

新吾は、美しい香織と暮しているうちに、彼女にひかれていたのであった。

（その香織のために、われわれ兄妹が、こんなにも苦しい目にあわなければならないのだ――）

わかっていても、香織を憎めなかった。すごすごと、家の敷居を跨いだ新吾を、香織が心配顔で待っていた。

血相変えてとび出した新吾をいぶかった村人も集っている。

「さつきさんは？――」

蒼ざめてたずねる香織に、新吾は本当のことをいえなかった。

「これが欲しいのではありませんか？　あの人たちは――」

うなだれる新吾の前に、香織がさし出したのはむささびの香炉であった。

香織は、甚八がかつて彼女を襲った隠密だったとは気づかなかった。が、悄然と引き返して来た新吾を見て、甚八たちが何をのぞんでいるかを見抜いていた。

「私も参ります……私には財宝よりも、さつきさんの命の方が大事なのです……」

真剣な眼差しを向ける香織。思わず新吾は顔をそむけた。少しでも香織を恨もうとした心が恥かしい。

「急いで参りましょう……さつきさんの身に万一のことがあったら、私――」

そこまでいって、香織は眼をしばたいた。

（すみません――）

美しい香織の心に、新吾は詫びた。

香織と新吾は川原へ降りた。

月も星も、夜雲に塗りつぶされて、地獄のような闇があたりを支配している。

「地図は持参したか」

闇の中から現われた影――甚八である。

「持って参った……その前に、さつきさんを返して下さい」

りんとした声が闇に響いた。

やがて、高手小手に縛られたさつきが、三郎次に抱えられて姿を現わした。

「あまり反抗するので、ちょっと、戒めただけだ、すぐ元気になる」

ドンと、背中を突かれて、さつきは川原に転がった。

素早く駈け寄って、さつきを抱き起すと、香織は甚八を睨みつけた。

「ふん！　こっちは約束を守ったぜ、さ、地図を渡して貰おうか」

冷やかに見返して、甚八がいう。

「お渡しします。その代り、これからは二度と私たちや部落の人たちに、迷惑をかけないと約束して下さい」

「よし、約束しよう。早く地図を渡せ」

三郎次がせかした。

香織は、むささびの香炉をさし出した。

「な、なんだ、こりゃ――」

素頓狂な声をあげたのは甚八。

「それが財宝のありかを示した地図なのです――」

香織の言葉に、甚八は手にした香炉を、すかしたり、ひっくり返したりして眺める。

「バ、馬鹿にするな！　ただの香炉ではない

かッ！――」

とび出すような眼で、甚八は三人を見すえた。

「よくご覧なさい。むささびの絵が地図になっているのです」

静かに答えたのは、新吾である。

「むささびの手足は、宝が隠されているという私の部落の地形をそのままに示していま す。多分その鉱石の光っているむささびの眼の位置が、財宝のありかを示しているのでしょう」

ギラッと、甚八と三郎次の眼の奥が光る。

「よし！――この眼の位置の場所へ、俺達を連れて行け」

「えッ？　それでは約束が――」

激しく、香織が抗議した。

「ふっふっふ……おとなしく連れて行けばよし、さもないと、首がとぶぞ」

女たちをかばって立つ新吾を、甚八は抜刀して脅かす。

苦労を重ねて、ようやく財宝のありかをつき止めても、隠密の報酬は少ない。

甚八と三郎次は、主君を裏切って、財宝をすべて私有する魂胆であった。

死者の庵

部落の人々は、四方の四つの岩に、それぞれ名をつけて呼んでいた。

東の岩を黒もず岩、西の岩を鴉羽岩、南をつばくろ岩、北をかりがね岩。

香炉に示されたむささびの眼の位置――宝が秘められていると思われる場所は、黒もず岩とつばくろ岩の中間地点――。両側をそそり立つ絶壁に囲まれた、凹地にある洞窟らしい。

その洞窟は部落の者たちから死者の庵と呼ばれていた。一歩、中へ入ると最後、生きて外へ出られないという。誰一人として近づく者もない洞窟であった。

むささびの香炉は、財宝のありかに死者の庵を示しているのだ。

近づくのを反対する村人たちをふり切って新吾は甚八と三郎次を洞窟へ案内した。

ゴーッ……頭上を覆う黒雲のどこかで、雷の音がする。

風が木々の梢を鳴らして吹き過ぎ、ザ、ザッと、木の葉をとび散らす。

ポツリ！　雨もこぼれ始めた。

「ふふふ……ここまで来れば、宝はもうこっちのものだ……お前たちはもう帰れ！」

洞窟の入口に立った甚八は、香織の手から松明をひったくると、鋭く睨みつける。

新吾と香織は、背丈をかくす繁みを分けて引き返して行く。

甚八と三郎次は先を競って、洞窟の黒い口へとび込んで行った。

バサ、バサッ……小さな黒い影が、ぱっと四方へとび散る。火を知らない蝙蝠の群だ。

鍾乳石が不気味な白さで垂れ下っている。

進むにつれて、右へ、そして、左へと屈折する。そのたびに道も次第に狭くなって行く。

チョロチョロと、足許を流れていた水が、いつか、少しずつ量を増していた。

宝の夢に憑かれた二人は、気にもせずにズンズン奥へ進んで行く。

「この奥に宝があるのだ……この奥に……」

水嵩は次第に増して、二人の膝を隠すほどになった。

「どうしたのだ、この水は？……」

水の冷たさに気づいた三郎次がいぶかった

「なあに、気にすることはあるまい……それより宝だ……」

先に立つ甚八の眼は欲に燃えていた。

その頃——

洞窟の外は大嵐であった。

嵐は豪雨をよび、滝のように降りしきる。

部落の人々は、死者の庵に近づいた祟りだと怖れた。老人も子供も、男も女も、部落の者たちはすべて新吾の家に集まり、天なる神さんたまりあに祈りの言葉を捧げた。

「なむさんちゃご……さんたまりあ……」

一刻も早く嵐のおさまることを、一心に祈り続けるのであった。

豪雨は部落を流れる小川を氾濫させた。あふれた水が、濁流となって、たった一つの流れ口、死者の庵へ向う。

浪窟の二人は腰のあたりまで水につかりながら、奥へ奥へと進んでいた。

轟々と鳴り響く濁流の音。それがこだまして、わぁーんと反響してひろがって行く。地獄から聞えて来るような、不気味な響きをもっていた。

(宝を探すまでは、引き返すものか！……)

甚八も、三郎次も、危険を忘れていた。

刻一刻、水嵩を増す洞窟を、宝にひかれて夢中で進んで行く。

「見ろ！　あれを——」

松明をかざして、叫ぶ甚八。

前方の壁に描かれた十字架が、ゆらめく灯りに、照し出されたのであった。

その十字架の下に——頑丈な木箱が幾つも積まれている。

「宝だ！」

真ッ先に、木箱にとびついたのは甚八だ。

錆びついた金具をおおッ！」

まばゆいばかりの黄金が、宝石が、燦然たる光を放つ。

思わず、二人は両手を財宝の中につっ込んだ。

ひやりと冷たく、重い。

その時——

轟々と流れていた濁流が、一時に水嵩を増した。二人は押し流されそうになった。

「危い！　引き返そう——」

だが、遅すぎた。一寸先もわからぬ真の闇津波のように押し寄せた濁流に、一瞬、二人は呑まれた。

松明も消されて、

「甚八ッ！——」

「三郎次ッ！——」

呼びあう声も、渦に巻かれて消された。

ごぉーッ！——再び襲った濁流が、二人の姿を、そして、財宝を、一気に呑み込んだ。

翌朝——一晩中荒れ狂った嵐が、まるで嘘のように晴れ渡った。

部落のあちこちに散らばった橘々の枝、泥水の溜りが、嵐のすさまじさを物語っている。

香織と新吾は、洞窟の中の二人の生命が気がかりになった。村人を集めると、洞窟へ救援に向った。

死者の庵はすっかり姿を変えていた。ポッカリ黒い口をあけていたその入口は、部落から押し流されて来た泥や朽木、落下した岩石で塞がれていた。中の二人は濁流に呑まれて、悶え苦しんだ挙句、死んだものと想像される。

死者の庵の入口跡に立ちつくした村人は、誰からともなく十字を切り、合掌していた。

それから、二度と、死者の庵に近づく者はなかった。また、天草四郎の財宝を口にする者もなかった。何百年も、この隠れ切支丹の部落を訪れる者もなかったという。

戦前、道に迷った猟師が、四方をそそり立つ奇岩に囲まれた無人の里で一夜を明かしたという記録を読んだことがある。そこが果して、鬼神ケ嶽の隠れ切支丹の部落であったかどうか——。



奸商秘帖 愛憎符印髷

地獄島佐渡

勝彦 画・古正英生

自由がきかないおときは眼に一ぱいの怨みを込めて見つめるのが精一杯だった！

伝奇小説特集

亭主は舌打ちすると、まだ生暖かい男の体を引きずってすぐ近くの浜へ運んで行き、そこに無数にすててある餓死人の山へぽんと投りこんでしまった。

そしてちょうど来合わせた近所の亭主たちに、顔をしかめて話しかけた。

「まったくだ。上州屋のいうとおりよ。今に佐渡中の人間が全部のたれ死にしてうこの有様じゃ。こう毎日毎日、亡者の数ばかりふえてこの先どうなるのかのう」

「どうもこうもないさ。この佐渡を地獄島にする気だろうて。今にこっちも干し上がるばかりよ」

「ばかばかしい！　実際こんなことが続いた日には、お飯の食いあげだ

「こら盗人め、待て！　餅を返さんか！」

骨と皮だけにやせこけた男の首すじをつまみあげて、亭主がそうどなった時はもう手おくれだった。

どうしたことか、男はふいに眼を白黒させると、うーんとのけぞってしまった。盗んだばかりの餅を口一ぱいに頬ばって呼吸をつまらせ、そのままあの世に旅立ってしまったのだ。

「ちえッ、また一人亡者がふえやがった！」

味噌屋町――それは時の佐渡奉行の下で、実際に佐渡を支配して文字どおり権力をふるっていた、留守居役奥野七郎右衛門の役宅が味噌屋町にあったところから、自然世間でよぶようになった隠語であった。



時は、ちょうど四代家綱将軍の寛文六年のこと。佐渡全体が未曾有の不況と不作に見舞われて疲弊のどん底におち、この世ながらの地獄絵を描きだしていた頃のことである。なにしろ相川の町だけで、四千人も餓死者が出たと記録にあるほどだから、その凄惨さはけだし想像以上のものだったろう。

それにしても一体なぜこんなことになったかというと、最大の原因は三年前の寛文三年に相川銀山随一の古い鉱脈で、多年さかえた割間歩を坑内の排水費用が掛りすぎるという理由で廃坑にしてしまったことだった。

これが大へんな失敗で、鉱夫たちはかせぎ場を失なって失業し、採掘量は激減する。そうなると、もともと鉱夫たち相手に栄えてきた相川は、文字どおり一たまりもなかった。

しかも悪い時には悪いことが重なるもので、去年も一昨年も二年つづいて大へんな凶作だった！　これで飢饉が来なかったら、むしろ不思議なくらいである。

かくて相川には餓死者の屍臭がただよい、こそ泥やかッ払いは横行し、人々は自分だけは自滅を免かれようと血眼になって狂奔しはじめたのである。

奸商策謀

相川紙屋町の甲州屋長兵衛方では、きょうも先刻から三人の男が額をあつめて、なにか相談事に余念がない。

大体、この甲州屋長兵衛という男は、本業よりもいろいろな金もうけの才覚にかけて人一倍頭のはたらくほうで、従って平生から慾深仲間の出入りがはげしいが、いまきているのも烏賊釣り舟の舟元の五助と、いま一人は相川一の畳屋のあるじで勘蔵――むろん、長兵衛とは同気相求める仲間同志だった。

「いまも来る途中、眼前で一人くたばりおったが、あまりよい気持はせんのう」

「五千人ぐらいはもう死んだろうという噂だが、でももう大丈夫じゃ。今明年中をかぎり他国出を願い出る者は許すというお触れが出たでのう。佐渡にいても食えねえ者は出て行きよるわい。餓死も追い消した。

「かりにそんなことがあっても、わしらにはなんの関係もないことよ。それより追滅るというものよ」

「しかし他国出はええとしても、すぐ眼につくよう髷に符印をつけられて、とぼとぼ舟出して行く姿をみると、ぞッとするわい。おなじ出すなら、往来の板判でも持たせりゃええに、味噌屋町のやり方はまったくえげつないからのう」

「なにを馬鹿いうとる！」

長兵衛が、いきなり口を入れた。

「髷に符印をつけるのは、一眼みて島抜けと区別がつくようにという奥野さまの親心じゃ。えげつないと言えばえげつないが、そういうお人だからこそ、わしらの話もきいて貰えるんじゃ。悪口なぞいうと罰があたるわい！」

「成程、そういえばそうだがのう。だが長兵衛どん、あの符印髷には大分カラクリもあるようだ、と世間では評判しとるぞな。現におらの浜方でも、願いもしないのに無理に符印をつけられて泣く泣く島を出て行った者があったとか……」

「ははは、ええじゃないか、五助どん！」

長兵衛は、五助の言葉を一言の下に笑い消した。

「しかし他国出はええとしても、すぐ眼につくよう髷に符印をつけられて、とぼだった千鳥賊座を自分たちで開かせて貰



一人娘おとき

って一儲けしようというのに、そう味噌屋町の悪口ばかしいうとは、どういう了見なんじゃ。味噌屋町がなにをやろうと、こっちに関わりさえなければ結構。そうじゃねえかの？」

「ははは、敵わん。長兵衛どん、お前さんの心臓は味噌屋町以上だのう」

「な、なにが……とんでもないことよ。五助どん、勘蔵どんもよく聞かッしゃい。あの奥野さまときたら、日頃から人間は千両以上の分限になれば、どんな危ない仕事をしても絶対命には関わらんと、こう言ってでござるのじゃ。大した度胸だろうが……わしなどとても敵うもんじゃないわい」

「へえ、しかし呆れたお役人だのう」

「ふふふ、よう話のわかる立派なお方じゃ。人間万事色と慾、あれが当世気質というものよ。おぬしらも金儲けがしたけりゃ、せいぜい奥野さまを見習うことだな」

「こりゃ一本まいった、ははは」

三人は顔を見合わせて笑いだしたが、すぐまた声をひそめると、しきりに悪企みの打ち合せをつづけるのだった。

「父さん、お客様はもうかえられた？」

娘のおときが襖越しにそッと顔をだした。

それから半刻ちかくたった後——部屋の中には、長兵衛がひとりまだなにか思案にふけっていた。

「おお、おときか！　やっと先刻かえりおったわ」



「そう。それで干鳥賊座なんてほんまに出来るの？」

おときは、心配そうに訊いた。

「あれッ、お前きいとったのか。盗み聞きなどして悪い奴だのう」

口では叱ったが、眼はわらっている。おときは長兵衛にとっては、眼の中に入れてもいたくないほど可愛い一人娘だ。年令は十八、発育がよいせいか、体全体が熟れきった果物のように、みずみずしい色気にみちている。胸のふくらみ、ゆたかな腰の線——それは親の眼からみてもまぶしいほどの成熟ぶりだった。

だが、長兵衛はすぐまじめな顔に戻った。

「聞いたのなら仕方がない。話してやるが、誰にもいうんじゃないぞ。昔一度願い出てだめだった干鳥賊座なぞ、まず見込はないだろうな」

「あれ、でも父は先刻今にも出来そうにいうていたのに……」

「ははは、それが父の策略じゃ。見込がない干鳥賊座を承知の上で願い出たのも、じつは別に父がひとりで願い出ている紙座のお許しをとるための駈引。のう、おとき。干鳥賊座なぞどうでもよいが、この紙座がとれたらそれこそ大したものじゃ。なにせお役所はもとより、島中で使う紙を一手に扱えるんだからのう」

「まあ、じゃあの人たちは父の踏み台というわけ？　ひどい父！」

おときの眼がやさしく睨んだ。

「はは、まあそういうところかのう。だが、父がそうまでして身代をふやそうらしい。おとき、お茶を大いそぎでな」

「はい」

おときも、その声の主ならよく知っている。たしかに先刻噂に出た奥野七郎右衛門の若党で、杉山重作にちがいなかった。

島の権力者

かげでは味噌屋町などと呼ばれているが、面とむかってはいま佐渡中に、一人として奥野七郎右衛門の前に頭の上がるものはない。

奉行はいたが名目だけで、島の実権は文字どおり彼ひとりに握られている。家祿は九十五俵、それに三十五俵の役扶持がつく。味噌屋町の邸は家族のほか奉公人あわせて二十人という、堂々たる生活



ぶりだし、下京町の別宅には長男の庄太夫が勘定代官を勤めて、別に世帯をかまえている。

だが、いま七郎右衛門が休息しているこの家は、その味噌屋町の本宅ではなかった。

浜にちかい会津町に最近設けた隠宅で召使も若党の重作のほかには、耳の遠い婆やがひとりだけのごく閑静な住居であった。

今日は早めに役所から退ってきた七郎右衛門、先刻からなにやら書類をみていたが、それにもあきたか、いまは二階の窓ごしにぼんやりと海をながめている。

もう五月も末である。

佐渡は、山も海も生きいきとかがやいていた。だが、番所前に船がかりしている荷役中の廻船に、いま一つ活気がないようにみえるのは、やはり島の不景気が反映しているせいだろう。

（去年の江戸上納銀が二万二千両あまり、今年の分も二万三千両あまりか。寛永の頃に比べると、ちょうど三分の一……。ふん、これじゃ島が不景気になるのも無理はないな。結局、符印髷でもつけさせて、せいぜい人減らしでもするほかに手はないか……）

七郎右衛門もさすがに少々憂鬱になったのか、手あらく書類を片寄せると、ぼんぼんと手を鳴らした。



「およびでございますか」

すぐ階段に足音がして、廊下に手をついたのは、杉山重作である。

「うむ、茶をいれてまいれ。あ、それから今日の符印の模様はどうであった？」



「はい。今日符印しました数は百二十人ほどの由、横目付石井様のお言葉でございます」

「ふむ、それで合計は？」

「はい。もはや一万二千を大分越した由でございます」

「一万二千？　やっとそんなものか」

「はい。でも殿さま、こう大勢本土に渡りましても、向うではたして渡世が見付かるものでございましょうか。私、それが心配でございます」

若くて健気な重作には、この間じゅうからそれがなにより心配だった。

「渡世か、ははは」

七郎右衛門は、おかしそうに笑いだした。

「つまらぬ心配などするでない。それは本土に渡ってから、めいめいが考えればよいのじゃ。普段は勝手に出られぬ島を符印髷をつけさせて、出してやるのが上のお慈悲――有難く思わねば罰があたろうぞ」

「はッ」上のお慈悲といわれれば、返す言葉はなかった。

「つまらぬことなど考えずに、そちはただわしに忠実に仕えておればよいのじゃ。わかったな」

「はい」重作は頭を下げた。

「もうよい、退っておれ。あ、それから甲州屋長兵衛がまいるはず、婆やに酒の仕度をいいつけておけ！」

ぴしぴしと用事をいいつける七郎右衛門だった。

あいびきの宿

ここは相川の町外れにある菓子屋の裏座敷。

膳のうえには、近頃佐渡にも伝わってきた江戸風のそばきりの丼が二つ、空になって載っている。

その横で、先刻から膝をすり合わせるようにして話しこんでいる若い男女は、甲州屋の娘おときと、もう一人は銀山の穿児で久平という、ちょっと苦味ばしった若い男だ。

むろん、親には内緒のうれしいあいびき――座蒲団が二つ折りになったまま、傍においてあるのをみると、もう嬉しい夢をみたあとかも知れない。

だが、いま二人が交わしている話の内容は、決してそんな甘いものではなかった。

「よわったな。まったくこの不景気じゃ肝心のものがままにならねえし……」

腕組みしたまま、溜息まじりにいう久平の面には、ありありと困惑の色がうかんでいる。

「久平さん、あんたの間切そんなに悪いの？」

「悪いのなんのって、てんで話にならねえ。一荷五六匁の鏈がほそぼそ出るだけなんだ」

「困ったわねえ。銀の二百匁もやれば、どの船だって喜んで越後まで渡してくれるんだけど、それじゃとてもだめねえ」

「とっても！　今日び百匁の銀も到底くすねられねえよ。といって、おれたちがまさか符印髷もつけられねえしな」

「いやよ、符印髷なんぞ……ああ、じゃどうしても父の言いつけどおり、妾は味噌屋町へ行くほかないの、久平さん！」

「くそッ、誰があんな狒々爺の所へ大切なお前を……お前の親父も親父じゃねえか。自分の娘を一体なんと思っているんだ！」



「仕方がないわ。うちの父さんは相川一の分限者になりたい一心なんだから。親孝行だと思って行け、とそういうのよ。辛いわ、妾！」

「……」

「ねえ久平さん、いっそ一思いに二人で死にましょうか？」

「うむ、おれもそいつは考えないわけじゃねえんだが……」

久平は、苦しそうに顔をそむけた。

「だが、おとき勘弁してくれ。故郷でただ一人、おれの帰りを待っているおふくろのことを考えると、おれにはそれは出来ねえんだ」

「そりゃ妾だって、なにも好きこのんで死にたくはないけれど……」

でも、それ以外になんかいい方法があるの？　そういいたそうなおときだ。

「仕、仕方がねえ！」

久平がついに思いきったように、言いだした。

「お前も辛かろうが、辛棒してくれ。なあに、間切の工合さえよくなりゃ、こっちのものよ。あんな狒々爺なんかくそくらえだ！」

「久平さん、ほんとう？」

「ほんとうとも！　さあ、こうなりゃおれも掘って掘りまくるぜ。そして乾度二ヵ月たたねえうちに、お前を迎えに行くからな」

久平は急に元気になって、胸をふってみせた。

「うれしい妾もはやく間切が盛るように一生懸命山神さまに願をかけるわ」

「おとき！」

「久平さん！」

二人は、どちらからともなくひしと抱き合った。自然と唇が重なり、舌がもつれ合った。そしてこれで当分会えないかも知れないと思うと、互いに体を求め合った。

ってまた慾情の嵐にすべてを忘れて行くのだった。

静かになった部屋の外では、蟬しぐれがまた一段とたかくなった。

美しきいけにえ

「ああ、よい気持じゃ」

七郎右衛門は、至極上気嫌である。

湯あがりの額をてらてらと光らせて、先刻からたのしそうに晩酌の盃を傾けている。

その前には、おときが銚子を膝においれも掘って掘りまくるぜ。そして、伏目がちにひかえていた。

行儀見習という名目で、この家にきてからもう三日目、身なりが変ったせいか町娘時代にはなかった気品のある美しさが体中からあふれているのを、七郎右衛門は眼を細めて満足そうにながめている。

それは獲物を前にした猛獣が、ひとき心ゆくまでそれを観賞している姿でもあった。

だが、おときのほうは、それこそ針の筵にでもすわらされている思いであった。

「それにしても、とき。そちは仕合せ者だな」



七郎右衛門が、ふとそんなことをいいだした。

「え、どうしてでございます？」

おもわず顔をあげるおとき。

「ははは、そちの父御は大した才覚者じゃ。今の分で行くと、二三年後には相川一の分限者になろうも知れぬ。それでそちは仕合せ者だと申すのじゃ」

「あの、それが紙座とか……」

「そうじゃ」

七郎右衛門はうなずいて、

「まったくえらいことを考えよったものよ。もっとも、それを許すも許さぬも、このわしの胸一つにある。わしがならぬといえば、長兵衛の大望もその日かぎり夢と消えるのじゃ」

「は、はい。でも殿さまも屹度許して下さるに違いない。お前からもよくお願いするようにと父は、そう申しておりました」

おときには、それだけいうのが精一ぱいだった。

「ははは、長兵衛がそう申したか。ますますもって才覚者じゃ。わしがいやとはいえぬように搦手から攻めて来よるから

のう」

「……」

「よいよい。心配は要らぬ。わしのいいつけに背きさえしなければ、長兵衛も相川の分限者にしてやろうし、またそちも栄耀栄華なぞとそんな大そうも栄華は心のままじゃ。どうじゃ、嬉しかろうが」

「はい。でも栄耀栄華なぞとそんな大それた……妾は安穏にさえ暮らせれば、それで結構でございます」

「安穏にか？　若い娘にしてはよい心がけじゃが、しかし今この佐渡では、そのあッ！　と叫びかけた時は、もうおそかった。肩を抱かれて、おときは体ぐるみずるずると引きよせられた。

好色な眼が真近にせまって、酒くさい唇が口をふさいだ。呼吸がつまりそうになった。

（久平さん、助けて！）

夢中で恋しい人の名を心の中でよびつづけながら、しかし思いきって男の手をふりほどくことも出来ず、おときはいつか観念の眼を閉じて行くほかなかった。

文つぶて

（ふふふ、最初はいやがってもだんだんと味がわかるにつれて、相手の男が好きに



なって来るのが女というものじゃ。とき、そちだってわしに抱かれて満更悪い気持ではあるまいが……」

肱を枕に寝ころびながら、七郎右衛門はそんなことを胸の中で呟いていた。

文字どおり、充ちたりた愉しい顔つきだ。

どんな世間の非難や蔭口も、彼の心には蚊が刺したほどの痛痒もあたえない。自分のもつ権力を最大限に活用して、一歩一歩着実に富をきずき上げて行けば、それが自分の幸福となり、子孫のためでもあると、かたく信じている七郎右衛門だ。

と同時に、女色についても彼はきわめて貪慾であった。権力を笠にきて、これまでも幾人となく女を手に入れてきた。今度のおときもその一人だ。

だが、いままで側妾にしてきた商売女や後家とちがって、おときの魅力はなんといってもその新鮮さにあった。

ぴちぴちした、もぎたての果物のような女体が、最初はなんの反応もしめさなかったが、やはり木石でない悲しさ、年功を重ねた男の愛撫の技巧のまえにもろくも潰えて行くさまは、七郎右衛門にとっては久しぶりで味わう楽しみであった。

だから今も、その時のおときのさまざまな姿態を思いうかべると、七郎右衛門の頬にはひとりでに快心の笑みがうかんで来るのだ。

「うふふふふ……」

だが、なにを思いだしたのか、彼がまたしても淫らな含み笑いをもらした時で



ある。ふいに妙なものが、七郎右衛門の眼にはいった。庭先の板塀をかすめて、小さい白い物が音もなく弧を描いて、植込みの蔭に落ちたのがみる気もなく視野にはいったのだ。

（おや、誰かなにか投りこんだようだが子供のいたずらかな？）

七郎右衛門は我れに返るとむっくり半身を起した。子供ならおどしてやるつもりで、縁側ごしに見下したが、塀外にはふしぎに子供の姿はみえず、その代り小走りに遠去かって行く若者のうしろ姿がひとつ、夕日を浴びてはっきりと七郎右衛門の眼にしみた。

（へんだな。あの若者が投げたのか？）

おときを呼んで拾わせようかと思ったが、ふと好奇心にかられて七郎右衛門は、自分でそれを拾いに行く気になった。

おときも婆やも台所で晩酌の仕度をしているらしく、そんな紙つぶてが庭に投げこまれたとは、ゆめ知らない。

庭に出た七郎右衛門は紙つぶてを拾いあげると、ちょっと辻占でもみるような気持で皺をのばし、書いてある文句に眼をさらした。

「うッ！」

その途端、おもわず驚きのうめきが分厚い唇を走った。手がわなわなと痙攣した。

意外、その紙片には金釘流の下手な字で、こんな文句が書いてあったのだ——。

こんや五ツ　いつもの家にてまちうけ候　ひなたまぎりもよくなってまいり候　いろいろの話　おめにかかりて申上候

久平

ときどの　いのち

「うーむ。これは……」

さすがの七郎右衛門も、瞬間われとわが眼をうたがった。それほど彼の驚きは大きかったのだ。その彼の眼に（ときどのいのち　久平）と書かれた文字が烙きつくようにしみこんで来る……。

一点の疑いもはさむ余地のない、おときと男とのあいびきの打ち合せの手紙だ。

今の今まで自分ひとりが独占しているとばかり信じていたおときに、隠し男があった！　しかも自分の眼をかすめて、あいびきの約束までしている！

こみあげて来る失望と憤怒に、七郎右衛門はおもわずきりきりと歯を嚙んだ。

（とき！　そして久平とか申す下郎め！　よくもこのわしの顔に泥を塗りおったな！）

誘う魔手

銀山の勘定日は初十日、中十日、末十日の月三回の定めで、それだけに昨日勘定日がすんだばかりの今日は、坑内もなんとなくのんびりしていた。

一点の疑いもはさむ余地のない、おときと男とのあいびきの打ち合せの手紙だ。

今の今まで自分ひとりが独占しているとばかり信じていたおときに、隠し男があった！　しかも自分の眼をかすめて、先刻からいらいらと煙草ばかりふかしている。

（おときの奴、どうして昨日は来なかっ



たのだろう？　折角間切もよくなったのに、人の気も知らねえで……狒々爺に抱かれやがって、おときの阿魔め、だんだん心変りしやがったんじゃねえかな。くそ面白くもねえ、ええい、かまうことはねえから、もう一度今日紙玉を投りこんでやるか！）

自暴に煙管ばかり叩いて、捌け口のない鬱憤をはらしている。

と、その時だった。遠くのほうから紙燭の灯が、真闇な坑道をぼうッと照らしながら近づいて来るのが、ふと眼にはいった。紙燭は役付の者が多く持つ燈具である。

（おや、今ごろ見廻りか？）

おもわず腰をあげて、働くふりをしかけた久平、ふと灯影に浮く姿をみるなり、かッとしていきなり怒鳴ってしまった。

「やい、馬鹿野郎！　なんでえ、ただの穿児のくせにそんな燈具をふりまわしやがって、碌でなしのおたんこ茄子め！」

「へえ、あの燈具を落してこわしてしまったんで、ご免なんして……」

みると久平も、顔を知らない穿児だ。

「おや、てめえ新顔だな。馬鹿野郎、間切をまちがえたんじゃねえのか。一体どこの間切へ行くつもりで、こんな所へ迷いこんできやがったんだ？」

「へえ、実は日向間切の久平さんの所へ行こうと思いますんで……」

「なんだ、久平？　久平ならこのおれだが、手前なんかに知らねえぜ。一体どんな用事があるッてんだ？」

「それが実は、その言伝てを頼まれましたんで……」



「言伝て？」

「へえ。あの娘ッちゃのおときさんから で……なんだか急ぎの用があるから、いつもの所へ大いそぎで来てくれッて、そういう言伝てなんで」

「なに、おときが大いそぎで来てくれだと？」

「へえ。そ、そうなんで……」

穿児の声は、なぜかふるえていた。だが、もとよりそんなことに気がつく久平ではなかった。

「ふうん。そうか、そりゃご苦労だった な。礼をいうぜ。駄賃はあとでやるからな」

いそいで起ちかけた久平を、だが、そ の穿児はあわてて遮ぎった。

「あッ、久平さん。そっちはいま役方が見えとるで、まずいぞな。遠くても竪坑のほうを廻って行くほうがええぞな！」

「そうか。役方がきてちゃまずいな」

踵を返して竪坑のほうへいそぐ久平の後から、穿児もおくれじと附いて行った。

だが、久平がなれきった調子で、竪坑の坊主梯子を身軽にとんとんと下りかけた途端——突如、すごい形相に一変した穿児が背後から無言のまま、力まかせに久平の肩先を蹴とばした！

「あッ、なにをしやがる！」

久平の絶叫が、もうその時は足をすべらせた彼が、すさまじく坑内に反響したが、もうそのときに、闇の底へ——身体はまっさかさまに、闇の底へ——そしてまもなくどーんとはげしく身体が坑底に叩きつけられる音がしたと思うと、あとはもうなんの音もしなくなった。

不気味な静寂のなかに、穿児が手にした紙燭の火だけが、かすかにふるえていた。

「不埒者めが！」

だが、そう呟いたにせ穿児——杉山重作の顔も、まるで死人のように血の気がなかった。

女体のたうつ女体

「ふふふ、どうじゃ、とき。苦しかろうが……」

「そ、そんな！　お殿さまに楯つくなんて……」

「ええ、申すな。男よりまいったこの手紙がなによりの証拠。これでもそちはまだ知らぬといいはる気か！」

七郎右衛門の手が伸びて、ぐっと乳房をつかんだ。

「ああッ！」体中を走る激痛に、おぼえず身をよじるおとき。



「ぞ、存じませぬ！」
「まあ、えわ。その久平とやら申す男ももう二度とふたたびそちを喜ばしてくれることはあるまい。今ごろは地獄の底で、鬼どもから裁きをうけていよう」
「ええッ、久平さんが？」
おときは只今甲州屋より戻りましたが…
だが、その時、やっとばたばたと階段をとびあがって来る足音――重作が押ッ取り刀でかけこんできた。
「おう、戻ったか」
「はッ、只今甲州屋より戻りましたが…
…これは一体どうしたことで……」
部屋の中の騒ぎをみて、呆気にとられたような重作の面持ちだ。
「ふふふ、そちの手柄じゃ、みい、そちの人足の顔を！」
「えッ？」おもわずおよび腰になった重作へ、久平の血みどろな眼がするどく噛みついて行った。
「畜、畜生！　汝だったなァ、にせ穿児め！」
「あッ、そちは久平！」
だらりと下った右腕、折れた右の足首――さながら悪鬼のような姿でふらふらと起ちあがりかけた久平の胸に、
「うぬ、死に損ない奴が！」
さっと一足引いた重作が、柄も通れとばかし久平の断末魔の声ではなかった。
必殺の諸手突き！　どッと崩れ落ちる久平の五体！
「ひいッ！」と絹を裂くような悲鳴は、
その時、やっとばたばたと階段をとびあまりの凄惨さに、おときがついに失したのであった。
神
し
土
その船の上では、髷にあわれにも符印つけられた舟元の五助、畳屋の勘蔵、して甲州屋長兵衛夫婦が娘のおときをれて、次第に遠ざかる故郷の島かげをつまでも飽かずにながめている。干鳥座はもとより、紙座の申請も下されて川一番の分限者になる夢もむなしく消た奸商たちの末路のすがたであった。ただ厳密にいえばおときだけは、故郷去ることの悲しみも、符印髷の人となた身の悲運もまったく感じないかのよに、この船旅を嬉々として子供のようはしゃいでいたが、それがまた長兵衛ちの涙を誘った。
あわれ、おときは久平のあまりにも無な死を眼のあたりにみたその日から、個の狂女と化していたのである。しかその胎内には、誰の種子とも知れぬ一の生命さえ、いつか宿していた……。

「さあ斬れ！　それは違う、違うッてば！」
「久平さんもだえるおとき。
懸命に身
「ふん、いざまだ。売女め！　せいせ

裏窓・既刊号目次

35年（二月特大号）女隠密女スパイ特集

○カラーヌード・悩乱……撮影・藤沢　修
○グラビア・ヌード傑作選……〃
絵物語・微笑に謎あり……〔文・松平　荘司／画・山田　彬弘〕
絵物語・フラミンゴの脚…〔文・橘　新太郎／画・秋吉　巍〕
犬武者脱走記……矢桐　重八
隠密釣天井……中林　節三
暗黒街の女猫……豊田　一狼
夜霧の中で……竹谷　十三
密林戦の妖花……藤見　郁
ラスベガスの女スパイ……黒羽　新
女間諜暗躍譚……鈴木　和夫
絵物語・肌絵狂女……〔文・久宝寺　葵／画・古正　英生〕
肌を這う悪夢……襟垢　残
鉄瓶の中の赤ん坊……長谷川　勇
足に憑かれる……篁　文彦
黒い憎悪……多々羅　健
或る美容体操……編集部・編
美貴の矯正室……南村　蘭
鬼哭妙国寺……中康　弘通
黒髪を織る兵隊（二）……志摩　不二
濡衣組往生記……小田桐　爽
探奇会事件……伊集院光一
泣き兵衛巷噺子・妄執血汐絵図…飯田　豊吉
未整理棚の中から……偏　執子

（二月特大号・定価百五十円・送料十六円）

35年（新年号）陶酔小説特集号

○カラーヌード・蛇と女……撮影・藤沢　修
○絵物語・墓穴を掘れ……〔文・豊田　一狼／画・山田　彬弘〕
○絵物語・魔像屋敷……画と文・中島　喜美
お雪さんの乳房……狛　勝彦
ゴミ箱の中の裸女……篁　文彦
悪魔の芋に指がある……長谷川　勇
黒髪を織る兵隊（一）……志摩　不二
隅の鬼が躰にさわる……岬　洋之助
山に殺された男……鬼山　絢策
或る美容体操……編集部・編
美女密使……丘野　武也
うるむ星座……藤川　博
仇討修羅道……小田桐　爽
三春党秘聞（一）……瀬川　泰子
怪盗奇賊抄……鈴木　和夫
東京の顔（二）……織田静太郎
絵物語・比丘尼忠臣蔵……〔文・矢桐　重八／画・古正　英生〕
白蠟荘事件……藤見　郁
泣き兵衛巷噺子・軍鶏屋敷異変…飯田　豊吉
危難場面を分類すれば……芝　利泰
受難桜……久我風太郎

（定価百二十円・送料十二円）

34年（十二月号）妖美小説特集

○カラーヌード・赤い布……〔文・烏丸　克彦／画・山田　彬弘〕
絵物語・十字架の美少女……南村　蘭
美加留夫人と三人の奴隷……浜松　武
炎（ほのお）……尾嶋　新
まんじゅう魔女……佐々木　力
喪家の犬……長谷川　勇
天井に気ィつけなはれ……兵庫　圭八
恐ろしき遺書……文津部三郎
色頁・或る美容体操……編集部・編
絵物語・姐御道中……中島　喜美
愛の煉獄……藤川　博
東京の顔（一）……織田静太郎
女人悲傷譜……中康　弘通
女狐髪……志摩　不二
絵物語・砦の花（完結編）…〔文・依田　精二／画・秋吉　巍〕
山に殺された男……鬼山　絢策
或る美容体操……編集部・編
美女密使……丘野　武也
黒子受難……藤川　博
三春党秘聞（一）……瀬川　泰子
乱れ髪夜話……久我風太郎
女たちの寝室……宇治川　龍
泣き兵衛巷噺子・苫船地獄……飯田　豊吉

（定価百二十円・送料十二円）

34年（十一月特大号）倒錯小説特集

○グラビア・ヌード傑作選……松下　正雄
○絵物語・謎の裸女像……〔文・松平　荘司／画・山田　彬弘〕
○絵物語・お蔦受難……中島　喜美
唇が悪魔を呼ぶ……浜松　武
黒い沼……長谷川　勇
そうされたい男……麻曾　保
地蔵怪……伊集院　光
鉄鎖の解ける時……鳴滝　三郎
醜聞を売る男……尾嶋　新

彼女は犬になった……朝来美佐男
ボラ助の受難……南原　哲
初夜の誓い……瀬川　泰子
愛怨相馬双紙……三国沢　隆
奇話妖談抄……鈴木　和夫
○連載絵物語・碧の花（一）〈文・依田　精二／画・秋吉　巍〉
天使の犯罪……宇留　利一
未完の友情……藤川　博
会津娘子軍……中康　弘通
髪花火……志摩　不二
色頁・或る美容体操……編集部・編
情炎の文……岩堀　光
ものいうバイブル……黒羽　新
幽霊小町……寿々喜多呂九平
泣き兵衛巷噺子・猛襲隠亡が原……飯田　豊吉
（十一月特大号・定価百五十円。送料十六円）
34年（十月号）あぶ・すとおりい特集
○絵物語・さそり座から来た女……中島　喜美
○グラビア・ヌード傑作選……藤沢　修
河馬を崇める男……文津部三郎
最後の客……長谷川　勇
髪吹雪……志摩　不二
あたしは蛙じゃない……鳴海　玄吉
女たちの檻……辻　哲哉
少年……藤川　博
執念の蛇……尾嶋　新
色欲蓮華蔓荼羅……三国沢　隆
月の篠原……瀬川　泰子
少年切腹史……中康　弘通
娘さらい影絵法師……篠田　一平
女王の切り札……竹谷　十三
つごもり池……鈴木　和夫
泣き兵衛巷噺子・往生組始末記……島　容教
ボーイ十年……
色頁絵物語・暗黒の触手……〈文・海老手　泰／画・鈴木　初男〉
お道変化……藤　琴也
奥様に男が出来た……鶴沼　二郎
泣き兵衛・妖虫からくり地獄……飯田　豊吉
未整理棚の中から……偏　執子
（定価百二十円・送料十二円）
34年（九月号）大奥秘史特集
○絵物語・桃色の怪盗……〈文・豊田　一狼／画・古正　英生〉
○グラビア・ヌード傑作選……藤沢　修
秘説千代田絵巻……矢桐　重八
夜叉駕籠……島本　春雄
むささび悲願……橋爪　彦七
大奥闘花図絵……中林　節三
妖雲練馬御殿……小田桐　爽
狂妃の罠……藤見　郁
続・女腹切りの史実と小説……中康　弘通
怨讐二人小町……久我風太郎
絵物語・美肌小姓……中島　喜美
未整理棚の中から……偏　執子
怪異河童小僧……寿々喜多呂九平
お龍秘帖……円城寺　達
妖婦悪党抄……鈴木　和夫
髪弁天……志摩　不二
墓場から来た悪魔……長谷川　勇
えんぴつ地獄……鳴海　玄吉
つごもり池……溝呂木寂子
泣き兵衛巷噺子・往生組始末記……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）
34年（八月特大号）呪法幻術特集
○グラビア・ヌード傑作選……藤沢　修
○絵物語・美女と野獣……〈文・秋津　京太／画・古正　英生〉
幽霊陰陽師……矢桐　重八
妖呪盲目雛……島本　春雄
丑の刻異変……中林　節三
幻術からくり小町……葉田　光
悪魔の笛で女は踊る……杉本　駿
歓喜天の呪い……黒羽　新
未整理棚の中から……偏　執子
絵物語・あんどろめだ絵図……中島　喜美
髪人形……志摩　不二
えんぶり……鳴海　玄吉
絵物語・婦人諜報部員（二）〈文・依田　精二／画・秋吉　巍〉
妖奇女護ガ島……小田桐　爽
白刃の舞……久富　浩司
美童切腹史……中康　弘通
お龍秘帖……円城寺　達
綺談異聞抄……鈴木　和夫
泣き兵衛巷噺子・地獄医者……飯田　豊吉
なめくじ屋敷……宇治川　龍
鏡に映す……襟垢　残
奇怪な手紙……長谷川　勇
（八月特大号・定価百五十円・送料十六円）

34年（七月号）恐怖異色感覚特集

○グラビア・ヌード傑作選……藤沢　修
○絵物語・地獄屏風……画と文・中島　喜美
奥様お手をどうぞ……鳴滝　三郎
女腹切の史実と小説……中康　弘通
灰色の壁の中（獄中想起）……新谷　芳美
いれずみ卍……円城寺　達
髪ぐるま……志摩　不二
奇妙な博物館……峠　浩介
絵物語・婦人諜報部員（一）〔文・依田　精二　画・秋吉　巒〕
妖異怪奇譚……鈴木　和夫
未整理棚の中から……偏　執子
首吊り屋敷……矢桐　重八
足のしもべ……牧戸　信雄
顔の二つある侍……島本　春雄
七（あいくち）首……中林　節三
平家部落の怪……藤見　郁
呪われた老人……長谷川　勇
貴婦人と犬……とやま・かづひこ
死者の贈り物……岬　洋之助
まぼろし侍・凝脂地獄……黒木　忍
（定価百二十円・送料十二円）

34年（六月号）伝奇・秘宝録特集

○グラビア・黒と白の幻想……藤沢　修
○絵物語・絢爛たる舞踏……画・山田　彬弘
伝奇紅蓮党……矢桐　重八
阿修羅秘帖……中林　節三
夜叉姫絵図……小田桐　爽
妖異女宝島……葉田　光
魔童子秘文……島本　春雄
肌絵双紙……藤見　郁
絵図面地獄……高月　大三
髪　一　重……志摩　不二
絵物語・女が死んでる……秋吉　巒
〃　・裸身菩薩……中島　喜美
散華白虎隊……中康　弘通
妄執黄金秘抄……鈴木　和夫
怪異愛霊教（完結編）……飯田　豊吉
まぼろし侍・黄金女仏……黒木　忍
白き神の穴……南村　蘭
巷説人肌呪縛……玉木　重信
（定価百二十円・送料十二円）

34年（五月号）女性解放特集

○グラビア・女体とロープ……藤沢　修
○絵物語・太腿に眼をつけた……島本　春雄
○絵物語・刺青小町……藤見　郁
砂漠の女囚……高月　大三
繰り子地獄……志摩　不二
からゆき悲歌……秋吉　巒
緋縮緬伝法……中島　喜美
海の魔王と女たち……中康　弘通
女体と圧制……鈴木　和夫
美女蒲鉾……飯田　豊吉
血（けつよう）妖……黒木　忍
連載・怪異愛霊教（四）……南村　蘭
髪行灯……玉木　重信
まぼろし侍・壁虎呪文……偏　執子
恩讐地獄ぐるま……志摩　不二
女神の壺……中林　節三
女体苦患教……瀬谷　伴八
腰紐呪法……島本　春雄
馬のり仙女……藤見　郁
女色金猫教……矢桐　重八
愛神の生贄……北羽　奥男
黒髪呪縛……小田桐　爽
彼女のミサ……黒羽　新
邪宗淫寺抄……鈴木　和夫
あの場面この女優……芝　利泰
淫祠邪教秘話……峠　浩介
（定価百二十円・送料十二円）

34年（三月号）凄艶毒婦妖婦特集

○グラビア・牛と骨と女……藤沢　修
○絵物語・剝製幻想曲……画・古正　英生
○絵物語・妖艶娘縛絵……中島　喜美

責め絵芸者……矢桐　重八
キスで血を拭け……杉本　駿
獄門首お銀……小田桐　爽
閻魔のお秀……中林　節三
毒蛇のお美津……葉田　光
地獄沼の妖女……藤見　郁
罪だぜ警部……橘　新太郎
女体と蠅……黒羽　新
連載・怪異愛霊教（三）……飯田　豊吉
まぼろし侍・人肌将棋……黒木　忍
開化女囚吟味……鈴木　和夫
抱き寝如来……円城寺　達
泣き方を教えて……鳴滝　三郎
銃口は笑った……東　零児
皿を割る女……伊達　徹
つばくろ道中……明石　汐子
女間諜散華……藤山　秀緒
（定価百二十円・送料十二円）
34年（二月特大号）変幻侠盗義賊特集号
○グラビア・ヌード傑作選……画・古正英生
○絵物語・誘拐に気をつけろ……画と文・中島喜美
○絵物語・絖肌地獄……画と文・歌川大雅
○絵物語・蛇夜庵の女……南村　蘭
魔女の神酒……島本　春雄
湯文字盗賊……小田桐　爽
俺は義賊だ……中林　節三
幽霊小判……黒羽　新
山荘のヘリオトロープ……葉田　光
賄賂裸人形……橘　新太郎
女に瓶はいらない……矢桐　重八
変化中条流……矢桐　重八
お龍月夜がさ……藤見　郁
讐怨私刑抄（二）……杉本　駿
骨に憑かれた女……小田桐　爽
肌責め稲荷……中林　節三
信長奇矯録……鈴木　和夫
連載・怪異愛霊教（二）……飯田　豊吉
まぼろし侍・生首往生……黒木　忍
ガラスの檻……蝦墓家一美
洞窟の蠟人形……川野　京輔
矢部駿河守端書……明石　汐子
烈しい女……京極　美岐
美胡の足……潮　寛二
泰西侠盗伝……峠　浩介
貞女サートリー……北羽　奥男
（二月特大号・定価百五十円・送料十六円）
34年（新年号）裏窓忠臣蔵特集
○グラビア・手と足の表情……藤沢　修
○絵物語・紅蜘蛛と殺人鬼……山田彬弘・画
○絵物語・悩乱犬小町……中島　喜美
肌絵図悲願……中林　節三
魔狙侍始末記……藤見　郁
引き廻し小町……小田桐　爽
妄執美女どもえ……夏本圭之助
糊紅地獄……島本　春雄
陰陽元禄侍……松井　簪子
狂異忠臣蔵……島本　春雄
輪廻ごよみ……宇治川　龍
お軽と三平……杉本　駿
遥泉院切腹……葉田　光
覗き見平内……矢桐　重八
連載・怪異愛霊教（一）……飯田　豊吉
まぼろし侍・蛇神異変……黒木　忍
黒い唇……京極　美岐
海底のハレム……橘　新太郎
肌責め稲荷……円城寺　達
復讐陣……明石　汐子
男装十文字腹……藤山　秀緒
押入れの中のひとりごと……柱　安佳
（定価百二十円・送料十二円）
33年（十二月号）奴隷と圧制特集号
○グラビア・若いヌード……藤沢　修
○絵物語・裸女島綺談……（文・夏本圭之助／画・山田彬弘）
○絵物語・緋縮緬草紙……画と文・中島　喜美
煩悩奴隷宮……小田桐　爽
売春奴隷街……飯田　豊吉
翳（じょう）雨……衿垢　残
象牙の王座……橘　新太郎
虜囚美人伝……葉田　光
女奴隷の宝石……藤見　郁
奈落の檻……志摩　不二
その箱をあけるな……佐々木　力
伽羅肌ごよみ……岩堀　光
白い炎（二）……河野　春雄
外国雑誌に現われた女奴隷……峠　浩介
処女の代償……蝦墓家一美
隠密覚書・髑髏提灯……島本　春雄
穴倉菩薩……円城寺　達
黄色い毒蛾……溝呂木寂子

壺地獄……川口　直樹
泡（あわ）……松井　籟子
化身歓喜女仏……梅田　楠雄
奇妙な自殺者達……神戸　裕一
（定価百二十円・送料十二円）

33年（十一月号）陰謀叛乱秘録特集号
○絵物語・廃坑は知っていた……秋吉　巒
○〃　・ドクトル魔美の唇……歌川　大雅
○グラビア・みのりの夜……藤沢　修
無頼征韓党……岩堀　光
妄執薬子絵巻……高木　龍二
烏羽玉侍……海部　陽三
泣き叫ぶ人工衛星……加山　和雄
おせいさまと隠亡……鈴木　和夫
讐怨私刑抄……樋口　逸馬
ナチス秘密諜報部の魔女……京極　美岐
淫らな釣師……志摩　不二
紅蓮の女……河野　春雄
白い炎……島本　春雄
隠密覚書・般若狂女……野田　淳
女漁り旅……麻布　義朗
ゲヘナの火……松井　籟子
夜の秘潮……円城寺　達
穴倉菩薩……藤見　郁
臀の下の男の小指……竹谷　十三
ザルドの帝王……天野　謙
裏窓のぞき（読者評論）……
（定価百二十円・送料十二円）

33年（十月号）怪異復讐譚特集
○絵物語・女水芸師……（文・櫛笥　重三郎　画・古正　英生）
○絵物語・地獄舟……（画と文・中島　喜美）
○絵物語・鬼火河岸……（画と文・歌川　大雅）
○グラビア・光と肌と……（撮影・藤沢　修）
○絵物語・蝠蝙座の秘密……（文・夏本圭之助　画・山田　彬弘）
連載完結篇・地獄の乳房……飯田　豊吉
隠密覚書・死棺小町……島本　春雄
絖肌呪文……高木　龍二
ストック・ホテルの怪……志摩　不二
お島仇討旅……竹谷　十三
腐塚美女因果……矢桐　重八
変化若衆……葉田　光
妖異死神旗本……三国沢　隆
傲れる女達……小田桐　爽
足にひそむ悪魔……股野　元
毒蝶の宿……溝呂木寂子
妖気を誘う家……松井　籟子
死を売り歩く男……猿若　屯平
怪異変幻抄……尾島　新

（定価百二十円・送料十二円）

33年（九月号）敗戦落城秘史特集号
○絵物語・夢魔の殺人……画・山田　彬弘
○〃　・雪姫受難……画と文・歌川　大雅
○〃　・女夜叉……画と文・東　桂史
グラビア・夜のえくぼ……撮影・藤沢　修
落城悲愴譜……宇治川　龍
餓鬼供養……伊能　孝
父恋い娘旅……矢桐　重八
怒りの焔……麻布　義朗
落城洞窟地獄……高木　龍二
疾風馬賊黒鷹団……南村　蘭
琴姫散華……葉田　光
戦国女房……小山龍太郎
アポロの少年……砧　真砂男
切支丹殉教史（下）……鈴木　和夫
変性の破戒尼……梅田　楠雄
髪地獄……志摩　不二
邪宗門小町……小田桐　爽
隠密覚書・妖雲小倉城……島本　春雄
おつや櫛……鷲尾　素人
連載妖異・地獄の乳房……飯田　豊吉

（定価百二十円・送料十二円）

33年（八月号）一揆殉難秘史特集号
○口絵・泥人形……画と文・歌川　大雅
グラビア・渇きの夜……カメラ・藤沢　修
天保血笑録……小田桐　爽
美作一揆秘譚……葉田　光
独立黒月党……南村　蘭
一揆に咲く花……曲　二十八
四郎時貞の復活……宇治川　龍
美女門一揆……高木　龍二
黒旋風一揆……小山龍太郎
人魚と短剣……画・沖　渉二
切支丹殉教史……鈴木　和夫
お綱草紙……画と文・東　桂史
天正あじさい若衆……大門　正人
黒い陽炎……浜松　武
隠密覚書・幽霊奉行……島本　春雄
佐渡夫人の魅惑……尾嶋　新
蜥（とかげ）蜴……伊能　孝

秘密のよろめき……三国沢　隆
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

33年（七月号）裏窓妖異譚特集

○口絵・花闘廻……画・古正　英生
蒼白い手……〈文・高須信次郎
〈画・秋吉　巒
黒猫小町……画と文・歌川　大雅
あおみどろの座……宇治川　龍
七化け死霊……矢桐　重八
変化屋敷……高木　龍二
妄（もうきょう）鏡……酒井　皓介
寄生人の恐怖……前田　勇
かっぱ沼の魅惑……伊能　孝
近松門左衛門の血……平林　啓子
天使をいじめるな……佐々木　力
苛責厳刑譚……鈴木　和夫
黒い陽炎……浜松　武
いざりが夜にやってくる……否笠　一郎
ハラハラ場面オンパレード……高円寺一郎
K君の女装系図……滋賀　雄二
隠密覚書・裸女小判……島本　春雄
お町の罪……小田桐　爽
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

33年（六月号）女忍者女間諜特集号

○口絵・女城鶴巻地獄……〈文・岩堀　光
〈画・柴谷宰二郎
○グラビア・夜の砂時計…構成・喜多　玲子
蛇林洞秘文……南条　慎一
間諜暁に消ゆ……黒羽　新
伝奇怨霊沼……曲　二十八
間諜散華……藤見　郁
雪肌密書……葉田　光
紅紐呪縛……小田桐　爽
慶安女忍道……円城寺　達
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
隠密覚書・妖異呪文鏡……島本　春雄
極刑秘抄……鈴木　和夫
女館南蛮船……画と文・歌川　大雅
卯の花くだし……大門　正人
蛇使いの王女……藤　琴也
死者は蘇える……矢桐　重八
悪魔は見ていた……神行　京一
（定価百二十円・送料十二円）

33年（五月号）裏窓妖異捕物特集号

○絵物語・乱世艶色隠密記…絵・山田　彬弘
○絵物語・血まみれマリー…画・秋吉　巒
グラビア・別離の詩……撮影・藤沢　修
新連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
愛憎血潮傘……松井　嶺子
獄門首供養……宇治川　龍
妖異お告げ狸……矢桐　重八
吸血艶魔伝……青木　憲一
アマゾン流刑奇譚……大町　三郎
絵物語・女刺青師……歌川　大雅
戦国刑譚……真野　麗
黄色い帯をしめた少女……竹谷　十三
海賊貴族……川野　京輔
拷問と処刑……鈴木　和夫
マダム僕をどうぞ……青葉　繁
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
隠密覚書・美女秘巻……島本　春雄
服地がほしい……卵　洋之助
（定価百二十円・送料十二円）

33年（四月号）あぶちっく・さすぺんす特集

（定価百二十円・送料十二円）

33年（三月号）裏窓妖婦伝特集号
（定価百二十円・送料十二円）

33年（二月号）裏窓遊俠伝特集号
（定価百二十円・送料十二円）

33年（新年特大号）あぶちっく忠臣蔵特集
（新年特大号、定価百五十円・送料十六円）

32年（十二月号）あぶちっくすりらあ特集
（定価百二十円・送料十二円）

32年（十一月号）あぶちっくみすてりい特集
（定価百二十円・送料十二円）

32年（十月特大号）時代伝奇小説特集号
（定価百二十円・送料十二円）

32年（九月号）耽美小説特集号
（定価百円・送料八円）

○以下売り切れ
★お買い洩れのないよう月ぎめで御予約ください。
★三ヵ月以上月ぎめ購読をお申し込みの方には、送料は当社で負担いたします。
★三冊以上御注文の際も、送料は当社で負担いたします。
★御送金は振替御利用が最も確実です。

東京都中野区江古田一の二三〇二
株式会社　久保書店
振替口座・東京　一〇七五六番

くれない草紙



一

湯上りの肌はほんのりと紅らんで、匂うような美しさである。

白地に紫陽花を染め出した浴衣に包んだ小雪の躰からは、濡れたようなしっとりとした色香が溢れていた。

抜けるような襟足に乱れた後毛を指でかきあげながら、口に糠袋をくわえて湯屋の暖簾をくぐった姿には、さすがに芸者らしい洗練された仇っぽさがあった。

六月のどんよりと曇った蒸し暑い夕暮れである。薄墨色の宵闇が漂い始めたばかりだが、不思議にも人通りはまったく絶えている。古語に言う逢魔刻であろう。

ふと、小雪は判別し難い胸騒ぎを感じた。濡れ手ぬぐいやぬか袋の入った桶を抱え直して、早く家に帰りつこうと思い近道をするた

めに暗い路地に入った。

小雪はぎくっとして立ちすくんだ。

蝙蝠の舞う黄昏の空を背にして、一人の武士が小雪を待っていたかのように立っている。痩身長軀を黒い紋服の着流しで包み、夏だというのに宗十郎頭巾で面を隠している。

蒼白な顔に死人のように動かぬ眼が、小雪を無気味に見詰めるのだった。

小雪は周囲に素早く視線を投げた。だが、人影はどこにも見えなかった。

「小雪」

と、低い滅入るような声が流れた。小雪は探ぐるように武士に視線をそそいだ。

「まあ、大場のお殿様でございんすね」

「うむ、大場主馬だ」

その名を聞くと小雪は不快な表情を浮べた。暗いので相手には判らぬ。

大場主馬は五百石の直参旗本だが、色街での評判はきわめて悪い。陰気な性格と狂気じみた組暴さが酷い酒乱となる。その主馬が小雪にしつこく言い寄っている。

「こんな所でなにをしておいでなのです？」

「ふふ、そなたを待っておった」

「私を？」

と、小雪は問い返した。

主馬の唇がふいに歪む。小雪は得体の知れぬ恐しさが心をよぎるのを覚えた。

「お殿様、酔狂なことはお止めになって下さいましよ。私に用事がおありなら、ちゃんとお座敷をかけて下さいな」

「座敷に呼ぶまでもなかろうと思ってな」

主馬はもがいている小雪の耳に言った。小雪は主馬の恐しさに肌がそそけたった。

小雪は腕を逆に捻じあげられ、よろめくところを弱腰を蹴られた。

次の瞬間、彼女は自分が地面に押しつけられていることを知った。気がつくと口を掩っていた主馬の手が離れている。小雪が叫ぼうとした途端、あっと言う間に風呂で使った濡れ手ぬぐいが、まるめられて小雪の唇を乱暴に割っていた。

「むうっ」

吐き出そうとする隙もなく、主馬の手は小雪のおとがいも砕けよとばかり猿轡を噛ましていた。

なめらかな頬を無惨にくびれさせている猿と小雪の口をふさいだ。

「わしはな、そなたのように美しい女が、ほしい。これから、そなたをゆっくりと可愛がってやろうというのじゃ」

主馬はもがいている小雪の耳に言った。小雪は主馬の恐しさに肌がそそけたった。

小雪は腕を逆に捻じあげられ、よろめくところを弱腰を蹴られた。

次の瞬間、彼女は自分が地面に押しつけられていることを知った。気がつくと口を掩っていた主馬の手が離れている。小雪が叫ぼうとした途端、あっと言う間に風呂で使った濡れ手ぬぐいが、まるめられて小雪の唇を乱暴に割っていた。

「むうっ」

吐き出そうとする隙もなく、主馬の手は小雪のおとがいも砕けよとばかり猿轡を噛ましていた。

なめらかな頬を無惨にくびれさせている猿



磐の上で、黒い瞳が恐怖と憎悪におののいている。さからった拍子に裾が乱れて、すんなりとした脚が膝のあたりまで覗いていた。

「ふふふ、そうやって縛られている心地はどうかの」

土蔵の建ち並んでいる路地の奥から、音もなく一挺の駕籠が現われた。二人の仲間は無表情に主馬を見上げた。

「女を駕籠にのせい」

駕籠先には大場家の定紋入りの提灯が下っている。こうしておけば、町方役人に怪しまれる気づかいはない。

縛り上げられた小雪がもがきながら駕籠にのせられると、主馬はゆらりと歩き出した。生贄を運ぶ駕籠は、たちまちぬばたまの闇に消え失せた。

二

ねっとりとした夜気が、黒々とした庭の木立によどんでいる。屋敷は総て墨闇に沈んでひっそりと冥府のようにしずまっている。雨が近いのか、吹いて来る風は湿っぽい。

床柱を背にして、主馬は能面のように冷めたい表情で座っていた。整った容貌は荒淫のためか、青黒い色を滲ませている。

前に置いてある膳部から盃をとると、主馬は淫情をめらめらと眼に燃して小雪を見た。

小雪はびくっと躰をふるわせる。猿轡の上に覗いている眼は長い睫毛の陰を落して、涙に濡れているようだった。

胸を緊めつけている縄は、豊かな肉づきの腕に痛いほど喰入っている。浴衣の襟はかなり大きくはだかり、ぬめ肌が乳色に光って主馬の咽喉をごくりと鳴らさせた。

主馬は盃を置き、膳部を膝の前からどけた。小雪の傍らに進むと、肩に手をまわしてぐいと引き寄せた。

咳がおさまると主馬は苛立しく言った。

「わしがそなたに心を奪われて幾度となく座敷をかけても、そなたはいつも素っ気なくわしを扱いおったな。わしはそなたにそうされる毎に、ますます心が燃え上ったのだ。そなたの柔肌を思うさま責め抜くのがわしの念願だ。ようやくのことで手に入れたそなただ。今宵はたっぷり泣かせてくれるわ」

まるで、地獄の底から甦えった亡者の声である。

小雪はそっとして、畳からあげた顔を曇らせた。絶望の涙が玉になって瞳に浮ぶ。これまで芸者をしていて、男の嫌な口説に平気だった小雪も、屈辱と羞恥にまみれた苦しみを

主馬は重ねられて、固く握られている白魚のような小雪の指をみると眼に燃して小雪を見据えて酒をふくんだ。唇が濡れて紅い。

「苦しいのか、小雪」

と、しわがれた声で主馬は言った。

「そなたは男嫌いが評判の芸者だな。美しい顔と躰を持ちながら、男が嫌いと言うわけはあるまい」

そこまで言った時、主馬は急に烈しく咳いた。盃を持った手がふるえて、酒がほたほたと膝の上にこぼれる。

前にしては、所詮弱い女にすぎなかった。
ふらりと立って近づく主馬を見上げて、躰を固くしながら後ずさる。
彼は身をかがめて、両掌に小雪の顔を包みこむと、頬に喰いこんでいる猿轡の結び目をゆっくりと解いた。
「泣きわめくそなたの声を聞こう。この屋敷の中ではいくら叫んでもかまわぬ」
猿轡を外されると、小雪は口中の唾液をじっとりと吸いこんだ濡れ手ぬぐいを、舌の先で押し出した。
息を弾ませて、小雪はむさぼるように空気を吸った。唇がわなわなとふるえている。
「お、お殿様、もう、お許し下さい」
悲鳴に近い小雪の声が座敷の中に空しく響いた。

三

暗い屋敷の中で、仲間部屋の障子だけが黄色く明るかった。
二人の仲間、弥七と新八が面白くなさそうな顔つきで寝酒をやっている。新八の方は昨日来たばかりの新入りである。
「今夜の女は大した代物でござんすね」
と、新八が唇を手の甲でぬぐいながら、弥七の顔を見て言った。
「当り前よ、あれは、小雪って売れっ子芸者なんだ。うちの旦那がえらく熱を上げた女なんだよ」
「成程、殿様も目が高けえや」
「おい、お前はこの屋敷は変だと思うだろ」
弥七が酔った顔を向けた。
「それですよ。あっしもおかしいとは思っていますよ。婆さんがいるだけで、この屋敷には若けえ女中って者は全然いねえんで？」
「いねえんだ」
「どうしてです？」
「ふっ」と唇元が歪む。
「今夜と同じことよ。旦那が屋敷にいる女中をかたはしから、裸に引き剝いて散々いたぶった挙句、楽しもうって寸法さ。女中はみんな逃げちまうんだ」
新八は驚いて顔をしかめる。それでも、好奇心でたずねた。
「するてえと、今夜の女もその手でやられるんですかい」
「そうよ。今頃は素っ裸に引んむかれて、柱にくくりつけられてよ。ひいひい泣いてるかも知れねえぜ。うちの旦那は悪どいからなあ」
と、弥七は脂っこく笑った。気のせいか、屋敷の奥から女の悲鳴が聞えて来るようだ。
新八はぶるっと身ぶるいをした。
「だけどよ。あの女みてえにむっちりした躰は、さぞ見事だろうな」
「そりゃあ、そうでしょうがね」
浮かぬ表情で新八は生返事をした。淫靡な雰囲気が、異様なおぞましさを感じさせたのである。
「でも、因果な御性分でござんすね」
「まあ、そうだろうな。ひょっとしたら、気違いかも知れねえ」
「その因果な御性分を、治すわけにゃいかねえもんですか」
「治らなくてもかまやしねえよ。俺達にはかかわり合いのねえ話だ。けどよ。旦那のお蔭で旨え汁が吸えるってもんだぜ」
「へえ、どんなことなんで？」
と、問い返えした新八の方に、じりっと膝をすすめながら、弥七はにやっとした。咽喉をしめすように酒を一口呑み、低い声でしゃべり始めた。
「旦那があんなふうになってよ、女中がいなくなったろう。それで、相手になる女がいなくなってしまったのさ。そこで、旦那は目をつけた女を、今夜のように引っさらうことに

したんだ。たっぷりと旦那が泣かした女を、俺達にほうびだってくれるんだ。どうだい。万更悪くはねえだろう」

「ふうむ、勾引をやって、よく役人に怪しまれねえもんですね」

「なあに、定紋入りの提灯を駕籠先にぶら下げときゃあ、直参旗本に町方の役人は手が出せねえのよ」

「お上に訴える女はいねえんで？」

「うん。屋敷から帰す時に小判の一枚か、二枚をふところに入れとくんだ」

弥七は着物の裾をめくり上げて、毛ずねを平手でたたきながら、酒を茶碗についだ。新八の方はいくらか蒼くなって落ちつかぬ。

「どうしたい。飲めよ。顔色が悪いぜ」

「へえ、あっしゃなんだか変な気持になりました。番町皿屋敷みてえに化物が出るんじゃありませんか」

「ふふ、まあいいやな。ほら、一杯やんな」

新八はまずそうに酒をふくんだ。

「今夜は滅法暑いじゃねえか」

と、呟いた弥七は、ぐっと躰を新八の方にのり出した。

「こいつは内密の話だが」

「あっしが聞いてもいいんで？」

「人に話してもかまわねえが、うちの旦那の耳に入れちゃあいけねえ。実はな、旦那はもう永げえ命じゃねえんだ」

「するてえと、病気なんですか？」

「うん、医者の話だと悪性の労咳だそうだ。じっと寝てさえいりゃあ、五、六年は死なねえてんだが、旦那はあの通りのありさまで、夢中だろう。自分で知らぬ間に命を削っているようなもんさ。今度血を喀いたら助からねえと言うんだがね」

新八は昼間見た幽鬼のような、青黒い主馬の顔を思い出してぞっとした。

どこから入ったのか蛾が一匹、羽音をたてながら行燈のまわりを飛んでいる。新八は肩をすくめて、弥七に言った。

「あっしゃ逃げ出したくなりました」

それを聞いた弥七は、酔眼を新八の方に投げた。

「辞めてえと言うのかい」

「へえ、なんだか恐くなりました」

「もう少し辛抱しな。お前だって女を抱きゃ居心地もよくなるさ。今夜のような女がただで楽しめるとなりゃ、居座りたくならあな」

と、弥七は酒をあおりながら、新八の蒼ざめた表情を、からかうように言った。

四

いつの間にか雨が降り始め、かすかな音が聞えた。

主馬は白綸子の寝間着に着換えて、座敷の中央にうなだれている小雪を物憂げに眺めている。むうっとする熱気の中に、小雪の甘ずっぱい肌の匂いが漂っている。

先程まで明るかった仲間部屋の灯も消えて起きているのは主馬と小雪だけである。

主馬は乾いた唇を舌の先でしめしながら、抑揚を失った声でゆっくりと言う。

「小雪、そなたの熟れきった裸身が見たいのう。着物を脱いでも寒くはあるまい」

「お、お殿様、止めて、止めて下さい」

と、顔色を変えた小雪の声はふるえる。

「ふふふ、よいではないか」

ふくみ笑いがもれると、主馬の手が小雪の躰にのびる。裸に剝れて獣のような男の視線にさらされると思えば、小雪は生きた心地もしない。彼女は主馬の手を脱れようとするがそれはまったく空しい動作にすぎないのだ。

「助けて、助けて下さい」

「暴れると一層見たくなるわい」

小雪は主馬の腕に抱きすくめられ必死にあ

がいた。結果的には衣紋を乱して、ちらちらと肌が覗くだけだった。

ぐいと引き起されて、主馬の膝に上体を押しつけられた小雪は苦しそうにうめいた。骨張った嫌らしい手が帯際に這って行くのが、布地越しに判ると小雪は真黒い絶望の渕に突き落されるような感じだった。

「そうら、帯を解くぞ」

「お殿様、それだけは、かんにんして」

荒く息を弾ませて小雪は哀願の声をあげた。勝ち気な女であろうとも、男の手で裸にされようとしていれば当然である。

帯の結び目が解かれると、かすれた音をたてて、夏帯が小雪の腰から離れて行く。縛られている以上、どうしようもない。

渋い模様の涼しげな夏帯が畳の上にくねった。浴衣の前がぱっと開いたが、胸にまわっている縄のために、縛ったままでは脱せない。うつ伏せになって肌を隠している小雪の背に主馬はのしかかるようにして縄を解いた。

「ああっ」

と、小さな叫びをもらして、前を押えようとする小雪よりも早く、主馬の指が後から襟にかかった。

びりりっ、と布の破れる音が起る。

脱がされまいとしていた小雪の躰から、浴衣がするっと引き剝された。

むっちりとした両肩から、豊かな肉づきの背中が光った。

「ああっ」

小雪は悲鳴をあげる。

むき出された小雪の腕を、主馬は力一杯後に捻じあげた。骨のきしむような痛みが、小雪の抵抗力を削いだ。

改めて後に重ねられる縄目の跡を残した手首に、無慈悲な細縄がからみつく。

五

「あの女の声だな」



久保書店の単行本・御註文の場合には御住所をハッキリとお書き下さい。

異色時代捕物秘帳
黄金呪縛
並木行夫著
好色人形師―黄金呪縛―生首騒動―雷雨の女―謎の天竺文字―紅筆の謎―娘斬り暗闇祭り―お化け石灯籠―夜鷹と手拭い―阿芙使い―邪恋に狂う女―以上十一篇収録
定価 120
送料 24

振袖小姓捕物控
やわ肌絵図
島本春雄著
大江戸八百八町の女体をおおう淫虐の魔手―戦慄を呼ぶ怪事件の真只中へ飛びこむは、北町奉行輩下の駿足と謳われる美少年、御存知振袖美弥太郎!!濃艶怪奇の捕物小説八篇!!
定価 120
送料 24

振袖小姓捕物控
妖異二人小町
島本春雄著
魔剣閃めき含み針が乱れ飛ぶ!謎と情痴をはらむ大江戸の闇に挑んで颯爽ふたたび起つは曙色の大振袖ひるがえした捕物小姓美弥太郎の優さ姿!
定価 150
送料 24

振袖小姓捕物控
裸女地獄
島本春雄著
またしても起る怪異の渦中に悶えのたうつ妖艶可憐の美女群!正邪相うちしのぎを削る智能と秘術。妖棺伝・悪呪隠密雛・白狐呪法・幽霊飛車・地獄駕籠など八篇収録。
定価 150
送料 24

仲間部屋でまだ眠っていなかった新八が、煎餅蒲団の中でつぶやいた。隣りを見ると、酔った弥七が正体もなく眠っている。新八はしばらく天井に眼を向けていたが、

「どんなことをしてるのかな」

と、蒲団からそろそろと這い出した。新八は弥七の寝息をうかがいながら廊下に立った。たれこめている重たい闇が、無気味な感じを新八に与える。

「くそっ、化物がいるわけじゃねえ。たかが気違いじゃねえか」

自分に言いきかせて、新八は足音をしのばせて屋敷の奥から流れている一筋の光を目当てに進むと、近づくにつれて切迫した呼吸と女のうめきがからみ合って聞える。

新八はそこが主人の寝所であることに気づいた。彼は襖の細い隙間に顔を押しつけ、中を覗きこんで思わず息を呑んだ。

そこには、地獄絵に似た光景が奇怪な雰囲気をかもしていた。

小雪を見すえたまま、酒をのんでいた主馬は、新八が覗きこんでいるのも知らず、小雪の肌に手をかけようとする。そのとき、凄まじい咳が主馬を襲った。

片膝をつき、肩をふるわして咳こむ主馬が

大江戸謎草紙　泰平の世につぎつぎと起る奇怪な事件。背後に潜む邪智奸悪を迎えうつ江戸随一の捕物名人は、御馴染み八丁堀同心稲妻左近が快刀乱麻を断つ推理の冴え！
稲妻左近捕物帖　九鬼紫郎著
定価100 送料24

秘密情報　大東京の真ッ只中にアメリカ映画さながらの暗黒街が存在する！『東京は俺たちのものだ』と叫ぶ彼等の巨大な実態を暴露する桃色の秘密情報。興味津津たる好読物集！
東京租界　五島勉著
定価120 送料24

性犯罪の專例と研究　乱れた性風習と犯罪の関係を衝き、一般社会人の関心と理解を深めるため、多くの実例を内外から集めて具体的に記述した現下待望の好著！　著者は現関東管区警察学校教授。
歪められた本能　井上泰宏著
定価120 送料24

特飲店従業婦の手記　ありあわせの便箋やノートの切れはしに、彼女たちの僅かな睡眠時間をさいて綴った鉛筆書きの生活記録。売春を肯定する者も否定する者も必読の問題書。
素顔（すがお）　大河内昌子著
定価130 送料24

東京都中野区江古田一の二三〇二・KK久保書店

両手で口を押えた。はっとして見詰める新八の眼に、主馬の手が真赤な血に濡れて行くのが映った。

「ぐわっ」

と、主馬はおびただしい血を咳とともに喀き出す。白綸子の寝間着が、たちまち赤黒い模様を浮き上らせた。血とともに主馬は夜具に倒れこんだ。

新八が襖をあけて飛びこんでも、主馬は血を喀き続けて頭を動かそうともしなかった。

「おい、しっかりするんだ」

と、縛めを解いた新八が、まぶしそうに小雪の裸身に手をかけると、彼女は悶絶してがっくりとのめった。顔中が涙と脂汗でべたべたに濡れている。

小雪は新八に助けられて、疲れきった躰を家に運んだ。それから、三日ほど小雪は眠り続けた。

柔肌に残ったいまわしい縄の跡はすぐに消えたが、小雪の頭からは恐怖と汚辱に彩られた地獄の夜は去らないのだ。

一ケ月位たったある日、小雪は新八から大場主馬が死んだことを知った。



★あの人の眼はあたしの一番見られたくない角度ばかり狙っている！

岸山治子・画

1

最初はとてもいやだったけれど、三ヵ月も経つと、モデルという仕事にもだいぶ馴れてきた。ひとつのポーズをやる時間、たいてい十分間なんだが、それが初めのうちは一時間にも思えたものだ。でも、馴れるということはほんとうに不思議なもので、今では、十分間なら十分間、二十分なら二十分、五分なら五分と、それぞれ時間に応じたポーズもわかってきたし、疲労も、そしてなんともいえないいやな恥ずかしさも、うんと少なくなった。

収入も、もちろん充分とはいえないが、あたしひとりが生活していくだけは手に入る。資本金がいるわけでもなし、次々と服装に神経を使う必要もなし、とりたてて才能もない若い女の仕事としては、まず悪いほうではないだろう。

でも、仕事先によっては、まだまだいやなところもないわけではない。あたしがいちばんいやなのは、美術好きのお客がよく集る喫茶店なんかが、サービスのつもりでやるナン

裸女は妖夢に崩れる

トカ研究会というのに雇われるときだ。ほんとうに絵の好きなひとたちばかりなら問題はないのだが、そこは喫茶店なんかのことだから、ポスターを見て、冷やかし半分にやってくるお客さんも案外多い。ろくすっぽ絵も描かないそういうひとたちに、興味本位の視線で体じゅうを、特に乳房やおなかのあたりを舐ずりまわされるのは、ほんとうにいやだと思う。

個人の絵描きさんに呼ばれる場合は、絵描きさんによって、好きなひともいやなひともあるわけだが、二度三度と呼んでくださるお得意先もふたりばかりできて、これはどちらもいい先生だから、まずいやなことはありっこない。学校へ雇われるのは、モデルさんのなかには好きだというひとも多いけれど、あたしはそれほど好きじゃない。同年輩の若いひとたちにとり巻かれると、せっかく忘れかけている恥ずかしさが、ともすれば戻ってくるからだ。それに、このごろのように寒い季節だと、ストーヴをどんどんたくものだからモデル台の上にいると煙くってしかたがない。ガス・ストーヴだといいんだが、広い教室ではダメなのだろう。

好きな仕事先といえば、中央線のK駅をおりたところにある、K画材店がやっている研究会だ。お客さんの雰囲気がとてもいい。本職の絵描きさんもいれば、美術学校の学生さんもいるし、アマチュアのひともわりに多いんだが、画材屋さんへくるようなひとばかりだから、冷やかし半分のお客さんはひとりもいない。それに、本職の先生はアマチュアにアマチェアは本職に、それぞれ遠慮するとみえて、ポーズにむずかしい注文をつけられることもほとんどない。別に指導するひとがいるわけではないのだが、みんな自由に、熱心に描いている。

あたしの安アパートが、K駅からわりに近いので、クラブのマネージャーも、ここの仕事を比較的多くあたしに廻してくれる。そんなわけで、たいてい一週間に一度はK画材店へ行くのだが、あたしもここへ行くときは、本屋でヌード写真ののっている雑誌などを見て、あたしなりにポーズの研究をしていくのだ。

でも、万事がうまくはいかないもので、K画材店へくるお客さんのなかにも、ひとりだけいやなひとがいる。そのひとも、毎日毎日くるわけではないだろうから、あたしも三度ばかりしか顔を合せていないのだが、このひ

とだけはどうも苦手だ。あたしにとってはいちばん楽しいK画材店の仕事も、このひとがきているときは、てんで楽しくなくなってしまう。

年は三十五か六だろう。ほんとうはもっと若いのかもしれないが、とにかくそれくらいに見える。痩せていて、とても不健康そうな感じのひとだ。画材店のひとと話しているのを耳にして知ったのだが、名前は確か吉田といった。だぶだぶの黒いセーターに、ひどくぶあついジャンパーなんか着て、ひと目で絵を描くひとだとわかる。ひとの服装や体つきがいやだというのではない。

このひとのどこがいやかっていうと、吉田さんは、あたしの描かれたくない方向からばかり、あたしの体を描くからなのだ。

研究会が開かれる部屋は、画材店の二階にあって、わりに細長い。モデル台は、長方形の部屋の真ん中よりもずっと奥によって置いてある。だから、平均して十人から十四五人くるお客さんたちは、モデル台の手前の、広い部分にそれぞれ陣どってクロッキー帖をひろげるのだが、なかにはとても早く描いてしまうひともいるし、ひとつのポーズをいろんな角度から何枚も描こる。そういうひとは、たいていプロの絵描きさんなのだろうけれど、自分の場所をひとつ枚描いては場所を移つけられるのが、あまり広くもなだ。

吉田さんというひとは、どういうわけか、あたしの神経がぬけていそうな角度からばかり、あたしの体をつかまえる。正面にはほとんど陣取らず、モデル台の左右かうしろにばかり、しゃがみこむのだ。まるで、まだ仕事に馴れきっていないあたしを嘲笑うように、吉田さんはあたしのウィーク・ポイントを探して廻る。といって、吉田さんにだけ気を使うわけにもいかず、またたとえ神経を配ったにしても、一度ポーズをとってしまえば一定時間は動けないのだから、反対側へ廻られてしまえばどうにもできない。

こんなわけで、K画材店へくる吉田さんだけは苦手なのだが、それ以外にはとりたてて不愉快なこともなく、まずまず順調にあたしは仕事を続けていた。

三月前に、仕事がなくなって困りきっていたころから考えると、生活も一応は安定していた。これも、ほんの偶然のことから知り合って、あたしをいまのモデル・クラブに紹介

してくれた先輩モデルの玲子さんのお蔭なのだ。

その玲子さんが、ひと月くらい前から、さっぱりクラブへ姿を見せなくなった。一度アパートへ招待して、よせ鍋でもつつきながらお礼を言おうと思っているのに、まったく現れないのだ。クラブに登録されているモデルは、毎週日曜日にクラブへ集ることになっている。そのときにマネージャーから、次の週のスケジュールを決めてもらうのだ。それに仕事が急に変更になったり、空いた日にスケジュール外の仕事を探したりするために、毎日午前中だと何人かのモデルさんがクラブにやってきている。

だが玲子さんは、日曜日にもその他の日にも、さっぱりこない。

仲間のひとに訊くと、自分でいいお得意をつかまえたから、クラブを通さずにやっているのだろうという。直接お得意をつかまえれば、クラブへの手数料もいらないわけで、これは誰でもやっていることなのだが、それだけで充分にやっていけるなんてとても考えられない。そんな仕事口は、月に三つもあればいいほうなのだ。

だが、別に玲子さんのことを心配していたわけではない。誰かお金のある先生の専属になったか、あるいはモデルなんかよりもっといい仕事があったのか、それとも、いいひとができて結婚しちゃったのかもしれないのだから。

一度会いたいと思いながら、玲子さんはきっと、前よりもたくさん稼いでいるのだろうと、あたしはそんなことを考えていた。

2

新宿のデパートで、その玲子さんにひょっこり会った。婦人服売場のマネキン人形をぼんやり眺めている玲子さんに気がつくと、あたしはいきなり駈けよって、とびつくように肩を叩いた。玲子さんはとってもびっくりしたらしい。でも、相手があたしだとわかるとすぐににっこり微笑んだ。

「どうしてらっしゃったの、玲子さんのほうは？　クラブにちっともいらっしゃらないから、きっといいお仕事があったんだろうって、みんなとも言ってたんだけど、なんだか少し疲れてるみたいじゃない」運ばれてきたコーヒーをかきまぜながら、あたしはさりげなく訊いた。

「ええ、ほんとにお蔭さまで。ねえ、どっかでコーヒーでも飲みましょうよ。あたし、おごらせていただくわ」

玲子さんが、なんとなく元気のない様子をしているのに気づいたのは、デパートを出て、裏通りのわりに大きな喫茶店で腰をおろしてからだった。久しぶりで出合ったあたしに、微笑はみせてくれているけれど、なんだか弱々しい。

「無理に誘っちゃったけど、悪くなかったかしら」あたしは訊いてみた。もしも、何か用事でもあったのなら、無理にひきとめられないと思ったからだ。

「悪いだなんて、とんでもない。会えてうれしいわ。どうなの、だいぶ馴れた？　あなたとても元気そうだわ」

あたしがこっくりうなずくと、玲子さんはまた微笑んだ。玲子さんが笑うと、歯並がとても美しい。でも、やっぱり元気がなさそうだし、そう思ってみるせいか、眼のあたりに疲れがみえる。

「で、玲子さんのほうは？　クラブにちっともいらっしゃらないから、きっといいお仕事があったんだろうって、みんなとも言ってたんだけど、なんだか少し疲れてるみたいじゃない」運ばれてきたコーヒーをかきまぜながら、あたしはさりげなく訊いた。

「仕事のほうはね、まあまあなのよ……」ここで玲子さんは、少しのあいだためらった。

熱いコーヒーを二口三口すすってから、玲子さんは煙草の箱をとり出した。

「……クラブには内証よ。あたしね、吉田さんのアトリエで主に仕事してるの。あなた、吉田さん知ってるでしょ？　K画材へよくくるひとよ」

あたしは黙ってうなずいた。

「もちろん、吉田さんひとりってわけじゃないけどね。でも、ほとんどが吉田さんのお仕事なの。週に一度か二度行くこともあるわ」

訊かなければよかったと、あたしは思った。絵のモデルの収入がどんなものか、たとえ特別に払ってくれるような相手でも、たかがしれていることはよく知っている。写真の仕事をしているひとならともかく、絵のモデルだけで生活するつもりなら、週にひとつやふたつの仕事でやっていけるわけがない。あたしだって、たいていの日は、一日に二ヵ所くらいかけもちをやっている。

吉田さんのところで、週に一度か二度お仕事をしているだけなのなら、玲子さんはよほど困っているか、なにか特別なことで特別なお金をもらっているか……まずこのどちらかだ。もし困っているのなら、当然クラブへ顔を出すだろう。とすると——なんとなく元気のない玲子さんの顔に、あたしはふと、暗い影を感じとってしまった。

「あなた、心配してくれてるのね」微笑みながら玲子さんは、あたしの疑問を吹っとばすように、明るい声で言った。あたしが一瞬感じたことを、敏感に察したのだろう。

「……そりゃ、ふつうの料金をもらってたんじゃ、それくらいのお仕事だけではやっていけないわ。吉田先生のモデルはね、ちょっと特別なことが必要なのよ。でも、変なことをするんじゃないわ。誤解しないでね」

「そりゃあ——」とは言ったものの、あたしはあとの言葉を出せなかった。変なことじゃなくて特別なことって、なんだろう。もちろん、個人の絵描きさんなどに呼ばれるときは研究会の場合とちがって、ポーズもある程度は大胆なものになりがちだけれど、だからといってそれほど料金が変るわけじゃない。

「これだけの話じゃ、納得できないのも無理ないわね——」

別に納得できないかもしれない。出かかった言葉をあたしはのみこんでしまった。好奇心のせいかもしれない。

「——つまりね、当然クラブへ顔あたり前のモデルが、あたるだけじゃ、吉田さんは承を出すだろう。とするとー



知できないのよ。あたり前のポーズでなくったって、ダメなのかもしれないわ。それで、ポーズをとる前に、薬をのませてくれるの。もちろん、体に害はないそうだけどね。それに、同じ薬を続けると、絵も面白くならないし、体に影響があってもいけないというのでやっぱり気味が悪かったけど、馴れちまえば別にどうってこともないわ。お金もたくさん払ってくれるしね」

玲子さんは一息ついで、コーヒーを飲み干した。あたしはやはり黙ったままだ。

「最初のお薬は、飲むと夢を見たような気持になって、いろんな色が目の前をとび廻ったわ。それがね、とってもきれいなの。それから、なんとなく全身がしびれるような感じになるのもあったし、ひどく睡くなるのもあったわね。ポーズをとりながら、ほんとに眠っちゃったこともあるわ。ポーズをとってるうちに薬が利いてくるでしょう。すると、モデルに邪魔な自意識とかがなくなっちゃって、すごく現実ばなれのしたポーズがとれるんだって」

驚いて、あっけにとられているあたしの顔を、玲子さんはじっと見つめた。一度微笑をみせて、すぐに真顔に返ると、玲子さんは力を入れて言葉をついだ。

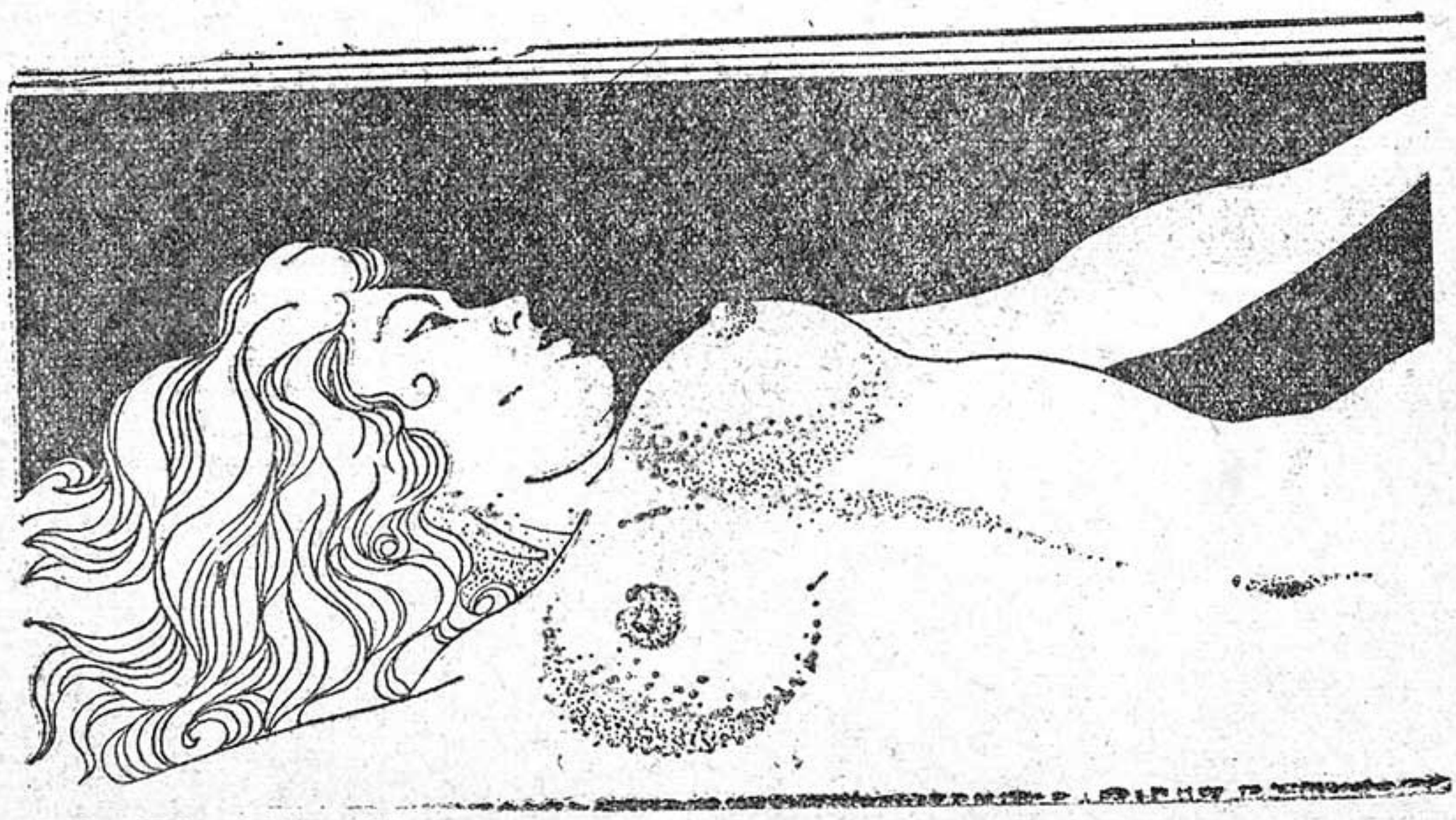
「ねえ、あたしの言ったこと、絶対ひとに喋らないでね。吉田先生から固く口止めされてるの。あなたがあんまり心配そうな顔するもんだから、つい口をすべらしちゃったけど。ね、あなただけよ――」

それっきり、自分の仕事のことを、玲子さんはひと言も話そうとしなかった。今度はあなたの話す番だとでも言うように、口をつぐんでしまったのだ。あたしは、だいぶ仕事に馴れてきたことや、失敗談などを喋ったが、喋りながら、ほんとうはうわの空だった。

すぐに返事をしかねているあたしに、吉田さんはこう言った。

K画材で吉田さんに会い、帰りに喫茶店へさそわれて、仕事の申し込みを受けたのは、玲子さんに会って二三日あとのことだった。

「以前きみのクラブにいた、玲ちゃんってひとね、あのひとにもよく頼んでるんだよ。だけど、ひとりだけだとどうも仕事がうまくいかなくってね。ときどき研究会にきてモデルさんを探してたんだが、きみがきてくれると助かるんだ。ペイのほうはうんとはずませてもらうからね。別にクラブを通さなくっても



いいんだろう?」

3

さんざ迷ったあげく、結局あたしは、言われた日に吉田さんのアトリエへ行くことにして、日曜日にクラブへ集まったとき、その日をスケジュールからはずしてもらった。

でも最後まで、やはり迷った。とうとう思い切ってアパートを出かけたが、決心がついた最大の理由は、なんといっても二時間で三千円という、普通の料金の十倍近い金額のせいだろう。あたしはお金がほしかった。買いたいものが、どっさりあったのだ。玲子さんの話のように、きっと薬を飲まされるだろうけれど、体に害がないのなら心配することなんてないだろう。別におかしなことをするわけじゃなし、モデルに違いないのだからと、あたしは強いて自分をはげました。

吉田さんのアトリエは、中央線でK駅のひとつ先だから、あたしのアパートからはそう遠くない。でも、電車を降りてからは少し距離があった。

約束の時間は七時。日が暮れてひっそりと静かな住宅街を、あたしは急ぎ足に歩いていった。かなり大きな家ばかりだ。どこからピアノの音が洩れている。

アトリエはすぐみつかった。立木に囲まれたずいぶん広い敷地に、ひと目でアトリエと知れる建物が建っている。カーテンをしめきった窓が、ほんやり明るいところをみると、吉田さんはもうアトリエで待っているのだろう。母家はアトリエの裏になっているよりも、いきなりアトリエの表からはわからない。

門は軽く押すとすぐ開いた。約束がしてあるのだからかまわないだろうと、あたしはそのまま入っていった。

アトリエの横手のほうへ、門から敷石が続いている。少しいくと、アトリエの裏にくっついている母屋が見えた。アトリエにくらべると、戦後に建てたものではあるらしいが、灯がひとつもついていないせいか、なんとなく古ぼけて見える。アトリエから母屋へ移るあたりのところにドアがあった。これがどうやら玄関らしく、小さな電球がついていた。

ベルを押す。こわれているのか、どうも鳴ったような感じがしない。もう一度押してみた。やっぱりダメだ。

「こんばんわ」二度ばかり呼んでみたが返事がない。

約束はしたのだし、アトリエにはちゃんと灯がついているのだから、留守ということはまずないだろう。聞えないのなら、こんなところで呼んでいるよりも、いきなりアトリエの窓をたたいたほうが手っとり早い。そう考えて、あたしはすぐにきびすをかえした。

先生ったら、あたしを待ちながら居眠りでもしてるんじゃないかしら。母家には全然灯がついてないけれど、家族は留守なのか、それとも吉田さんというひとは、まだ独身なのかしら。そんなことを考え考え、あたしは窓を叩こうと手をあげた。アトリエの中で、そのときカタンと物音がした。

思わず手をとめると、あたしは一瞬耳をすました。確かにひとの動く気配だ。居眠りの最中どころか、どうやらアトリエの中を歩き廻っているらしい。

二三歩しりぞいて、あたしはたくさんの窓を見わたした。ひとつの窓に、ほんの少し、カーテンの隙間ができている。あたしはそっと近よった。

隙間に顔を近づけたとたん、真っぱだかの女の背中が、あたしの眼にとびこんだ。よく見ると、確かに玲子さんに違いない。これはどういうことなんだろう。最初は、吉田さん

がダブル・ポーズを描くつもりだったのかと考えたのだが、それならそうと、先に喫茶店でいうだろう。吉田さんの口ぶりは、たまには別のモデルを使ってみたいという調子だったはずだ。

もう一度よく考えて、あたしはやっと、とんでもない失敗に気がついた。冗談じゃないあたしは約束の日を間違えたのだ。一週ずつのスケジュールで仕事をしているためか、何曜日ということはまず間違えないが、何日ということになると、ときどき間違えないでもない。ついこのあいだも、せっかくもらった映画の招待券を、ムダにしたばかりなのだ。あたしの約束の日は、なんのことはない、あさってだった。

緊張してやってきた自分が、われながら馬鹿らしくなると同時に、いたずら心が頭をもたげた。自分ではモデルをやっているけれど他人がほんとうに仕事をしているところは、一度も見たことがない。それに、吉田さんの薬を飲むとどんなことになるのか、無性にのぞきたくなった。もしみつかれば、正直に日を間違えてきたのだと言えばいい。

あたしはもう一度、カーテンの隙間に眼をよせた。隙間がせまいので、アトリエじゅうは見えないが、モデル台はちょうど正面で、玲子さんの全身が、はっきり見える。あたしのほうに背を向けて、玲子さんはやや両足を開き加減に立っていた。手は乳房のあたりに当てているらしい。よく見ると、玲子さんの上体が、わずかに前後に揺れている。

吉田さんの姿が見えた。見おぼえのある黒いだぶだぶのセーターを着て、クロッキー帖を片手に、玲子さんをみつめては、右手のコンテを動かしている。その眼つきに、あいだは窓ガラスに釘づけになっていた。

玲子さんの体の動きが静かになると、吉田さんはまたクロッキーにかえって、ほとんど休むまもなく仕事を続けるのだ。

夢でもみているような感じで、あたしの眼

吉田さんの唇が動いたが、なにか言ったらしいが、外のあたしには聞えない。やがて、玲子さんは、くずおれるようにしゃがみこむと、そのまま仰向けに寝そべった。眼は閉じているが少しゆがんでいるが、別に苦しそうな様子もない。寝そべったまま、玲子さんは、手や足を少しずつ緩慢に動かしていた。

あたり前なら、一度ポーズをとれば絶対に動けないものだ。だが、相手が吉田さんだと、常識どおりにはいかないらしい。玲子さんは、腰のあたりもくねらせている。わずかに動く玲子さんを、吉田さんはけんめいにらみつけながら、手早くコンテを動かし続けた。不思議な光景だ。

玲子さんが、眼を閉じたまま、なにか言っている。ほんの少し、笑っているようだ。そのうちに、玲子さんの体の動きが、わずかに早くなってきた。吉田さんの姿が、カーテンの蔭になって見えなくなった。が、すぐにまた現れる。今度は手にカメラを持っていた。

あたしの眼は、玲子さんの体の動きが、わずかにクロッキーにかえって、ほとんど仕事を続けるのだ。

吉田さんがなにか声をかけると、そのたびに玲子さんは、寝返りをうったり、あるいは上体を起したり、立ちあがったりした。ポーズを変えてくれという合図なのだろう。でも寝ていても、玲子さんの恰好は立っていてもあたしの常識からすると、てんでモデルのポーズなんてものじゃない。体はずっと動いているし、全身の神経がまるで抜けてしまっている。玲子さんの話していた、自意識のすっかりとれたポーズというのがこれだろうかと、ほてった頭の中で、あたしはぼんやり考えていた。

「下着をとったら、コートでもはおってらっしゃい。コーヒーを飲んで、仕事はそれからだ。コーヒーを飲んでるあいだに、下着のあとが消えるでしょう。さあ、冷めないうちに」

顔の感じにくらべると、わりに澄んだ声で吉田さんはあたしを呼んだ。

おとおい、窓の隙間からのぞいて、絶対にくるまいと決心はしたのだが、お金の魅力には簡単に負けてしまった。神経のまるっきりぬけたような体をひと目にさらすのは、どうにもいやだと思うけれど、それ以上に、あたしはお金が欲しかった。自分の仕事に馴れてさえくれれば、二時間の料金を五千円にしてもいいと、いまも吉田さんは言っていた。

全裸の体にハーフ・コートだけをはおったあたしは、アトリエの片隅にある小さな椅子に腰をおろした。小さなテーブルに、湯気のたつコーヒーのはいったカップがふたつ、皿なしでのっかっていた。きっとこの中に、薬が入っているのだろう。

吉田さんは、あたしの顔をみて微笑んだ。いったいどういうひとなのだろう。吉田さんから眼をそらすと、あたしはわりに広いアトリエの中を見廻した。あたしの知っている、他の絵描きさんのアトリエと同じように、こもあまり片づいてはいない。壁には、キャンバスがたくさん立てかけてあり、床には雑誌や絵の道具が、雑然と散らかっていた。

キャンバスは、ほとんどが裏向きになっていたが、表を見せているのもたくさんある。なにが描いてあるのかさっぱりわからない抽象画と、かなり写実的な裸婦の絵が、半数ずつくらいのわりで混っている。ただ両方とも色彩がものすごく突飛な点が共通だった。

裸婦の絵は、二枚をのぞいて、どれも玲子さんをモデルにしたものらしい。どのポーズも、まるで風変りな恰好だ。あとの二点が、またひどく変っていた。一枚は、椅子に手足を縛りつけられた裸婦、もう一枚は、やはり全裸の女が、十字架らしいものにキリストみたいにかけられている。この二枚は、かなりほこりをかぶって、どうやら玲子さんをモデルにしたのよりも以前の作品らしい。

「先生、あの縛られてる絵も、やっぱりモデルを使われたんですか？」口もとまで運んだカップをとめて、あたしはふと訊いてみた。

「ああ、あれは完全な失敗作なんだ。モデルさんをさ、まさか力いっぱい縛りつけるわけ

にもいかなかったんでね。もっとも、ぼくの想像力が足りないってのが、ほんとうの理由かもしれないけれど――。ちょっと失敬」

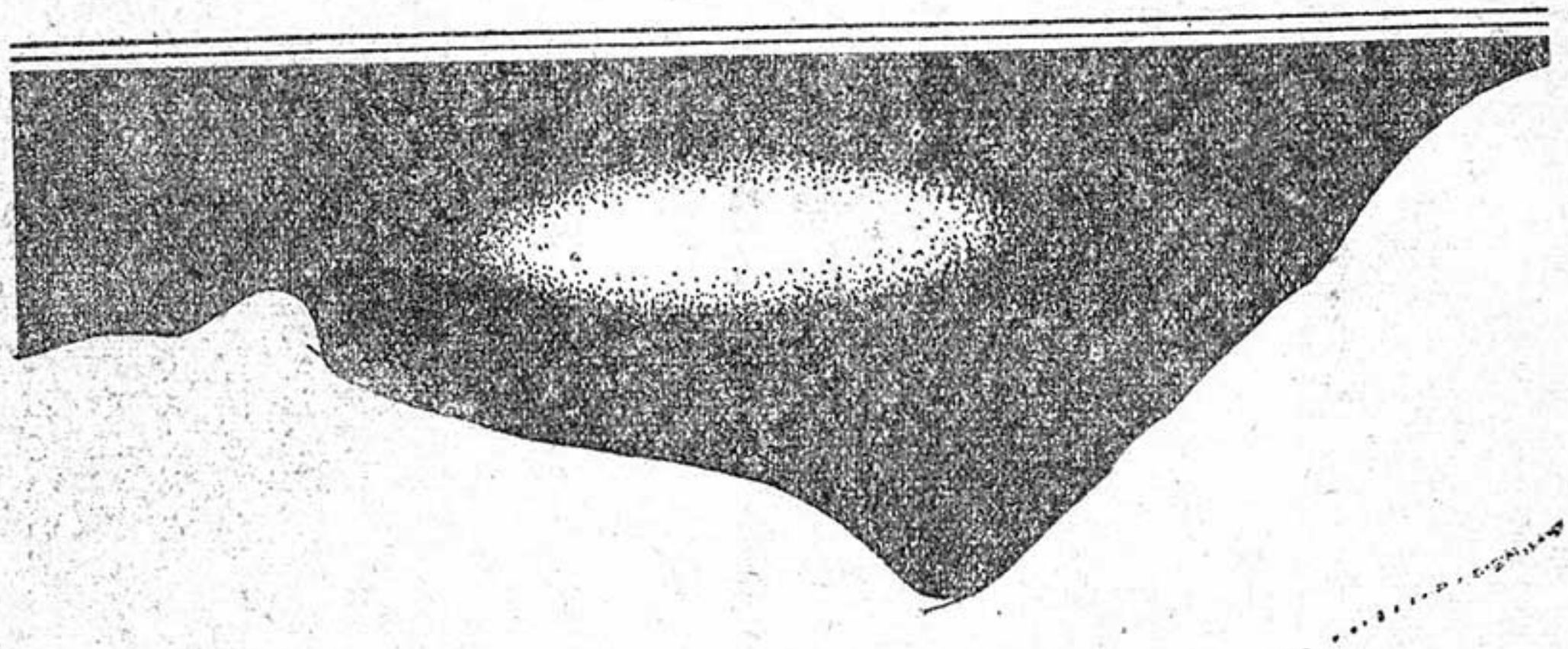
トイレにでも行くのか、吉田さんはアトリエを出ていった。

女が縛られている絵さえ見なかったら、あたしはいさぎよくコーヒーを飲んでいただろう。ところが、二枚の絵のおかげで、なんだか気味悪くなってしまった。もともと、あまりいい気味ではなかったのだから、しかたがない。

吉田さんがアトリエを出ているすきに、あたしはコーヒーのカップをすりかえた。とても濃いコーヒーだった。

すぐに戻ってきた吉田さんは、あたしがすりかえたコーヒーを、さっさと飲み干した。どうやら気づかれなかったようだ。もっともあたしが気づかずに飲むよう作られたコーヒーなのだから、吉田さんが知らずに飲んだのも当然なのかもしれない。それでも、あたしの胸は、どきどきと高鳴っていた。

「じゃ、お願いしようかな。きょうは初めてなんだから、簡単なクロッキーだけってことでね。そのうち、少し馴れてもらったら注文もつけるし、制作にもかかりたいんだけど、



そうだな、初めはK画材にでもきてるつもりで自由にポーズをとってくれればいいよ。あんまり神経を使わずにね。ポーズをとろうなんて意識はぬきにしてやってもらおうか」

毛布を敷いた、十センチばかりの高さのモデル台にあがると、動悸もだいぶ鎮まった。K画材や、その他の仕事先でもやっているように、あたしはまず立ポーズをとった。いかにも馴れた手つきで、吉田さんは、クロッキー帖の上へコンテを走らせはじめる。

十分くらい経つごとに、吉田さんはあたしのポーズを変えさせた。ただ、変えてくださいい、と言うだけで、注文はつけようとしない立ポーズを三つやってひと休み、次の坐りポーズをはじめたころから、あたしは、頭がへんにぼんやりしてきたのに気がついた。

おかしい。神経をシャッキリさせようと、壁に立てかけられた絵をじっとみつめる。奇妙な色を背景に、椅子に縛りつけられた若い女。モデルを思いきり縛れなかったと、吉田さんは言っていた。ほんとうかしら。乳房や膝や足首にからんだロープは、肌に深くくいこんでいる。二時間で五千円なら、力まかせに縛られるモデルだって、いるかもしれない。それに、抵抗力を奪うような薬を飲ませる手

だってある。じっとその絵をみつめていると奇妙な背景の色彩だけが浮き出して、揺れてみえたり、縛られた女の体が浮かび出て、わずかに身をもがいたりしはじめた。

どうしたわけだろう。二台のガス・ストーヴが、単調な音を立てて燃えつづけている。部屋が暖かすぎるのかしら。いや、やっぱり薬のせいだ。吉田さんは、あたしがカップをすりかえることを、計算にいれていたのだろうか。それとも、最初から間違えて、薬の入っていないカップをあたしの前に置いたのか。そうか、あたしが腰をおろす前に、もうカップは置かれていたのだから、吉田さんがすわるつもりの椅子へ、あたしが腰をおろしてしまったのかもしれない。

天井を見た。白塗りの天井に、さまざまな色が浮かんではまた消えた。腰にあてていたはずの手を、あたしはいつのまにか投げ出していた。組んでいたはずの膝も、いつのまにかだらしなく、ゆるんでしまっている。あたしの前から、あるいはうしろから、吉田さんはものすごい勢いで描き続けている。

「ポーズを変えて」吉田さんの声が、ひどく遠いところから聞えた。全身の力がぬけたまま、ぶざまな恰好で、仰向けに寝そべっている自分の姿を、あたしはぼんやり感じていた。

ポーズなんてどうだっていい。夢をみているようなあたしの頭の中に、縛られた女の絵や玲子さんの絵が、ぐるぐると渦巻き続けた。

ストーヴの音と、吉田さんの歩き廻る足音だけが、はっきり聞える。吉田さんも少し疲れてきたらしい。足音が重かった。

ふと気がつくと、あたしは俯伏せになってポーズともいえないポーズをとっている。頭が少しずつはっきりしてくるところをみると薬がきれてきたらしい。

「どうもごくろうさま。時間だよ」吉田さんの声がした。閉じたクロッキー帖をテーブルのうえに投げ出して、吉田さんは椅子に腰かけている。とても疲れた表情だ。

「実はね、さっきのコーヒーに少し薬を入れといたんだ。一種の鎮静剤なんだけどね。いや、大丈夫、心配しなくっていいんだ。モデルさんの神経を柔らかくしておかないと、へんに意識のあるポーズになっちゃうんでね。先にことわろうかと思ったんだが、玲ちゃんがきみに会って話をしちゃったと言ってたもんだから――。気分は悪くないだろう？　きみさえよかったら、これからもときどき仕事をしてくれないか。今度からはペイもはずむつもりだ。

あのコーヒーは、やっぱり間違えて置かれたんだ。すりかえたのが逆効果だった。

静かな夜道を国電の駅へ急ぎながら、吉田さんの仕事はこれ限りにしようと、あたしは考えていた。三千円のお金はありがたかったけれど、神経をぬかれてしまうポーズなんてやっぱりいやだ。

5

画家とモデルの心中。焼あとから心中死体。社会面のこんな見出しをみても、あたしはさほど驚かなかった。驚くというより、やっぱりこんなことになってしまったという感じのほうが、うんと強かったのだ。

新聞の記事によると、吉田さんのアトリエの火事は、発見が遅く、またたくうちに全焼してしまったらしい。焼あとから吉田さんと玲子さんの死体が発見されると、擬装殺人という疑いも出たらしいが、ふたりの体内から毒物が発見されて、結局は心中という見方が強いようだ。愛情と芸術の葛藤かなどという意見を書いている新聞もあった。毒物をのんだあと、火を放ったのか、あるいは苦しまぎれにストーヴを倒したか、そのあた

りはまだはっきりしないらしい。女の死体に着衣のあとがないのは、いかにも画家とモデルの心中らしいと、色っぽく書いているのは三流紙だった。

でも、あたしは心中でないと信じている。探偵小説ばりに殺人事件だなどというわけではない。あれはきっと、事故死と呼ばれるべきものなのだ。第一、独身同士の身軽な男女が、そう簡単に死なないだろう。

あたしがすりかえたコーヒーに、やはり薬が入っていた理由は、吉田さんの仕事をしたくなかったからだ。モデルをみつめる吉田さんの目つきの異様さも、それならよくわかる。

それに、モデルに薬をのませるのは、意識をぬいたポーズをとらせるためだと言っていたのでもなければ、あたしが椅子を間違えて置いたのでもない。両方に薬が入っていたのだ。

その日、あたしは近くの区立図書館に出かけて、美術雑誌のバックナンバーと薬物学の本を調べてみた。カップの疑問が解けたとたんに、あたしは、薬物の力をかりて絵を描く画家を扱った探偵小説を思い出したからだ。美術雑誌の一年くらい以前の号に、当時個展を開いたらしい吉田さんの紹介文がみつかった。現実ばなれのした色彩を駆使する夢幻的な作風と、吉田さんの絵は要約されていた。現実ばなれがしているはずだ。薬をのんで描いていたのだから。あたしは、白い天井に浮かんだ奇妙な色を、はっきりと思い出していた。

薬物学の本は、むずかしくてよくわからなかったが、メスカリンという薬をのむと、多彩な色調の幻視がおこったり、異常な精神状態をきたしたりするらしい。そのほかに、夢をみるような気分にさせる薬品の名が、ずいぶんたくさんみつかった。

吉田さんがどんな薬を使っていたのか、あたしは知らない。でも、薬を使っていたことだけは事実のようだ。

夢を追いかけながら死んでしまった吉田さんは、ある意味では幸福なひとなのだろう。可哀想なのは玲子さんだが、あのひとだってほんとうはお金だけが目的であんなモデルをやっていたのではなかったのかもしれない。すると、結局は心中といっても、それほどの間違いではないのだろうか。それとも、一度しか仕事に応じなかったことで、あたしにも責任があるのだろうか。

でも、そんなことはどっちだっていい。すんでしまったことなのだ。あたしはいまも、全神経を張りつめたポーズをとって、モデルの仕事を続けている。女ひとりが生きていくには、充分な収入もある。ただし、目下のところ夢はない。

やがて吉田さんは、玲子さんにも飽きてきたのだろう。そこであたしを呼んだのだが、あたしは一度しか行かなかった。新しい絵を書くために、あるいはモデルの心をもっと強く縛るために、吉田さんは薬の量を増やしたのだ。そして死んでしまった。吉田さんか玲子さんか、どちらかが薬の量の多すぎたことに気がついて、あわててストーヴをひっくりかえし、そのまま倒れてしまった——これが火事の原因ではないかしら。



泣き兵衛巷囃子

地獄絵女房

飯田豊吉

中島喜美・画

非人の群れ

えいほ、
えいほ……
と、威勢のよい掛け声とともに、揺れていた駕籠が、ふいにそこでとまった。
「――へい、御新造さま、着きやした」
垂れがはねあがり、草履がそろえられる。
その草履につまさきをのせ、
「あの、駕籠屋さん、ここは？……」
不審の眉で、美保代はきいた。
「へい、入谷に近い浅草田圃、旦那さまがおいいつけの場所で……」
「浅草田圃？……」

なるほど、人家のあかりは遠く、眼の前には黒々と田圃がひろがっている。道の左側は墓地をとりかこむ雑木の林であった。

「ほんとうにここが、旦那さまのおいいつけの場所ですか？」

重ねて、美保代はきいた。

「へい」

とこたえて、二人の駕籠かきは、もう帰りの方角に棒鼻をむけている。

（おかしい？……）

夜気の冷えが、ゾクリと美保代の肩さきにしのび、さらにそれよりも、不穏の気配があたりにわだかまっていた。

駕籠かきは去り、遠くで数匹の犬が吠え合っている。

「うふふふ……」

「えへへへ……」

「いひひひ……」

ふいに、美保代の前後左右から、異様な笑声が湧きおこった。

同時に、雑木林の木下闇から、おそろしく汚ない風体の男たちが、わッとわめいて飛びだし、美保代を取り巻いたのである。

「あれえッ！」

美保代は、顔をおおって悲鳴をあげた。

「おッと、いくらさびしい浅草田圃でも、金切り声をあげられちゃまずいぜ！」

男の一人が、すばやく美保代の背後にとびかかった。その垢だらけの手で、美保代の口を、むンずとふさぐ。

それを合図のように、それッとかけ声をかけて、いちどきに襲いかかったのである。

男どもはこの近くの非人小屋にたむろする、非人の群れであった。

瘡かき、目っかち、鼻欠け……それらの醜悪な面相が、十名ほども歯をむきだし、野犬のようにうなって、若く美しい武家女房につかみかかる。

折からの月光に照らしだされて、それは、たちまち酸鼻の図となった。美保代のかまえた懐剣は、あえなく叩き落とされ、その足体は身もとを払われて地面に横転した。

したたかに脾腹を打ち、その苦痛にもう声をあげる気力が失せた。

裾がひるがえり、脛の白さが地にもだえる。

その襟首に背の帯に、狼どもの手がガムシャラな勢いでかかった。

「それッ、えへへへッ！」

帯が宙に投げ捨てられた。またたくまに、水色縮緬一枚だけの美保代となる。

「さあ、辛抱しなよ、ご新造さん」

その半裸身の白さに一瞬息をのみ、非人たちの声がうわずった。

美保代の両腕はうしろにねじあげられ、あらがう手首には荒縄がからみつく。

キリキリ……

キリキリキリ……

★縄目にくびれた乳房の痛々しいまるみを写す絵師春斉の筆は非情なまでの克明さだ！

荒縄は肌に、泣くような音をたてて喰いこんだ。

「あ、あ、あッ！……」

苦痛、恐怖、屈辱——美保代は前のめりのからだを、地に片膝つけて、からくも失神を防いでいた。

もしここで気を失ったら……この狼どものために、血肉をむさぼられること、必定であろう。

最後の危難に、手のかかったときは、舌を噛む覚悟の美保代であった。十三夜の月が、さらに青白く冴え渡った。

「う、ううむッ！……」

つつしみぶかく盛りあがった乳房が、ザラザラと荒い縄目を三筋四筋と受けて、奇妙な形にゆがむ。

髪はがっくりとくずれ、襟すじから肩、背へかけてのまろやかな肉づきの線が、切迫する危機に硬直する。

胸もとから二の腕、背中にねじあげられた両手首に、ぎっちりと噛みこんだ荒縄のむごさ……。

下半身にまとっている水色縮緬の湯文字も裂けて、腿が雪のようにこぼれ、若い武家女房の柔肌は、いま月光を真上から浴びて、真珠色に輝やいていた。

「……」

嵐のようなはげしさで、これまでを終えた非人どもは、くくりあげた美保代を地面にひきすえると、荒い息をつきながら、ただ眼光だけを燃やしている。

腰をまげて美保代の顔をのぞきこみ、ただ野卑な言葉を浴びせるだけなのだ。

美保代の美しさに気圧されて、それ以上の手出しはならなかったのであろうか……。

無残絵師

ところが——。

その美保代と非人の群れがわだかまる位置から、およそ数間離れた大銀杏の木蔭に、二人の男が身をひそませていた。

一人は——宗匠頭巾に顔を包んだ絵師、歌川春斉。

いま一人は——黒紋服の着流しに、これも黒頭巾、腰に大小の刀を着した侍風態の男。名は鶴木一角。

「さすがにお美しい。しかし、大丈夫でございますかな？」

非人のなかにもだえる美保代を凝視したまま、絵師春斉は感嘆し、それから、心配げに鶴木一角の顔を見あげた。

「無駄口をたたかずに、さっさと写せ！」

鶴木一角が、低く叱咤した。

大銀杏の根かたに、小提燈が突きささって、絵師春斉は絵筆を走らせていた。

そのあかりの下に、絵師春斉は絵筆を走らせていた。

鳥の子紙に写す、墨一色の素描である。

美しく若い女房を襲う、野卑醜悪な非人の群れ——。

とりかこまれて半裸にむかれ、抵抗もむなしく荒縄で縛りあげられていく過程が、すでに十数枚の紙に写されていた。

そしていまは、いましめられた身のなまめかしいくねり、乱れた湯文字から、白い内腿がのけぞる様を写して、練達の筆が紙の上をすべっている。

無駄のない線だ。空想だけでは描け得ない無残絵の急所を、巧妙に

とらえて克明に描きこむ。素描がらも、妖気ただよう筆力であった。

「――しかし、なんでございまなァ、鶴木さま……」

声をかけながらも、春斉の筆は休まずにうごく。眼は、数間先月明下にもがく美保代に、らんとそそがれている。

「あなたさまも、むごいお方で……」

絵筆はいま、縄目にくびれた房の、痛々しいまるみを写している。

「むごいか――」

鶴木一角の唇が苦笑した。

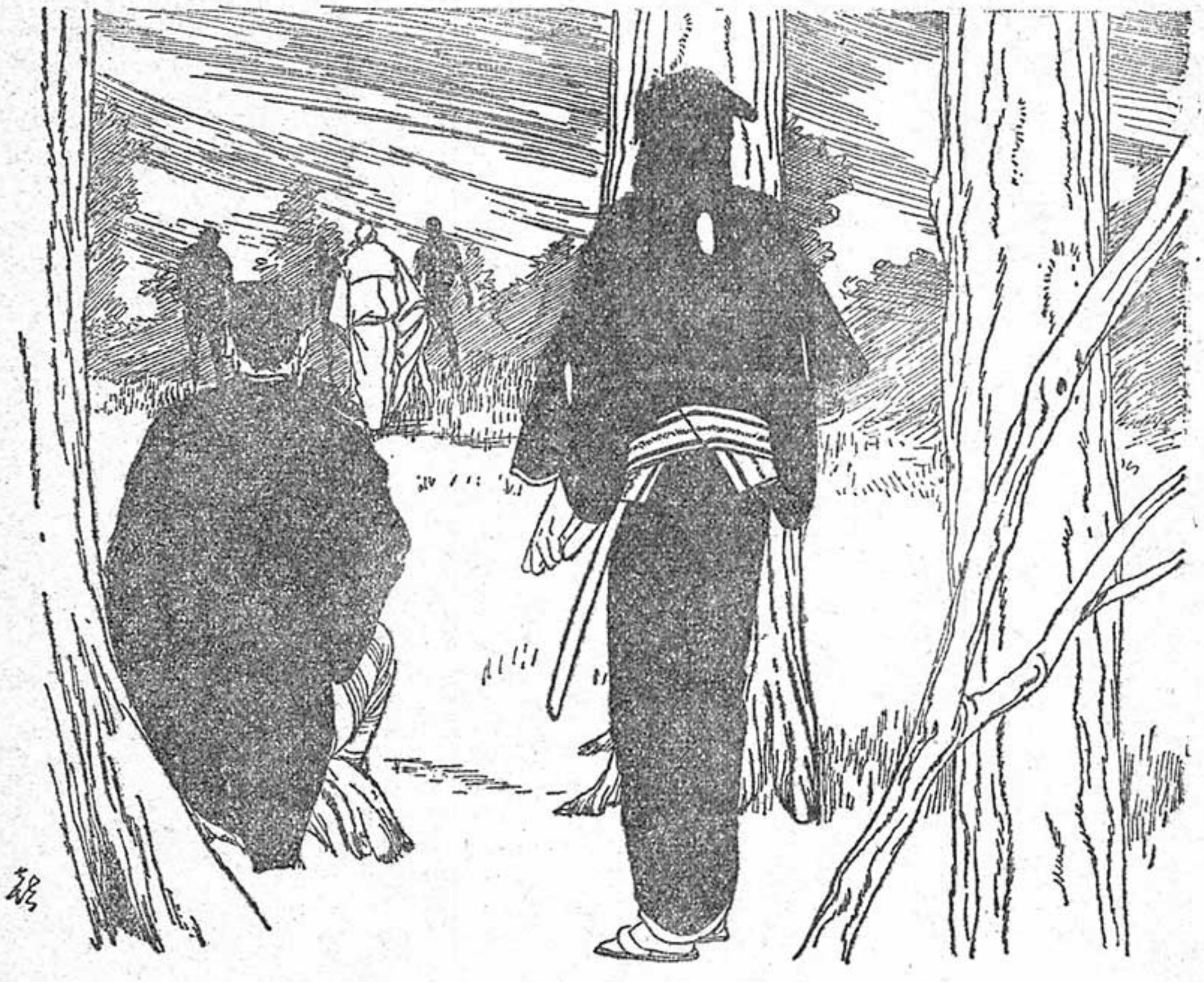
「あんな美しい奥さまを、よりよって……」

「喰うためだ……」

「何も知らぬ奥さまが、おかわそうだ」

「たかが食客の女房だ。奥さまばわりはやめろ。背筋が寒い」

「ほれ、あの鼻っ欠けが、あのうなことを……」



春斉の口ぶりは、一角をなぶっているようにもみえる。

「うるさい、しっかりと写せ。お前にしても仕事ではないか！」

鶴木一角は、また叱った。

叱るまでもない。春斉の筆は、迫真の力をもって、縄に苦悩する裸身の、妖しくも美しいそのままを、つぎつぎに重ねていく。

月下の殺気

「ひいーッ！」

美保代が、一際するどい悲鳴をあげてのけぞった。

鼻の肉がくずれ落ちて、白い骨だけがむきでている怪奇の顔が、美保代の唇を求めて迫ったのである。

が、カン高くほとばしりでたその悲鳴が、たのもしい一人の味方を、この場に呼び寄せた。

蒲黄献上の帯に、赤樫の木剣を無造作に差しはさんだ遊び人風態の男である。

足音もなく、風のように突ッ走ってきたかとみると、男は鼻欠けの脇腹に強烈な当身をくれた。

「おおッ！」

不意の出現におどろいて、非人の群れが寸時たじろいだ。

「やめろ！」

と、その男――泣き兵衛が一喝した。

「なにいッ！」

十数名の非人たちが、猛りたって泣き兵衛を包囲した。

「やめろッて言うんだよ。てめえらがここで何をはじめようとしていたかは、ひと眼見ればわかる。だから、余計なことは言わねえ。やめろ　やめな。おやめなさい――」

「なにをッ、うぬは誰だ！」

「きいたって仕方なかろう。さァ、もうあきらめて、うぬらはうぬらの小屋へ戻って寝なよ。いくらか恵んでやりてえが、おれも今夜はあいにく一文無しだ。かんべんしな」

泣き兵衛は、白い歯をみせて嘲弄した。

「あ、ありがとうぞんじます。どうかお助け下さいまし！」

美保代に喜色がうかんだ。

逆に、非人どもは激怒した。

「なまいきな野郎だ。おれたちをいったい誰だと思っている。地獄の一丁目と三丁目の間を往き来している番人さまだぞ！」

ひと口に非人乞食というが、非人には囚人や晒し者を取り扱う下役の仕事や、死刑獄門の際の雑務が与えられている。

「野郎、ぶちのめせ！」

荒くれどもは、手に手に棍棒をつかみ、泣き兵衛にむかってなぐりかかったのである。

「よせというのに……」

しようのねえ奴らだ――泣き兵衛は眉をひそめ、一歩身を退いた。

左右から同時に打ってくる奴が、味方同志の頭上に棍棒を喰らわせてひっくり返った。

「棒のふり方は、ちいッとばかり、おれのほうが、うわ手らしいな」

笑いながら、泣き兵衛は腰の木剣をひっこぬいた。月光を浴びた顔が、不敵な余裕をみせている。

「野郎、やりあがったなッ！」

野良猫でも追いつめてぶち殺すような勢いで、非人の群れは、いちどきに棍棒をふりあげた。

「それよッ！」

泣き兵衛の体位が、腰を落としざま、くるりと変転した。

「だあッ！――」

というような悲鳴があがって、十数名の非人は、扇をひらくようにのけぞった。

いや、悲鳴だけではなく、それは彼らのむこう脛を、泣き兵衛の木剣がしたたかにかッぱらった音も混っていた。

「――やめろ！」

泣き兵衛の背後に、そのとき声高の叱声があがった。

その声は、非人どもにむけて投げられたのである。

「へえい……」

やめろと命じられなくとも、すでに彼らは地に這い、打たれた脛に手をあててうめくばかりであった。

黒紋服の侍が、面を覆った黒頭巾を脱ぎながら、ぬうッと泣き兵衛

の眼の前にすすみでた。

——鶴木一角である。絵師の春斎は、まだ銀杏の蔭にひそんでいるらしい。

「そら、金をやる——」

鶴木一角は、懐中に手を突っこみ、非人どもの頭上に、バラバラッと二分銀を撒いた。

わあッと喚声をあげ、我れ勝ちにそれを拾うと、非人どもは這いずりながら逃げ散っていく。

「あ、あなた！」

美保代が顔をあげ、膝で立った。

縛られている胸をふるわせながら鶴木一角の足もとににじり寄る。

「……」

鶴木一角は、冷酷な眼光で美保代を一瞥して、無言だった。

「おや、こちらは旦那の奥さまでございンしたかい。そいつはどうも、危いところでしたねェ……」

でもまァよかった、という顔で、泣き兵衛は気軽に手を差しのべ、美保代の縄を解こうとした。

が、ハッとしてその手を硬くした。

鶴木一角の突き刺すような鋭い視線をうけて、泣き兵衛の筋肉が反射的にこわばったのである。

（おンや、なんだか妙だぜ？）

泣き兵衛の顔から、すうッと血の気がひいた。

それほど、鶴木一角はすさまじい殺気をみなぎらせて、泣き兵衛に迫っていた。

「旦那、早く奥さまの縄を解かなくちゃ、風邪をひいてしまいますぜ。ねえ、お可哀そうじゃありませンか……」

その殺気を、やわらかくはずして、泣き兵衛は言った。

「……」

なおも無言のまま、美保代を背にして、鶴木一角は、ずいッと泣き兵衛の前に進み寄った。

（おッと！……）

油断なく、泣き兵衛は身をひいた。その泣き兵衛の眼くばり、足腰の落としぐあいをみて、

「できるな、お前——」

鶴木一角は、落ちくぼんだ陰険な瞳を据えていった。

「できるって、なにがですい？……」

「とぼけるな！」

二人の親線が激突し、眼にみえぬ火花を散らせた。

その火花から、一瞬の腥風が生じた。

もし、このとき、頭上に輝やく月を雲がさえぎり、この浅草田圃一帯を闇に塗りつぶさなかったら、二人のうち、どちらかが血を流し、傷ついていたであろう。

泣き兵衛もいまは怒っていたのだ。

（てめえの女房の危いところを、せっかく助けてやったのに、どうだろう、この態度！……）

むかえ駕籠

さすがにぎやかな西両国界隈も、宵の五ツを過ぎれば、見世物小屋の木戸もピタリと閉ざされ、昼間の雑踏は、ウソのように静まりかえ

る。娘南京出刃打ち春本春駒一座の楽屋口に、いま、一挺の駕籠が横づけになった。

駕籠かきのほかに、男が一人ついている。

「――なんだって？　泣きさンから頼まれてお迎えにあがった？……」

春駒太夫は、思わずきき返して、その男のようすを見つめた。

一日の舞台を終え、すっかり厚化粧も落とした春駒である。

「へい、すぐおいで下さるようにと……」

男は手拭いで頬かぶりしている。小腰を低くかがめ、屋敷奉公の中間のような身なりであった。

（ぶうん……）

春駒は、胸のなかでニヤリと笑った。

泣き兵衛が駕籠を寄越すなんて、はじめてのことなのだ。

春駒に逢いたければ、いつでも、どこからでも、煙りのように現われて、楽屋のれんをひょいとはねのけ、

「へへへ……太夫、ごきげんはどうだい？」

と、とぼけた顔を見せる男である。

春駒は、楽屋へもどって呼び込みの三吉を手招いた。

「なんです、太夫？」

と、寄せてくる三吉の耳へ、なにごとかをささやく。

「わかったね、たのんだよ」

春駒は念を押し、三吉の肩をポンとたたいた。

「へい、がってん承知――」

うなずく三吉。

それからまた春駒は楽屋口を出て、使いの男に愛嬌をみせた。

「どうもお待ちどおさま。じゃ、のせてもらいますよ」

駕籠は走りだす。

（そういえばあのひと、今日でもう三日も、あたしのところへ顔を見せない……）

揺られながら春駒は、ツンとふくれた。

それから小半刻後――

春駒一座の楽屋口へ、ひょっこりと姿を見せたのは泣き兵衛であった。

「いやに静かだなァ、太夫はいねえのかい？……」

のれんをかいくぐり、もうすっかり片附いた春駒の部屋を見わたす。

「あれッ、泣き兵衛のおにいさン！」

仰天したのは、まだ残っていた、つばめ太夫だった。まるい眼をいっぱいに見ひらいて泣き兵衛をみあげる。春駒の可愛い妹弟子だ。

「どうしたンだい、つばめちゃん、そんなにびっくりして？」

泣き兵衛は笑いながら、つばめ太夫のまるい頬っぺたを指で突ッつく。

「だって、だって、春駒ねえさんは、ついいましがた、おにいさんが寄越した駕籠にのって……」

「駕籠？……ヘンだぜ、おれはそんなことしねえぜ」

泣き兵衛は首をひねった。不安な予感が、脳裏をかすめる。

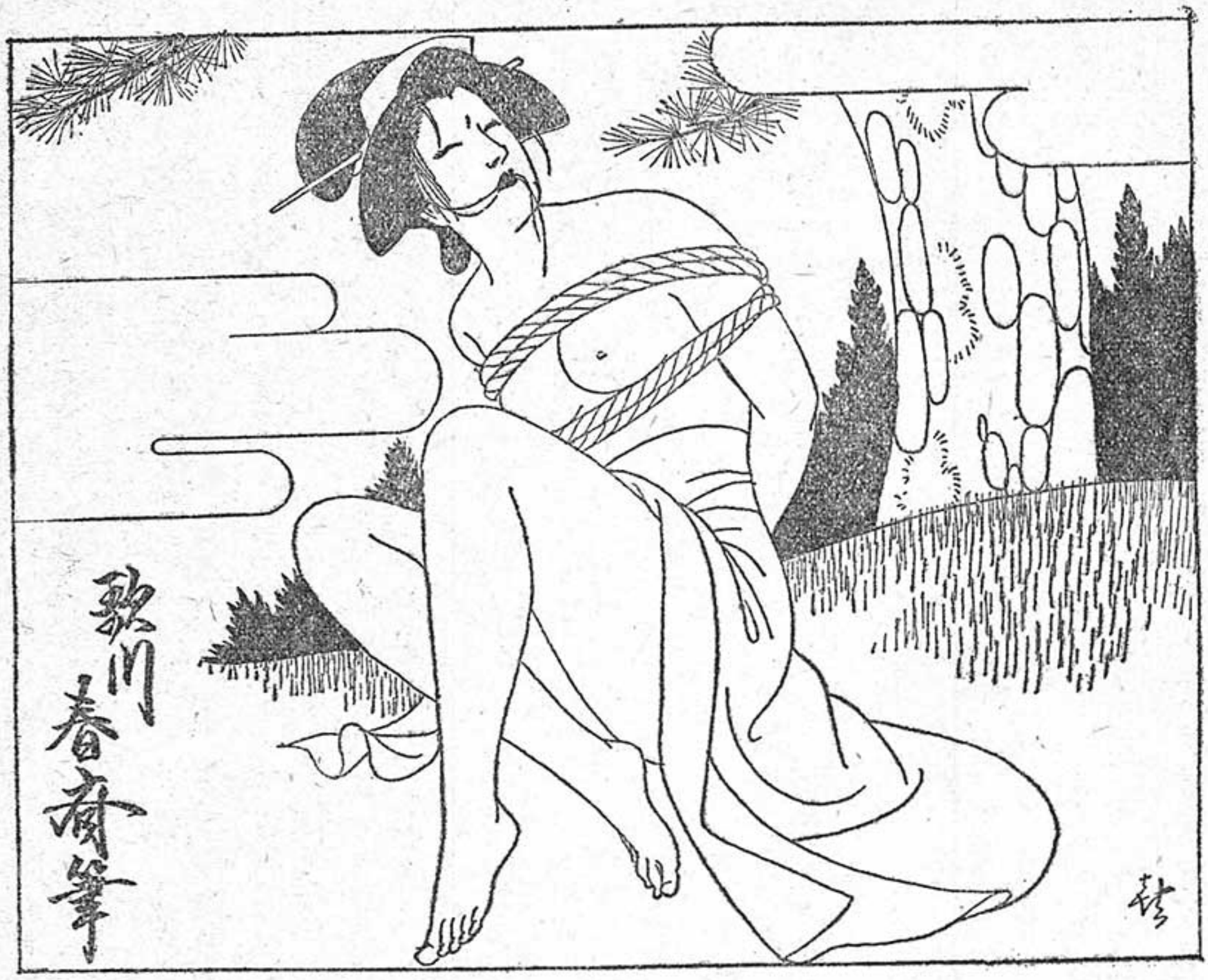
「助けて、春駒ねえさんを助けて！　きっとさらわれたのよ！」

つばめ太夫は、もう泣き声だった。

「助けてくれと言ったって、太夫の行った先がわからなけりゃ、いくら泣き兵衛のおにいさンでも、駄目だなあ……」

「いじわる！」

泣きべそのつばめ太夫は泣き兵衛の胸に可愛い拳固をふりあげた。



「まあ、落ち着きなよ。しっかり者の太夫のことだ。まさか、むざむざとさらわれることもあるめえ……」

泣き兵衛のいうとおりだった。

あらかじめ春駒に命じられて、駕籠のあとを尾行していった呼びこみの三吉が、むこう鉢巻、尻ッぱしょりの勢いで、戻ってきたのである……。

「た、た、たいへんだァい！　は、は、春駒太夫が！――」

妖気の画帖

広大な武家屋敷であった。

いや、ただ大きいというだけではなく、贅を凝らしたその内部であった。

その庭園一つを例にとってみても――。

まず、中央に位置する池の広さが眼を惹いた。近くの川から、直接に水を引いてくるのであろう、満々と湛えて船遊びができ得るほどの豊かさ。

池縁にめぐらせた美しい石組み、築山に植え込んだ蘇鉄は異趣味を奏で、苑路わきの萱葺屋根の待合の風雅。

青石をたたんで池畔から突きだした形は、荒磯の岬みたての凝った意匠である。水面の中ほどに築かれた島が、浮世ばなれの情趣を添えていた。

だが――

その庭園の突きあたりの、築山とも見えぬほどの高さと幅をもつ小山の蔭に建ち並ぶお長屋。

客の眼には触れにくいその建物の一室で、いま、庭園の雅趣とはおよそかけはなれた光景があった。

上座に坐っているのは、この屋敷の側用人頭、神戸主膳であった。その前に、鶴木一角、絵師の歌川春斉がひかえていた。

そして——

神戸主膳の膝もとには、豪華に装釘された一冊の画帖がひろげられていた。

「いかがでござります、主膳さま……」

といったのは歌川春斉。この中年の絵師の眼もと口もとには、おのれの作に抱く自信の笑みが、たっぷりとあふれている。

「ふうむ。……見事なできばえだな。——さながら、生きているようだ……」

画帖をめくりながら、主膳がうなった。

「なにしろ……」

と、春斉は隣りに坐っている鶴木一角の横顔に、チラと眼をやってから、

「鶴木さまの奥さまを、犠牲にしての絵でござりますからな……」

「うむ、似ておるよ、美保代どのに……」

主膳の眼が、絵のなかにねばりつく。

これは——無惨絵の画帖であった。

先夜、浅草田圃においての美保代の危難の数場面が、さらに誇張されて、絢爛たる極彩色のもとに、細密の筆致で、描かれているのである。画帖のなかから、美保代のうめきと悲鳴がきこえるかと思われるほどの迫力であった。

「うむ……よく描けておる……」

主膳の唇に、涎がたまった。無惨絵はまたあぶな絵でもあるのだ。

そのとき、廊下にめんした障子が、ふいにあいた。

静かに一礼して、この座敷に入ってきたのは美保代であった。

「——粗茶にござりますが……」

茶碗を置く指さきがふるえていた。

このお長屋の一劃は、鶴木一角夫妻に与えられているのだ。

鶴木一角はこの広大な屋敷を昼夜警護する用心棒の剣客であった。

「これは美保代どの、いつもお美しいのう……」

主膳が眼をほそめた。手はそれとなく紫のふくさをとり、画帖の上にかぶせる。

絵のことは、むろん美保代には秘密であった。

茶をすすめたあと、美保代は腰をおとし、この部屋を去る気配を示さなかった。

「これ……」

鶴木一角が、そのことをとがめた。

「はい……」

うなずいた美保代の眉宇に、一途の決意があった。唇が白くふるえている。

美保代は、夫の左背後に膝をすすめ、帯の間から、静かに懐剣を抜いた。

「ええいッ！」

美保代は、いきなり夫の左脇腹をめがけて懐剣を突っかけたのである。

身をひねり、一寸の差で妻の切先を避けた鶴木一角であった。

「なにをするッ！」

利腕をねじあげ、懐剣を叩き落とす。
「なにゆえの乱心！」
「乱心ではござりませぬ！　恥辱を知るがゆえ、あなたさまと共に、この場で死のうと……！」
美保代の瞳が、悲痛に光って訴えた。
「障子の外で、立ち聞いていたな！」
さすがに、一角はたじろいだ。唇を噛み、顔がゆがんだ。
「不審の念は、先夜来より抱いておりました……なれど、なれど、このような辱しめを、まさか……」
美保代はうめき、蒼白な顔をうつむけた。舌に歯をあてて、ガッ……と噛み切ろうとする。
「待てッ！」
一角がさけび、妻の肩を仰むきに突きとばした。
「ごめん！」
と一礼したのは、神戸主膳に対してであった。
懐中から手拭いをだし、美保代の口に猿ぐつわをかける。美保代も必死であった。はげしく夫に抵抗して、その猿ぐつわをむしりとろうとする。
「おろか者め！」
一角は、舌うちして美保代の腰からしごきを解いた。それで、妻の両腕を、うしろにねじあげて縛りつけるのである。

連縛美女

一角は、神戸主膳の前に平伏した。
「なんの……美保代どののの心とすれば、無理もないことじゃ……」
主膳はさしておどろきもしない。そこにころがされ、猿ぐつわにうめく美保代の、まくれた裾もとから露出した白いふくらはぎに眼をやっている。
「ああ、ぴっくりした。ピカッと懐剣が光ったときには、三年ばかり寿命が縮みました」
歌川春斉は、部屋の隅にすっ飛んでいる。
そのとき、用人の一人がこの部屋にきて、神戸主膳の耳もとに、なにごとかをささやいた。
「うむ、うまくいったか……」
主膳は、にこりと笑った。
そして、歌川春斉に顔をむけて言った。
「いまここに、もう一人、美しい女の客が現われる。都合よく美保代どのもそのような恰好になっていることだし……そこでだ、春斉、お前の達者な筆で、二人の美女が、対になってみてぬか……」
「へえ、もう一人美しい女客……と申されると？」
春斉が、けげんな顔できき返した。
「うふふふ。その者はな、うちのお殿さまが、本所の室戸様の下屋敷で見かけて以来、ぞっこん参っているほどの美形だ。いや、美形というよりも、その肌のなまめかしきこと――つまり下世話にいう色っぽさが、まさに江戸随一……と、これは殿のお言葉なのだが……」
説明しながら主膳は、ニヤニヤと唇をなめる。分厚い唇が唾に濡れて、好色に光った。

その、江戸随一の色っぽい肌をもつ女が、いま高手小手に縛りあげられて、この部屋に引きたてられてきた。

女は――春駒太夫だった。

「なンだい、なンだい、あたしをどうしようッてンだい！　こんなでッかい屋敷に引ッ張りこみやがって！」

わめく春駒は、すでに着物を脱がされ、真紅の匹田鹿の子の長襦袢一枚にむかれたしどけなさ。

その長襦袢も、片襟は肩から滑り落ちて、ひろがった胸もとから、むっちりとゆたかな乳房がこぼれている。

「おおッ、これは！……」

歌川春斉と鶴木一角が、同時に驚嘆の声を発した。

まっ赤に咲きひらいた巨大な花びらが、濃艶な花粉をまき散らしながら、いきなりこの部屋に舞いおりたような、まばゆいほどのあでやかさである。

「両国に小屋掛けする芸人、春駒と申す女じゃ。どうだ、美保代どのとは、またべつの美しさであろうがな……」

神戸主膳が、誇らしげにいった。

「ちくしょう！　あンたたち、いったい誰なんだい！　泣きさンの名を騙って、あたしをかどわすなンて、だいそれた野郎どもだねえッ！」

くやしげにわめきつづける春駒。毒づきながら乱暴に身をもがくから、長襦袢の前がいよいよみだれ、湯文字もはだけて、白い膝までがチラチラと見えかくれするのだ。

「うるさい。――一夜の役目がすめば、相応の祝儀とともに、また無事に送りとどけてつかわすわ。静かにせぬと猿ぐつわを噛ますぞ！」

主膳が威嚇し、立ちあがると春駒の縄尻をとった。

肩をゆすり、足を踏んばって抵抗するやつを、美保代のころがっているそばへ寄せるのだ。

するとなるほどこれは、身うごきならぬ女の、むざんにも妖艶な一対であった。

「それ、春斉。この二人の女を使い、さまざまの形に組み合わせて、おもしろい絵柄をくふうしてみよ」

興にのった主膳が、はずんだ声で絵師に命じた。

言われるまでもなく、歌川春斉の眼は、新しい意欲に、ギラギラと燃えていた。

「な、な、なにしやがるンだい！」

立ちあがった絵師の身体から、不気味な熱気を感じて、春駒は戦慄した。

「むむ、むむむ……」

畳に俯向いた美保代の顔は屈辱の涙で濡れていた。

舌を噛み切ろうにも、猿ぐつわの手拭いはギッチリと歯の間に喰いこんでいる。

絵師の手がのび、美保代の裾が、膝の上までめくられた。

鶴木一角は、正座のまま、身じろぎもしなかった。突きでた咽喉仏が、ゴクリ……と鳴った。

額に、なにかを耐えるような皺が寄っていた。

裂け襦袢

歌川春斉の心は、もうこの二人の美女の組み合わせのおもしろさに憑かれていた。

紙に写してはまた変え、また描き写しては絵筆を口にくわえて、春駒と美保代のからだを置きかえるのだ。

一本の縄で、二人を背中合わせにギリギリ縛りつけてみたり……

美保代の胸の上に、春駒を腰かけさせてみたり……

さらには、春駒の首に、美保代の足を縛りつけてみたり……

「うふッ、これは珍奇！　お二人とも、そのままそのまま、うごかないでくだされや！」

歌川春斉は、そのむごい姿態をサラサラと紙に描き写す。

さすがにするどい観察の眼であった。

神戸主膳は、眼をほそめてほくそ笑んでいる。

（――この絵が出来上って、それをまた殿に進呈すれば、自分の成績はあがり、褒美が頂ける……）

美保代を素材とした絵も、つまりは、そのためのものであった。この側用人は、金を貯めることだけを生き甲斐にしていた。

鶴木一角は、黙然として腕を組み、無言であった。猿ぐつわから洩れる妻のうめきに、微動もしない。

そして――。

さすがの春駒も、身を責めつける縄に、その肌を疲れさせていた。

（くそッ、したい放題のことをしやがって、いまにどうするか、おぼえていやがれ！）

この狂気じみた一幕にあきれ、なかばヤケになって、絵師のうごかすままに、身を投げだしている。

（おそいッ、まったくおそいよ、あのひと。……どうしたンだろう？）

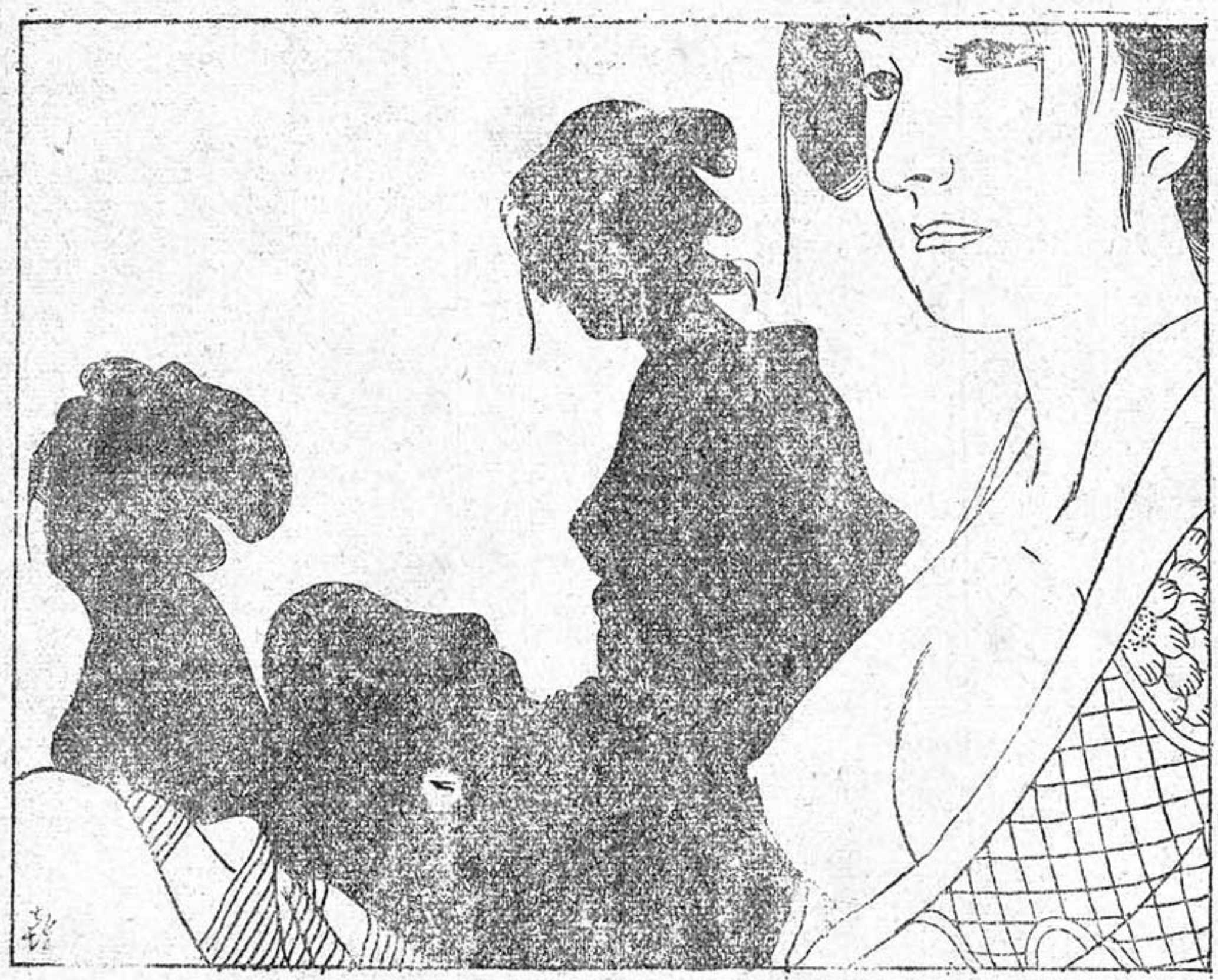
喰い入る縄の疼痛にあえぎながらも、春駒の脳裏には、その望みがある。



こないはずはないのだ。三吉がまちがいなく知らせれば……。
「ううッ、痛いッ、こんちくしょう！」
「その顔、そのつりあがった眼、眉、あえぐ唇……」
絵師春斉の筆が、すばやく春駒の苦悶の表情をとらえて紙に写す。
「よし、おれが手伝ってやろう……」
鶴木一角が、無言を破って立ちあがった。
春駒の縄尻を奪いとり、握りなおすと、力まかせにひきあげる。
「ひいーッ、痛いよッ——ううッ、ああ、泣きさァん！」
泣き兵衛の馬鹿野郎！——」
こらえきれず浮き腰になり、片方の腿の上まであらわに踏みだして
春駒は絶叫した。
「わかった！　すまなかった！　もう安心しろ、太夫！」
縁側の障子がスルリとあいて、庭の闇を背に、ギョロリと光ったの
は泣き兵衛の大きな眼玉であった。
「おそいじゃないかッ、なにぐずぐずしてたンだようッ！」
春駒が泣き声でさけんだ。安堵と苦痛のなみだ声だ。
「ひどくだだっぴろいンだよ、この屋敷は……。いや、まったく、ぐ
るぐる探がしちまったぜ」
弁解しながら、泣き兵衛の足がつかつかと座敷の中に踏みこんだ。
一瞬ふりかえった泣き兵衛の拳作で匕首を抜き、二人の女のいましめを切りほ
どく。

鳴咽妻

「おのれ、何者だ！」
神戸主膳と鶴木一角が、同時に怒声を発した。
「——泣き兵衛という、ケチな野郎さ。……おや、そっちの強そうな
旦那には、この間の晩、浅草田圃でお目にかかりましたねえ。そうい
やあ、そのご新造は、たしか旦那の奥さまじゃなかったかね？」
「そうか。お前が泣き兵衛か。噂はときおり殿からきいておる。なる
ほど、不敵な面魂だな」
神戸主膳が、おびえた顔でいった。
「庭へ出ろ、泣き兵衛——」
鶴木一角が、顎でしゃくった。
「やりますかね」
泣き兵衛がこたえた。
「太夫、着物を着て待っていてくれ」
春駒に声をかけてから、スタスタと庭へおりた。
その泣き兵衛の背中を、神戸主膳がいきなり大刀を抜いて斬りつけ
た。
「うわわッ！」
のけぞって昏倒したのは、しかし、主膳のほうだった。
一瞬ふりかえった泣き兵衛の拳が、主膳の脾腹に喰いこんでいた。
「この大将は気が早いね」
泣き兵衛は、愛嬌のある笑顔を、鶴木一角にむけた。
「こいッ……」
鶴木一角がいった。
（——一年目に、やっと用人棒としての責務がはたせる……）
泣き兵衛の手練に瞠目しながらも、鶴木一角には、それがうれしか
った。



「さあ、いくよ」

泣き兵衛は、帯にはさんである木剣を、無雑作にひっこぬいた。

鶴木一角の眼には、その木剣も泣き兵衛の構えも、異常なものにうつった。

無雑作のなかに隙がなかった。息づまる沈黙が数秒つづいた。

今宵も月光白く、そのなかに、泣き兵衛の耳もとに刃風が鳴った。

一角の袖がひるがえると同時に、

びゅッ、びゅッ！――

鋭い剣尖を毛一筋の間隙にかわしながら、泣き兵衛は後退した。

呼吸の間もなく、つづけざまに討ちかかる白刃にも、その引き際に微妙の間隔がある。

そこに、泣き兵衛の木剣が、かいくぐって反撃した。

ガッ！……にぶい音がして、この緊迫の勝負は終った。

「うッ……」

低くうめいて、一角の右腕が、だらりとさがった。

「てめえの女房を、いじめてばかりいやがる極道亭主だ。ついでに左腕も叩き折ってやろうか！」

泣き兵衛が大きく木剣をふりかぶった。

そのときである。

美保代が駈け寄り、泣き兵衛の腕にとりすがったのだ。

「お願いでございます、どうか、どうか、主人をおゆるし下さりませ！」

「だって、お前さんを、あんなにひどい目に逢わせた亭主だぜ？」

ふりかぶったまま、泣き兵衛は美保代を見おろした。

「わけのあることでございます。私どもは、あのようなことをせねば……あのようなことをせねば、生きてゆけぬのでございます！」

血を吐くような言葉だった。

「そ、そんなバカな！」

泣き兵衛はあきれた。

「私ども夫婦は、ここ数年の間の浪人ぐらしに窮乏きわまり、一年前、このお屋敷にひろって頂かねば、餓死するところだったのでございます……」

「……」

「主人は、警護役の剣客として、このお屋敷にご奉公致し、おかげさまをもちまして、このお長屋の端を頂戴致し、日に三度の食事を頂ける毎日となりました……」

美保代の唇が、悲しみにふるえた。

「美保代、もういい、もういうな！」

たまりかねたように、一角がうめいた。

だらりとさがった一角の袖口からは、一筋の血が流れて、手の指さきから地面にしたたっていた。肩の骨と肉を打ちくだかれた血である。

「笑ってくれ、泣き兵衛とやら。——用心棒に雇われたものの、世は泰平だ。この一年間にわしの腕がこの屋敷のために役立ったことは、一度もなかった……。わしはおそれた。わしら夫婦が無用の者として、この屋敷から暇を出されることをな……」

一角の形相が、幽鬼のように自嘲する。

「おのれの妻を非人に襲わせ、それを絵に描かせて、この屋敷の主人の好奇に迎合したのも、しょせんは生きるための、飯を喰うための手段だったのだ……」

声もなく、一角はわらった。

「あなた！……」

美保代が、夫の胸にとりすがった。身を揉んで嗚咽した。

一角は片手で妻の背を抱いた。

「すまなかった、美保代……」

「これからは、私が女中奉公でも、茶屋奉公なりと致します。もうこのようなお屋敷には、こちらからお暇を……」

そういって美保代はまた、声をあげて泣き伏した。

「……」

言葉もなく、泣き兵衛の眼からも、もらい泣きの涙が、ポロポロとこぼれている。

一角への怒りも憎悪も忘れて、滂沱と涙をこぼす男であった。

「——泣きさん……」

背後から春駒が声をかけた。すっかり身づくろいして、帯もしめている。絵師の春斉をおどかして、どこからか着物を持ってこさせたのだ。その絵師はもうどこかへ消え去っている。

「ああ、太夫か。——もう帰ろうや」

泣き兵衛は、泣きながら春駒にふりかえって言った。

お熱い春駒

すっかり夜も更けわたった向島土堤——。

夜風がつめたく、泣き兵衛と春駒は肩をくっつけ合っての帰りみちだった。

「――味気ねえ世の中だなあ……」
星空を仰いで、泣き兵衛が歎息した。
「――で、泣きさン……」
春駒がその泣き兵衛の気をまぎらわせるように、あわてて話を変えた。
「あの大きなお屋敷の、そのいやらしいお殿さまっていうのは、いったい誰なの？」
こんなところで、また大粒涙の大安売りをされてはかなわないと思った春駒である。
「――瀬田覚翁の下屋敷だよ」
ポツリとこたえる泣き兵衛。
「あら、その名前、きいたことがあるよ？」
「知ってるはずさ。半年ばかり前、太夫の一座が本所菊川の旗本屋敷によばれたことがあったろ？」
「ああ、室戸介十郎っていう、あのキモチの悪い木彫りの蜘蛛だの蟹だので女をおどかす悪趣味のお旗本……」
「そうだ。あの夜、客になって上座に坐っていた白髯のじじい。あれが瀬田覚翁さ。いまをときめく将軍家ご愛妾お牧の方の実父だよ……」
「へえん……だから、あんな豪勢なお屋敷に住んでいるンだね。――だけど、どうしてあの白髯のお殿さまが、あたしをさらったりなんかしたンだろう？……」
「おおかた、見染めたンだろうよ。なンせ太夫は、色っぽいからなア……」
「おお、いやだ。あんなじいさんになんか」
「じじいはきらいかい。けど、金は持ってるぜ、あの覚翁――」
「お金なんか無くたって、あたしゃ若くてピチピチした、気ッぷのいい男のほうが好きなのさ」
「へええ……たとえば？」
「チェッ、言わせる気かい」
春駒のひじ鉄砲が、泣き兵衛の脇腹をドンと突いた。
「ううッ……今夜はバカに冷えるな。冴えかえる春の寒さか。――ねえ、太夫、どうせ戻りみちだ。いつものところで、熱いやつをキュウッと一杯、どうだい？」
「いいねェ、つきあうよ」
「太夫と飲んでほがらかになると、おれはいつも駒形へ帰るのがイヤになるンだ。膝ッ小僧を抱いて寝るなンてのは、腹の底からさびしいもンだぜ」
「そいつァ、あたしも同じくさ」
「いっそ今夜は、れいの茶屋で、二人しっぽり……」
「いいねェ、つきあうよ」
「てへッ、ヌケヌケと相槌をうちやがったぜ」
顔を見合わせて、プッと吹きだす泣き兵衛と春駒。
――身体のうわべは寒くとも、どうやら、シンはお熱い二人であった。

（泣き兵衛巷噺子・第八話　終）

★泣き兵衛巷噺子第九話
★次号を御期待ください！

◇他誌に見られぬ特異な題材で頁を飾る本誌は、毎号異常な反響を呼び、店頭で売切れの盛況を示しておりますが、来月号もお買い洩れのないように必ず本号お買い上げの書店に御予約下さい。

◇バックナンバーは新規の愛読者のために小部数取り揃えてあります。（二二四頁―二二九頁を御覧ください）既刊号三冊以上お申込みの読者には送料は当社で負担いたします。

◇御送金は、現金書留、小為替、振替等が最も安全で確実です。

◇小社は本誌の他にも、単行本・新書判等の書籍を多数出版しております。出版目録をおのぞみの方は、ハガキにハッキリと御住所御芳名をお書きになって〝裏窓で見た、目録送れ〟とだけ書いて、東京都中野区江古田一の二三〇二久保書店営業部宛お申込になれば、無料ですぐ送ります。

◇直接購読希望の方は、三ケ月分・三百六十円、又は六ケ月分・七百二十円を、本誌営業部あてにお払込み下さいますと店頭発売前に直接お送りします。（送料小社負担）

◇但し、特大号、臨時増大号のように定価が上った場合は、その分だけ追加払込みして頂きます。なお、お送金と同時に、何年何月号よりと何月号までとハッキリ御指定下さい。

募集 原稿

◉小説・読物＝三十～四十枚
他誌に見られないような特異性のあるもので、本誌にピッタリすると思われる作品をお待ちします。（時代・現代どちらでも結構です）

◉アブチック・スリラア

◉あぶちっく・みすてりい

いずれも三十枚～四十枚ていどで、他に本誌に適すると思われるものなら何でも結構です。原則として原稿は返印しないことになっております。掲載の分には掲載誌発行後、相応の原稿料と掲載誌一部をお送りします。

―原稿送り先―
東京都中野区江古田1の2302
久保書店内 裏窓編集部

★お買い上げの本誌に落丁乱丁等がありました節は書店にておとり替え下さるか、または本社宛にお送り下されば、スグおとり替えします。

裏窓 三月号
第五巻 第三号
（毎月一回一日発行）

定価 百二十円・送料十二円
（地方売価百二十三円）

印刷 昭和三五年二月二五日
発行 昭和三五年三月一日
編集人 須磨利之
発行人 山田忠雄
印刷所 向上印刷株式会社
発行所 株式会社 久保書店
東京都中野区江古田一ノ二三〇二
電話中野（38）六九八〇・一三八八
振替口座・東京 一〇七五六番

★本誌の記事を無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。